山手樹一郎長編時代小説全集＝29

青雲の鬼

他二編

春陽堂

山手樹一郎長編時代小説全集＝29

青雲の鬼

他二編

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

肉親が雲の上のような偉い人だと知ったとき、現代っ子のキミならどうする？　……山手文学おなじみの主人公は、そんな事はまるで無関係な心境だ。自分の力で〝天に梯子をかけるんだ〟と、急がず騒がず、物欲色欲うずまく世の中を闊歩する。こういう青年早水東吾にほれぬ男も女もいない。かくて、暗黒世界のボスで、淫蕩な天草屋市蔵一味と虚々実々の闘いが始まった。好物の菓子が舌に快いように、本編「青雲の鬼」もまた読者の期待を裏切らない。

併録「青春峠」は、題名どおりの大らかな青春をたたえてさわやかだ。――いつの時代でも、若者たちは過激な思想の囚人だが、それもはやり病い程度なら、もっと身近かな生活にじっくりと落ち着いて……例えば、本編主人公の秩父小太郎のように、純情なお千代とのほのぼのとした人間らしい情愛を育てるのが本物ではないだろうか？　幕末、攘夷開国に騒然の時代に生きた三人の若者と、その恋人たちをめぐって、快適なテンポはいつも陽性を志向する作者らしい佳編！

青雲の鬼

他二編

山手樹一郎長編時代小説全集＝29

春陽堂

春陽堂●490円
0193-200429-3066

青雲の鬼 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集 29

春陽堂

青雲の鬼 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集 29

春陽堂

青雲の鬼 他編

山手樹一郎長編時代小説全集 29

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
*伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治
*本巻執筆者

目次

青雲の鬼……一
青春峠……二六五

青雲の鬼

江戸への旅

1

いそぐ旅というわけではないから、きょうは川崎泊まりにして、あす昼まえに江戸にはいろう。そのつもりで程ガ谷の宿で中食をとり、早水東吾がゆっくり茶店を出たのは、やがて九つ半（一時）をまわったころだった。

茶店の前の白梅が、もう七分ほど咲いているのどかな春の旅で、空はからりと晴れていた。

「だんな、いいお天気ですね」

気軽にうしろから声をかけて追いついてきたのは、年ごろ二十六、七の旅なれているらしいきりっとした男である。堅気の商人にしてはどこか着くずれたところがあるが、やくざ渡世というほどのすごみいやみは身についていない。豆しぼりの手ぬぐいを吉原かむりにして、道中差し一本、荷物はなにも持っていなかった。

「貴公とは、たしかきのうも出あったな」

東吾は人なつこく肩をならべてくるその男を、わらいながら迎えた。今までおなじ茶屋で飯を食っていた男で、きのうも大磯で中食をとるときいっしょだったのである。

「おぼえていてくれやしたんで――。こいつはうれしいや」

「そうか。ことわっておくが、わしのふところはあまり重くない」

「あれえ、だんなは案外口にとげがありやすね。見そこなったかな」

「あてがはずれたら、かまわず先へ行きたまえ」

「けど、だんなも江戸へ行くんでしょう」

「うむ」

「ご修業ですか、やっぱり剣術の」

「それもあるが、わしの望みはもっと大きい」

「望みは大きくもてっていいやすからね。剣術だって、お玉ガ池の千葉周作先生ぐらいになりゃ、たいしたもんでさ」

「それはそうだな」

「失礼ですが、だんなはいい相をしていなさる。天庭ひろく、鼻骨とおり、だいいちその澄んだ目がすばらしいや。生まれながらにして高貴の相ってやつを備えていなさるようだが、口にとげのあるのだけは感心しやせんね」

「玉にきずというやつかな」

「ああ、わかった。だんなのからだつきを見ると、年は若いが、もう国もとでだいぶ修業をしている。これから江戸へ乗りこんで、お玉ガ池の千葉、浅利河岸の桃井、九段の斎藤なんて名人の道場を、かたっぱしから破って、いちどに天下に名をあげてやろうっていう大望だ。そうでしょう、だんな」

「いや、わしのはもう少し大きい」

「へえ、もう少しね。まさか、だんな、天下をねらう由比正雪、そんなんじゃないんでしょうね」

男はわざと声をひそめて、あたりを見まわす。

「そうだな、こんな腐った天下をねらったってしようがないが、まあそれに近いかな」

東吾は苦笑しながら、この人のふところをねらっていそうな男がどんな顔をするか、それとなく見てやった。

2

「物騒な人だねえ、だんなは。いったい、どう天下をねらおうっていうんです」

その男はあきれたように目を丸くする。そう安っぽく顔色を動かすようでは、おなじごまの灰にしてもたいした男ではないのだろう。

「なにも物騒なことはない。わしはただ、将軍にあったとき会釈をさせ、老中と対等の口がきける男になってやろうと望んでいるだけだ」

東吾はこともなげにいってのける。

「なんですって、公方さまに会釈をさせる。へえ、ご老中と対等の口をね。つまり、ご老中水野越前守さまにあったら、やあ越州侯、きょうはいい天気でござるな、ってなぐあいにやりてえんですね」

「望みは大きくもてというからな」

「なるほど、――人間は若いうちが花だ」

「貴公だって、まだ若いほうではないか」

「おっしゃるとおり、わっしは二十七ですがね、だんなはおいくつです」

「文化九年、申年生まれだ」

「すると、あっしが辰年だから、巳、午、未、申、四つ違いの二十三てことにやりやすね」

「貴公は辰年か」

「争われないもんですね。太閤さまは申年生まれで天下を取った。申年の人はみんな高望みだ。そのくせ、毛が三本足りないから、たいていは器用貧乏でね、ことわざにも、さるも木から落ちるっていいまさ」

「だいじょうぶだ。わしは落ちないように、自分の力で一段ずつあがっていく」

「失礼ですが、だんなはいなかから出てきた浪人さんでしょう」

「うむ」

「ご老中は大名でなくちゃなれないものだ。浪人さんから大名にまでとどくはしごがありやすか。これが元亀、天正のころならいざ知らず、一段ずつのぼろうにも、今はそのはしごがないと思うんですがねえ」

「気の小さいことをいうな」

「あれえ、だんなこそ正気かね」

「器量の小さいものから、器量の大きい者のすることを見ると、とかく気ちがいに見えるものだ」

さすがにその男はむっとしたらしく、口をつぐんでしまった。

――おこりたければ、かってにおこれ。

東吾も黙ってさっそうと歩く。七年ぶりで帰る江戸が、はたしてどんなふうに自分を迎えてくれるかと思うと、おのずから心おどるものがある。しかも、東吾としては、いちばん困難な道を選んでそれに力いっぱいぶつかっていこうという、希望にあふれた江戸への旅だった。

「おや、あんなとこに待ってやがる。だんな、あの女に見おぼえはありやせんか」

おこっているとばかり思っていた連れの男が、ふっと、のんびり声をかけてきた。

ちょうど神奈川の海を見晴らしながら、台の茶屋へかかろうとするあたりである。

3

高台の見晴らしの掛け茶屋に休んで、青い海のほうをながめているのは、年ごろ十九かはたち、江戸の下町娘らしく、黒えりのかかった黄八丈の着物に、紺がすりの道行きを腰のあたりできりっとすそ短に、赤いしごきでたくしあげ、あさぎの手甲脚絆、手ぬぐいをあねさまかむりにした、大がらでちょっと人目にたつ娘だった。

「あれはさっき程ガ谷でおなじ茶店にいた娘のようだな」

東吾はそう答えたが、その娘もきょう程ガ谷で見かけただけではなく、きのう大磯で中食をとってからの道中で、一度追いぬいている。つまり、これで三度見かけることになるのだ。

「だんなはあの娘を、どう思いやす」

「どうとは――」

「あんな娘のひとり旅、怪しいとは思いやせんか」

自分がごまの灰と疑われているくせに、この男は声をひそめて、そんなことをいいだす。

「そうかなあ」

「だいいち、あの娘の人を見るときの目が、ただじゃありやせん。娘なんていうものは、いくら年増になっても、男の顔をまともに見られね

えのがほんとうでさ。それを、あの娘は、赤い顔ひとつしないで、じろりと見すえる。ありゃたしかに道中師だ」

「人を見たらどろぼうと思え。思うのはかってだが、みだりにそれを口にするのは感心せんな」

東吾はたしなめるようにいった。

「だんなは女に甘いね。あの娘は、きのうから、だんなと道づれになりたがっているのだ。用心しなけりゃいけません」

「そうかなあ」

話しながら、すたすたと茶屋の前を通りすぎて、道はやがてだらだら下りになる。

「もし、失礼ですが、お武家さま――」

はたして、娘が追ってきて、うしろから声をかけた。

「わしに、なにか用かな」

「すみませんが、その辺までごいっしょさせてくださいまし」

遠慮なく男とは反対側へ肩をならべてきて、

「そっちのにいさん、おじゃまですかしら」

と、にっこりわらっている。

「おまえさん、人見知りをしないほうだね。念のために、お名まえをうけたまわっておこうかな」

「江戸深川のそば屋の娘で、袖(そで)といいます。にいさんは――」

「おれは神田明神下の拾吉っていう者だ」

「ついでにご商売は」

「自慢にはならないが、ぶらぶら遊んでいる、まあ遊び人てやつだ」

「裏へまわると、なんとかの拾吉っていう肩書きがあるんじゃないかしら」

この娘も口にとげがあるほうらしい。

4

「お袖さんといったっけな、なかなかおつな口をきくぜ。人の肩書きが聞きたかったら、まず自分の肩書きから名のるもんだ」

左の拾吉がすかさずやりかえした。

「お武家さまのお名まえをうけたまわってはいけませんかしら」

右のお袖は、あっさりと拾吉を無視して、まんなかの東吾にきく。

「わしは遠州浜松から出てきた、早水東吾という浪人者だ」

「ありがとうございます」

「拾吉うじの説によると、お袖さんはきのうからわしと道づれになりたがっていたというんだが、ほんとうかね」

東吾も歯に衣(きぬ)をきせないほうだ。

「ええ。ことによったら、そうしていただこうかしらと、考えていました」

「やっぱりそうか」

「早水さまは、今夜川崎泊まりのおつもりですか」

「うむ、そうしようかと思っている」

「あら、ではあてがはずれたかしら」

「そうでもないだろう、思うつぼじゃねえのか」

拾吉が左からしんらつな横やりを入れる。

「それはにいさんのほうでしょう。あたしはきょうじゅうに、どうしても深川へ帰りたかったんです。それには、大森あたりから夜道になる。いくらあたしがはねっかえりでも、女ひとりの夜道はこわい。だから、早水さまに道づれになっていただこうと思ったんですけれど、――早水さまは今夜どうでも川崎泊まりになさらなければならないんでしょうか」

「そうか。たって夜道がかけたいなら、品川まで送ってやってもいい」

「だんな、だんなは大森の先に鈴ガ森ってさびしい難所があるのを、知らねえんですね」

「その鈴ガ森へ、なにか出るのか」

「出るでしょうねえ、きっと。どこかのあねごを統領とたのむ仲間が七、八人、金が惜しい

か、命が惜しいかとね」
「肩書きつきのにいさん、そんな心配はしなくったっていいんですよ。こう見えても、あたしのおとっつぁんは、そば屋の弥之助といって、お上から十手をあずかってる男ですから、そんなやつらが出たら、おとっつぁんにいいつけて、かたっぱしから縛ってもらいます」
お袖が負けずにてきぱきとやりかえす。
「なあんだ。おまえは岡っ引きの娘か。道理で、目つきが違うと思った」
拾吉は思わず苦笑したようである。
「おきのどくさまでしたね。あたしもきのうから、にいさんはひょっとして早水さまと道づれになりたがるんじゃないかしらと、見ていたんです。にいさんもどこか人とは目つきが違いますもの」
この舌戦の勝負は、どうやら拾吉の負けくさい。

5

手先や岡っ引きなどという稼業は、あまり世間から好感を持たれないのが常識となっている。それを、娘だてらに平気で自分から名のりあげるのだから、この娘は相当勝ちっ気でしっかりものなのであろう。
しかも、お袖はどうやら拾吉を怪しいと見て、親切気から東吾の道づれになってくれたらしいところもあるのだ。
「わしはいい道づれができて、おかげで助かる」
まんなかの東吾は、どちらへともなくいってわらった。
「だんなはやっぱり女に甘いねえ。そうすぐ女に目じりをさげるようじゃ、とても天へはしごはかけられやせんぜ」
すかさず左から拾吉がひやかしてくる。
「あら、天にはしごがかけられるかしら」

お袖がたちまち聞きとがめる。
「それが、このだんなは、きっとかけてみせるっていうんだから、たいした度胸さ。だんなはこう見えても、これから江戸へ出て、ご老中と対等の口がきける人間に出世しようっていうんだ」
「まあ、おりっぱな心がけですこと」
「あれえ、またキ印がひとりふえたようだ。それ、本気で感心しているんかね、岡っ引きのお袖親分」
「どうして、本気じゃいけないんです」
「じゃ、うかがいやすがねえ、この節、浪人さんからご老中までとどくはしごなんてのが、世の中にありやすか」
「ないとはいえないわ。灰印のはしごじゃ二階へもかけられないかしれないけれど、いちばん出世の早いのは坊さん、お医者さま、学者、人間偉くなれば、だれだってご老中と対等の口がきけるんじゃないかしら。ねえ、早水さま」
「わしもそう思うな」
「十年ばかりまえの、根岸肥前守さまってお奉行さまは、もと秩父の絹商人から出世したかただと、おとっつぁんがよく話しています」
「ほう、それはいいことを聞いた。つまり、ご家人の株を買って、それから自力で奉行にまで出世したわけだな」
「なあるほど、うまくわいろをつかうって手があったなあ。こいつはうっかりしていた」
拾吉がまたしてもそばからまぜっかえす。
「拾吉にいさん、江戸へ行ってうっかりそんな口をきくと、それこそ手がすぐうしろへまわりますよ」
「なあに、おれはその下をつかって、なわ抜けをする忍術を心得ているから、その心配はいらねえ」
「にいさんなんかまで、そんな口をきくご時勢ですものね。早水さま、よっぽどしっかりなさらないと、江戸には人のこまたをすくいたがる人間が、うようよしているんです」

お袖のことばには、どこか真実がこもっていた。下町娘の心意気とでもいうか、東吾はふっと心あたたまるものを感ぜずにはいられない。

6

神奈川から川崎へ二里半、女ひとりに男ふたりの旅は、のんきなむだ口をたたかわせながら、春の日はいつか夕暮れかけてきた。

「拾吉うじ、わしはお袖あねごを送って、このまま品川まで行くが、貴公はどうするね」

東吾は川崎の宿へかかってから、拾吉にきいた。

この男の正体はまだはっきりしないが、そう悪人ではなさそうだと、東吾はもう安心していた。

「あっしもぜひお供しやすよ。出世まえのだんなを、娘さんとふたりっきりで夜道をかけさせるのは、ねこにかつぶしでげすからね」

「あら、どっちがかつぶしなの」

お袖は年だけに、そんなあけっぱなしな口を平気できく。

「そりゃかつお武士というから、だんなのほうがかつぶしで、あねごはねこのほうだ。ふたりきりにしておくと、あねごねこがちょいちょいと、かつぶしにちょっかいをかけて、しまいにはなめたがる」

「おあいにくさま。そばやのお袖さんは、そんな甘い女じゃありません」

「ごもっとも——。そば屋の鬼娘といえば、深川じゅうの泣く子が黙る、さっきもうかがったばかりですがね、鬼も十八、番茶も出ばな、春の宵なんてやつは、とかく娘心がうずうずしたがるもんだ。あねごはたしか十九でござんしたね」

「くやしいわ、そこまで手がとどかないが」

三人で六郷の渡しをわたり、品川までまた二里半、お袖がいっていたとおり、大森へかかるころすっかり日が暮れてきた。

空に十三日ばかりの月がさえているから、ちょうちんの用意はなくても足もとに不自由はないが、日が暮れると急に夜風が身にしみてくる。さすがにお袖は女の足で疲れてきたか、あまり口数をきかなくなってきた。

「あねご、ひどくおとなしいようだが、くたびれてきたかね」

「ええ、すこしばかり」

「いやにすなおだぜ。娘心がうずくまえに、足のほうが重くなったっていうわけか。こっちからは見えねえから、遠慮なくだんなの手につかまりなせえ。そうれ、いよいよ鈴ヶ森へかかってきた」

拾吉のむだ口にも、どこか疲れた娘をいたわる声音が出てくる。きょう一日だけの見ず知らずの三人旅だが、世の中はよくしたものだなと、東吾はほほえましい。

「お袖さん、拾吉だんながああいうのだから、手につかまってもいいよ」

「よしますわ。まだねこなんかになりさがりたくないんですもの」

下町娘はやっぱり意地が強い。

鈴ヶ森は右がすぐ海ばたの石がけで、青い月を見晴らし、左に松林が十町あまりつづく。その中ほどにおしおき場があるのだ。

「あら——」

そこまできて、お袖がふっと東吾の腕につかまってきた。

7

品川のほうから海ばたにそって、ちょうちんの灯が一つ見えだし、それがかごの棒端につるしてあるものだとわかって、まもなく、えんほい、えんほいという掛け声が耳にとどくあたりまで近づいてきた。

まだ宵をすぎようとする時刻だが、もうこのあたりはばったりと人通りが絶えているので、なにかものものしい感じである。

「いそぎ旅らしゅござんすねえ」
拾吉も気になるらしくつぶやいた。
と、左手の松のかげから、かごをやりすごしておいて、黒い人影が一つひらりとおどりだしたのが、はっきりと目についた。
ぎょっと三人が不吉な予感に息をのんで立ち止まったのと、かごのうしろで人かげがもつれ、
「わあッ」
たまげるようなぶきみな悲鳴がおこったのとが、ほとんど同時だった。
「出たあ」
かごかきは、いきなりかごをどすんとおろして、横っ飛びに松林の中へ逃げこむ。
「いけねえ」
拾吉は立ちつくし、お袖は力いっぱい東吾の腕をつかんで身ぶるいしている。
「ふたりとも、ここに待っておれ」
東吾はこのお袖の手を振り切って、決然とそっちへ大またに歩きだした。
「だんな、——だんな」
二足三足、拾吉があとを追ったようだが、東吾はもう振り向いてもみなかった。
海を渡ってくる夜風が、緊張したほおへひえびえとして、一瞬視界が明るく青ざめているような感じだった。
——物とりか、それとも遺恨か。
いずれにせよ、人ひとりがきられて、しかもかごの中にまだひとりがいるのだ。見のがしてはおけない。
東吾はまっすぐ前を見て、ぐんぐん歩いた。
下手人は抜き身をさげたままかごわきまできて、こっちを見ながらぬっと突っ立っている。宗十郎頭巾で面をつつんだ着流しの、背のすらりと高いやつだ。
人ありと見て、近づいてくるのを待っているよほど腕に自信もあり、度胸のすわったやつなのだろう。

かごの中がいまだにひっそりとしているのは、恐怖に声さえたてられないのか、それとも気を失っているのか。
東吾は下手人の前まできて、刀のとどかぬあたりへゆっくりと立ち止まった。
宗十郎頭巾は冷ややかにこっちを見ている。頭巾の中の切れ長な目が、不敵というより、残忍な光さえおびているようだ。
「貴公、なぜあの者をきったのか」
東吾は下手人のうしろを指さしながら、詰問するようにきいた。六、七尺離れたところに、今きられたばかりの旅の侍が、頭をこっちへ向けてうつ伏せに倒れているのだ。

8

「貴公はただの通行人だな」
宗十郎頭巾は、低いおうへいな声できく。
「さよう、旅の者だ」
「貴公にはかかわりのないこと、黙って通り過ぎるがよろしい」
そんな高飛車な物のいい方をする。
東吾はかっとなりかけたが、すぐに気がついて自制した。敵は無法な放言を承知で、こっちをおこらせようとしているかもしれないのだ。
「ただの通行人でも、つじぎり強盗は見のがしかねる」
こっちも皮肉な出方にかえる。
「無用なことだ。世の中は表面から見ただけではわからぬ。行きなさい」
「貴公がこの者を待ち伏せしていて、きったことは事実だ。つじぎり強盗でないという言いわけがあるなら聞こう」
「かかわりのない者に、裏の説明はいらぬこと。よけいなおせっかいはするものではない」
「そうか。きる理由があるからきったといいたいのだな」
「そのとおりだ」
「では、そのかぶりものを取って、姓名をうけ

たまわろう。拙者は二代浪人、早水東吾。よけいなおせっかいはしたくはないが、人ひとり目の前で切られているのを、黙って見すごせるほど冷淡非人情な男にはなれぬ」

「わからぬ男だ。わしは貴公にかかわりのないことだから、黙って通れと申している。あまりくどいと切るぞ」

おどしではなく、その切れ長な冷たい目に、あやしい殺気が光ってくる。当人は自分のいうことに正当な理由があると信じているのだろうか。

「どうも、貴公の住む世界と、わしの住む世界と少し違うようだな。やむをえぬ。貴公があくまで横車を押す気なら、わしはこの目で見たとおり、貴公をつじぎり強盗とみとめるほかはない」

東吾は相手の挑戦に応ずるはらをきめて、じっと宗十郎頭巾の出ようを待つ。負ける勝つではない。こんな非道は、どうしても許せないのだ。いや、正しいを正しいとして、非道と戦えるだけの修業はじゅうぶんしているという自負もあった。

敵はあきらかにこっちの強弱を瀕ぶみしている執拗な目つきだったが、不意をかけても、同時に抜き打ちがくる、かえってあぶないと見て取ったのだろう。

「よし、こい、小僧」

すっと左足をひいて、とっさにさげていた一刀を青眼にとりなおした。

東吾も無言で、同時に抜きあわせたが、

――こいつ、思ったより強いぞ。思わずぞっと背筋へ悪寒が走った。

敵のきっさきはぴったりとこっちののどに吸いつき、すごい圧力で息もつがせず、ぐいぐいとのしかかってくるのだ。

9

東吾は十三のときから斎藤弥九郎に剣を学んで、十六のとき神道無念流の免許をゆるされている。その年に運命の大きな転換期がきて、母とともに江戸を去ったから、皆伝までは取れなかった。

遠州浜松まで行ったとき、母に旅の空で病死され、一時は出家しようかと寺へはいったこともある。また思いかえして医者になろうかと思い、大阪の緒方塾へ通って蘭学を勉強したこともあったが、ついにそれも果たさなかった。

しかし、その間中も剣の修業だけは怠らず、ことにこの三年あまりは、考えることがあって小太刀のくふうに専念してきた。たいていの試合にも、一尺八寸の小太刀を用い、よく踏み込んで打つことに成功してきたから、自分ではおそらく皆伝の腕にまで上達していると自負していた。

それが、今は敵とおなじ二尺一寸の大刀を取って立ち向かいながら、宗十郎頭巾の剣に圧倒されて、思わずじりじりとさがるばかりだった。

――おのれ。

東吾は歯ぎしりをした。この非道の剣にたおれるようでは、とうてい自分の選んだ江戸へ行っての困難の道は切りひらけない。いわば、大きな試練に直面したのだ。力足りなければ、それまでの運とあきらめて玉砕してやろう。

「えいっ」

東吾は新しい勇気をふるいおこして、ぐっと踏みとまった。敵のきっさきは執拗に突きをねらっている。その一撃を払って一気に踏みこんできる。払いそこねれば死だし、払いきれればそこに活路がひらける。勝敗を一挙に決する覚悟で、その敵の突きを踏みとまって誘ったのだ。

「おうッ」

敵のきっさきは無意味にびくりとけいれんしたが、しかしそのままぴたりと静止して動かない。払って踏みこむこっちの気魄が、はっきり

と胸にひびいたからだろう。
「えいっ」
「おうッ」
ここまでくればもう、つばぜりあいもおなじだ。引く息に乗られたほうが切られる。あくまでも気合いをあわせて、乗り切っていかなければならない。
宗十郎頭巾の目は、あやしく燐のように燃えていた。こしゃくなという気持ちがあり、早くかたづけなければというあせりがあるのだろう。そのあせりは、おのれの非から生じているのだ。
——勝ったぞ。
東吾はわずかに優越を感じた。が、それはようやく対等の気魄にまでこぎつけた優越感で、敵はまだ乗ずるすきは見せない。
いや、むしろなんとかこっちを強引にねじ伏せようとして、
「えいっ——おうッ」
先手に先手にと、凶暴な闘志を火のようにかりたててくる。

10

勝負は一撃一刀できまることを、どっちもじゅうぶん承知しているから、刃はまだ一合もあわせていない。
一歩あやまればそこに死に神がわらっているような必死な激闘は、刻々と命を刻みながらいつ果てるとも思えなかったが、敵にあせりが見えてきてからの東吾は、いくぶん気持ちにゆとりが出て、もう負けぬと思った。
しかし、それはまだこっちから踏みこんでいって勝てるという必勝の自信ではなく、来れば切りかえせるというだけの、うぬぼれにも似た自負にすぎなかったのだから、あぶないといえばまったくあぶないせとぎわだった。
敵にもう一歩破れかぶれの気持ちがあったら、たとえわずかに勝っても、自分もまた無事にはすまなかったかもしれぬ。
「待てッ」
宗十郎頭巾はひらりと飛びのいて、ふいに刀をひいた。
「なにッ」
それがずるい敵の手段かもしれないので、東吾はゆだんできぬ。
「じゃまがはいったようだ。この勝負はあらためてつける」
「そうか。わしには無用の勝負だが、逃げはせぬ」
「早水東吾といったな、きっとおぼえておくぞ」
敵は刀をおさめて、くるりときびすをかえす。ゆうゆうと品川のほうへ歩きだすのだ。
——下手人をこのまま見のがしていいのか。
若い東吾は、ちくりと良心を針で刺される気はしたが、今になって肩で息がはずみ、どうにもこれ以上あの死闘をくりかえす気力がない。
——くやしいが、おれの負けかもしれぬ。
忸怩としているうちに、宗十郎頭巾の姿は、もう月の中へ黒々と遠くなっていた。
今になって、足もとの砂を洗っている波の音が、ゆるく耳によみがえってきた。
「だんな、すごいやつでしたねえ」
左の松林の中から、ふらりと拾吉が出てきた。手ぬぐいをぬすっとかむりに直して、まだその目にぎらぎらと殺気が残っているようだ。
「貴公、わしにすけだちをしてくれる気だったのか」
「すんません。どうにも見ていられなくなりやしてね。こっちから野郎のうしろへまわろうとしたら、ちゃんと気がつきやがった」
拾吉はぬすっとかむりを取って苦わらいをしている。
「わしは少しも気がつかなかった」
東吾は、やっぱりおれの負けだなと、さびしくなる。その顔を見ないふりをして、

「もし、かごの中のおかた、――おるすでございますか」
拾吉は小腰をかがめながら、そっちへ寄っていった。

11

「はい」
かごの中からすぐ、案外はっきりした返事があって、たれをあげ、横ざまにわらじの足のほうから、すらりとかごわきへ月にぬれており立ったのは、年ごろ十七、八とも見える高島田、紫矢がすりのあざやかな武家娘だった。
着物を腰のしごきですそ短にきりっと締めあげ、胸高の帯の間から懐剣のにしきの袋をのぞかせているのもかいがいしい。
拾吉はおやあといった面持ちで、
「こりゃどうも――。こんばんは、お嬢さん。とんだご災難でございましたようで」
と、あわてておじぎをする。
「おせわをかけまして」
娘は拾吉と、そのうしろに少し離れて立っている東吾のほうへ会釈してから、気もそぞろのように、死骸のそばへ走り寄った。
「まあ、忠吉」
その忠吉とよばれた若い侍は、うしろから抜き討ちにけさがけにされたらしく、刀に手をかけるいとまさえなく、つんのめるようなかっこうで、すでに息が絶えている。
娘はまっさおになりながら、そこへしゃがんで傷口をひと目見るなり、たもとで顔をおおってしまった。
「ご家来ですか、お嬢さん」
拾吉が腰をかがめながら、痛々しそうにきいた。
「はい、召し使っている若党です」
「下手人に心あたりはありませんか、宗十郎頭巾をかむり、切れ長な目の鋭い、着流しの、わしはまず浪人者と見たが。あるいはご家人くずれででもあるか、とにかく非常に腕まえのすぐれた男です」
東吾はそばへ寄って、わかるように説明した。
「ありがとうございます」
娘は急にしゃっきりと立ち上がって、品川のほうを振りかえってから、
「あたくしは千鳥と申します。あの、少し子細がございまして、追っ手に追われているかと存じます。すぐにまいらなければなりません」
と、口ではきっぱりいっても、涼しい目がなにか当惑しているようである。
「どこまで行かれるのです」
「あす、おそくもあさってまでには、ぜひ小田原へはいりたいのでございます」
「なるほど。そのために若党をつれて、ここまで出てきたのですな」
「はい」
「すると、いまの下手人は、その追っ手の一味と見ていいのですか」
「たぶん、そうではないかと存じます」
そういいながらも、千鳥という娘は、しきりに品川のほうが気になるようだ。
「失礼だが、あなたはひとりで小田原まで行けますか」
東吾はそうきかずにはいられなかった。

12

「あの、お願いでございます。ご迷惑とは存じますが、小田原まで、送っていただけませんでございましょうか」
ひとりで行かれるかときかれれば、娘ひとりの夜道、まして追っ手がかかっているというのだから、そう来るのが当然であった。千鳥はいっしょうけんめいにすがるようなまなざしをする。
「小田原までね」

自分からさそったようなものだが、そうすがられると、東吾ははたと当惑する。自分のことはともかくとして、だいいち、お袖を品川まで送ってやろうと約束して、まだその途中なのである。

「お袖さん、——お袖さん」

東吾はさっきから近くの松林の中に遠慮しているお袖を呼んだ。

「はい」

走り寄ってきたお袖は、女らしく千鳥のほうへ会釈してから、

「早水さん、あたしはらはらしちまいました。ご無事で、よかったわ、ほんとうに」

と、いまさらのようにまゆをひそめている。

「ありがとう。さっそくだが、そこに切られているのは、この千鳥さんの家来なんだそうだ。いまの下手人は、ただのつじぎりではなく、追う手らしい。そして、千鳥さんはどうしても、小田原まで行かなくちゃならないというんだがねえ」

「ひとりじゃ無理だわ」

「どうだろう、あねごはなんでも今夜家へ帰らなければならないからだなのかなあ」

たとえ小田原へ送っていくにしても、相手は若い娘ひとり、お袖がいっしょに行ってくれれば、これに越したことはないと、東吾はふっと思いついたのだ。

「そうねえ、おとっつぁんは少し心配するだろうけれど——」

お袖はもうこっちの心を読んでいるようだ。

「だって、あねご、こりゃ人殺し事件だからね。そば屋のお袖ちゃんが知らん顔したんじゃ、深川の名折れだぜ」

そばから拾吉がうまいことをいう。

「じゃ、拾さん、小田原へ行って帰ってくるまで、あんたあたしの子分になってくれる？」

「うへっ、やぶへびか。乗りかかった船じゃしようがない。あねご、なにぶんよろしくたのんます」

冗談まじりに、拾吉がおじぎをする。

「早水さん、話はきまりました」

「ふたりとも、よく承知してくれた。わしからも礼をいう。——千鳥さん、われわれ三人で小田原まで送ってあげることになった」

「あたくし、あたくし、一生ご恩にきます」

千鳥は涙ぐんでいるようだ。

「たった一つ、千鳥さんに聞いておきたいことがある」

きっと東吾は千鳥を見すえた。

13

「どんなことでございましょう」

東吾のどこかきびしいまなざしに、千鳥も思わずしゃっきりと顔をあげる。

「こんなことはいわずもがなのことかしれぬが、われわれ三人はともかくも、それぞれ正しい世間を歩いている人間です。それが、自分たちの用を差しおいて、あなたを小田原まで送っていく気になっているのは、いわば一片の義心からです。失礼だが、千鳥さんが小田原へ行くということは、良心に恥じないことなんでしょうね」

正しからざることにむだばねをおって、あとで世間からわらい者にされるのは心外だし、そんなあわて者にはなりたくないのだ。

「はい、あたくしは父の命が救いたくて、小田原へまいるのでございます。お察しくださいませ」

千鳥はそう答えながら、急に不安がこみあげてきたように、がくりとうなだれてしまう。

「よくわかりました。では、出かけましょう。話は歩きながらでもできる」

目的は思ったより重大なようだ。しかも、追っ手がかかっているとすると、一刻も猶予はできない。東吾はすぐに一同をうながした。

「ちょっとお待ちくださいませ」

千鳥はいそいで死骸の前へしゃがみ、
「忠吉、そなたの忠義はわすれません。きっと、おとうさまにも申し上げます。千鳥は先をいそぎますから、このまま、このままいります。許してくださいね」
涙声に合掌しているうなじが白々と痛々しかった。
拾吉もお袖も、つりこまれたように立ったまま、死者のほうへ手を合わせている。
「あの、かご屋の代はどうすればよろしいでしょう」
涙をぬぐって立ってから、千鳥がきいた。さすがにしっかり者らしい。
「お嬢さん、どこから乗ってきたんです」
拾吉がきいた。
「神田の今川橋のそばからです」
「拾ったんですか」
「ええ」
「じゃ、このまま行くわけにもいかねえな。ようござんす、あっしが見はからって、かごの中へほうりこんでいきやすから、かまわず出かけておくんなさい」
「では、お願いいたします」
千鳥は東吾と肩をならべた。
かご屋はまだ出てこない。そう遠くへ逃げるはずはないから、掛かり合いを恐れて、出てこないのだろう。
拾吉は手早くなにがしかの銭を紙にくるんで、かごの中へ投げこんだ。
「拾吉、思ったより気がきくんだね」
にっこりしながら、お袖はもう拾吉を子分あつかいにする。

心ごころ

1

「お袖あねご、なんのことはねえ、この双六は

上がり近くまできて、また振り出しへもどることになっちまったねえ」
拾吉はお袖と肩をならべて歩きだしながら、苦わらいが出た。
「じゃ、あんたのこんどの道中の振り出しは、小田原だったってわけね」
お袖はたちまちことばじりをつかんでくる。
「さすがはそば屋のお袖ちゃん、いい勘だ。ついでに、あねごの振り出しは」
「やっぱりその近くよ」
「まさか、小田原まで駆け落ちはやったが、そこで男に捨てられて、ひとりとぼとぼってあねごでもなさそうだが」
「拾吉、たった今、早水さんが、われわれ三人は正しい世間をわたっている者だって、千鳥さんに開き直っていましたっけね、あたしは良心に恥じるようなことはしちゃいない。あんたはどうなの」
「けっ、そんなに目つきが悪いかなあ」
「せっかく子分にして、小田原までいっしょに苦労をしてしまってから、その子分を縛らなければならなくなるなんて、いくらあたしが岡っ引きの娘でも、つらすぎます」
「あねご、ほろりといたしやす。正直に申し上げると、あっしは捜し屋なんで。ないしょにしておいてくださいよ」
「捜し屋ってあき巣をかえ」
「ありゃねらうほうだ。あっしのはただ捜すだけさ」
「なにを捜して歩くの」
「どろぼうが盗んでかくしておく金でござんす」
「なんですって――」
うそかほんとうか知らないが、大きなぬすっとは盗んだ金をすぐその土地ではつかわないものだ。それをどこかへ隠しておいて、江戸のぬすっとなら上方へ高飛びをする。そこでまた金を盗んでかくし、二年か、三年めぐらいに江戸

へ帰ってきて、まえに隠しておいた金を取り出してつかう。そのくらい用心深いものだが、そのぬすっとが隠しておく金をさがし出して、それで遊んで食っているやつがあるんだから、こわい世の中だと、お袖は父の弥之助から聞かされたことがある。

「ほんとうなの、拾吉」

「へえ、あんまり自慢にゃなりやせん」

拾吉はけろりとしている。

2

「千鳥さん――」

しばらく黙っていそいでいた東吾は、拾吉とお袖がうしろへ追いついてくるのを待って、千鳥に話しかけた。聞くだけのことは聞き、協力してくれるうしろのふたりにも聞かせておくべきだと思ったからである。

「はい」

「父上の命を助けに行くということでしたが、ご尊父は小田原におられるのですか」

「いいえ、大阪からもどってくるのでございます」

「大阪から――？」

これはまた意外である。

「では、小田原で待ちうけようというのですね」

「はい」

千鳥はそれっきり口をつぐんでしまう。なにか人にはいいづらい事情があるらしい。

が、ある程度まで事情がわからなくては、たとえば追っ手に対してもどう手をつくしていいのか、判断のしようがない。

「いいづらい人の秘密を、むりに聞きたがるわけじゃないんだが、われわれはひょっとすると、あなたの追っ手を引きうけて、命がけにならなければならない場合がないともかぎらない。まるっきり事情がわからなくては、対策のたてようがないと思うんだが」

それを口にしてみて、はっと東吾は気がついた。乗りかかった船だから、自分はしかたがないとして、そういう危険な仕事に拾吉やお袖をまきこんでよかろうか。

これはもう一度考えなければならないと思う。

「あたくし、まちがっていたかもしれません」

千鳥は千鳥で、ためいきをつくようにいった。

「まちがっていたとは――」

「あたくしの口から、子として、どうしてもいいにくいことがございます。やっぱり、あたくしはひとりで小田原へまいるのがほんとうだったかもしれません」

そういわれると、東吾も返事のしようがない。

「ご尊父の名もいえませんか」

「いいえ、父は三年ばかり大阪奉行をつとめまして、こんど勘定奉行にあげられ、三年ぶりでもどってまいります松浦岩見守、又左衛門と申します」

「ふうむ」

勘定奉行は江戸の町奉行とともに、旗本が進みうる最高の大官である。

「そういう名誉のご尊父が、どうして人に命などねらわれるのかなあ」

東吾はちょっとふにおちない。

「その命をねらっているという敵の名はわかっているのですか」

「はい」

千鳥ははっきりとうなずいてみせる。

3

「ご尊父の命をねらっているのは、何者なんです」

東吾はあらためてきいた。

逆もどり街道は、やがて大井から大森へかかろうとしている。

「それがあたくし、どう申し上げていいか」
千鳥はまたしても口ごもってしまう。
「お嬢さん、あっしたちに聞かせたくないんなら、もっと離れて歩きやすぜ」
拾吉がうしろから、気をきかせるように声をかけてきた。
「いいえ、そんなつもりで、あたくし――」
千鳥ははっとしたようだったが、急に申しわけなくなってきたらしく、
「では、皆さんに聞いていただきます」
と、ようやく決心したようだった。
「あの、父はもとお先手組頭で加役を兼ね、大阪奉行に出世してまいりました。そのころの組下与力に石垣綱右衛門というものがおりまして、その娘をのち添えに直したのでございます」
「だいぶ年が違うってわけですね。よくあることった」
拾吉が口をはさんで、ごつんと隣のお袖にひじでこづかれる。
「これはさっきの忠吉が教えてくれたのでございますけれど、今では継母の父綱右衛門は、まえから部屋頭の天草屋市蔵と申す者と、なんといいますか、深いかかりあいの者だったと申します」
「へえ、あの天草屋とねえ」
「そなたは、市蔵という者を存じていますか」
「あっしでなくたって、その道の者はみんな知ってまさ。加役荒らしの市蔵といいやしてね、もとは町方の手先かなんかやっていたんだが、いつの間にか天草屋という人入れ稼業をはじめて、諸家さまへ中間小者の世話をする。特に加役のお屋敷はたいせつにして、どんどん金をつかい、そこで賭場をひらく。町方の手ははいりっこねえし、安心して人が集まるから、ばくだいな寺銭があがる。その金をまた役人にまくから、大きな声じゃいえやせんが、たいていの小役人は市蔵に頭があがらない」

「拾吉、よく知ってるのね。あんたもその天草屋の子分なの」
お袖がわらいながら横やりを入れた。
「ご冗談でげしょう。あっしはやろうのばくだいな寺銭のうちの二両か三両ぐらいは奉納している、これでもだんな衆のうちでさ」
「やっぱり、捜し屋でせしめたお金なんでしょ」
「まぜっかえしちゃいけねえ。肝心のお嬢さまの話が、どこかへ行っちまった。すんません、お嬢さん」
「いいえ。市蔵という男は、ほんとうに恐ろしい男だそうですね」
千鳥は身ぶるいしているようである。

4

「お嬢さん、ほんとうをいうと、市蔵ってやつはただ恐ろしい段ぐらいの男じゃありやせん。世の中の悪事ってえ悪事で、野郎のやらないことは一つもない。それでいて、一度もしっぽをつかませねえ。いいえね、しっぽをつかまえようとするやつがいると、いつの間にかそいつが世の中から姿を消している。まあ、太閤を悪党にしたようなやつで、しかも切支丹バテレンの術を使いやあがる」
「なんだね、そのバテレンの術というのは」
東吾はわらいながらきいた。
「野郎は九州の天草の産でしてね、つまり天草四郎の子孫なんですね。どこにねぐらがあるのか、今どこにいるのか、めったに姿を人につかませねえんです」
「しかし、天草屋という自分の家はちゃんとあるのだろう」
「そりゃありやすがね、つまりそんな家を何十軒も持っているんですね、うそかほんとうか知らないが、ときにはお旗本の殿さまに化けて、すましてるっていう話さえあるくらいでさ」
黙って歩いていた千鳥が、そっとためいきを

一つついた。
「千鳥さん」
「はい」
「どうやら、わしはわかったような気がする。失礼だが、綱右衛門と市蔵は、ご尊父に江戸へもどられると困るような事情が、なにかある。違うかな」
東吾はちらっと千鳥の顔を見やった。
「お恥ずかしゅうございます」
千鳥のからだじゅうがなんとなく羞恥に堅くなったような感じで、
「忠吉が、忠吉が、どうしても父が江戸へはいるまえに、それを告げておかないと命にかかわると、たってあたくしにすすめるものですから」
と、つぶやくようにいい足す。
「ふうむ、それを忠吉がねえ」
東吾は考えこまずにはいられない。
「だんな、こいつはえらいことになりそうです

お袖はいじっぱりの目をいきいきとあげて、きっぱりという。
「いやかね」
「ええ、いまさらあとへひくなんて、深川っ子の恥ですもの」
「しかし、今の拾吉うじの話を、話し半分に聞いても、天草屋という男はそうとう悪どいやつのようだ。ただ小田原まで千鳥さんを送っていって、それですむことなら、わしも深川っ子の意地と人情をぜひ見せてもらいたいと思ったんだが、それが命にかかわってくる問題だとなると、考えなけりゃならないと思うんだ。お袖さんには、深川で帰りを待っているおとっつぁんがあるんだからねえ」
「じゃ、早水さんも小田原へ送っていってあげるの、よすんですか」
「いや、わしは武士だから、約束は果たす。そういう悪党と戦っていくのは、男の責任の一つなんだ」

ぜ」
拾吉の声音も変わっていた。
「どうも、さっきの宗十郎頭巾は、ただの浪人者じゃねえとにらんでいたんですがね。黒幕が天草屋だとすると、こいつは命がけだ」
それぞれの胸へなにか重苦しいものがのしかかってきたように、ちょっとことばがとぎれる。
「お袖さん」
しばらく歩いてから、東吾が呼んでふっと立ち止まった。
「どうしたの、早水さん」
「あんた、ここから拾吉うじに送ってもらって、江戸へ帰ったほうがよくはないか。もしものことがあると、あんたにはおとっつぁんというものがある」

5

「いやだわ、いまさら」

「女だって、おんなじことよ。こわい話を聞かないうちならとにかく、命があぶないと聞かされて、じゃよしますでは、いくら女だって、あんまりだらしがなさすぎます。それじゃまるで、お嫁に行ってからご亭主が業病の家がらだとわかって、びっくりして逃げ出すのとおんなじじゃありませんか」
「うれしいことをいうぜ。見直しちまったな あ、あねご」
そばから拾吉が感心する。
「あたしもその天草屋のことは、おとっつぁんから少しは聞いているんです。女だって悪いやつには腹がたちます。女だから悪いやつには負けていなければならないって法はないんでしょう。男に悪党と戦っていく責任てのがあるんなら、女にだってその責任はあると思います」
「うむ、りっぱなものでげす。けど、あねご、もう一度ようく考えてみておくんなさいよ。一つまちがうと、命が消える。現にたった今、若

党さんの命が、目の前で消えているんだ。ねえ、だんな」

拾吉も真顔になってきたようだ。

「あたし、天草屋が憎いことも憎いんですけれど、この自分たちのすんでいる世の中で、そんな悪いことがほんとうにできるものかどうなのか、ふしぎでたまらないんです。そりゃ、どろぼうの隠しておくお金を捜して暮らしている捜し屋なんてのも、ずいぶんふしぎにはふしぎだけれど――」

「あれえ、変な引き合いに出されちまったぜ」

「いいえ、捜し屋なんてのは、ただふしぎな人間がいるもんだで、すましていられもしますが、どんな悪いことをしていてもつかまらない、お上でも手のつけようがないなんて、そんな世の中なのかしらと思うと、なんだかくやしくなってきちまうんです」

お袖はただ物好きではなく、激しい義憤をさえ感じているようだ。

6

「そうか、お袖あねごの心意気はよくわかった。もうむりにとめないことにしよう。――で、拾吉うじはどうするね」

東吾はあらためて拾吉にきいた。

「冗談じゃねえ、あっしはこれでも、だんな、男のうちでさ」

「妙な意地はたてないほうがいいと思う。天草屋のこわいことを、いちばんよく知っているのは貴公なんだからな」

「なあに、こわくてたまらなくなったら、いつでも黙って逃げ出しやす。せっかくここまで三人いっしょだったんだから、まあ小田原まで送らしておくんなさい。たまには男の責任てやつも果たしてみてえ」

まじめなのか、冗談なのかちょっとわからないようなところはあるが、この男はもっと奥になにか性根があってとぼけている、東吾にはそんなふうに思えたので、

「よかろう。じゃ、ともかくも三人いっしょに小田原まで行くことにしよう」

と、千鳥をうながして歩きだした。

「だんなえ」

「なんだ」

「どう道をいそいだって、今夜じゅうに小田原へ行こうってのは無理だ。今夜は大森泊まりってことにしちゃどんなもんでげす。だんなはまだ腹はすきやせんか」

「正直にいうと、腹はすいてきたな」

まだ三人とも夕飯をとっていないのだ。

「そうでげしょう。たとえば、このまま川崎までのしてみたところで、追っ手がかかっているとすりゃ、きっと追いついてくる。お袖あねごの足もだいぶ無理をしているんだから、大森泊まりってことにしやしょう」

たしかに、拾吉のいうとおりである。

「千鳥さんの考えはどうだろうな」

念のために、千鳥にきいてみた。

「あたくしは皆さまおまかせにいたします。旅ははじめてなのですから、なんにもわかりませんの」

すなおな千鳥である。

「よし。それじゃ、今夜は大森泊まりということにきめよう」

「そこで宿帳なんですがねえ、てんでんばらばらじゃ、旅籠で怪しまれる。あっしはお袖あねごのお供、だんなはお嬢さんの家来、これからみんなでお嬢さんのご尊父松浦さまを小田原までお出迎えに行くんだってことにしておきやしょうよ」

そういう点はいちばん拾吉が世なれているらしく、よく気がつく。

「承知した。万事貴公の采配にまかせよう」

大森はほんとうの宿駅ではなく、中間の町だから、大きな旅籠屋はない。四人がわらじをぬいだのは、山本屋という料理屋兼業の、いわゆ

る旅籠茶屋というやつであった。

7

大森から蒲田へかけては梅林の名所で、ここの梅の実は季節がくると毎年江戸へ売り出される。今はちょうど花の盛りだから、昼間は梅見の客でこの店もいそがしいようだが、夜の泊まり客はほとんどないようだった。

四人でおそい夕飯をすましたのは、やがて宵をすぎるころで、腹ができると急に一日の疲れが出る。あとはもう寝るばかりだが、といって、それぞれに胸に重いものがあるから、だれも寝ようといいだす者はなく、なんとなく不安な浮かない顔を、一つ火ばちのまわりへ集めてきた。

「拾吉うじ、貴公の捜し屋というのは、どんな商売なのかね」

東吾はふっと思い出して、きいてみた。

「恐れ入りやす。つまらねえことをしゃべるんじゃなかった」

拾吉は首をすくめながら、うらめしそうにお袖の顔を見る。

「あたしのせいにしたってしようがないわ」

お袖はおつきあいのように微笑したが、なんとなくうわのそらで、心では別のことを考えているようだ。

「あねご、腹がくちくなったら、急に里心がついてきたのとちがうかね」

口ではからかっているが、拾吉の目にはどこかいたわりの色がある。

「そんな人の心配をしないで、早く早水さんに捜し屋の自慢をしたらどうなの」

「けっ、薄情な親分だな。なにも満座の中でそう赤い顔をさせたがらなくたってようござんしょう」

「そういえば、なにかどろぼうの隠しておく金を捜して歩くんだとかいっていたようだな」

そこまではちゃんと聞いている東吾なのだ。

「へえ、用心のいいぬすっとってやつは、ぬすんだ金をすぐにその土地ではつかわねえもんでしてね。江戸で仕事をすませると、上方へ高飛びをする。ほとぼりがすぎてから、江戸へ帰ってきて、まえに隠しておいた金を掘り出してつかうもんでさ」

「なるほど、どろぼうでも用心のいいものだね」

「そりゃ、その道の人間になると、自然といろいろな知恵が働いてくるんでしょうね」

「そのなかでも、天草屋市蔵ってのはいちばん悪知恵の働くやつなのね、きっと」

話はどうしてもそこへ落ちてくる。

「野郎のは金をかくしておくんじゃなくて、ばらまいているんだ。しかも、これはと思う急所急所へね」

お袖と火ばちを中に向かいあっている千鳥は、さっきから行儀よく両手をひざにおいてうなだれたまま、三人の雑談が耳にはいっているのか、いないのか、人形のように身うごき一つしない。

「千鳥さん――」

呼びかけた東吾の目に、なにかきびしい色がある。

8

「はい」

千鳥は敏感に東吾の語気を感じたらしく、びっくりしたように涼しい目をあげた。

「われわれ三人は、ともかくもこうしてあなたのために命をかけようとしている。もっと突っこんだ話をしなければ、たとえば追っ手がきても、策のたてようがない。正直にいって、千鳥さんはわれわれともっと心やすい口をきくのは、迷惑なんだろうか」

これから命がけの苦労を共にしようというのに、千鳥だけが高いところにとりすましているような態度は、拾吉とお袖に対してもよくない

と、東吾は不満だったのだ。
ちょっと千鳥をしかったような形なので、拾吉もお袖もはっと東吾の顔を見ている。
千鳥はきのどくなほど顔を赤らめながら、なんと思ったか、静かに座ぶとんをすべりおりて、そこへ両手をつかえた。
「申しわけございません。つい胸にあまることがございまして、うっかりいたしておりました。ふつつかなあたくしのために、みなさまがお力になっていてくださいますのに、まだごあいさつも忘れておりまして、——皆さま、こういうぶちょうほう者でございますが、気のつかぬところはご遠慮なくおしかりくださいまして、どうぞ小田原までお送りくださいますよう、あらためてお願い申し上げます」
行儀正しく頭を下げる姿が、しかられたすぐあとなので、ひどくいじらしく見える。
「いいんですよ、千鳥さん、あらたまっておじぎなんかしなくたって。——早水さんは案外こわいのね」
お袖がいそいでとりなすようにいった。
「そりゃしようがありませんや。いざとなれば、なんといったってだんなの腕と知恵がいちばんたよりなんでげすからね」
拾吉がもっともらしく首を振って、
「さあ、お嬢さん、もうそれでようござんす。ずっと火ばちのそばへお寄んなすって」
と、千鳥を招く。
「拾吉うじ」
「なんでげす、だんな」
「わしは、さっきの若党忠吉というのに少し疑問があるんだが、どうだろうねえ」
東吾が考え考え切り出す。
「といいやすと——」
「死者を疑うのは酷なようだが、天草屋というやつがそんな悪どい男だとすると、忠吉もその手先に使われているんじゃないかという気がしてくる。千鳥さん、なにかそんな心あたりはないかねえ」
東吾の表情はもうやわらかい。
——なんて憎いんだろう、この人。まだ若いのに、ちゃんと大将になれる器量を持ってる。
お袖はそれとなく、東吾の顔を見直さずにはいられなかった。

9

「いいえ、忠吉にかぎって、そんなことはないと存じます」
千鳥は真顔になって、いそいで首を振っている。
「あの下手人は、わしがいちばん最初に誰何したとき、おまえにかかわりのないことだから、黙って通りすぎろといっている。千鳥さんはかごの中で聞いていたろう」
「はい」
「次に、切る理由があるから切るのだと、うそぶいていた。あれが天草屋一味の刺客だとすれば、ご尊父にあわれて困るのは、若党よりむしろ千鳥さんのほうだ。その千鳥さんは刺す暇がじゅうぶんあるのに、殺さずにおく。ひとりになれば女だから、小田原までは行けないと見たのだろうか」
「ひっさらう気だったかもしれやせんぜ、だんな。お嬢さんは器量がよすぎやすからね」
拾吉がまたしてももっともらしい顔をする。
千鳥はほおを赤らめ、お袖は失礼なといいたげに拾吉のほうへ目をとがらせたが、口をはさむすきはなかった。東吾がすぐあとをつづけたからである。
「そうもいえるかもしれない。しかし、わしは若党の口から千鳥さんになにか秘密のもれるのを恐れた。というより、千鳥さんをあそこまでひっぱり出させれば、もう用のない人間だから、あとくされのないように切った。そう考えるのは、少し思いすごしかな」
「いや、あっしはだんなのいうとおりだと思い

ますね」
「もし、ほんとうの忠義からだったら、死んだ若党さんがかわいそうじゃありませんか」
お袖が娘らしい抗議を持ち出す。
「それは、忠吉がなんといって千鳥さんを連れ出したか、その様子できまる」
東吾はそれとなく千鳥をうながしたが、千鳥はいいにくいらしく、目をひざの上へおとしてしまった。
「わしが代わっていってみよう。天草屋はのち添えのひととふらちな関係におちている。それを千鳥さんも若党も勘づいていた。違いますか」
東吾はずばりと切りだした。
千鳥が消え入るようにうなずき、さすがにこんどはお袖も顔を赤くしている。
「しかし、ただそれだけでは、千鳥さんも小田原まで行く気にはならない。忠吉がだれに吹きこまれたか、このまうっかりご尊父が江戸へ着くと、命があぶないといいだした。いっしょに小田原までお供するからと、熱心にいうので、千鳥さんも決心した。そうでしょう」
「はい」
「そんな差し出たまねをすれば、忠吉の命はない。忠吉も天草屋のこわいことはじゅうぶん承知している。それを承知のうえで、こんな大胆なまねを実行したのは、天草屋一味の者にそそのかされてのことだと考えるほかはない」

10

「すると、だんな、天草屋はどうして忠吉なんかをそそのかして、お嬢さんをひっぱり出させたか、——つまり、なにをたくらんでいるのかってことになってきやすね」
拾吉がじいっと目を光らせた。
「千鳥さんはひとり娘じゃないのかな」
ほかにたよりになる兄弟があれば、ひとりでこんな苦労はしないはずである。

「はい」
千鳥はうなずいてみせた。
「じゃ、松浦家の跡めは、千鳥さんが養子をもらってつぐことになるはずだが、そんな話はまだ出ていないんですか」
「継母の弟で、綱次郎という者を養子にするようにといわれています」
「なあるほど、お嬢さんはそれをきらっていなさる。ご尊父さんもあんまり気乗りはしないが、これは若いのち添えさんに頭があがらないってわけだ」
「拾吉、ずけずけとそんな口をきくもんじゃありません。失礼じゃありませんか」
お袖がちらっと千鳥の顔色を見ながらたしなめた。
「だって、あねご、ずけずけとものを聞いておかなくっちゃ、善意がわからねえ。おなわにできないじゃありませんか」
「あら、あんた天草屋をおなわにする気なの」
「あれえ、そば屋のお袖ちゃんは、岡っ引きの娘さんじゃねえんですかえ」
拾吉がわざとあきれてみせる。
「そりゃ、あたしに縛れれば縛ってやりたいけれど、たよりない子分ばかりなんだもの。ねえ、早水さん」
お袖はくやしそうに東吾の顔を見る。
「しかし、ただそれだけじゃ、天草屋がご尊父の命までねらうとは思えないな。たとえば、その美しいのち添えがほしいのなら、黙ってつれ出して知らん顔をしていることも、天草屋ならできる。なるほど、千鳥さんを忠吉につれ出させたのは、綱次郎を千鳥さんに押しつける小細工と見られないこともないが、ご尊父を殺してしまえば、松浦家は断絶してしまうのだ。養子をこしらえたところでしようがないと思うがねえ」
東吾はなにかを読みとろうとするように、千鳥の顔色をうかがう。

千鳥もじっと考えこんでいるようだ。
「わかった。だんな、わかりやしたぜ」
拾吉がぽんとひざをたたいて、得意そうな顔をあげた。
「しっ」
廊下へだれか来たようなけはいに、東吾がいそいで拾吉の口を目で押える。
「お客さま、失礼でございますが、宿改めでございます。おじゃまいたします」
女中の声が廊下から告げた。

11

旅をしていれば、宿改めはそう珍しいことではない。
が、おりがおりだし、多少宿帳をこしらえようと相談していた弱みもあるから、はっとそれぞれに三人が顔を見あうのを、東吾はおちついているようにと、すばやく目で制して、
「おはいりなさい。まだやすんではおらぬ」
と、廊下の女中に返事をした。
さらりとふすまがあいて、そこに立っているのは、江戸の同心とも見える四十年配の着流しの男で、うしろに手先らしい男がふたりひざまずいている。
「拙者は江戸北町奉行所配下の同心倉橋市之丞です。特に手配を依頼された件があって、江戸から急行したもの、以下役目によって、めいめいに尋問いたす」
はっきり身分を名のってから、
「そのほうの姓名は」
と、まず東吾に向かい、吟味口調になる。
江戸から特に手配をたのまれてきたというからには、松浦家から手配の依頼があった千鳥たちを追ってきたのかもしれぬ。なまじこしらえごとをいっては、かえって逆を取られるおそれがあるので、
「拙者は遠州浜松の浪人、早水東吾、二十三歳でござる」

と、東吾は正直に答えることにした。
「どこまで行く途中かな」
「江戸へ志す途中ですが、少し子細あって、小田原まで引きかえします」
「江戸へはだれをたずねていかれるのか」
「九段の斎藤弥九郎先生をたずねていきます」
「そのほうの名は」
急にお袖のほうを向く。
「袖と申します。深川永代橋詰めのそば屋弥之助の娘。十九でございます」
東吾が正直に答えたから、そうしたほうがいいのだろうと、敏感にさとったらしい。岡っ引きの娘だけあって、役人はこわがらない。
「どこへ行くのだ」
「箱根の湯本からの帰りでございますが、早水さまといっしょに小田原まで引きかえすことにいたしました」
「箱根へは湯治に行ってきたのか」
「いいえ、それほどの身分ではございません。深川佐賀町の質両替商和泉屋さんのおかみさんが湯治に行っていますので、お見舞いに行ってきたのです」
「ひとりでか」
「いいえ、父がお上から十手をおあずかりしておりますので、そのほうの見習い、これなる拾吉を供につけてくれました」
ぬけぬけいってのけるだけの度胸を持っているのだから、東吾もひそかに感心させられる。尋問されていちばんまごつくのは拾吉ではないかと、実は心配していたのだ。

12

「拾吉――」
倉橋の鋭い目がじろりと拾吉をにらむ。
「へえ、お役目ご苦労さまでござんす」
拾吉は人のいい顔をあげながら、如才がない。
「てめえ、いくつになるんだ」
「二十七になりやす」

「そば屋弥之助の手下のなかでも、てめえは親の弥之助に信用があるから、娘につけられて箱根までふたりきりで供をさせられたんだな」
「へえ」
「ゆくゆくは、お袖の婿にと、そんな話も出ているのか」
そのくらいの男でなければ、泊まりを重ねる道中へ、親が安心してふたりきりで出すはずはない。と見て突っこんだ倉橋だから、目はすばやくお袖の顔へ走る。
さすがにお袖は、はっとほおを赤らめたようだ。
「いいえ、まだそんな話は一度もございませんが、あっしはこれでもいっしょうけんめい、親分たいせつとつとめておりやす」
りちぎそうな顔をして、あたりさわりのないうまい返事をする。
「きっとそれに相違ないな」
「へえ」
「その忠義者が、せっかく江戸の近くまで帰ってきていながら、なぜまたわざわざ小田原まで引き返すんだ。弥之助は娘の帰りを、少しも心配しちゃいねえのか」
「恐れ入りやす。あっしはそういったんでございますが、お嬢さんの難儀をよそ目に見すごしちゃ、深川っ子の名折れだと、お袖さんがたって申しやすんで」
「だから、てめえも納得したというのか」
「へえ」
「そのお嬢さんの難儀というのは、どんなことなんだ」
倉橋はわざと拾吉をにらみつけながら、千鳥のほうを見向こうともしない。
「へえ。――お嬢さん、どうしやしょう」
拾吉は当惑したように、千鳥のほうを見る。
「黙れ、てめえにきいているんだ。人に相談するやつがあるか」
「へえ」

「てめえも御用聞きの見習いなら、こんなときのロのきき方ぐらいは知っているだろう。なんで小田原へ引き返さなくちゃならねえのか、ありていに申し上げてみろ。しだいによっちゃ、てめえは親分の娘をそそのかしてよけいな道中をさせる、弥之助の口一つでは、娘たらしの罪に落ちるか落ちねえの境だぞ」
「そ、そいつはたいへんだ。冗談じゃねえ、だんな、ありていにすっかり申し上げやす」
拾吉は顔色を変えたようである。

13

倉橋はあきらかに、なにかことばじりをつかんで難癖をつけようとしているようだ。
「だんな、あっしはなにもお袖さんに気があるから、わざと道中をのばして、泊まりを重ねようとしているんじゃないんで、――そんなそぶりがちっとでも見えようもんなら、それこそ横っつらを張り飛ばされて、たちまちお払い箱でござんす」
知っている者から見ると、この拾吉の返事のしようは、そうとうずぶとくすっとぼけたものである。
「だからそぶりにゃ見せねえが、腹ん中でそう思ってりゃおんなじことだろう」
皮肉な薄わらいをうかべる倉橋だ。
「とんでもござんせん。この早水のだんなと戸塚から道づれになりやしたんで、夜道になっても心じょうぶだと、安心して鈴が森へかかりやした。品川のほうからかごが一丁かけてきて、いそぎだなと見ているうちに、松のかげからふいに頭巾をかぶったやつが飛び出して、いきなりかごのうしろからついてきた若党さんをたたっ切りやしたんで」
倉橋は冷たい顔つきで、うなずいてもみせない。
「あっしたちはびっくりして棒立ちになっちまいやしたが、早水のだんなはさすがにお武家さ

んでさ、おまえたちはここで待っていろといって、ぐんぐんその下手人のほうへ向かっていきやしてね、命がけの切りあいがはじまりやした。すごいのなんのって、——いいあんばいに、その野郎が逃げ出してくれたんで、あっしたちもそばへ出ていくと、かごの中にこのお嬢さんが青くなっていたんです。切られたのは若党さんで、これからご尊父の松浦岩見守さまが大阪奉行からご勘定奉行に出世なすってお帰りになるのを、小田原まで迎えに行く途中だ、お嬢さんひとりではとても小田原までは行けないおっしゃるんで、それなら窮鳥というやつだから、三人で送っていこうと話がきまったようなわけなんでして」

「早水東吾——」

「はい」

「いま拾吉の申したとおりに相違はないか」

「相違ありません」

「松浦岩見守娘千鳥——」

倉橋ははじめて千鳥のほうを向いた。

「はい」

千鳥がしゃっきりと意地のある顔をあげる。

「そのほうはたしかに松浦岩見守どのの娘に相違あるまいな」

「はい」

「夕刻、小川町の屋敷から、ことし十八になる娘千鳥、若党忠吉なる者と無断家出、駆け落ちをいたしたようだから、まちがいのないうちに手配をしてくれるようにと届け出があった。その儀はどうか」

14

東吾が考えていたとおり、倉橋市之丞は松浦家のるす宅からたのまれて、千鳥を追ってきたのだ。

しかも、屋敷では千鳥を駆け落ち者として取り押えようとしているらしい。むろん、無断で家を出てきているのだから、千鳥の返事のしようによっては、保護という名目で強引に取り押えられてもいたしかたないことになる。

「おことばではございますが、あたくしも武家のしつけをうけております松浦又左衛門の娘、けっして家出などはいたしません。小田原にて父にあえば、必ずともに屋敷にもどります」

千鳥は少しもうろたえたふうはなく、おちついて答えた。

「駆け落ちではないといわれるのだな」

「はい」

「しからば、なぜ家人に無断で、屋敷をぬけ出すようなまねをされたのか」

「それには子細がございますが、ここでは申し上げられません。胸にあまる子細がなくて、なんで女の身でただひとりこうして小田原まで父にあいにまいりましょう。ご推察くださいませ」

さすがに筋のとおった返事である。

「拾吉——」

「へえ」

「そのほうは松浦の娘千鳥を窮鳥だと申したな。なんで窮鳥なのか、その子細を申してみろ」

倉橋は拾吉から事情を聞き出そうとする。

「へえ、お供の若党さんが切られて、ひとりになっても小田原まで行かなくちゃならない。困っているから窮鳥でござんす」

「わざわざ小田原まで送っていくより、江戸の屋敷へ送っていくほうが近いではないか」

「いいえ、お嬢さんは屋敷へは帰れないんだそうでござんす」

「その帰れぬ子細を聞いているのか」

「そいつはまだ聞いていやせん」

「早水東吾、そのほうはどうか」

「拙者もくわしい子細はまだ聞いてはおりません」

「それを聞かずに、頭から娘のいうことを信用する、うかつだとは思わぬか。分別ある者な

ら、いちおうは屋敷へもどるように意見をするのが道かと思うが、この儀はどうか」

「そのご不審はもっともですが、道だけは踏んでいるつもりです。われわれ三人、一片の義によって小田原まで道中を引きかえす、良心にとがめるようなことではないでしょうなと、念が押してあります。これが一つ。もう一つは、若党を切った下手人が、物とりではない、切るべき理由があって切ったのだと、そのおりはっきりと口走っていました。前後の事情から推察して、屋敷へもどすより、小田原まで行ってご尊父の手にわたすほうが安全だと判断しました。おそらく、この判断は狂っていないという確信を持っています」

15

「人の娘をその屋敷へ送っていきたくないそのほうの確信というのは、どういうことか」

倉橋が皮肉に突っこんでくる。

「家名を重んずる直参旗本の屋敷で、主人のす中その娘がたとえ無断で家出をしたといって、いきなり駆け落ち者として町方へ保護を願い出るようなことは、主人の面目もわきまえぬうろたえたいたし方、さようなるす宅がどれほど信用できるものかできぬものか、われわれとしてはむしろ千鳥さんを小田原まで送っていって、ご尊父岩見守どのの判断におまかせするほうが至当のように考えます」

「なるほど――」

倉橋はちょっとことばに詰まったようだが、

「すると、若党を切った下手人は、ただの物とりではないというのだな」

と、もっともらしくそっちへ逃げを打つ。

「拙者にはそう思えます」

「松浦千鳥――」

「はい」

「役目によっていちおう問いただしはいたしたが、小田原へ父を出迎えにまいるのが事実なれば、むりに屋敷へつれもどすというわけにもいくまい。屋敷のほうへは当方からそのように伝えておくが、それでよいか」

「はい、どうぞお願いいたします」

「お袖、拾吉、おまえたちのことも父弥之助のほうへ話しておいてやるから、深川っ子の名折れにならぬよう、きっと小田原まで無事に送っていってやるがよい」

「かしこまりました」

「一同、じゃまをしたな」

倉橋はそうあいさつをして、最後は案外あっさり引きあげていった。

四人はそれぞれの心で、かれらの去っていく足音に耳を澄ましている。

「うちのおとっつぁん、だいじょうぶかしら」

お袖がふっと心配そうにいいだす。

「なにがだね、あねご」

「拾吉なんて子分いやしないもの。うっかりそんな返事をしたら、上を偽る不届き者で、あたしたちたいへんなことになりゃしないかしら」

「そのときはそのときでさ。あっしひとりが悪者になりゃいいんだ。それより、だんな――」

拾吉は東吾のほうを向いて、

「いまの八丁堀は、さぐりってやつでござんしょうかねえ」

と、目を光らせる。

「やっぱり、天草屋がかげにいると、貴公は見るんだな」

「だって、それでなけりゃ、駆け落ち者っていうことばは、出ねえはずでしょう。だいいち、あの八丁堀は若党を切った下手人のことを、あんまり聞きたがらなかったじゃありませんか」

拾吉はちゃんと急所をつかんでいる。ただの遊び人にしては、どうも頭が切れすぎるようだ。

16

「とにかく、あすはまた早立ちだし、今夜はゆっくり眠ることにしよう」

東吾はあまりむだ口はきかず、みんな疲れていることでもあるし、女たちふたりは次の間へやすませ、自分はふすま一重のこっちの間へ拾吉とまくらをならべて床についた。

「早水さん、おやすみなさい」

きさくなお袖が、床にはいるまえにもう一度、ふすま越しに声をかけていた。

「おやすみ――」

東吾が返事をする。

「あねご、おやすみなすって」

と、拾吉がわざとこっちからいって、べろりと赤い舌を出す。

「はい、おまえもね」

答えて、くすりと笑うけはいのしたのは、お袖のほうでもなにかそんなまねをしていたのだろう。

間のふすまをしめるまえに、一度あいさつはすんでいるのだから、千鳥はさすがにそんなはしたないまねは慎んでいるようだ。

へやのすみの有り明けあんどんがほのぐらい。寝しずまると、波の音が静かに耳についてきた。

東吾は目がさえて、容易に寝つかれなかった。

――妙なまわりあわせになってしまった。

男ふたりに女ふたり、きょうまではまったくあかの他人でいた者が、いまこうして一つ旅籠に泊まっている。またしてもそんな感傷がふっと胸をひたしてこないでもないが、それはほんの一瞬のことで、東吾はたちまち三人の命をあずかっている大きな責任感に、男の闘志をかりたてられてくるのだ。

むろん、このあともどり道中は、小田原まで行って、千鳥を無事にその父松浦岩見守なる人の手にわたせば、それで事なくすむ。が、おそらくそう簡単にはいくまい。

現に、倉橋市之丞という同心が、こっちの様子をわざわざさぐりにきているのだ。

――だいいちに、天草屋市蔵という者の目的はなにか。

それを考えてみなくてはならぬ。

かれは悪党で、松浦岩見守の若いのち添えと不義を働いている。その岩見守が、こんど勘定奉行に出世して、江戸へ帰ってくる。

そこで、娘の千鳥を若党に誘い出させ、鈴ガ森でその若党を切らせた。

いったい、天草屋はなんのために千鳥を若党に誘い出させる必要があるのだろう。

たとえ、千鳥をさらって、そのロをふさいだところで、岩見守が江戸へはいれば不義は必ず知れる。また、岩見守を抹殺してしまうはらなら、千鳥などを誘拐させる必要はないはずだ。

いや、かれほどの悪党が、なんでいまさら不義などをそう恐れるのだろう。女がほしければ、その女を黙ってどこかへ隠してしまえば、それですむ話ではないだろうか。

17

「だんな、寝やしたか」

ふっと隣の拾吉が声をかけてきた。

「いや、起きている」

「お隣さんおとなしくなったようだから、少し話しやしょうか」

これも今まで、ひとりでじっと考えこんでいたらしい。

「拾吉うじ――」

拾吉は天井を向いたままで、軽く目をつむった。

「なんです、だんな」

「わしがひとりごとをいってみる。気が向いたら、返事をしてみてくれぬか」

「寝言に返事ってやつでげすか」

「うむ、寝言に寝言でいい」

「おはじめなせえまし」
東吾はちょっと考えてから、
「天草屋はご尊父を抹殺する気だ」
と、まず断定してみた。
「でござんしょうね」
拾吉も同じ見方のようである。
「理由は――？」
「間おとこでござんすからね」
「ご尊父はお先手頭時代、天草屋の金をつかって大阪奉行に出世した。のち添えはそれを知っているから、天草屋との不義をこばみきれなかった」
「ありそうなことでげす」
「するとご尊父も不義は大目に見なければならない。まして、こんどは勘定奉行に出世して帰ってくるのだから、天草屋としては抹殺するより、利用したほうがりこうだ」
拾吉は考えているようだ。
「ご尊父としても、女ひとりのことでわが命をねらわれるより、天草屋をもっと利用したほうが得だ」
「だんなは恋ってやつを、つまり女の子にほれたことがありやすか」
「ないな」
「世の中には、女の子を平気で道具に使える男もいるが、そんな男でも、自分がほれたとなると、どういうもんですかねえ」
「なるほど」
「それに、天下の勘定奉行が悪党なんかに利用されていちゃ、御用がつとめにくい」
東吾はぐっとことばに詰まる、殺意はむしろ岩見守のほうにおこるのが当然だった。天草屋はその先手を打とうとしているのだ。
「窮鳥はねえ、だんな、もしかの場合の人質にほしかったんでさ。寝言だからここだけの話だが、そば屋のあねごはやっぱり鈴が森から帰したほうがよかったかもしれやせん」
「あすの朝でもおそくはあるまい」

「さあ、あの気性じゃねえ。それに、今となっちゃ、もうおそい」
東吾はかえすことばもなく、いつか目をあいて天井をにらみあげていた。

道険し

1

翌朝、東吾は朝のぜんにつくまでは、もう一度お袖に、ここから江戸へ帰るようにすすめてみる気でいたが、ついに口に出せずにしまった。
「早水さんも拾吉も、ゆうべなにか寝言をいっていたようですね」
顔がそろって朝茶を入れているとき、お袖が先手を打ってきたのである。
「あねご、寝ている間のことは、罪だからいいっこなしにたのみやす。眠っている間は、どんな人間だって仏さまもおんなじでげすからね」
拾吉が口をふさぐようにさえぎって、にやりとわらった。
「ふ、ふ、知らぬが仏っての、そんなところから出たのかしら」
からかっているような口ぶりから見ても、昨夜のこっちの話は、女たちも眠れぬままに、とぎれとぎれには耳にはいっているのだろう。千鳥の顔色は、ことにさえなかった。
「お嬢さん、きょうは藤沢泊まり、あすの夕がたにはいやでも小田原へはいれやす。小田原へ着いてしまえば、もうこっちのものですからね」
拾吉がなぐさめるようにいう。
「どうぞ、お願いいたします」
千鳥はことばすくなに、行儀よく会釈をしていた。
「早水さん、あたしたちは正しい表街道を歩いているんでしょう」
「うむ」
「どんなことがあったって、良心にとがめるよ

うなことはないんだし、ちっともこわがることはないと思います。正しい者には、きっと天が味方をしてくれると思うんです」

お袖がしんけんな顔をして、力んでみせる。自分にいいきかせるというより、千鳥の気持ちを少しでもひきたててやりたい心づかいなのだろう。

「こいつありっぱな寝言だ。ねえ、だんな」

拾吉も思わず感嘆の声を惜しまない。

「わしも賛成だ。ここに正しい人間が四人いる。断じて行なえば鬼神もこれを避けるというからな。心を一つにして、今のお袖さんの声を天の声として聞こうじゃないか」

東吾もなにか教えられたような気がして、もうお袖に江戸へ帰れとはいいだせなくなってしまった。

千鳥のほおへすっと涙が一筋光ってくる。

やがて朝飯をすませ、新しい気持ちでわらじをはいて旅籠を出ると、街道はきょうもからりと晴れた梅びよりだった。

「だんな、お袖あねごに一本活を入れられやしたねえ」

きょうは東吾と肩をならべて、女たちよりひと足先を歩きながら、拾吉が小声でわらった。

2

――きょうは何か起こる。

だれの胸にもそういう予感はあった。ゆうべ、現に倉橋同心がちゃんと様子を見にきているのだから、敵にたくらみがあるとすれば、なにか手を打ってこなければならないはずである。

が、こうして明るい春の日ざしの中を歩いていると、昨夜あんなにしんけんに話し合っていた天草屋のたくらみなど、なんだかうそのような気もしてくるのだ。

常識から考えても、このきちんと制度がととのっている世の中で、ひとりの人間がそんな計画的な殺人をたくらみ、しっぽをつかませないようにそれを実行するなどということが、はたして可能なのだろうか。

いや、もう一歩突っこんでいえば、天草屋市蔵などという悪党が、この世の中に生きているということさえ、東吾は信じられなくなってくる。

「拾吉うじ、こんないい天気の下で考えると、ゆうべの寝言など、なんだか杞憂のような気がしてくるねえ」

「すると、だんなはこのまま歩いていさえすりゃ、無事に小田原まで行けそうだっておっしゃるんでげすか」

「うむ、正直にいうと、天草屋がどんな悪党か知らんが、天下の勘定奉行をしっぽもつかませずに抹殺し去る。そんなことができるかどうか、疑問になってくるんだ。考え方が甘いかなあ」

「さあ、甘いかからいかは、小田原へはいるまでの勝負でござんしょうね」

「なるほど――」

「現に、昨夜は鈴ガ森で、若党がひとり、この世から消されていやす。うっかりすると、きょうはあっしかだんなの番かもしれやせんぜ」

「それもそうだな、どんな手でくるだろう」

東吾はまだ本気になれない。

「刀ばかりが人を殺すんじゃありません。弓、鉄砲、毒薬、――それよりもっとこわいのに抱き込みというやつがありやす」

「だきこみ――」

「あいつはあっしの仲間ですと、罪もない人間を悪党が抱きこんでいっしょにろう屋へつれていく。申し開きがたつまでに、ごろう内で一服盛られちまうんでさ」

「ふうむ。手はあるもんだなあ」

しかし、その日の道中は至極平穏無事で、日が暮れかかるころ藤沢の宿へはいった。

旅をする者にとって、灯ともしごろがいちばんうらさびしい。無事ではあったが、大森から

九里あまり歩かせられたのだから、女たちは疲れた足をひきずるように、肩を寄せ合って歩いていた。

「どうやら、遠矢にもかけられずにすんだようだな、拾吉うじ」

東吾はほっとした気持ちである。

3

「だんな、化け物はたいてい夜出るもんでさ。安心するのはまだ早うございますぜ」

拾吉はなかなか用心深い。

「それもそうだな」

まだあすという日が一日あるのだから、むろんゆだんはできない。

「だんなはおとといの晩、どこの旅籠だったんです」

そういえば、拾吉もお袖も、おとといの晩は藤沢泊まりだったはずである。

「わしは高砂屋というのへ泊まった。お袖あねごはどこだったんだろう」

「あねごはたしか常陸屋だったといっていやした。娘が中一日おいてまた同じ旅籠へ着いちゃ、それこそなにかとまちがえられそうだ。今夜は高砂屋ときめやしょう」

「そうか。わしはどっちでもかまわん」

「そこで、あっしはちょいと本陣まで行ってきやすから、だんなはふたりをつれて、ひと足先へ宿へ着いていておくんなさい」

「本陣へなにしに行くんだね」

「御用道中の泊まりは本陣にきまっていやす。たいてい一日か二日まえに前触れがきているはずでさ」

大名の参覲交替や、公儀役人の御用道中は、必ずその宿の本陣へ泊まる。宿賃が公定できめられていて、普通の旅籠よりずっと安くなっているのだ。

「なるほど、それはいいところへ気がついたなあ。——ちょっと待ってくれ」

東吾は立ち止まって、女たちが追いついてくるのを待ち、

「お袖さん、今夜の泊まりは高砂屋にきめるが、それでいいかね」

と、念のため聞いてみた。

「ええ、どうぞ——」

お袖は、どこでもいいから、早く宿に着きたいといった顔つきである。

「よし、きまった」

「じゃ、たのみやす」

拾吉は疲れた様子もなく、夕やみの中を足早に歩きだす。

「あら、どこへ行くんです」

「本陣へ千鳥さんのご尊父の前触れがとどいているかもしれないというんでね」

「そういえばそうでしたねえ」

お袖が感心したようにいうと、疲れきっている千鳥の顔にも、急に生気が出てきたようだ。

まもなく高砂屋へわらじをぬいで、あとからもうひとり連れがくるからと番頭にいいおき、女中に二間つづきの二階の座敷へ案内されると、女たちはいちどに疲れが出たらしく、ぐったりと火ばちの前へすわってしまった。

旅籠はちょうど泊まり客のたてこむ時刻だから、上も下もどたばたと家じゅうが活気だっている。

4

「ふたりとも、きょうはだいぶ疲れたようだな」

東吾も、火ばちのそばへ仲間入りをしながら、いたわるようにいった。

「早水さんも、拾吉うじも、憎らしいほど先になってしまうんですもの」

お袖がおおげさに憎らしい表情をしたので、思わず千鳥の顔がほころびる。ひとりはばっと明るい松葉ぼたんのような下町娘、ひとりはあくまでも慎み深いなでしこのような武家娘、顔

に疲労の色はかくしきれないが、どっちもみずみずしく、美しいなと東吾は思った。
「わざと早く歩くつもりはないんだが、気がついて振りかえってみると、ずっとおくれている。これじゃ護衛役にはならないと思ってね」
「男って、どうせ薄情なものなんだからって、さんざんあたし悪口をいいました」
「お袖あねごは、足も、口も達者だから」
「いいましたね、早水さん」
お袖はまたしても東吾をまっこうからにらみつけたが、ちょうど女中が茶器を運んできたので、
「お世話さま。あたしがいれますから」
と、すぐにそっちへ笑顔を向けて、如才なく盆をうけとっていた。
「お願いいたします。あの、お膳はお連れさまがみえてから出しますから」
女中はいそがしそうに去っていく。
「おねえさま、あたくしがいたしましょう」
なんでもかんでもお袖が手まめに女中代わりをやってのけるので、さすがに千鳥は気がひけるらしく、いそいで茶器のほうへ手を出そうとする。
「まあ、お嬢さまはちんとすわっておいであそばせ。そば屋のお袖あねごは、手も達者なんですから」
さっさと三つの茶わんに茶をついでしまうお袖だ。
「はい、まず若さま」
「若さまはないだろう」
東吾は苦笑しながら、ふっと熱いものが胸にこみあげてきた。
七年まえに、おなじ東海道を上る旅の泊まり泊まりで、母は茶を入れると手を仕えて、必ずまず自分にすすめてくれた。たまに自分がそれをすると、恐れ入りますと、心から会釈をする。十六の年の、希望にあふれた母と子の旅だった。

「どうかなすったの、早水さん」
「いや、おふくろさまのことを思い出したんだ」
「あら、早水さんのおっかさん、生きておいでなさるの」
「死んだよ、旅でね。もう七年になる」
東吾はちょっと瞑目してから、静かに熱い茶を喫した。
お袖も千鳥も黙って東吾の顔を見ている。

5

「妙な縁だねえ、ここにいる三人とも、まだそんな年でもないのに、みんなおふくろさまに死に別れている」
灯ともしごろの感傷とでもいうか、東吾はしみじみとした気持ちで娘たちの顔を見くらべる。
「ほんとうですねえ。あたしがおっかさんに死に別れたのは十三のとき、いいおっかさんでしたわ」
お袖の目が、ふっとうるんでくる。
「あたくしも、十三の年でございました」
千鳥も思い出したように、うなだれてしまう。
「母親というものは、こどものことしか考えない。わが子のためには、どんなつらいことでも忍べる。わしのおふくろさまは、わしが十六になるまで、苦労して女手一つで育てあげ、やっと父親にあいに行く途中の旅で死んでしまった。それだけに、さぞ心残りだったろうと思う」
「それで、早水さんはそのおとっつぁんに、お目にかかったんですか」
「いや、まだあわない」
「だって、おとっつぁんのいるところはわかっているんでしょう」
「それはわかっている」
「どうしてお目にかからないんです」

「こどもにはこどもの意地があるんだ。わしは母が死んだとき、もう父にはあうまいと思った。母に死なれたのがくやしくて、いっそ出家してしまおうと思った。しかし、考えてみると、母はわが子を父にあわせたい一心で、十六年間苦労してきたのだ。だから、父にあわなければいけない。そのかわり、父にあったら、よくそれまでに女手一つで育て上げてくれたと、父が母の位牌に頭を下げて、感謝するような自分になってからでなければ、父にあうのはよそうと決心したんだ。それが、苦労してくれた母への、せめてもの孝行だと考えている」

東吾はきょうまで何度も心に誓ってきたことを、もう一度口に出して、自分にもいいきかせる気持ちだった。いや、死んだ母親にも聞いてもらいたい気持ちだったので、

「母上、それでよろしいでしょうね」

と、思わず帯のあたりを手でおさえていた。胴巻きの中に、母の遺髪にそえて戒名がはいっているのである。

「わかったわ、早水さんが天にはしごをかけたいといっていた気持ち――」

心から同感したように、東吾の顔を見なおしながら、多感な下町娘はほろほろと涙を惜しまない。

「いやだなあ、早水さんは。泣きたくなるじゃありませんか」

「悪かった。そんなつもりじゃなかったんだ。すまん」

東吾ははにかんだような顔をして、大きなおじぎをしてみせる。

6

「早水さん、いま胸のところをおさえましたね」

お袖は見のがしていなかった。

「うむ」

「そこになにかおっかさんの形見、お持ちになっているんでしょ」

「遺髪を抱いているんだ」

「早水さんて、ずいぶん情が深いのね。おっかさん、きっとよろこんでおいでになるわ」

「そうかなあ。とにかく、だからわしは、おふくろさまが悲しがるようなことは、けっしてしないことにしているんだ」

「あたしのおっかさんの形見はこれなんです」

お袖は髪から銀の平打ちのかんざしを抜いて、ふところ紙でぬぐい、手のひらにのせてみせる。

「あたしも持っています」

千鳥もさそわれたように、帯の上を軽くおさえてみせた。

「お嬢さんのもご遺髪なんですか」

「いいえ、母のさしていたくしですの」

「おもしろいねえ。みんな髪のものばかりだ。もっとも、たびなんかを形見にする者もないだろうけれど」

東吾がそういってわらうと、

「そりゃそうよ、幽霊はたびをはいていませんもの」

と、お袖はそんなときにも口が軽い。

ふ、ふと、千鳥が思わず口をおさえていた。

「お袖さん、おっかさんの形見、そんなところへさして歩いて、落とすとたいへんだよ」

東吾は気がついたので注意した。

「そうね。旅へ出るんだと思ってさしてきたんだけれど、やっぱり帯の間がいいかしら」

お袖はすなおにもう一度かんざしをふいて、帯の間へ入れてみている。

「お連れさんがお着きになりました」

廊下で女中の声がして、

「ただいま帰りやした」

拾吉がそそくさとはいってきた。

「どうだ、わかったかね、拾吉うじ」

一同の目が拾吉に集まる。

「わかりやした。ご尊父さまはあすの晩、藤沢

へお着きになるんだそうです」
「ふうむ。そうすると、今夜はもう小田原へ着いていることになる」
東吾はちょっと意外な気がした。
「じゃ、あすわざわざ小田原まで行かなくても、ここに待っていればいいことになるんですね」
「あねごのおっしゃるとおりなんですがね、どうもふにおちないことがあるんでさ」
拾吉はちょっと千鳥のほうを見ながら、浮かない顔色だ。なにか千鳥に気がねをしているようにも見える。

7

「拾吉うじ、われわれはすでに事件の渦中へまきこまれていると見ていいんだ。そのことについては、おたがいに遠慮やきがねなしに、意見を出して、みんながいいと思う道を取ることにしようじゃないか」
東吾は拾吉をうながすように提案した。
「なるほど、そうでござんしたね。一つまちがえば、おたがいに命がけなんだ。じゃ、正直なことをいいやすがね」
拾吉はもう一度女たちの顔を見わたしてから、
「あっしはいよいよお蔵へ火がついてきたような気がするんでさ」
と、声をひそめた。
「どう火がついたんです」
お袖の目がいっしょうけんめいに光っている。
「ご尊父さんが今夜小田原泊まりだとすると、今お袖あねごがいったように、黙ってここにこうしていたって、あすの今ごろにはお嬢さんとご対面ということになる。もし、こっちからもあすの朝立っていけば、おひるすぎには大磯あたりでぶつかりやす」
「うむ、そういうことになる」
「そういうことにしたくないから、天草屋はいろいろ手を打っているでげしょう」
「うむ」
「だから、今夜からあすのお昼までの間に、ご尊父さんのほうか、こっちか、どっちかに変事が起こると覚悟しなけりゃなりやせん。そうは思いやせんか」
「たしかにそうだわ」
お袖は大きくうなずきながら、いそいで東吾の顔を見た。早く東吾の意見が聞きたいらしい。
「それにねえ、だんな、あっしは本陣へ行くまえに、そっとここの家の前を見張っていたんでさ」
いよいよ声をひそめる拾吉だ。
「うむ、わかる」
こんどは東吾が大きくうなずいた。
「で、ござんしょう。すると、案の定、だんながたがここへはいるとまもなく、ふたりづれの小商人らしい旅の男が、一度ここの前を通りすぎてから、ゆっくり引きかえしてきて、ここの客になったんです」
「ほんとう、拾吉さん」
今は拾吉と呼びすてにもできかねて、お袖はさっと顔色を変え、千鳥は伏し目になったまま、じっとからだじゅうを堅くしたようだ。
「ふたりとも、ここへはいったのかね」
東吾がきく。
「ふたりとも、ここへはいりやした」
拾吉がはっきりと答える。
「貴公が本陣へ行ってきて、いまここへはいるとき、この家の軒下に、なにか目じるしのようなものは出ていなかったかね」

8

「あっしもなにかそんな目じるしが出ちゃいないかと、気をつけて見たんですが、それだけは見あたりやせんでした」

拾吉はそう答えて、東吾の顔色をうかがう。
「すると、今のところは、化け物はそのふたりだけということになるね」
しかし、ふたりだからといって、けっしてゆだんできない。敵はどんな手段をとってくるかわからないのだ。
「とにかく、千鳥さんもお袖あねごも、今夜は廊下へ出るときはひとりで行っちゃいけないな。いつもふたりでいることだ」
「はい」
お袖はすなおに答えてから、
「お嬢さん、あんまり心配しないほうがようござんすよ。死ぬときはみんないっしょなんですからね」
と、そんな一本気な力のつけ方をする。
「あねごのいうとおりだ。いたずらに心配することはないが、覚悟だけはきめておこう」
「どうきめておくんです」
「われわれは表街道を歩いているんだから、あす千鳥さんをご尊父の手もとへとどけるまでは、正々堂々と戦う。三人のうちふたりまで倒れても、倒れたふたりにはかまわず、残ったひとりが目的を果たす。たとえ三人とも倒れてしまっても、千鳥さんはちゅうちょすることなく、まずご尊父のふところへ飛びこむことだ。わかったでしょうな」
「はい」
こんどは千鳥がすなおに答えて、
「あたくしのために、みなさまにとんだご苦労をかけまして、ご恩はきっと忘れません」
と、あらためてそこへ両手をつかえた。
「いいんですよ、そんなに恩になんかきなくたって。あたしたちはお嬢さんのためばかりでなく、世の中の悪党と戦いたいってのが、本心なんですもの。ねえ、早水さん」
お袖がいじらしそうに、うまいことをいう。
「そのとおりでげす。あねごは岡っ引きの娘さんだからって、悪党は見のがしちゃおけねえ」
拾吉はそんな揚げ足を取って、お袖ににらまれていたが、やがてふたりが連れだって廊下へ立つと、
「だんな、もしあしたじゅうにお嬢さんをご尊父の手にわたせなかったら、どういうことになりやす」
と、むずかしい顔をした。
「というと――」
「変事はこっちにばかり起こるとはかぎりやせんぜ」
「なるほど」
天草屋のねらいは、むしろ千鳥より父の松浦岩見守を抹殺するにあると見ていいのだ。そして、それを実行するとすれば、江戸へ着いてからより、道中でのほうが仕事はしやすい。

9

「拾吉うじは、むしろご尊父のほうに異変がおこりそうだと見ているのか」
「もし、今夜じゅうにこっちへ化け物があらわれなければ、きっとあっちだと思うんですがねえ」
拾吉はなんとなく目の色を変えている。
「しかし、あっちはもう勘定奉行の格式で、それだけの供ぞろいを立てての道中だろうからな」
それを供の目にもふれず襲うとすれば、それこそ遠矢か鉄砲にでもかけるほかはない。
「もっとも、きょうは箱根越えじゃあったが」
自分で口にしながら、東吾ははっとした。遠矢も鉄砲も、箱根峠なら使えないことはない。
すると、岩見守の命はすでになくなっていることになる。
「とにかく、だんな、あしたを待つことにしやしょう。あっちのことは、あっしたちがここでいくら気をもんでみたところで、どうにもしようがありやせん、まあ、千鳥さんにはよけいな

心配をさせずにおきましょう」
「賛成だな」
その夜は食事のときにも、さすがにあまり冗談口は出なかった。疲れてもいたが、それよりだれの胸にも重くつかえるものがよどんでいる。
食事の雑談もちっともはずまない。みんなにかの異変を待っている気持ちなのだ。
「さあ、もう寝ることにしようじゃないか。こうして四人でにらめっこばかりしていたってしようがない」
東吾がわらいながら、そう提案した。
「寝まきに着替えてもいいんですか」
お袖がそんな心配をする。
「あなたがたは、寝まきに着替えて、ゆっくりやすみなさい。今夜はわしと拾吉うじとで、かわり番こに宿直をやる」
おなじ屋根の下のどこかに、敵のまわし者が泊まっているのだから、男の責任は重い。
「悪いけれど、そうしていただくと安心していられます」
「そのかわり、そば屋のお袖ちゃんの寝言がみんな聞ける」
拾吉がわざととぼけた顔をしていった。
「いやだな。あたしも宿直のほうにしようかしら」
そうはいっても、疲れている女たちには、とてもそれだけの元気はなかった。
やがて、女中に床をのべさせると、女たちは昨夜のようにおやすみなさいと、両手をついてあいさつをして、間のふすまをしめてしまった。
「拾吉うじ、わしが九つ（十二時）まで起きていよう」
「そうですか。じゃ、あっしは遠慮なく九つまで寝かしてもらいやす」
こっちは着のみ着のままで、拾吉が寝床へはいろうとしたとき、ふすまの向こうで、あっという千鳥の声がした。

10

「どうしたんです、お嬢さん」
お袖の声がきいている。
「おねえさま、これを見てくださいまし」
「まあ、それがお形見のくしなんですか」
「ええ、どうしましょう、あたくし」
悲しげな千鳥の声だ。
女たちは帯を解いているところらしいので、うっかりふすまはあけかねる。東吾は拾吉と顔を見あわせながら、
「どうかしたのかね、お袖さん」
と、ふすま越しにきいてみた。
「あの、お嬢さんのおかあさんのお形見のくしが、いま帯を解いてみたら、二つに折れているんです」
「あたくし、ころんだおぼえも、ぶつかったおぼえもございませんのに――」
千鳥も訴えるように告げて、そのくしをじっとながめている姿が目に見えるようである。
「お嬢さん、苦が折れるといいやしてね、くしの折れるのは気にすることはないんでさ、心配にゃ及びやせんや」
拾吉が床の中からかまくびをもちゃげて、あかるくなぐさめた。
「そうでしょうか」
おりがおりだけに、千鳥は気にかかるらしい。
「さあ、お嬢さん、それはべっこうですから、つげばもとのとおりになりますわ。もう気にしないで、今夜はやすむことにしましょうよ」
「はい」
女たちもやっと床についたらしい。
――もう一日のことなんだ。どっちも無事であってくれるように。
前兆などということは、あまり気にしないことにしている東吾だったが、いじらしい千鳥の

ために、今夜だけはひそかに祈らずにはいられない気持ちだった。

さいわい、その夜はなにごともなく、無事に朝を迎えた。しかし、半分ずつしか寝ない男たちにとっては、それはかなり長くてつらい夜だった。

女たちの顔色も、一夜のうちにげっそりと色つやを失っているようである。やっぱり、貧しい眠りしか取れなかったのだろう。

女たちも折れたくしのことはもういわなかったし、むろん男たちもきこうとはしない。千鳥がそれを口にしないのは、さすがに武士の娘だと、東吾はまたしてもその心根がいじらしくなる。

無事に朝を迎えたからといって、けっして安心はできない四人である。朝の膳もそうそうにして旅籠を出ると、街道はきょうもいい天気だった。

「きょうはわれわれが後ろを歩くことにするから」

東吾がそういうと、

「早水さん、黙ってあたしたちをまくと、化けて出ますからね」

やっとお袖の口から冗談が出て、笑いながら千鳥とひと足先を歩きだす。

11

藤沢から小田原へ八里あまり、その日の道中ぐらい気の重いことはなかった。

松浦岩見守の行列が、予定どおりその朝小田原を立っていれば、平塚か大磯で必ず行きあえる。敵はそれまでになにか手を打ってくるだろうから、朝のうちはひと足ひと足がけっしてゆだんのできない道中だった。

が、ついにそれらしいけはいもなく、やがて平塚が近づいて、馬入川の渡しをわたるとき、

「だんな、やっぱりいぬがついていやすぜ」

と、拾吉がいま出てきた岸のほうを、そっと

指で教えていた。

渡し船はすでに中流を越していたが、なるほど、そっちに次の船を待っている四、五人の人たちの中に、ふたりづれの小商人ふうの旅の男がまじっていて、じっとこっちを見ているようだ。

尾行がついているとすれば、なおさらゆだんはできない。

しかし、平塚から大磯へ二十七町、これも無事だった。時刻はもう昼に近い。

町の中ほどの、山本屋という中食茶屋の前へかかると、わきに道中かごが一丁おりていて、いま茶屋を出てきたどこか大店の内儀とも見える若い女が、そっちへ足を運びながら、あっというように立ちどまった。

「あら、おかみさんじゃありませんか」

千鳥と並んで歩いていたお袖が、いきなり呼んで走り寄ったからである。

「まあ、お袖さん、どうしたんです」

ふたりは手を取りあって、どっちもびっくりした顔を見あわせている。

顔色はどこかさえないが、しっとりとおちつきのあるみずぎわ立った美貌である。

あとから供の女中と中年の番頭、鳶の頭、それに中小僧がひとり、みんなお袖を知っているとみえて、声をかけながらそばへよってきた。

「拾吉うじ、ついでだから、われわれもここで中食にしていこう」

東吾は拾吉にささやき、千鳥をうながして、茶屋へはいっていった。

「お袖さんが箱根へ見舞いに行った和泉屋のおかみさんて人かもしれやせん」

あいたしょうぎに場所を取ってから、拾吉がいった。

「そうかもしれんな」

「どっちでもいい人にはちゃんと出あう」

思わず口に出してしまってから、

「こいつはいけねえ。これがいわずもがなの、

悩まれ口っていうやつでござんしてね」
と、拾吉は平手で自分のおでこを一つたたいて苦わらいをしていた。
「おきれいなかたですのね」
なにげない千鳥だが、うれいの色はかくしようもない。

12

まもなく、お袖が顔を上気させてはいってきた。
「お待たせしました」
「どういたしやして。和泉屋のおかみさんでげしょう、あねご」
拾吉がさっそくきく。
「ええ、なんですか、お店から急に帰ってこいという使いが来たんで、いそいで立ってきたんですって。こんなところでお目にかかろうなんて、あたし夢にも思わなかったもんですから、びっくりしちまって」
「あちらさんも、びっくりしていなすったようだ」
「そのかわり、訳を話して、頭に家へことづてをたのんでおきましたから、あたしはもう安心です」
「あとの雁が先になるってわけでげすね。あっしのことも話してくれやしたか」
「ええ、半分ぐらいは――」
「拾吉の半分だと、五吉ぐらいってことになりやすぜ」
そんな冗談口も、きょうはあんまり笑いをさそわない。
大磯で中食をすませて表へ出たが、当然この辺で出会うはずの岩見守の行列はついにこなかった。
大磯から小田原へ四里、午後の道中はまったく気が重かった。
「だんな、いよいよ覚悟しなけりゃなりやせんぜ」

「そうかなあ」
「もし、なにかのつごうで、無事にご尊父にめぐりあえたら、ぜひそうであってほしいとは思うが、――あっしはなんだか胸が痛あくなる」
「まあ、奇跡を信じようじゃないか」
東吾は黙々と前を歩いている千鳥の、足重たげなうしろ姿が、見るにしのびないような気がした。
そういえば、さすがのお袖も、今はいたわりのことばもつきたように、黙って千鳥の手をひいてやっている。
――わしに覚悟しろといって、いったいどう覚悟すればいいのか。
今のところ、東吾は覚悟のしようもないのだ。
こうして、四人がやっと小田原へたどり着いたのは、たそがれまえの夕がたであった。

13

小田原へはいると、さすがに四人とも緊張してきた。凶か吉か、いよいよどたん場へ追いつめられた気持ちである。
「お嬢さん、とにかく本陣へ行ってみやしょう」
拾吉が前へ出てそういいながら千鳥と肩をならべる。
「お願いします」
千鳥もしゃっきりと顔をあげて歩きだした。
あとへさがって、東吾とならんだお袖は、
「なんだかあたし、胸がどきどきして――」
と、そっとささやきながら胸を押えていた。
小田原は大久保加賀守十一万三千石の城下町で、当主忠真は老中を勤役中であった。ここは箱根峠をひかえて、峠八里は一日の旅だから、上りの者も下りの者も、たいていはここで一泊するようになっている。
御用道中の者は、箱根八里を無事に越して小田原へ着くと、山祝いといって若党に六百文、中間に三百文の祝儀を出すならわしなどもあ

って、とにかくここは東海道五十三次のなかでも、毎日繁盛する宿駅であった。

「あっ、お嬢さん、ちゃんと出ていやすぜ」

本陣の前へ立った拾吉は、思わずよろこびの声をあげた。

門のわきに、松浦岩見守殿御宿と、ちゃんと宿札が出ているのだ。

「まあ」

千鳥の目がさっと輝く。

「だんな、ここはあっしたちの出る幕じゃありやせん。あっしはお袖あねごとここで待っていやすから、だんなだけ玄関までお嬢さんをつれていって、ご尊父さんに無事に引きわたしてきてください」

拾吉がほっとした面持ちで東吾にいう。

「いいえ、どうぞ皆さまもごいっしょに来てくださいませ」

千鳥がそばからいそいで拾吉をさえぎる。

「お嬢さん、あたしたちは表だって、ご尊父さんの前へ出られる身分じゃありません。どうせ今夜ここ泊まりなんですもの、またあとでゆっくりお目にかかれるんですから、ともかく早水さんに送ってもらって、早くおとうさまにおあいなさいまし。——ほんとうにようございましたねえ」

純情なお袖は、もう目にいっぱい涙をためていた。

「そうだ、とにかく玄関までわしが送りましょう。拾吉うじもお袖さんも、きっとここで待っていてくれ」

東吾もまた、座敷へあがってまで晴れがましく岩見守にあう気持ちは毛頭なかった。無事に千鳥をわたしさえすれば、玄関からすぐ引きかえすつもりである。

「そりゃ待っていやすとも。お嬢さんがちゃんとご尊父さんの手にわたるまでは、まだ安心できませんからね」

14

東吾は千鳥をつれて、本陣の玄関へかかった。

「たのうむ」

案内を請うておいて、後ろへさがり、

「さあ、千鳥さん」

と、千鳥をうながした。

うなずいて、ひと足前へ出た千鳥の顔は、さすがにいっしょうけんめいにおちつこうとしている。

無事に父にはあえる。やっと安心したようなものの、けっして言いわけできたのではない、その思いが、新しく娘心をかき乱してくるのだろう。

「どなたさまでございましょう」

取り次ぎに出てきた中年の番頭が、若い武家娘の顔を見て、ちょっと目をみはったようだ。

「あの、あたくしは門の宿札に出ております松浦岩見守の娘千鳥と申します。急用がありまして、江戸からまいったと、父に取り次いでいただきます」

「松浦さまでございますね」

はっと番頭の顔色が変わったようだ。

「はい」

「そういたしますと、もうこちらの使いが着きましたので——」

「使い——？」

千鳥がききかえす。

「では、お嬢さまは、まだこちらの様子はなにも——」

「父に、父になにかあったのでございますか」

ぎょっとして、千鳥の顔がみるみる青ざめてくる。

「はい、ちょっとお待ちくださいまし。いますぐ、ご用人さまにお取り次ぎいたします」

番頭はあきらかにきのどくそうな顔を見せながら、あわてて奥へ引きかえしていった。

ふらふらとなりかける千鳥のからだを、東吾はしっかりとうしろからささえて、
「千鳥さん、ここで取り乱してはいかん。人にわらわれるぞ」
と、しかるように耳もとへささやいた。
「はい」
千鳥はうなずいて、しゃっきりと立ち直る。
「みんながついているんだ。勇気を出すんです」
「はい」
もう一度うなずくのを見て、東吾は手を放し、ひと足うしろへさがった。
——拾吉の勘のほうが正しかったようだ。
東吾はいまさらのように、拾吉という男を見なおさずにはいられない。
「おう、お嬢さま——」
四十年配のりちぎそうな男が出てきて、千鳥の顔を見るなり、つかつかと泳ぐように式台までおりてきた。
「半兵衛、おとうさまは、——おとうさまは」
千鳥が飛びつくように、その手を取ってきく。

15

「お嬢さまは、お嬢さまはどうしてここへ」
用人はなにか痛ましそうに目をしばたたいたが、
「いや、ここではお話もできません。ともかくもお上がりくださいまし」
と、気がついたようにいい直す。
「早水さま、ご迷惑でも、いっしょにきてくださいませ」
千鳥は東吾のほうへ哀願するようなまなざしを向けてから、
「半兵衛、こんど道中で、たいへんお世話になった早水東吾さまです。おとうさまからもお礼を申し上げていただこうと思ってまいりましたのに」

その父はどうなったのかと、もどかしく、またしても用人の顔色をうかがっている。
「それはそれは——。てまえは岩見守用人田村半兵衛と申します」
半兵衛はもうおちつきを取りもどして、じろりと東吾の人がらへ目を向けていた。
東吾は無言で会釈をかえしてから、
「千鳥さん、わしはちょっと表の連中にことわってくる」
と、いいおいて門のほうへ急いだ。
やがて、たそがれかけてきた向こう側の軒下に立っている拾吉とお袖が、東吾を見て走り寄ってきた。
「だんな、どうでござんした」
「まだくわしい様子はわからんが、やっぱりなにか起こっているようだ」
「なんですって——」
たった今、安心してよろこんだばかりのあとだから、ふたりともぽかんとした顔をする。
「話が少し手間取るかもしれぬ。用人にあってもどるから、貴公たちは先に宿を取っておいてくれぬか。宿は恵比寿屋にしよう」
「承知しやした。だんな、じゅうぶん気をつけてくださいよ」
「うむ」
「早水さん、千鳥さんの、千鳥さんの力になってあげてくださいね」
お袖はしんけんな顔をこわばらせている。
東吾は大きくうなずきながら、うれしい連中だなと、いまさらのように胸があたたかくなる。
用人が千鳥と東吾を案内したのは、まにあわせにちょっと借りたらしい殺風景な六畳の座敷だった。今までだれかいたのをどいてもらったらしく、使った茶器や菓子ばちが盆にのせて、片すみへ寄せてある。
「半兵衛、聞かせてください。おとうさまはどうあそばしたのです」

千鳥は座につくと、もう覚悟がきまったように、きびしくきりだした。
「お嬢さま、びっくりなすってはいけませんぞ。殿さまは昨夜、昨夜――」
さすがに半兵衛は口ごもる。

16

「ゆうべ、おとうさまがどうしたのです」
「申しわけございません。表向きはまだ急にご発病としてありますが、実は非業のご最期をとげられました」
「まあ、やっぱり――」
玄関をあがるときから、すでに覚悟はしていたが、半兵衛にあらためてそうはっきり告げられると、千鳥はついに断崖から突き落とされたような絶望を感じ、急には涙も出ない。
「てまえはいまだに、なにもかも夢のようでございます」
半兵衛は申しわけなさそうにつぶやいてから、こう説明した。
「ゆうべは無事に箱根を越えた日でございます。山祝いということで、一同にご酒肴の膳をくだされ、殿さまにもごきげんよく杯をあげられましたが、ちょうどそこへ、小田原藩からごあいさつの使者として、桜井浪右衛門というかたがみえられました。殿さまはこんどご勘定奉行にあげられましてのご帰府でございますから、城下町へお泊まりの日は必ずその藩からあいさつの使者がまいります。ゆうべも別座敷であいさつをおうけになりましたが、桜井は特になにか用談があるとかで、人払いを願い出ていましたそうで、――すると、そこへまた小田原藩のあいさつの使者だと申しまして、中津川主膳さまというかたがみえられたのでございます」
「では、まえのは、その桜井というのは、にせ者だったのですか」
「はい。てまえが玄関へ出まして、桜井のことを申しますと、当家にはそういう家来はいないというので、驚いて使者の間へ行ってみますと、殿さまは左の乳下を一突きにされて、血の中にこと切れ、桜井の姿はむろん消えていました」
「半兵衛はその桜井という者の顔を見ているのでしょうね」
さすがに取り乱している場合ではないと気をしめなおしたか、千鳥は激しいまなざしになっている。
「いいえ、殿さまが出迎えには及ばぬとおっしゃって、番頭に座敷へ案内させましたので。あとで番頭の話を聞きますと、桜井は内密の使者だからといって、座敷へ通るまではずきんをとらなかったそうですが、切れ長な鋭い目つきの、背の高いりっぱな男だったそうです」
そばで聞いている東吾は、ふっと鈴ヶ森の下手人を思いうかべた。
「殿さまは加役（火つけ盗賊改役）をおつとめのころ、ずいぶんてがらをたてられました。したがって、人からもさか恨みをうけていられる、てまえがそれをついうっかりして、ゆだんしたのがまちがいでございました」
半兵衛も責任をじゅうぶん感じているようだ。
いずれにしても、松浦岩見守は昨夜のうちに、この世から消されていたのである。

17

「失礼ですが、ごあいさつの使者には、いつも岩見守さまおひとりであわれることになっていたのですか」
念のために東吾はきいてみた。
「いや、いつもはたいてい拙者が陪席していました」
「桜井浪右衛門がきて、あとから中津川殿がみえられるまで、どのくらいの時がたっていたのでしょう」

「千鳥さんは一昨日の晩、岩見守さまにあうために、若党忠吉ひとりをつれて、小石川の屋敷をぬけ出された。鈴ガ森まできて、その若党が怪しい浪人者に切られたところへ、拙者と、いま門前に待たせてある拙者の連れのふたりとが行きあわせ、事情をうかがったので当地まで送ってきました。——もっとも、これからの千鳥さんは、ご家来であるあなたがたがきっと引きうけてくれるのでしたら、拙者どもはなにも聞かずに、これで手をひいてもいいのです」

口ではそういっても、この用人ではなんだかたよりない気がする東吾だ。

「お嬢さま、ほんとうでございますか」

半兵衛はびっくりしたように目をみはっている。

「ほんとうです。おとうさまにもしものことがあってはならぬと、心配して屋敷をぬけ出してきましたのに、やっぱりまにあいませんでした」

「およそ四半刻（三十分）ぐらいだったでしょうかな」

「桜井は、むろん供をつれていたはずですな」

「若党ひとり、中間ひとりが玄関で待っていたそうです」

「桜井はやっぱり玄関からもどっていったようですか」

たたみかけての東吾の質問に、半兵衛はなにか自分の手落ちを責められているような不快さを感じたのだろう。

「おてまえ、そんなことを聞いて、どうなさるのだな」

と、いやな顔をした。青二才がよけいなお世話だといわぬばかりである。

「くわしく聞いておかぬと、千鳥さんを守りきれません」

東吾は率直にいう。

「ほう。おてまえが千鳥さまを守る。それはどういうわけですな」

「すると、すると、昨夜の下手人に、なにか心当たりでも——」

「半兵衛はどうです。いつもおとうさまのおそばにいたのですから、なにか思い当たることはあるのでしょう」

千鳥が鋭く逆襲する。

「さあ、てまえにはどうも——」

半兵衛は口を濁しながら、小首を傾けている。

18

「半兵衛、とにかくおとうさまにあわせてください」

思いきったように切り出して、ついに生きた父にはあえなかったと、胸が迫るのだろう、千鳥の声はいじらしくふるえていた。

「それが、お嬢さま、てまえの一存では計らいかねるのです」

半兵衛が当惑そうにいう。

「どうしてです」

「さきほども申し上げましたように、大久保家から中津川主膳さまがお使者としてみえられて、はじめてこの騒動がわかりました。主膳さまがおっしゃるには、お勘定奉行という重職にある岩見守が道中で変死されたとなると、変死させた小田原藩のおちどにもなり、また殺害された松浦家もただではすむまい。公儀においてもつごうのあることだろうから、とにかくここは急にご発病ということにして、江戸へ急使を立て、おさしずをうけることにしよう。万事は当家へまかされたい、かように申されましてな、江戸からのおさしずがあるまでは、わいわれ一同も禁足を命じられ、かってな取り計らいは堅く禁じられているのです」

「では、その中津川さまのお許しがなければ、病間へも通れないのですね」

「はい」

「おとうさまのご遺骸はどうなっているので

す」
「医者の手当をうけまして、お居間へ移し、てまえどもがふたりずつ交替で、お守りしております」
「中津川さまはどこにおいであそばすのです」
「お城へ引き取られて、江戸との手つづきに当たられ、ここへは藩士のかたが数人詰めておられます」
「では、主膳さまに千鳥のことを申し上げてうかがってみてください」
「ごもっともでございます。しかし、お嬢さまはお屋敷を無断でぬけ出られたと申されたようですが」
さすがに半兵衛は用心深い。
「無断で出ても、千鳥は岩見守の娘ではありませんか」
「さようではございますが、もし中津川さまから表向き、なぜ無断で屋敷を出てきたのかときかれましたおり、お嬢さまは申し開きができますか」
千鳥はぐっとことばに詰まったようだ。
「殿さまにはまだお跡めがきまっておりません。問題はここにもございます。お屋敷の内情に少しでも不審を持たれますと、ご変死だけに、お家が立たなくなるかもしれません。それに、ご承知のとおり、当地の殿さまはご老中をつとめられ、中津川さまはただのごあいさつの使者ではなく、わざわざ江戸から出向かれたとうかがっております」
半兵衛は声をひそめて、いかにも用人らしく、重大そうな顔をするのである。

影の力

1

町筋はたそがれからしだいに宵にはいろうとしていた。

この辺は本陣を中心にして、旅籠屋がひとかたまりになっているから、番頭女中のにぎやかな客引きの声がきそい、上り下りの旅の客がおもいおもいの宿へ絶え間なく吸いこまれていく。
拾吉とお袖は、先に恵比寿屋へ行っているはずだったが、ふたりとも本陣の様子が心配で立ち去りかね、さっきから筋向かいの薄暗い路地口へ身をかくすようにして、東吾の出てくるのを待っていた。
疲れきっているせいか、お袖はなにか不安に胸をかきたてられながらも、妙にわびしく、気が沈んでしようがない。
考えてみると、きょうで三晩四日、無理な旅ばかりしているのである。明るい深川の灯も恋しいし、酒やけのした父親の顔も思い出すとなつかしい。
その江戸と、今夜は二十里のうえも離れた遠い小田原の、こんな路地口へ、まるでどろぼうねこのようにひそんでいる。
しかも、いま自分に背中を見せて、じっと往来を見張っている男は、ついおとといまでは見ず知らずのあかの他人で、いまだにはっきりした素姓さえわからないのだ。
——いったい、なんのためにあたしは、こんなよけいな苦労をしなくちゃならないんだろう。
われながら変な気がしてくる。
いや、そうじゃない、あたしたちはみんなあかの他人だけれど、千鳥さんというきのどくな娘さんのために、いっしょになってこうして苦労しているのだ。
早水さんだって、この拾吉だって、みんなそれぞれに自分の用は持っているだろうに、それを捨てて、ひとりの不幸な娘のために心を一つにしている。こんな美しい人情なんて、そう世間にざらにあるものじゃない。
——あたしたち四人はもう、あかの他人では

なくなっているのだ。
お袖はふっと東吾や千鳥の顔をなつかしく思いうかべて、急に心配になってくる。
「拾吉――」
思わず拾吉の背中へ呼んで、
「あら、悪いかしら、さんをつけなくちゃ」
と、気がついてお袖は顔が赤くなる。
「かまいやせんよ。あっしはまだ当分あねごの子分でげすからね」
拾吉はそんなとぼけたことをいいながら、
「なんです、あねご」
と、あらためて人のいい顔を向ける。
「なんでもないけど、東吾さん少しおそいわね」
「こうおそいのは、ただごとじゃありやせん。困ったことになりやがった」
重い声音である。
だれか、すっと路地の前へ人が立ち止まったようである。

2

三度笠を目深にかぶった長わき差しの男が、通りかかってだれかおくれた連れを待つ、そんなふうに路地の前へ立ち止まって、笠越しにじいっと本陣の門のほうを見ている。
こっちから見ると、がっしりとした肩幅で、すぐうしろに人がひそんでいると知っているのかいないのか、――拾吉は思わず声をのんだようだし、お袖はは っとして、その拾吉の腰へつかまっていた。
「おい、人魂がこわかったら、早く江戸へ帰るんだ」
うしろ向きのまま、その男がひとりごとのようにいう。低いが、どすのきいた声だ。
「人魂をしょってくる男にも、そういってやんな。よけいなことはするな、命が惜しかったら、さるになっていろとな」
そして、ほんのしばらく、身動きもせずにそのまま突っ立っていたが、やがてくるりとしもてのほうへ足を向けて、前かがみにすたすたと歩きだす。
お袖はぞっとからだじゅうがかたくなって、息もできない。
「あねご、そうあっしの腰にぶらさがっちゃ重いや」
拾吉がけろりとして振りかえった。
「あら、いやだなあ、あたし」
お袖は赤くなって、いそいで拾吉の帯から手を放しながら、
「だれだろう、今のやつ」
と、声をひそめずにはいられない。
「箱根のたぬきでしょう」
にやりとわらってみせるのが、いかにも負け惜しみのように見える。
「なら、どうしてつかまえてやらなかったの」
つい突っかかってみたくなる。
「たぬきは八百八だぬきといって、眷族が多うございんすからね。へたにからかわねえほうがいいんでさ」
拾吉は苦わらいをして、
「あねご、今夜小田原じゅうの旅籠屋を洗ってたぬき狩りをやったら、どれだけ人間に化けて泊まりこんでいるたぬきがしっぽを出すかしれやせんぜ」
と、さすがに味なことをいう。
「そうねえ。人魂をしょってくる男って、早水さんのことかしら」
「むろん、そうでげしょう」
「じゃ、岩見守さまは――」
「残念ながら、人魂になっているんでさ。そら、ごらんなさい、また足軽さんがまわってきた」
六尺棒を持った足軽が三人、ちょうちんを持ったのが先頭に立って、これで二度本陣を見まわりにくるのである。
「いけねえ」

拾吉がふっと口をつぐんだ。そのちょうちんを持った足軽が、どうやらこっちの路地へ気がついたように立ち止まったからである。

3

ちょうちんを持った足軽は、つかつかと路地口へきて、

「おまえたちそこでなにをしているんだ」

と、とがめるように誰何した。

こんな暗いところにこそこそしていれば、不審をうたれるのは当然である。

が、連れを待っているんですとは、おおっぴらにはいえない。連れの名を出せば、いよいよ怪しまれそうだからだ。

「かんべんしておくんなさい。もうすぐ旅籠へつくんだから、がまんしろっていったんですが、どうしても漏りそうだといいやすんで。

——だんな、見のがしてやってください。たのみやす」

とっさに、拾吉は口から出まかせをいってのける。

お袖はあっと顔から火のでる思いだった。

「なんだ、そんなところで、いかんなあ。が、すんでしまったもんなら、しようがあるまい。まだなら、なるべく早く宿へかけこめ」

足軽はもっともらしく、そんな味なことをいって、わらいもせず、さっさと本陣のほうへ去っていった。

「知らない、あたし」

どすんとお袖が拾吉の背中へ肩をぶつける。考えれば考えるほど恥ずかしい。

「悪気でいったんじゃありやせん。あっしもせっぱつまっちまったもんだから」

そういいながら、拾吉もおかしくなって、ふ、ふとわらってしまった。

「わらっちゃいやだったら」

「へえ、もうわらいやせん。わらいごとじゃありやせんや。あねご、やっぱり恵比寿屋へかけこみやしょう。ここはあぶねえ」

「そうねえ。そうしましょうか」

お袖は事実、多少かけこみたくもなっていた。

恵比寿屋はそこからものの小一町とも離れていなかった。

あとから連れがふたり着くからとことわって、二間つづきの座敷を取り、お袖がやっと自分のからだになったような気がして、すまして座敷へもどると、拾吉はまだ旅姿のまま、ぼかんと火ばちの前へすわって考えこんでいた。

「ねえ、ここにもたぬきがはいりこんでいるのかしら」

お袖はくもの巣にひっかかったちょうの姿を思い出さずにはいられない。

「お袖さん、正直なところどうするね。あっしたち四人、とうとうどたん場へきてしまったような気がするんだ」

「どうするって、なんのこと」

「約束は千鳥さんを小田原まで送ってくることだった。その仕事はとにかく果たした。問題は、これからまた新しくなるんだ」

拾吉は考え考えいう。

4

「さっき、たぬきが、さるになれといってやしたねえ」

「いってたわ」

「見ざる、聞かざる、話さざる、黙って江戸へ帰って、知らんふりをしていろ、そうすれば見のがしてやるといっているんでさ」

「おどかしなのね」

くやしいが、お袖はやっぱりぶきみである。

「やつらのは、ただのおどかしじゃない。いうことを聞かなければ、ちゃんとそれだけの手は打ってきやす」

拾吉はまじめにお袖の顔を見ながら、

「あっしはあねごを変なめにあわせたくないと

思うんだ」
と、しみじみしたまなざしになる。
「殺すっていうの」
「殺されるよりつらいめだって、女にはありやす。たぬきどもは恥知らずですからねえ」
「だれがそんな――」
お袖は思わず顔が赤くなりながら、
「じゃ、千鳥さんは、千鳥さんもそんなめにあうの」
と、ちょっと意地になる。
「あねご、しっかりしておくんなさいよ。千鳥さんはもうご尊父さまを、ひょっとすると人魂にされているんだ。あねごにだって、おとっつぁんはある。しかも、あねごは女の身だ。変なめにあわされて、宿場女郎にでも売りとばされてしまっても、それまでの話だ。正直にいって、ここが考えどころだと思うんだがなあ」
ためしているというより、心から心配しているという顔つき、声音である。
「じゃ、あんたはどうするの」
「あっしや早水さんは男でさ」
「千鳥さんだって、もうのがれられないんでしょう」
「あの人はねらわれているご本尊さまなんだから、しようがありやせん」
なにをいいだすんだろうといいたげな、拾吉の顔だ。
――あたし、こんな大きなことをいっていて、ほんとうに防ぎきれるのかしら。
ちらっと弱気が胸をのぞき、だからといって、いまさら仲間はずれになるのはいやだし、急にくやしくなってきて、
「ですから、ですから、あんたたち男がほんとうの男なら、あたしたち女をちゃんと守ってくれるのがあたりまえじゃありませんか。そんなこと、できないっていうんですか」
と、つい声が高くなる。
「あねご、声が高いや」

拾吉が困ったようにたしなめたとき、
「お連れさまがおつきになりました」
と、女中が廊下へきて声をかけた。
「ここかね」
障子の外へ立ったのは、たしかになつかしい東吾の声である。

5

「やあ、待ったかね」
障子をあけてはいってきた東吾は、いつものとおりおちついた顔に、ちらっと微笑を見せ、
「お帰んなさい」
拾吉がいそいで直す火ばちの前の座ぶとんへ、会釈をしながらゆっくりすわった。
あとから、障子をしめてはいってきた千鳥の顔は、びっくりするほどまっさおである。
――ああ、やっぱり。
お袖はほっと胸をつかれながら、
「疲れたでしょう、お嬢さん」
と、いたわるようにひざをずらせて、自分の隣へ迎えてやろうとした。
「はい」
千鳥はその席へはつかず、少しさがったところへすわって、
「早水さま、いろいろありがとうございました」
と、折り目正しく両手をつかえた。
「いや、なんの役にもたたなくて、申しわけないが、――とにかく、しっかりしていなくちゃいけません」
「はい、あたくし、あの、しばらく失礼させていただきます」
そういうと、千鳥は逃げるように立って、だれの顔も見ず次の間へさがり、あいていたふすまを半分しめて陰へかくれる。
――泣きに行ったんだわ。
お袖が東吾の顔色を見ながら、中腰になりかけると、東吾は行くなと目でおさえて、

「拾吉うじ。やっぱり、ご尊父は人手にかかっていられた」
と、悲痛な顔をした。
「やっぱりねえ」
拾吉は痛ましそうに、ちらっとふすまのほうを見る。
その陰から、ここまでがまんにがまんをしてきたらしい嗚咽の声がかすかにもれて、千鳥は必死に口をおさえているようである。
——かわいそうに、どんな気持ちだろう。
お袖はたまらなくなって、たもとを顔にあててしまった。
「で、だんな、どんなぐあいだったんです、ご尊父さんは」
拾吉が声をひそめてきいた。
「それが、実に大胆なやり口だったらしい」
東吾はひととおり用人田村半兵衛から聞いてきた話を告げて、
「事件はすでに小田原藩の手に移っている。今夜あたり江戸からなにかおさしずがとどくだろうということで、それまで用人の一存ではなにをすることも禁じられているようだ」
と、説明した。
「じゃ、なんですか、お嬢さんはまだご尊父さんの死に顔にも対面できないんですね」
拾吉は不満そうに目を光らせる。

6

「ごめんくださいまし」
廊下へ女中が食膳を運んできたようだ。
泣いた目を見せてはおかしいと思ったので、お袖はいそいでふすまのかげへ座を立った。
千鳥はもう泣いてはいなかった。放心したように、がっくりとすわっている。
「お嬢さん、お察しします」
お袖はひざを突きつけるようにすわって、できれば肩を抱いて、いっしょに泣いてやりたい気持ちだった。

「はい」
千鳥はうなだれたまま、身動き一つしない。
お袖も黙って、女中が食膳を置いて去るのを待っていた。
「ねえさん、自分たちでかってにやるから、お給仕はいいよ」
拾吉がそんなことをいっている。
「お願いします」
女中はいそがしそうに去っていった。
「さあ、ご飯にしましょう」
「はい」
「少しでも食べておかないと毒ですわ」
「ほしくございませんの」
どこかうわのそらの返事である。
「お気持ちはよくわかりますけれど、無理にでも召し上がっておかないと——」
「おねえさま、あたくし覚悟をしました」
ふっと強い目をあげるのだ。
「覚悟って——」
どきりとして聞きかえすと、
「あたくし、きっと、きっと父のかたきを討ちます」
と、千鳥はいきなりお袖の両手をつかむように握りしめ、
「くやしい、おねえさま」
ううっとむせびあげながら、ひざの上へ泣き伏してきた。
「お察しいたします、お嬢さん」
お袖はおろおろとその肩をさすってやりながら、そうだった、お侍にはかたき討ちということがあったのだ、泣いてばかりはいられないと、なにか違った世界を見せつけられた気持ちで、涙があふれてくる。
「だんな、飯にしやしょうか」
拾吉が冷静にいう。
「そうだな」
「相談はそれからということにして、とにかく宿屋の膳は一度引っこんだら、二度は出やせ

ん。お嬢さんもお袖あねごも、どうか席におつきになって」
「はい」
「早く腹ごしらえをしておかないと、いつたぬきがいたずらにくるかわかりやせんぜ」
「たぬき――？」
まだその話を聞いていない東吾は、不審そうに聞きかえした。

7

「さっきあっしたちが隠れている本陣の路地口へ、旅のやくざのようなやつが、連れでも待つようにふらりとうしろ向きに立ち止まりやしてね、本陣の門のほうを見ながら、人魂をしょってくる男にもそういっておけ、命が惜しかったらさっさと江戸へ帰って、『さるになっていろ』と、そんなおどし文句をならべて、ぷいと行ってしまやがった。だれだろうって、お袖あねごがきくから、おおかた箱根のたぬきだろうって、あっしはいったんですがね」
拾吉はとぼけた顔をしてたぬきの説明する。
「ふうむ」
「今夜あたり、小田原のはたご屋をかたっぱしから洗ったら、人間に化けているそんなたぬきが、どのくらいしっぽを出すかわかりやせんや」
「そうだろうなあ。たぬきのほうにはちゃんと皮算用があって、じゃま者は今のうちに始末しておこうというのだろう」
東吾は苦わらいをしてから、
「とにかく、飯にしよう。千鳥さんもお袖さんも、早く膳につかなくちゃいけない」
と、命令するように女たちのほうへ声をかけた。
「はい」
こんどは千鳥もすなおに返事をして、顔を直し、衣紋をつくろって、お袖といっしょに膳につく。給仕役はあいかわらずお袖がつとめた

が、千鳥はさすがになまぐさ物にははしをつけず、香の物でやっと一わんだけむりにのんでいたようだった。
そういうお袖も、腹はすいているくせに、なにか胸がつかえているようで、少しも食欲がない。
「あねご、なにかの用心のためだ、握り飯を四つばかりこしらえておいてもらいやす」
拾吉は如才がない。
「あら、かきの種と取りかえるつもりなの」
うっかりそんな冗談が口に出て、お袖ははっと首をすくめながら、いそいで東吾の顔色を見る。
「さるかに合戦だね」
にっと東吾がわらう。
たのもしい顔だなと、お袖は感心してしまった。
「だんな、さるにゃなりたくありやせんぜ。もっとも、だんなは申年だとか聞いたが」
拾吉が横やりを入れて苦笑する。
「拾吉うじ、ここでひとつ、みんなの腹をきめておこう」
急に東吾の顔がまじめになった。
「腹をきめるといいやすと――」
「さるになりたくないとすると、男たちは女たちを守るために、たぬきと戦わなくちゃならない。男たちはこれでいいとして、まずお袖さんの立場だ」
やっぱり、お袖が問題になってくるのである。

8

「早水さん、まさかあたしを、あたしを仲間はずれにするんじゃないでしょうね」
お袖はつい突っかかるような口ぶりになっている。東吾がどうしてそんなことをいいだしたかはよくわかっていても、いまさら仲間はずれにはなりたくない、その気持ちのほうが強いの

だ。
「いや、仲間はずれにするなどという気は毛頭ないんだ。お袖さんを江戸まで無事に送りとどけるのは、やっぱりわれわれ男たちの責任だからな。よし、江戸へついてからのことは、またそのときのことにしよう」
ここまできてしまっては、お袖だけを危険から除いてやることは、事情からいっても無理かもしれぬと、東吾は気がついたのだ。
「千鳥さん」
「はい」
「あなたはもううっかり屋敷へはもどれぬ立場になってきたようだが、江戸へ帰って、どこか身を寄せられる親戚がありますか」
「はい」
千鳥はまだそこまで考えていなかったらしく、はっとうなだれたが、
「父の弟の屋敷が牛込にございます」
と、考え考え答える。
「いちばん近い親戚ですね」
「はい」
「では、ともかくも、そこまでわれわれは最善をつくしてお送りします」
「早水さん、じゃあたしたち、江戸へ着けばみんな別れ別れになるのね」
お袖ははじめて気がついたように、そんな当然のことをきく。
「まさか、みんなであねごの家へころげこむわけにゃいきやせんからね」
拾吉がそばから苦笑しながらいう。
「そりゃそうだけど、じゃ早水さんはお嬢さんのかたき討ちのすけだちはしてあげない気なんですか」
「その話はまだ早いと思う。千鳥さんには千鳥さんの考えもあるだろうし、立場もある。われわれは千鳥さんの身の立つように、できるだけの力ぞえは惜しまないが、あまり度がすぎると、かえっておせっかいになって、千鳥さんの迷惑になるかもしれない。早い話が、千鳥さんもお袖さんもまだ嫁入りまえのからだなんだから、世間から誤解をうけるようなことは、なるべく慎まなくてはならない。とにかく、さしずめの目的は、江戸まで女ふたりを無事に送ることにしておこうじゃないか。どうだね、拾吉うじ」
「けっこうでげす。だんなのおっしゃることはりっぱだ。で、小田原はいつ立つことになりやすね」
こっちだけでそれをきめておいても、はたしてそのとおりうまくいくかなと、拾吉には拾吉の心配がある。

9

「いつ小田原を立つかは、千鳥さんの心ひとつできまるんだが――」
東吾はうながすように、千鳥のほうを見た。
東吾には東吾の考えがあっても、千鳥がはっきりと腹をきめてくれなくては、助言のしようがない。
しかし、世間知らずの千鳥は、
「あたくし、あの、どうすればよろしいのか」
と、ただ当惑するばかりで、いまだになんの方針もたたぬらしい。
「千鳥さん、これは、今いったおせっかいの部に属するが、正直にいえば、あなたは家名も屋敷も失いかけているんだ。このままほうっておくと、松浦家は敵のいいようにされたうえ、あなたのからだまで縛ってくる。早い話が、今夜にも江戸から天草屋の息のかかった者が本陣へついて、あなたに屋敷へもどれといってくれば、われわれあかの他人には、表向きそれを拒んであげられる口実はなにもないのだ。わかりますか」
「はい」
「それではご尊父は大死にになってしまう。だいいち、あなたの身がたたない。あなたの身を

たてる道は、たった一つだと思う」
「教えてくださいませ。どうすればよろしいのでございましょう」
千鳥の顔へ、さっと血のけがさしてきた。
拾吉もお袖も、東吾の顔を見つめながら、次のことばを待っている。
「さっき用人は、いま屋敷の内情を表へ出すのは不利だという意見だったが、わしはそうは思わない。たとえ不利にせよ、ここはぜひ小田原藩の中津川主膳という人に会って、あなたが家出をしてまでご尊父にあいにきた理由を、はっきりと訴えておく。それが事の正邪をただし、ご尊父の下手人をあげて、制裁してやるいちばんの早道だと思う」
「でも、でも、あたくしの申すことなど、中津川さまがほんとうにしてくださいましょうか」
しかも、恥ずかしい屋敷の内情を口にしなければならないだけに、千鳥としてはためらわずにはいられないだろう。
「むりにすすめるのではありません。実行するかしないかは、あなたにまかせるほかはない。しかし、江戸へ帰って、親戚と相談してからでは、おそきに失するでしょう。いや、その江戸へ無事に帰ることさえ、実際には非常に困難があると覚悟しなければならないんだ」
突っぱねるようにいう東吾の顔は、お袖がひやりとするほど冷たく、底意地悪かった。
千鳥はうなだれて、じっと歯をくいしばっている。
「実は、あっしが心配しているのも、それなんですがね」
拾吉がきのどくそうな顔をしていう。
「ごめんくださいまし」
番頭が廊下へきて、いそがしくひざまずいたようだ。

10

「番頭さんかね」

拾吉が気軽に声をかけると、へえと答えて、障子をあけ、
「失礼でございますが、こちらさまは早水東吾さまでございましょうか」
と、あらたまってきく。
「早水東吾はわしだが――」
「ただいま本陣から使いがみえまして、松浦からきましたが、ちょっと早水さまにお出向きが願いたく、お迎えにまいりましたと申して、玄関でお待ちになっておりますが、どういたしましょう」
松浦と聞いて、はっと千鳥が顔をあげる。
「早水東吾に出向いてくれと申すのだな」
東吾が念を押す。
「はい、早水さまにと申しております」
「そうか。今すぐまいるからと申して、使いの者をしばらく待たせておいてくれ」
「かしこまりました」
番頭はおじぎをして去っていく。
「江戸からなにかおさしずが着いたのでございましょうか」
千鳥が不審そうにきく。今夜にも江戸からさしずがとどいたら、内々で知らせるからと、用人はいっていたのだ。
「しかし、わしに出向けというのはおかしい」
東吾は拾吉の顔を見た。
「お嬢さんに聞かせたくないさしずでもとどいたんでしょうかね」
「そういうことがないともいえないが、――とにかく、用心しておくに越したことはない。わしがもどってくるまで、みんなはここを動かないことだ」
「といいやすと、だんなはたぬきの使いと見るんでござんすか」
「たぬきの腹になってみれば、四人をばらばらにしておくほうが仕事がしいい」
「じゃ、早水さん、その使いことわったらいいじゃありませんか。用があるんなら、向こうか

らきてもらうことにして」
お袖が顔色を変えていう。
「いや、わしのことは心配ない。敵の手に乗ってみるのも、一つの手段だ。拾吉うじ、女たちのことをたのむ。なるべく三人いっしょの行動を取るようにしてくれ」
東吾はそうたのんで、床の間の刀を取りに立つ。
「承知しやした。けれど、だんな、じゅうぶん気をつけておくんなさいよ。あっしたちのたよりは、だんなひとりなんでござんすからね」
拾吉がしんけんな顔をする。
「うむ、わしはいつも必ず最善をつくすことにしている」
「早水さま――」
千鳥が呼んで座ぶとんをすべりおり、なにか決心したようにそこへ両手をつかえた。

11

「どうした、千鳥さん」
東吾は刀を持ったままそこへすわった。
「あの、さきほどのお話、あたくしやっぱり中津川さまにおすがりすることにいたします。もし、本陣へみえておりましたら、お目にかかれるようにおとりなしくださいませ」
それが最善の道だと、千鳥もやっと覚悟がついたらしい。
「承知しました。わしに今夜万一のことがあっても、拾吉うじがいるし、お袖さんもいる。よく相談して、その方針で進むのがいちばんよいと思います」
「はい」
「だんな、冗談じゃありやせん。万一のことだなんて、そんな弱音はよしやしょう。だんなはいまに天へはしごをかけようっていう男一匹ですぜ。忘れちゃいけやせん」

拾吉がそばから景気をつけるようにいう。
「そうだわ。早水さんがいなければ、あたしたち二度と無事に江戸へ帰れるかどうか、心細いわ」
お袖が正直に心細そうな顔をする。
「いや、だいじょうぶだ、万一はあくまで万一で、九千九百九十九はきっとうまく切り抜けてくる」
東吾は笑って立ち上がった。
「お玄関までお見送りいたします」
つづいて千鳥が立ちあがろうとする。
「それには及びません。必ず三人いっしょの行動をとることです。――たのむぞ、拾吉うじ」
「たしかにたのまれやした」
その返事を聞いて、東吾は廊下へ出た。
やがて宵をすぎようとして、宿屋はおおかた夜食がすんだところらしく、女中たちが膳をさげに走りまわっている。
玄関へ出てくると、さっきの番頭がいそいで帳場から立ってきて、
「あのお使いさんでございます」
と、土間に立っている若党を教えてくれた。
二十七、八の、どこかきりっとした若党だ。
「松浦家の使いというのは、あんたか」
「はい。早水東吾さまでございますね」
じろりと見あげる目に、かくしきれないふてぶてしさがある。
「わしは早水東吾だが、松浦家のどなたからの使いだね」
「ご用人さまが内々でお目にかかりたいのだそうでございます」
「そうか。ご苦労だった。番頭、ぞうりを貸してくれ」
昨夜桜井浪右衛門について本陣へ行った若党は、この男かもしれぬ。東吾はちらっとそんなことを考えながら、番頭がそろえてくれたぞうりを借りて、表へ出た。
外は今夜もおぼろ月夜で、この辺はもう梅が

散るころだから、夜風がほおになまぬるい。

12

泊まりにつく者はもうほとんど宿に着いた時刻なので、往来はひっそりとしていた。

軒下を離れて、なにげなく足を本陣のほうへ向けると、筋向かいの路地口からすっと月の中へ出てきたやくざふうの旅の男が、

「だんな、こんばんは――」

と声をかけて、かぶっていた笠のひもを解く。

東吾はゆだんなくすっとひと足後ろへさがった。笠のひもを解くふりをして、いきなり抜き打ちをかける手があるからである。

むろん、うしろからついてくる若党の不意討ちにも、それとなくじゅうぶん備えている東吾だ。

「呼び出しなんかかけて、すんません。そこまでおつきあいが願いたいんで」

笠を取って左手にさげた男は、三十がらみの中肉中背、見るからにびんしょうそうなやつで、にっと笑ってみせながら、本陣とは反対の新町のほうへあごをしゃくって、不敵にも東吾の右肩へ肩をならべてくる。切るんならお切りなさいといわぬばかりだ。

「さっき、わしの連れに、親切な忠告をしてくれたのは貴公かね」

どうせこんなことだろうと、はじめから覚悟をして出てきた東吾だから、行くところまで行ってみる気で、おだやかにきり出す。

若党は黙ってあとからついてくるようだ。

「なるほど、だんなはちょいといい度胸でござんすね」

「ほめられるほどではない」

「どうでござんしょうねえ、だんな。江戸へいらしてご仕官なり、なにかこんなものになりてえというお望みがあるんでしたら、ずいぶん相談に乗ってもいいんでござんすが」

まずしたてから出てという腹なのだろう。

「望みはなんでもかなえてやる。だから、さるになれというのかね」

「だんなはわかりが早いや。お察しのとおりなんで」

「さるまわしは天草屋かね」

「それはいいっこなし。物には順というものがありまさ。あっしはまだ名まえさえ名のっちゃいやせん」

「つまり、さるにならなけりゃ切るという意味か」

「そう先まわりをなすっちゃ話ができませんや」

「しかし、わしがさるになると、泣く者がある。わかっているだろうな」

念を押すような東吾の語気だ。

「そいつはだんな、少し違いやす。だれが物好きに人を泣かせたり、むやみに切りたがったりするもんですか。人間はだれだってみんな無事に笑って一生が送りてえ、そのじゃまになるようなやつがあるとしたら、だんなだってただじゃおかねえでしょう」

妙ないいがかりをつけてきた。

13

「わしが千鳥さんといっしょにいると、どうして貴公たちのしあわせのじゃまになるのかね」

東吾は冷静にきいてみた。

「あのお嬢さんはねえ、だんな、おとなしく屋敷へ帰れば、ちゃんとお婿さんをもらって、りっぱに家名が立つようになっているんでさ。それを、なんにも知らねえだんなが横から出てきて、よけいなおせっかいをすることはないでしょう」

その男はそんなむしのいいことを平気でいう。

「では、ご尊父を殺害したのも、貴公たちのしあわせのためにやったのかね」

「あの人は恩知らず、裏切り者だからしようがありやせん」
「裏切り者――」
「そうでさ。さんざんうちのだんなの世話になって出世しておきながら、その恩を忘れて、うちのだんなをつかまえようとする裏切り者でさ」
「ふうむ」
すると、岩見守は公儀からなにかそんな内命でもうけていたのだろうか。
「しかし、もしそれが公儀のいいつけだったら、どうするね」
東吾はさぐるようにきいていた。
「だんな、公儀っていったいなんなんです。欲のかたまりの役人たちが、いってみりゃ公方さまにおべっかを使って、みんな自分のふところを肥やしている。だいいち、公方さまなんてのからして気に入りやせんね。だれからもらったのか知らねえけれど、天下をわがもの顔にして、したいざんまいのぜいたくをしている。好きとなりゃ人の女房でも娘でもめかけにしちまう、金がいるとなりゃかってに町人から巻きあげる。つまり、山賊の親分みたいなもんでさ。公儀なんてのは、その山賊の親分の手足になって働いている役人の寄り集まりなんですぜ。もったいぶることはありやせんや」
ずぶとくせせらわらってみせるのである。それがただ口先だけの嘲罵ではなく、ちゃんと信念のようなものがあって、はらから嘲笑しているふうにも見える。
東吾はふっと、天草屋は切支丹バテレンの術を使うと冗談に拾吉がいっていたことばを思いだした。
「すると、貴公たちはなにか公方さまや公儀にたてをつこうという者たちが集まっている一味なのかね」
「なあに、天下をねらう由比正雪だなんて、そんなばかげたことは考えちゃいませんがね。公方さまが公方さまなら、こっちはこっち、みんなでうまく世渡りをやろうっていうだけの話でさ」
要するに、どろぼうにも三分の理のたとえで、かれらはかれらなりに悪事に理屈をつけているといったところだろう。
が、それだけやることは悪どいと見なければならぬ。世の中に無知ほどこわいものはないのだ。

14

「わしの住んでいる世界と、貴公たちの住んでいる世界とは、だいぶ違うようだ」
東吾はそういって、ふっと立ち止まった。左手が寺の長い土べいつづきになって、宿からはもうかなり離れてしまったようだ。残してきた三人のことも心配になるし、これ以上この男とつきあってる必要はないと考えたからだ。
「へえ、そんなに違いやすかねえ」
その男も立ち止まって、にやりと薄らわらいをうかべながら、こっちの顔色をうかがっている。
「公方さまがかってなまねをするから、おれもかってなまねをする。人がどろぼうするから、おれもどろぼうするでは、そうでない他人が迷惑をする。わしは賛成できない」
「だから、他人でなく、あっしたちの仲間入りをすりゃ、どんな出世でもさせてあげられるんですがねえ」
「わしは他人の金で出世をしようとも思わぬし、他人に迷惑をかけてまで出世をするのは、なおさら好まぬ」
「そうかなあ。あっしはだんなのためを思って、できるだけの親切はしてきたつもりだが、そうきらわれたんじゃしようがありやせんねえ」
「わしも貴公の親切に答えて、ひとことだけいっておきたい。仏のことはわしの知らぬことだ

し、また、そう根掘り葉掘り知ろうとも思わぬ。しかし、千鳥さんはさるまわしのだんながきめた養子では気に入るまい。ほんとうにあの人のしあわせを考えてくれるなら、あの人を自由にしてやることだ。できたら、そうしてやってほしいと思う」

「だんなが親切ごかしにうまくくどき落として、婿にはいりこもうって気かね」

冷笑をろこつにして、どうやらこの辺でたぬきの本性を出す気らしい。

「わしは天にはしごをかける男だ。そんなけちな了見は持っておらぬ」

東吾の微笑は明るかった。

「天にはしごをかける――？」

ちょっとけげんそうな顔になる。

「わからないだろうな。わしは貴公のいった公方さまの不心得をしかってやる男になろうと考えている。人の女房をめかけにしたがるようなまねは、だれがやっても悪いことだ。公方といえども許せぬ。いまにわしが必ずしかってやるから、安心しなさい」

「おまえさん、正気かね」

「貴公は案外気が小さいな。たったいま大きなことをいっていながら、こんなことぐらいで人をもう気ちがいあつかいにしたがる、とても太閤さまになれぬやからかな」

大言壮語にしても、あまりにも突拍子もない東吾の放言に、

「ごたいそうなことをぬかしやがる」

と、たぬきもいささかあきれているようだ。

15

「では、わしはこれで失礼する」

むろん、このまま無事に帰すはずがなかろうと思ったが、それを承知で、東吾はあっさりくびすをかえそうとする。

「おう、ちょっと待ってくんな。そう甘く見ちゃいけねえ」

はたして、その男の目がきらっと光って、凶悪なつら構えになってきた。

「まだなにか用があるのかね」

「冗談じゃねえ、用はこれからだ。じゃ、おまえさん、どうしてもおれたちを敵にまわそうっていうんだね」

「そうだな、わしたちはわしたちの住みいい世界で生きていくつもりだ」

「おれたちは、自分のじゃまになるやつは、腕でかたづけていく。承知かね」

「山賊の世界に住んでいると、どうしてもそういうことになる。きのどくなものだ」

「なにッ」

「貴公たちはいつも戦々恐々として、白昼表が歩けないんだろう。いくら強がっていても、ほんとうは人に顔を見られるのがこわい。そんな生活はつまらないと思うがなあ」

東吾の顔に、ふっとあわれみの色がうかぶ。

「こいつはまったくあきれた気ちがいだ」

男は胸にこたえるものを苦笑にまぎらわせるといった顔つきで、

「先生――先生」

と、行く手の山門のほうへ呼んだ。

どうもその辺が怪しいのではないかと、はじめからそんな気はしていたが、案の定、すっとそこのかどから出てきたのは、宗十郎頭巾、着流しの浪人者である。たしかに、鈴ガ森で物別れになったやつだ。

「先生、この気ちがいはあっしの手には負えそうもありやせん。かわっておくんなさい」

「うむ」

宗十郎頭巾はわずかにうなずいて、東吾の前へ立つ。

「やっぱり、貴公だったようだな、桜井浪右衛門というのは」

どうせ偽名だろうが、本陣を襲ったのもこの男らしいと、東吾は自信を強める。

「抜け、小僧、一昨夜の勝負をつけてやる」

「山賊だから、名は名のりたくないかね」
嘲笑には応ぜず、宗十郎頭巾はさっと抜刀した。例のぐいぐいのしかかってくるようなすごい青眼である。
「おうっ」
とっさに土べいを背にして抜きあわせた東吾も、もう口をきくゆとりはなかった。若党だぬきとやくざだぬきは、まだ抜いてはいないが、今夜の敵は三人だ。腕からいえば、宗十郎頭巾ひとりでさえ強敵なのである。
——おれは天にはしごをかける男だ。
東吾の自負はただそれ一つである。

16

人通りのすくない夜とはいえ、昨夜岩見守を襲ったおなじ城下町の往来中で、敵は大胆にも二度めの殺人をあえて強行しようというのである。
それだけに、敵は一瞬のうちに目的を果たして、さっさと姿を消さなければならないし、むろん宗十郎頭巾はそれができると自負して、この呼び出しをかけたのだろうから、今夜はまったく待ったなしだった。
「えいっ」
冷酷な目にぎらぎらとあやしい闘志をみなぎらせて、たちまち激しい第一撃をかけてくる。
「とうっ」
その出ばなを、東吾はこっちから捨て身の突きに出た。鈴ガ森ではじめて相対峙したときから、この強敵にはそれ以外に手はないと覚悟していた東吾なのだ。相討ちを承知のうえの無謀にも似た攻撃だから、まともにぶつかれば、敵の振りおろす太刀と、こっちの突進するきっさきとでは、ほとんど遅速はないはずだ。いや、むしろこっちの突いて出るきっさきのほうが正確で、わずかに早いはずである。
はたして、宗十郎頭巾のほうがあやうくとっさに身をひねったので、敵の太刀は空を切り、こっちのきっさきは空をついて、東吾の体は疾風のように宗十郎頭巾の背後へ飛びぬけていた。
「うぬッ」
位置が入れ代わって同時に振り向いた宗十郎頭巾は、一刀を上段に取っている。一気に二の太刀を入れる意気ごみに見えたが、振り向いた東吾の体勢がもうじゅうぶん第二の突きを用意しているうえに、
「おうっ」
相手の仕掛けを圧倒する烈火の気合いで、機先を制してくる。
「くそッ」
相討ちは好まぬ敵は、一呼吸入れて、東吾の引く息を待つほかはない。
その敵味方が静止した一瞬、そばで息をこらして見ていた若党が、ちょうど東吾の体が往来へ出て、こっちへ右側面を見せているので、これなら切れると思ったのだろう。
「えいっ」
夢中で抜刀するなり、だっと切りこんできた。
「とうっ」
きらっと白刃が月かげにきらめくのを感じて、東吾の刀が、身をしずめながら無意識にそっちを払う。はた目には静止しているように見えても、じゅうぶん気合いが充実している横なぎだから、
「わあッ」
若党は帯のあたりを一文字に切り上げられ、絶叫しながら、がくんとそこへ両ひざをつく。
「えいっ」
その東吾の横なぎが伸びきった正面から、宗十郎頭巾がすかさず拝み討ちをかけてきた。

17

若党を右へ横なぎにした東吾の一刀が、つばめ返しに前の敵を払うのは、それを起こしたと

きからの一連の無想剣なのだから、なんのためらいも遅疑もない敏捷無類の動作だった。

結果から見れば、敵の体勢がひとりを切って伸びたと見た宗十郎頭巾は、じゃまのはいらぬうちに一刻も早くというあせりもてつだって、自分からその無想剣の圏内へ飛びこんでいったことになる。

両者がそのまま激突すれば、むろん相討ちに果てたろうが、それをきらう宗十郎頭巾は、また巧者なわざの持ち主だから、はっとした一瞬振りおろす剣で、とっさに東吾のつばめ返しを引っ払っていた。

「えいっ」

「とうっ」

両者の剣は戛然と火花を散らして、宗十郎頭巾はぱっともとの土べいぎわへ飛びのき、東吾はその位置でふたたびすっと青眼に立ち直った。この一瞬で東吾のもとどりが切れ、さんばら髪になったことでも、いかにそれが悽惨必死のせとぎわであったかがうかがえる。

「くそッ」

たかが青二才ひとりを、二度も討ちもらした宗十郎頭巾は、激しい怒りと同時に、一方ではまたみごとと舌をまかずにもいられなかったのだろう。その青眼にあせりを捨てて、じっくりと腰をすえた重厚さが、はっきりと見えてきた。

「先生、いけねえ。足軽のちょうちんだ」

前後を見張っていたやくざだぬきが、ふいに低い声で注意した。

「そうか」

宗十郎頭巾は不敵にも返事をして、

「小僧、勝負は三度めの正直といたそう」

すっと刃をひき、もうしもてのほうへ歩きだす。

この土べいのしもてのはずれが四つかどになっているらしく、ふたりの姿はたちまち右へ切れて、見えなくなってしまった。

——白昼表は歩けない連中だからな。

東吾はちらっとそんな誇りを感じながら、さすがに全身に疲労をおぼえて、まだ抜き身をさげたままである。

ふっとその左のかどからも、今の剣戟の音を耳にしたのだろう、ちょうちんが一つあわただしくこっちへ曲がってきた。

「貴公、どうしたのか」

「おう、ここにひとり倒れているぞ」

本町のほうから駆けつけてきた警戒の足軽が三人、東吾の抜き身を用心して、少し離れたところから、ちょうちんを持ったのがそれをこっちへかざすようにしながら、口々に誰何した。

そこへ、しもてからのちょうちんもぐんぐん近づいてきて、こっちは若侍三人、若党中間をしたがえた中年のりっぱな侍である。

18

主人の侍はいずれかへ微行の途中らしく、黒ちりめんの頭巾で顔をかくしていたが、足軽組はそれと見ると、

「これはこれは、中津川さま——」

と、急にかたくなっておじぎをした。

——中津川主膳。

すると、江戸のさしずを持って、本陣へ向かう途中かもしれぬ。いいところで出あったと思いながら、東吾はいそいで刀をぬぐってさやにおさめる。

「この者を切ったのはご貴殿か」

中津川についていた侍のひとりが、死骸のほうを目で差しながら緊張した顔つきできく。

「拙者は遠州の浪人早水東吾と申します。ご当地ご家中のかたがたでございましょうな」

東吾はいちおう念を押しておくことを忘れない。

いま人を切ったばかりの興奮の色は、少しも見せていなかった。

「さよう。われらは小田原藩の者です」

名を名のろうか、どうしようかというよう

に、供侍はちらっと中津川の顔を見る。
中津川は東吾のほうを見すえたまま、黙っている。
「ただいまあなたがたがこの通りへ出るとき、反対の道へ曲がっていったふたりづれがありますが、お気づきでござろうか」
「存じています。ひとりは頭巾をかぶった武士のようだった」
「そうです。連れはやくざふうのやつで、ここに倒れている男と三人、拙者をここまでおびき出して、ふいに切ってかかりました」
「どこからおびき出されたのかな」
「ご当地に江戸から中津川主膳さまがまいられているはず、刺客三人はその件に関係のある者です」
東吾はここでぜひ中津川にひっかかりをつけておきたかったし、そのほうがなりゆきを説明するにもてっとりばやいと思った。
「なに、中津川さまに――」
供侍はもう一度、中津川の顔色を見る。
「貴殿はなにか松浦どのに関係のある仁か」
中津川がはじめて声をかけてきた。
「はい。子細あって松浦どのの娘千鳥を同道して、今夕ご当地に着いた者です」
「ほう。わしは中津川主膳だが、するともう本陣へまいられたのだな」
「まいりました。ここに倒れている若党は、昨夜松浦どのを本陣へたずねた桜井浪右衛門についていた若党ではないかと思われる節がありまず。本陣の番頭に首実検をさせればすぐわかるでしょう」
「おまえたち、この死骸をよく見張っていなさい」
中津川は足軽組に命じて、
「早水うじといわれたな。ともかくも本陣へまいって、お話をうけたまわろう」
と、てきぱき事を運ぶあたり、やっぱり相当の人物のようである。

敵

1

翌朝――。
中津川主膳の帰府の行列は、六つ半（七時）に小田原を立つ。主膳は乗馬で、警固の士十人が前後をかため、槍持ち、挟箱、若党などを加えると、十五、六人の人数である。
行列が城下町を離れて、小田原海岸へかかろうとするころ、物かげから東吾を先頭に千鳥、拾吉、お袖の四人が街道へならんで、馬上の主膳に丁重に会釈をして、その行列の最後へ加わった。
まず千鳥とお袖がならんで歩き、しんがりは東吾と拾吉である。
昨夜、東吾は中津川といっしょに本陣へ行って、こっちの事情をくわしく説明した。
そこへ若党の首実検に行った本陣の番頭がもどってきて、たしかに桜井浪右衛門についてきた男のようだということだったので、時を移さず城下町の宿改めを行ない、たぬき狩りを実行したが、これは一匹もそれらしいものは網にかからなかった。
「まあそれがほんとうだろう。なかなかそんなことでしっぽをつかませるようなたぬきどもではないからな」
問屋場役人から報告をうけた中津川は、そういって苦笑していた。
千鳥はすぐに恵比寿屋から迎えられて、中津川にあい、はじめて父の死に顔にも対面した。
江戸のさしずは、松浦家から人が着くまで喪は伏せておくようにということで、たぶん明日は屋敷の者が着くはずだと中津川は話してくれた。
つまり、松浦家の相続人がきまるまで、急病ということにしておけというのだから、公儀の

情で松浦の家名は立ったことになるのである。が、親戚じゅうが集まってだれを養子にきめたかは、ここからでは知る由もない。

「そこで、千鳥どのはどうされるな」

最後に、中津川は千鳥の身を心配して、そうきいてくれた。

「中津川どのは、いつ江戸へもどられますか」

東吾がたずねると、

「わしの用はもうすんだので、明朝立つつもりだが」

という返事だった。

「できれば、その行列の後ろへなりと加えていただきたいと思うのですが」

それ以外に、千鳥を安全に江戸へ送っていける最善の手段はないと思い、東吾は独断でそうたのみこんで、承諾を得てしまった。

「あたくし、せめて父の野べの送りをすませてからと存じていたのですけれど」

あとで千鳥は不平そうな顔をしたが、

「仏事より、あなたのからだのほうがたいせつなのです」

東吾はぴしゃりと一本きめつけて、あとの口はきかせなかった。

2

「では、せめて今夜はここで通夜をしてまいりたいと存じます」

人の子として、それもいけないとは東吾もいいづらかったが、あすはまた一日じゅう歩かなくてはならないうえに、千鳥をここへひとり残していくのもなんとなく不安だった。

「わしがいっしょにここへ残ってあげるわけにはいかぬ。やっぱり、今夜はお帰りなさい」

「通夜もいけないのでございますか」

「通夜は心でするものです。ここにいなければできないというものではないでしょう」

「それはそうですけれど、――では、もどります」

まわりじゅうに敵がいると見なければならない千鳥なのだ。さすがにひとりで残るのは心細いらしく、しぶしぶいっしょに恵比寿屋へひきあげたが、それっきりすねて口をきかなくなってしまった。

「早水さん、千鳥さんはなにをおこっているんです」

けさ旅籠を立つとき、お袖が心配してそっときいていた。

「気にしないがいい。どうせおこりたいことがたくさんある不幸をしょわされている娘なんだから」

「でも、あんまりふきげんにされると、あたしたちなんのためにこんな苦労をしているのか、悲しくなってくるんだもの」

「まあ、江戸までのしんぼうなんだから。お袖さんにはとんだ苦労をかけてしまったなあ」

「いいえ、あたしそんな気持ちでいったんじゃありません。いやだなあ、そんな他人行儀に取られちゃ」

人のいいお袖は、はっとそれで思い返したか、つとめてこだわらずに、今までどおり千鳥のめんどうをみてやっていた。

街道はきょうもおだやかな春びよりである。

「だんな、中津川さんてのは、なかなかりっぱな人がらですねえ」

拾吉はけさはじめて中津川を見たのだ。

「うむ、はらもできている人物らしい」

「そりゃご老中の公用人をつとめるおかたですからねえ。こんなことをいっちゃなんだが、あっしはゆうべ、よくあっさりだんなにあってくれたと感心しているんでさ」

「こう見えても、わしもただの青二才とは違うからねえ」

東吾がわらいながら、珍しく自負してみせる。

「ごもっとも、――だんなは天にはしごをかける男でげすからね。そこで、そのはしごさんに

ちょいとうかがいやすがね、中津川のだんなは、天草屋のことをどういってるんでげす」
「いや、その話ひとことも出なかった」
「だって、松浦の殿さまをやっつけたのは天草屋の一味だってことは、ちゃんとわかっているんでげしょう」

3

「はらでは、むろん天草屋の仕事とわかっているだろうが、しかし責任のある地位にいる人は、めったに軽率な口はきかないものだ」
事実、昨夜の中津川は、ただこっちの話を聞いておくというだけで、東吾でさえ物足らなく思ったほど、自分の意見らしいものは口にしようとはしなかった。
「なるほどねえ」
拾吉は考えるようにしながら、
「だんな、あっしはにらんでいることがあるんですぜ」

と、急に声をひそめる。
「にらんでいるとは――」
「中津川のだんながわざわざ江戸から小田原くんだりまで松浦の殿さまにあいさつにくる、なにかわけがなくちゃならない、天草屋はその先手を打ったんでさ」
「というと、天草屋をうまく処分しろというご老中の内意でも持ってきたというのか」
「たぶんねえ」
天下の老中ともあろう者が、そんなに一介の素町人天草屋市蔵を持てあましているのだろうかと、なにかふしぎな気がしないでもないが、昨夜のやくざだぬきの自信ありげな口ぶりから考えると、それもないとはいえないかもしれぬ。
「つまり、表だってつかまえると、大官のうちにも相当迷惑をするけが人が出てくる、そんなことがあるのかもしれないな」
「こわいやつでさ、天草屋って男は。まあ、はらわたの中にわく虫のようなもんですね。きたないはらわたを持っているやつは、きっと食いこまれる。その食いこまれているやつが、悪いと承知していながら、みんなで天草屋をかばっているんだから、ご老中もほねがおれまさ」
「拾吉うじ、ひょっとすると、わしは道を誤ったかもしれんな」
「あっしのいいたかったのもそれだ。どうしても、こんどねらわれるのは、中津川のだんなということになりそうですからねえ」
「といって、われわれだけで歩いていても、ねらわれることはねらわれる」
「そうですとも、おなじねらわれるんなら、行列の中にいたほうがいい。ただ、安心してゆだんしっこなしということでさ」
それとなくいましめられて、この男はやっぱりおれより年が上だと、東吾は感じた。
大磯で早めの中食をとった行列は、その日戸塚泊まりの予定である。

大磯から平塚を経て藤沢へ四里あまり、藤沢から戸塚へ一里三十町、藤沢で日が暮れかかるから、戸塚へ着くのはどうしても宵になる。しかも、藤沢と戸塚の中間に千本松というさびしい松原道が十数町つづく。
敵が待ち伏せしているとすれば、まずこの辺がいちばん物騒ということになる。

4

きょうの道中は行列といっしょだから、藤沢の町へかかるころは、女たちはもうびっこをひかぬばかりに疲れきっていた。
そして、四人だけのときなら、こっちからいいださなくても、男たちのほうから気をきかせて、今夜はここ泊まりにしようといってくれるのだが、きょうはそうはいかない。行列ははじめから戸塚泊まりときまっているのだ。
もうあたりはたそがれかけてきて、まもなく家々にはあかりがともりはじめるころだのに、

戸塚まではまだ二里近くも歩かなければならないのである。

——いやになっちまうなあ。なんだってあたしは、こんなつらい思いをしなくちゃならないんだろう。

お袖はまったく気が重かった。

しかも、千鳥はあいかわらずむっつりして、自分から口をきこうとはしないし、はじめのうちこそつとめてきげんを取るようにしていたが、もうその気力さえなくなっている。

——あたしはなにもお腰元ってわけじゃないんだもの。

考えてみると、こうやって道草をしているのさえ、わけがわからなくなってくる。

いや、正直にいえば、お袖は東吾が好きだから、ついあの鈴ヶ森の晩、ひとりで深川へ帰る気になれなかったのだ。

千鳥に親切にしているのも、東吾への心づくしの気持ちが多分にあったことはいなめない。

でも、もし東吾が千鳥のほうが好きになるようなら、あたしは黙って身をひこうと、それはちゃんと覚悟していた。

が、その覚悟が今はどうやらぐらつきだしている。昨夜から千鳥がどうして急にふきげんになったか、それが気になってしようがないお袖だった。東吾との間になにかあったからにちがいないのである。

——ゆうべふたりきりで本陣からの帰りがけに、なにか口げんかをしたのだ。

口げんかをしてふきげんになるようなら、もうふたりの間はただでなかったということになる。そう考えると、お袖はなんだか目の前がまっくらになってくるのだ。

——邪推かしら。

邪推であってほしいと思う。それとなく、ずいぶん気をつけていたのに、自分の知らない間にふたりができている、そんなことはあってほしくない。

——東吾さんに出あったのも、東吾さんをおもいだしたのも、あたしのほうが先なのだ。

一度自分の心につめを立てて、本心をむき出しにしてみると、お袖はもうみえもなく、狂おしいまでに東吾が好きで好きでたまらなくなってくるのだ。

どうしても、千鳥にとられたくない。

5

「千鳥さん、ゆうべあなたなにか、東吾さんとけんかでもなすったの」

さっき、お袖は思わずそれが口に出てしまった。

「早水さまと——」

あんまりだしぬけだったので、千鳥はびっくりしたように、ちらっとお袖の顔を見ながら、

「いいえ、あたくしそんなこと」

と、急に顔を赤くしていた。

「じゃ、どうしてゆうべからふきげんになってしまったんです」

赤くはなったが、少しもあわてたふうはなく、しっとりおちついているところを見ると、こんどはお袖のほうがが赤くなってくる。

「あたくし、そんなにふきげんですかしら」

しかし、それは口先だけで、ふきげんなのは自分でもちゃんと知っているようである。

しっかりしているんだからかなわないと、お袖はなおも疑いが解けず、

「東吾さんもけさ、心配していたわ」

と、ずるい手を使ってみる。

「すみません」

千鳥はおとなしくそういっただけで、またロをつぐんでしまった。

けっきょく、千鳥の様子からは、なにもかぎ出せない。では、東吾さんはどうなんだろうと、今までのことをずっと考えてみたが、こっちは切りこむすきもないほど行儀がよすぎて、千鳥にも自分にもただ親切だという以外には、

なんの感情も見せていないようだ。
——じゃ、どっちによけい親切だったかしら。お袖はからだじゅうが熱くなるほどいっしょうけんめいに考えてみる。
——そうだ。こんな役にもたたないあたしを、どうして東吾さんは道づれにしたかったんだろう。
ぱっと目の前が明るくなったような気がしたが、いいえ、千鳥さんひとりではあとで人の口がうるさい、その用心のためだとすぐ気がついて、がっかりしてしまった。
あの人、どうしてああ行儀がいいのかなあ。しまいにはうらめしくさえなってきて、ふっと気がついたのは、こんなにあたしは、東吾さんをおもいこんでしまって、これから先どうなるんだろうということだった。

6

日はすっかり暮れきって、街道は月あかりになっていた。行列はどうやら千本松原へかかってきたようである。
行列の足がなんとなく早くなったようで、女たちはときどき小走りに前の供侍たちに追いつかなければならない。
疲れた足につらいけれど、駆けなければ行列と離れすぎてしまうのだ。
お袖はいつか冷たい千鳥の手を取って走っていた。
「おねえさま」
千鳥が歯を食いしばりながら呼んだ。
「しっかりするのよ、もうすぐ戸塚なんだから」
「いいえ、あたくし、あたくし、鬼になります」
「鬼——？」
「それでなければ、鬼にならなければ、生きてはいけません」
なんのことか、ちょっとわからなかったが、

ああそうか、このひとは親のかたき討ちのことを考えているのだと、すぐに気がついて、
「偉いわ、お嬢さん」
と、それとは知らず、東吾のことばかり考えていた自分が、急に恥ずかしくなってきた。
「いいえ、弱いから、鬼になります。悲しいけれど、覚悟しました」
だあん。
ふいに、右手の松原の中から、銃声が一発、間近に耳をうった。
「あっ」
鬼になるといった千鳥が、力いっぱいお袖の腕にすがりついてきた。
——出たんだわ、やっぱり。
とっさに、しっかりしなくちゃと気がたってくるお袖だ。
「つづけッ」
前のほうでそんな声がしたと思うと、にわかに馬の走りだすひづめの音が狂ったように耳につき、目は松原の中からばらばらっとおどり出してくる数人の人影を見ている。
手に手に抜刀がきらめいていた。
行列全体が、次の瞬間にわあっと、ときの声をあげて走りだす。
「あねご、おれについてくるんだ」
拾吉がうしろから女たちの中へ割ってはいって、千鳥の手をつかみ、ひきずるようにぐんぐん走りだす。あいた手で道中差しを抜いて、もう行く手へ立ちふさがってくる二、三人の覆面を、めちゃくちゃになぎ払っていく。
「あれえ」
お袖は自分のほうへ迫ってくる抜刀を見て、思わず悲鳴をあげた。
「えいっ、——とうっ」
脱兎のようにうしろから飛び出した東吾が、この敵を切って、ぐいとお袖の手をつかみ、拾吉のあとを追いだす。

7

中津川の行列は、たちまち前とうしろと二つに分かれたようだ。

前の組は疾駆する主膳の馬を追っていっさんに走り、後ろの組の供侍五人は、追いついた千鳥と拾吉をかこむようにして、くせ者どもを切り払い、なぎたてながら一団になって駆ける。

短筒がそれて、主膳を取り逃がした以上、くせ者どもが千鳥をねらうのは当然で、いきおいそこへ風当たりが強くなる。

が、五人の、いや拾吉を入れれば六人の抜刀にまもられ、敵にはともかくも飛び道具があるから、立ち止まってはあぶない。必死に抜刀をふるって切りぬけていくので、これを見送った敵は、どうしてもしんがりの東吾とお袖にむらがってくる。

「お袖さん、思いきって、前の組の中へ駆けこむんだ」

東吾もまた少しも足をゆるめず、前の一団を討ちもらして、自然こっちへ襲いかかるかっこうになる覆面どもを、片手で力いっぱい左右へ切りひらきながら、何度もお袖に叫んだ。

「いいんです。あたしは、あたしは東吾さんといっしょ――」

お袖は白刃がきらめくたびに、はっと身がすくむ思いで、夢中で東吾の左手につかまりながら、いっこうに前へ出ようとはしない。

「それ、逃がすな。若僧をたおせ」

幾度か戛然と白刃が激しく火花を散らした。

「追え、――追え」

うしろになった敵は、口々に叫んでいる。

敵の人数も十人あまりで、ようやく前だけは切りぬけたようだ。十四、五間先の月の中を、千鳥の一団が走っている。

「早く、――今のうちだ」

「いやッ」

「なにをいう」

東吾はぐいとお袖の手をひっぱって、力まかせに前のほうへ突っ放し、やっと両手が自分のものになったので、そのままくるりとうしろを向き、

「えいっ、――おうっ」

すぐ背後へ迫っていた三人ばかりの中へ、いきなり切ってはいった。

「わあっ」

「野郎ッ」

ふいを食った敵は、いちどに左右へ飛びのいたが、それより東吾の思いきって右をないで左へかえす太刀のほうがわずかに早く、ふたりはどっとそこへしりもちをつく。

「やった」

「それッ、ゆだんするな」

そのあとにつづく四、五人がかっと刀を振りかぶったが、思わぬ逆襲にあっと気をのまれて、足が前へ出ない。

と見て、東吾は戦うより、この場はむしろ切りぬけるのが目的だから、すばやく身をひるがえす。

8

「なんだ、お袖さん」

こっちが敵をふせいでいる間に、少しでも前へ逃げてくれたとばかり思っていたお袖が、すぐそこにまっさおな顔をして、ぼかんと突っ立っているのである。

「走るんだ」

また手をひっつかんで駆けだすほかはない。

「逃がすなッ」

「切れ、切れッ」

いきおいを得て、急に敵が追い迫ってくる。

「くそッ」

またしても振り向いて、えいっ、とうっ、と敵の中へ切りこむ。こっちから切りこむというより、敵のほうが惰性で、刀さえふるえばその届くところへ向こうが飛びこんでくる形になる

のだ。
「わあッ」
白刃が火花を散らして、またふたたりたおれる。
こんどこそと、振りかえってみると、お袖はやっぱり突っ立っている。
手をひっつかんでまた駆けだす。
「逃がすな」
「追え、――追えっ」
しかし、敵はもう本気で追う気がなくなったらしく、足音がしだいに離れてくる。
前の千鳥の一団は、もう見えなくなっていた。
「どうして、お袖さん、早く逃げなかったんだ」
「だって、――だって、あたし心配で」
「こっちのほうが、よっぽど心配するじゃないか。しようがないなあ」
「いいわ、死んだって、いっしょなら」
「冗談いっちゃいかん」
だんだんお袖の足がおそくなってくる。
「もう苦しい、東吾さん」
お袖はとうとう立ち止まってしまった。がくりとまげがおちて、胸も肩もはあはあ大波のようにはずんでいる。
耳を澄ましても、追っ手の足音はもう聞こえない。やっと千本松原を出はずれて、はるかな行く手に戸塚の宿のあかりが、ちらちらと目についてきた。
東吾のびん髪もさんざんにくずれ、しかも腕、肩、背の衣類がところどころ鋭いきっさきで切りさかれ、白いはだの見えるところさえある。
「たいへんだわ、東吾さん。切られている。まあ、ここも、ここも」
お袖が金切り声をあげて、狂ったようにからだじゅうをなでまわしはじめた。
「血がここに、血が出ている。どうしよう」
それは右の肩だった。

「かすり傷だよ。心配ない」
東吾は刀をぬぐって、さやにおさめた。
「だいじょうぶかしら、ほうっておいて――。じっとしていらっしゃいってば」
お袖はまゆをひそめながら、押えつけるようにして、ふところ紙を肩に押しつけている、手がわなわなとふるえていた。

9

「いそごう、お袖さん」
東吾はかまわず歩きだした。
第一の襲撃に失敗した敵は、必ず第二の襲撃を計画するにちがいない。ぐずぐずしてはいられないのだ。
「その傷口を風にあてておいてだいじょうぶかしら」
お袖は歩きながら、傷口から取ったふところ紙を月かげにひろげてみたが、血はわずかに一線をひいているだけで、東吾がいうとおり、ほんのかすり傷らしい。
お袖はそのふところ紙を、黙ってふところへしまった。
「お袖さんがけがをしなくてよかった」
足を早めながら、東吾がいう。
「千鳥さんたち、無事だったでしょうねえ」
お袖は急にそれが心配になってくる。
「あっちはたぶんだいじょうぶだろうと思う」
「あの人たち、中津川さまでかたづけようとしているんですね」
「うむ」
しかし、今夜のほんとうの目的は中津川ではなく、やっぱり千鳥を奪うにあったのではないかと、東吾には思える。
どうしても中津川をやる気なら、敵は狙撃と同時に行く手を断ち切って、もっと激しく側面から切って出るはずだ。
おそらく、あの銃声も狙撃ではなく、ただ合い図を兼ねて行列を乱し、その混乱に乗じて千

鳥を奪い、自分と拾吉をかたづける、そういう計画だったにちがいない。敵の人数からいっても、中津川をねらうにしては少なすぎる。

お袖がもう息をはずませながら、そっと手につかまってきた。

「お袖さんが拾吉うじといっしょに行列の中へ飛びこんでくれれば、わしは両手が使えたんだ」

足をゆるめてやるわけにいかないから、その手をひっぱってやりながら、東吾は正直に不満をもらす。かすり傷ですんだからいいようなものの、もう一歩深いと命取りになったかもしれないのだ。

「ごめんなさい。あたし、ただこわかったもんだから」

こわいのもこわかったが、それより東吾のそばを離れたくなかったのがほんとうなのだから、お袖は思わず顔が赤くなってしまった。

——でも、命があってよかった。こうしてふたりきりで歩けるんだもの。

考えてみると、なんだか夢のようで、お袖はしっかりと男の手につかまりながら、ただわくわくと酔ったような気持ちになってくる。

やっと戸塚の宿へかかってくるとまもなく、心配して迎えにきたのだろう、拾吉がせかせかと引きかえしてくるのに、ばったり出あった。

「あっ、だんな、——お袖あねごも無事でございましたね。よかったなあ」

10

「拾吉うじ、千鳥さんはどうした」

東吾がすかさずきいた。むろん無事だとは思うが、千鳥にまちがいがあっては、これまでの苦労が、すべて水泡に帰する。

「本陣で待っていやす。玄関先までちゃんと送りこんできやしたから、心配ありやせん」

「東吾さんはけがをしたのよ、少しだけど」

お袖は東吾に寄りそうようにして、おおげさな表情をした。

「やっぱりねえ。どこです、だんな」

「なあに、ほんの一カ所、かすり傷だ」

その肩の傷は、もうすっかり血がかわいていたが、

「こいつはひでえ。だいぶやられていやすね」

拾吉はすばやく東吾のからだじゅうを調べて、まゆをひそめた。衣類を裂いているいくつかの鋭いきっさきも、一つ誤ればただではすまない。

「あの乱刃で、これだけですんだのは、まあ運がよかったんだ」

「しかし、よくあねごは、どこもけがをしないですみやしたねえ。もっとも、あねごは生けどりにしておかなくちゃ、敵もたのしみがないってわけかな」

「だれが、そんな、あたし」

ぷっとふくれてみせるお袖だ。

「とにかく、本陣へいそごう。中津川どのはだいじょうぶだったんだろうね」

東吾はそういいながら歩きだした。

「ご無事だったようです。そういえばねえ、だんな、あっしたちがご家来さんたちと本陣へはいろうとすると、供をつれた旅の若いお侍がひとり、じっと立ってあっしたちのほうを見送っていたんです。お嬢さんがぶいと顔をそむけて、その男が、それ、ご尊父さんののち添えの弟の石垣綱次郎っていう人だというんです」

拾吉が声をひそめていう。

「のち添えが千鳥さんの養子にしたがっている男だね」

「そうなんです。きっと小田原へ行く途中だと、お嬢さん顔色を変えやしてね。小田原へ乗りこむからには、松浦家の養子ときまったにちがいないというんでさ」

「なるほど。すると、その綱次郎が千鳥さんを迎えにくると、われわれはそれを拒む理由がなくなるわけだな」

「つまり、どうしてもそういうわけになりやすね」
向こうから四、五人の人影が、一団になって、道をいそいでくる。
「おう、貴公たちも無事だったか」
先頭のふたりは中津川についていた小田原の家来で、あとの三人は問屋場役人だろう。
「お世話になりました」
「いや、けしからんやつらです。いまにきっとひっ捕えてみせるから、安心なさい」
一行は宿の入り口を張りこみに行くようだ。

11

「ご苦労です」
東吾はあいさつをして、張りこみの一行と別れた。
「一匹でもあのたぬきどもが網にひっかかってくれるとおもしろいんだが」
そんなへまなたぬきどもじゃないんだといいたげな拾吉の口ぶりである。
「拾吉うじ、今夜ここへ着いた石垣綱次郎は、千本松原のたぬきどもと糸を引いているはずだな」
「なるほど――」
「おそらく、千本松原で千鳥さんを強奪して、たぬきどもは綱次郎にわたす手はずだった。それが失敗したとなると、次の手は正面から本陣へ千鳥さんを迎えにくる」
「お嬢さんが、行くのはいやだといったら、どういうことになりやす」
「養子は親戚じゅうで相談してきまったことだろうから、その当主のことばにそむけば、千鳥さんは松浦家の家名を捨てるほかはない」
「つまり、あかの他人に松浦家を、根こそぎ横領されちまうわけですね」
「親戚じゅうが、どうしてそんな綱次郎なんて男を、かってに千鳥さんのお婿さんにきめてしまったんでしょう」

そばからお袖がおこったように口を出す。
「天草屋は金に物をいわせる男でさ」
拾吉は吐き出すように答えて、
「だんな、なにかうまい手がありやすか」
と、東吾にきく。
「ないこともないが、しかし、牛込の叔父という人は、はたして親戚じゅうを相手にしてまで、千鳥さんのことを心配してくれる人かなあ」
東吾は疑問を持たずにはいられない。事はすでに敵の筋書きどおりに決定してしまったあとと見ていい。それをひっくりかえすには、黒幕の醜いからくりをすっかり暴露して、公儀の力を借りるほかはないのだ。
「じゃ、だんなは千鳥さんを敵の手にわたしちまう気なんですか」
拾吉が不満そうに突っかかってくる。
「そうか、ぐずぐずしていると、なるほどそういう結果になるな」
「なりやすとも。たぬきどもの思うつぼにはまるくらいなら、なにも今までこんな苦労はしてこなくてもよかったんでさ」
「よし、そのとおりだ。先のことは先のこととして、ひとつやるところまでやってみよう」
「そうですとも。いまさら窮鳥をほうり出す手はありやせんや」
「お袖さん、あんたも覚悟してくれるか」
東吾はなにか期するところがあるらしい。
「みずくさいわ、東吾さん。あたしだってもういっしょに刃の地獄をわたってきているじゃありませんか」
お袖はそっと東吾のたもとをつかんで、この人とならよろこんで火の中へでも飛びこむ気でいる。

12

本陣へ着いてみると、千鳥はさむざむとした座敷のまんなかに、まだそのままの身なりで、

ぐったりとひとりですわっていた。
が、さすがに東吾たちが女中に案内されて、無事に帰ってきたのを見ると、うれしかったらしく、
「お帰りなさいませ」
さっと顔を輝かせて迎えたが、
「まあ、早水さまは――」
たちまち東吾のさんざんな姿に気がついて、あっと目をみはった。
「千鳥さん、けががなくてよかった」
「はい」
「とにかく、みんなもここへすわってくれ」
東吾は女中の去るのを待ちかねて、いきなり千鳥の前へすわり、拾吉とお袖を呼んだ。
「なにか用ですか、だんな」
「千鳥さんはここへ着くのを、石垣綱次郎という男に見られたそうだね」
「はい」
「石垣はきっと今夜ここへ、千鳥さんをもらいうけにくる。あなたは綱次郎といっしょに行きますか」
「いいえ、あたくし、敵でございますもの」
千鳥はきっとなって、強くかむりを振った。その目に、はっきりと憎悪の色が出ている。
「では、あくまでわれわれといっしょに江戸へ行きますね」
「はい」
「あなたがこれからたよろうとする牛込の叔父上は、なんといわれるかたです」
「牛込の組屋敷におります御徒組頭高橋新左衛門と申します」
「わかりました。では、そこへお送りするまでは、いっさいわしのさしずにしたがってもらいます。承知でしょうな」
「はい」
「事は急を要します。すぐにお袖さんと身なりを取りかえ、髪を直してください」
「まあ」

「どうするの、東吾さん。そんなまねをして」
お袖が目を丸くした。
「説明はあとでします。女中に見られてはまずい。早くしていただこう」
きっぱりといいきる東吾だ。冷たいと思われるほど、意志の強い顔である。
「はい。――おねえさま」
千鳥はお袖をうながして、すぐ立った。ふたりともなんとなく足をひきずるようにして、次の間へはいる。
「だんな、どうしようっていうんです」
「ご苦労だが、拾吉うじ、にせあねごをつれて、即座にここを立ってくれ。あすの晩、例の大森の山本屋で落ち合おう。綱次郎の手をのがれるには、それ以外にない」
やむをえないとはいえ、かなり思いきった手段である。

13

「だんな、わかりやした。ひとつやってみやしょう」
拾吉が目をすえながら、きっぱりと答える。
「やってくれるか。たぶん、あっちも宿の出口はもう張りこんでいると思うが、うまくお袖で通りぬけてくれ」
東吾はそれがいちばん心配なのである。
「安宅の関ってわけですね。いかにも疲れたようには、義経さん生地でいけるが、この弁慶どのはまるっきりさるしばいですからねえ」
「なあに、あっちは富樫たぬき左衛門だ。いちかばちか、度胸でこなしてみてくれ」
「ようござんす。やっつけやしょう。ここにいて、みすみす義理のしがらみにかけてからめどられるより、いっそとらの尾を踏んだほうがましかもしれやせん」
「わしもそう思う。千鳥さん疲れている足で、

たいへんだろうとは思うが」
今夜は程ガ谷泊まりにしても、これから二里あまり歩かなければならないのだ。
「じゃ、わしは中津川どのにあいさつをしてくるから、したくができたら、かまわず立ってもらいたい」
「承知しやした」
東吾が座を立つと、
「早水さま――」
半分あけっ放しの次の間から、千鳥が呼んだ。
「なんです」
思わず立ち止まって、目がそっちへ行くと、もうお袖の着物になった千鳥が、帯をしめない胸をいそいでそでで隠しながら、そこへひざまずいて、
「あの、あたくし、どうしても拾吉と行かなければいけないのでございますね」
と、まっさおな顔になっている。拾吉とでは心細い、そんな気持ちがするのだろう。
「そうです。やれるだけやって、あとは天命をまつ。勇気を出してください」
「はい」
千鳥はくちびるをかんで、つとうなだれてしまった。帯をしめかけていたお袖が、ぽかんと立ってこっちを見ている。
「頼んだよ、拾吉うじ」
東吾はそのまま廊下へ出てしまった。
――是と信ずる道を進むよりしようがないじゃないか。心配していてもきりがない。
かわいそうにという気持ちを、東吾はむりに押しのけてしまう。
女中にたずねて、中津川の座敷へ出ると、主膳もまた旅装は解かず、二、三の藩士となにか打ち合わせをしているところだった。
「ごあいさつに参上いたしました」
「やあ、早水うじか、無事でなによりだった」
中津川は心よく迎えてから、

「ほう、ひどく戦いましたな」
と、こっちのかっこうに、たちまち太いまゆをひそめる。

14

「中津川さまはおけががなくて、なによりでございました」
「いや、あれはから鉄砲、おどしのようだった」
中津川はさすがに見ぬいているらしく、
「ねらいはやっぱり、千鳥さんだったかもしれぬ」
と、苦笑する。
「それにつきまして、小田原へあと始末にまいる松浦家の者が、今夜当宿へ着いているようでございます。千鳥どのが見かけたといいますから、あるいは正面から受け取りにくるかもしれません」
「ふうむ。では、こっちも見られたのかな」
「そうのようです。独断ではございましたが、千鳥さんはお袖と身なりをかえさせ、拾吉をつけて、すでにここを立たせました。お含みおき願います」
「あいかわらず早いなあ、東吾さん。しかし、だいじょうぶかな」
中津川が心配してくれる。
「ほかに、これといういい思案もつきませんでした」
「いや、拙速のほうが、この場はよかったかもしれぬ。むしろ、問題は江戸へ帰ってからかな」
「江戸へ着きましたら、親戚のかたがたにお任せしようと思います」
「うむ。しかし、その親戚がたよりにならぬと、わしはもう知らんでは、東吾さんすませなくなる」
「その節はまた、中津川さまにおすがりするよりほかはございません」

「ずるいぞ、東吾さん。わしまで仲間にまきこむつもりかね」
中津川がわらいだしたとき、
「申し上げます。ただいま玄関へ、松浦岩見守さまご舎弟、御徒組頭をつとめる高橋新左衛門さまと申されるかたが、松浦家の養子綱次郎さま同道にて、ごあいさつにまかり出たと申しておりますが、いかがいたしましょう」
と、若党が取り次いできた。
「かまわぬ。ここへ案内しなさい」
若党を去らせてから、
「敵も拙速に出たようだね」
と、中津川は皮肉な顔をする。
「てまえは遠慮しましょう」
「いや、ここにいたほうがいい。敵を知っておくということは、戦術のうちだからな」
できれば、東吾もそうしたかった。江戸へ帰って千鳥がたよろうとする叔父高橋新左衛門の名が出ている。しかも、綱次郎といっしょだとすると、あるいはすでに敵がたにまわっている人ではないのか、そういう不安が濃くなってきたのだ。
まもなく、四十年配の新左衛門と、二十四、五とも見える綱次郎が、若党に案内されてはいってきた。

15

「てまえがおたずねにあずかりました中津川主膳です」
主膳は陪臣ではあるが、老中の公用人という格があるから、直参に対しても鷹揚な態度に出る。
「はじめて御意を得ます。てまえは松浦又左衛門の舎弟、高橋新左衛門、これなるは又左衛門養子綱次郎でございます。このたびは又左衛門儀小田原にていろいろご懇情にあずかり、親戚一同も深く感謝しております。一同になりかわり厚くおん礼申し上げます」

新左衛門はどっちかといえば、お役だいじにつとめる平凡な人がらのようだ。
「いや、このたびのことは突然のことでしてな、てまえ主人もいたく憂慮いたしおります。それで、ご両所にはこれから小田原へまいられるところでござるか」
「はい、おさしずにしたがい、これより小田原へ急行いたしますが、それについて、綱次郎が申しますには、さきほどお行列の中に又左衛門娘千鳥の姿を見かけましたそうで、千鳥は少しく子細があって、小田原へ父の出迎えに出ておりましたそうで、ここで出おうたのをさいわい、るす宅のことなども申し聞かせ、もう一度いっしょに小田原へつれてまいりたいと存じますが、いかがなものでしょうな」
新左衛門がなにげなく切り出す。
「ほう、松浦家どののご息女が、てまえの行列の中にいたといわれるのですか」
「はい、たしかに行列のお人数といっしょに、当家へはいるのを見たと、これは申します、——そうだな、綱次郎」
「はい、この目でたしかに見かけました」
綱次郎は恐れげもなく中津川を見上げる。これは一癖ありそうな、陰険な目の持ち主だ。
「それはなにかのまちがいではないかな。もっとも、年ごろの娘はひとり連れております。知人にたのまれましてな」
「いいえ、てまえはたしかにこの目で千鳥を見たのです。まちがいはありません。ここへお呼びくだされば、わかると思います」
綱次郎は強引だ。
「よろしい。では、呼びましょう。念晴らしにな」
中津川は微笑しながら、手をたたいて若党を呼び、袖をここへと、いいつけた。
「高橋どの、てまえは松浦さんのご息女のことはよく知らぬが、お話のようだと、こんどのご養子はご息女のるす中にきまったことになるの

ですか」
なにげなくきく中津川だ。
「はあ、なにぶん火急のことでしてな、余儀なく親戚中できめました」
「ご養子はどういうお家がらからです」
「又左衛門の家内の弟になります」
「なるほど。たしか、松浦どのの奥方はのち添えでしたな」

16

千鳥と身なりを取りかえたお袖が、つつましやかにはいってきて、
「お呼びでございましょうか」
と、中津川のほうへ両手を仕えた。
「袖か。わしの着替えがあるはずだから、若党に申しつけて出してもらってな、東吾に合うように直してやりなさい」
「はい」
「ああ、ちょっとお待ち――」

中津川はなにげなくとめて、
「綱次郎どの、さっきあなたが見かけたのは、この娘ではなかったかな」
と、そっちを向く。
すでにお袖がはいってきたときから、ぶしつけにじろじろと見すえていた綱次郎も、はっきり違うとはいいきれないものがあるのだろう。
「これは千鳥ではございません」
「わしがつれているのは、この娘ひとりだが」
中津川はおだやかに微笑している。
「失礼ですが、たしかにおつれになっているのはおひとりなのでしょうな」
「すると、あなたはさっき門前でふたり見かけたのかな」
「いや、それはひとりですが――」
「そのひとりが、これとは違うといわれるのか」
綱次郎は返事ができない。
「ご息女がわしの行列の中にいる、正直に申す

と、そう考えられるのからして、拙者はふにおちませんな。ご息女は当然小田原へ残らなければならんはずだ。なにか、わしの行列といっしょに、江戸へ帰らなければならない理由でもござるのかな」
これは痛い質問だったにちがいない。
「いや、そう申されると、たしかに綱次郎の見誤りだったのでしょう。千鳥が小田原を離れるはずはありません。それをうっかり、ここで出あったと思ったのは、家督のことを心配して、江戸へ帰るところだと、ついこちらの思いすごしでございました」
新左衛門がどうやらうまくいいつくろって、そこつをわび、綱次郎をうながして座を立ったのは、それからまもなくであった。
「東吾うじ、あの綱次郎という男は、相当のくせ者だな」
「しんねりむっつりと底意地が悪そうです」
「それに、あの叔父ごはあんまりたよりにならんようだ。まあ、乗りかかった船で、あんたもたいへんだろうが、しっかりおやりなさい。見たところ、東吾うじはけっして困難に押しつぶされてしまう男ではない」
だから、わしなどをたよらずに、自分のことは自分でやれといっているようにも取れる中津川の口ぶりである。
そのころ、拾吉は千鳥の手をひいて、戸塚の宿はずれへ足を早めていた。

17

お袖になった千鳥は、手ぬぐいを吹き流しにかぶって、顔半分をかくすように一方の端をくわえ、疲れきっているところだから、はじめからびっこをひいていた。
「あねご、ご苦労でござんすね」
「いいえ、あたくしのために、みんなにこんなに迷惑をかけてしまって」
心から申しわけなさそうにいわれると、拾吉

はなんだかいっそう哀れになってくる。
「なあに、この宿さえ無事にぬけ出してしまえば、あとはゆっくり休み休み歩いてもいいんですから――」
もう宵をすぎようとしている時刻だから、往来を歩いている者はほとんどなかった。
戸塚の宿は家数三百五十軒、町の長さ十五町ばかりで、すこしいそぐとすぐ町並みはまばらになって、宿はずれめいてくる。
――早水さんああはいったが、敵もまさかまだ出口まではふさいじゃいまい。
千本松原であれだけの待ち伏せがあったばかりだし、しかもそっちの入り口はこっちでふさいでいるのだ。拾吉はたぶんだいじょうぶだろうとたかをくくっていたが、
「待て――」
まもなく宿を出はずれようとする竹やぶのかげから、つかつかと行く手へ出てきたやつがある。
「へえ」
足を止めながら、ぎょっとした。小田原でお袖と本陣の前の路地へひそんでいたとき、うしろ向きに立っておどし文句をならべていったあのやくざだぬきである。
竹やぶのかげにもうひとりぬっと立っているのは、たしかに鈴ヶ森で見た宗十郎頭巾、桜井浪右衛門である。
「なんだ、拾の字か」
やくざだぬきは低くいいながら、とっさに背中にかくれるようにしている千鳥のほうをじろりと見る。
「ああ、あのときの親分で――。すみません。あっしたちは江戸へ逃げ出して、おっしゃるようにさるになることにきめやした。すんません」
いそいでおじぎをしたが、やくざだぬきはまだ千鳥のほうをにらんでいる。
「あねごも早くあやまっちまってくんな」
拾吉はじっとりとわきの下へ、冷や汗を感じてきた。
「親方、ごめんなさい」
千鳥は拾吉の帯につかまりながら、声がふるえている。いじらしいかっこうだ。
「そうか。じゃ、きっとさるになんなよ」
一度小田原でふたりの姿を見ているだけに、やくざだぬきもついうっかりしたらしい。そういって、すっとひと足道をひらいてくれた。
「ありがとうござんす。恩にきやす、親方」
まったくとらの尾を踏む気持ちだった。拾吉は千鳥の手を取って、ぐんぐん歩きだす。

春の町

1

数日ぶりで江戸の官邸へもどった中津川主膳は、その朝主人加賀守が登城するまえに居間へ出て、小田原の一件をひととおり報告した。
老中首席の水野出羽守が病中で、その職責を代行している加賀守はなにかと多忙であったが、天草屋の風聞はすでに将軍家斉の耳にもはいり、
「箱根からこっちには、化け物がおらぬはずだが――」
と、苦笑しながらそれとなくなぞをかけられている。
一妻二十一妾、生涯に五十何人かの子女を持ち、栄華を窮めた十一代将軍で、いま再起不能といわれる水野出羽守忠成は、その大奥の濫費をつぐなうために年々金の苦労ばかりして病にたおれたといっていいくらいだが、そういう豪放な一面、地獄耳を持っていて、なんにでもよく気のつくゆだんのできない上さまのことだから、天草屋の件に対しても、もうお庭番(隠密)が何人か活躍しているにちがいない。
たかが市井の一無頼の徒のことではあるが、

おことばがあった以上、早くてぎわよく葬ってしまわないと、こっちの手腕まで疑われることになりそうなので、つらい加賀守である。

「主膳、すると化け物は、事前にこっちの腹を読んだということになるのか」

加賀守は軽く老人らしいまゆを寄せる。

殺された岩見守は、加役をつとめてながらがあり、相当の手腕と見たから、加賀守が大阪奉行に推したのだ。それをこんど勘定奉行に昇進させて江戸へ呼びもどすことにしたおもな理由は、松浦ならてぎわよく化け物を取り押えるだろうと考えたからで、主膳にその旨をふくめ、わざわざ内密に小田原までつかわしたのである。

しかも、岩見守はまだその内命さえ聞かぬうちに、化け物に殺されたことになるのだ。

「残念ながら、そういうことになるかと存じます。密命は殿のお口から出て、てまえの耳へはいっただけで、他にもれるはずはございませんん。てまえが小田原へ立ったその動きで、化け物はあるいはと疑念をいだいたのでございましょう。あいにく、化け物にはほかにも松浦どのにもどられてはふつごうな事情が重なっておりました」

「ふうむ」

「松浦どのは加役のころ、だいぶ化け物の金をつかっているようです。化け物から見れば、松浦どのは自分の道具にすぎなかったのでございましょう。自然、そのるす中に、萩江と申すのち添えまで道具あつかいにしていたようでございます」

「うむ」

「そんなことから、よけいこんどのことについて神経をつかっていましたので、てまえの動きにぴんと感じるものがあったとみえます。しかも、その殺害の場所をわざわざ小田原にする、恐ろしい奸智です」

そういう主膳の顔は、べつに恐れてもいない微笑を見せている。

2

「小田原で松浦を殺害したのに、なにか特に意味があるのか」

加賀守は不審そうな顔をする。

「下司の考えとでも申しましょうか、当家のおひざもとで勘定奉行ともある重い役目の者が殺害されれば、なにか当家の傷になるかもしれぬ、鼻をあかしてやるだけでもいいと、そのくらいのことは考えたでございましょう」

「うむ、あまり名誉なことではないな」

「一つには化け物め、思いあがって、おれに手をつけるな、へたなことをすると、たたりが大きいぞと、警告してみせる気持ちもございましたろう」

「うむ」

加賀守は軽くうなずきながら、

「とにかく、一日も早くかたづけぬといかぬ。だれがよかろうな」

と、さすがにたたりなどは少しも意にとめていないようである。

「さようでございますな」

主膳にもこの人選はちょっとむずかしい。正面からぶつかっていけぬ化け物だし、またぶつかっていこうにも、そのけはいがわかると、たちまち姿をくらましてしまうばかりでなく、逆にとんだあだをしかえしてくる。

いきなり当人をつかまえて、その場で始末してしまう以外に手はないのだ。

「主膳、こんど出羽どのにかわる後任は、おそらく西の丸の越州侯になろう。越前どのは切れるご仁だ。その辺のところを、よく含んでおいてくれ」

出羽守はほとんど再起不能なので、後任は西の丸老中の水野越前守忠邦という呼び声が高かった。

忠邦は文化九年十九歳で唐津六万石の封をつ

ぎ、文政元年二十五歳のとき自分から願い出て、浜松六万石へ国替えをした。唐津は実収二十万石といわれ、浜松はその高どおり六万石あるかなしかである。そんな損までして国替えを願い出たのは、九州大名には外国警備の勤役があるから幕閣にははいれない。忠邦は他日老中となって大いに天下の政事に手腕をふるってみたい野心があったから、わざわざ損な国替えをした。

そのくらいだから、文政六年には大阪城代をつとめ、京都所司代から西の丸老中に補されて、当年四十一歳、その才腕はすでに天下に知られている。

加賀守は文政元年以来、やがて十数年も老中をつとめてきているのだから、いまさら越前守に負けてくれるなよという意味が、言外にあるのである。

「殿、今のおことばで、よい人物を思いつきました」

主膳は急に顔を輝かせた。

「ほう、今のことばでな。だれだな、申してみなさい」

3

「越州さまのご舎弟跡部良輔さまはお目付役をつとめ、なかなかの人物とうけたまわっております。このおかたなら安心してお任せできるのではないかと存じますが、いかがでしょう」

主膳はそう進言して、意味ありげに微笑した。

これならたとえ失敗しても、忠邦に横やりを入れられる心配はない。また、跡部としては、兄忠邦の力を借りても、ぜひやってのけなくては今後の栄達にかかわってくるから、必ずやりとげずにはおかないだろう。人が悪いようだが、ここで跡部を起用することは、忠邦を起用するとおなじ結果になるのだ。

「うむ」

加賀守はうなずいてから、ちょっと考えている。人選に不満があるのではなく、なにごとにも軽々しい言動は避ける、そういう老中としての習慣が身についているのだ。

「よかろう、適任かもしれぬ。さっそく呼んでみよう」

「それにつきまして、化け物を誘い出すよいえさがございます」

「えさがな」

「浜松の浪人で早水東吾という者を利用してみるように、ひとこと殿から跡部さまのお耳に入れておいていただきます」

「うむ、あの若い男だな」

「さようでございます。くわしいことは、てまえがお目にかかってから、申し上げることにいたします」

「うむ。如才もあるまいが、せめて松浦の娘だけは、身のたつように心がけてやってくれ」

「心得ましてございます」

「登城するぞ」

加賀守は静かに立ち上がった。

――そのころ。

大森の山本屋で無事に落ち合った東吾とお袖、拾吉と千鳥の四人は、一夜を大森で明かして、翌朝品川にはいり、品川から船で深川へ向かっていた。

千鳥が江戸でたよりにする叔父高橋新左衛門があまりたよりにならないとわかると、東吾は千鳥の身を寄せる先がきまるまで、手がひけなくなってしまった。

「どうしやす、だんな」

ふたりきりのとき、拾吉が心配して東吾にきいた。久しぶりでゆうべ女たちがふろへ立ったあとのことである。

「やむをえない。こうなっては、自分用はあとまわしにして、なんとか千鳥さんのことを考えてやらなければならないんだが、千鳥さんはどう考えているだろうな。なにかそんな話は出なかったかね」

拾吉はまえの晩、千鳥とふたりきりで一夜を明かしているから、なにか話が出たはずなのだ。

4

「あのお嬢さん、口が堅うござんすからねえ。それに、あっしのお供じゃ気にいらなかった、というより、おなじことならだんなに手をひいてもらいたかったんでしょうよ」

拾吉はそういって苦笑いをしている。

「いい気なものだな。こっちはそのために、みんなが命がけになっているのになあ」

「でも、かわいいところもありまさ。拾吉は江戸へ帰っても、千鳥の力になってくれますねというから、そりゃもう、できるだけのことはいたしやすといいやすとね、早水さまはあたくしを早く牛込の屋敷へ送りこんでしまうことばかり考えているのではないかしらと、ためいきをついている。つまり、拾吉なんかどっちでもいいんで、ぜひ力になってもらいたいのは、だんなのほうなんでさ」

「その牛込の高橋の屋敷がたよりにできなくなってきた。そこで、お袖あねごが道々いうには、さしずめ佐賀町の和泉屋のおかみさんにたのんで、そこへ当分あずかってもらってはとすすめるんだがねえ」

「ああ、大磯で出あったあのきれいなおかみさんの家ですね」

「そうなんだ」

「大きな質両替屋だっていう話だが、あずかってくれやすかね」

「自分からたのみこめば、きっとだいじょうぶだと、あねごはいっている」

「それで、だんなもいっしょってわけでげすか」

「いや、わしはそんな家へやっかいになる理由はない。別に家をさがす」

「そういやあ、だんな、あっしはお袖あねごから聞いたんだが、だんなはご尊父さんをさがしに江戸へ行くんですってね」

拾吉が突然そんな話を持ち出す。

「いや、さがさなくても父親のいるところはわかっているんだ」

「じゃ、どうしてすぐそこへ行かねえんです」

「天にはしごをかけてから行くつもりだ」

「失礼ですが、ご尊父さんそんなに貧乏でもしていなさるんですか」

「いや、べつに貧乏はしていない」

東吾は思わず苦笑したが、

「拾吉うじ、貴公とは思わぬ行きがかりから、生死まで共にしてきた。深い縁があるんだろう。貴公にだけはほんとうの話をしておくから、きっと他言は無用にしてくれ」

と、居ずまいを正した。

「承知しやした。これでも、だんな、あっしは男のはしくれでござんす」

拾吉も急にすわりなおす。

「わしの父親は、今の西の丸老中水野越前守忠邦だ」

「えっ」

あんまりけたが離れすぎているので、拾吉はわが耳を疑わずにはいられない。

5

「わしは文化九年生まれだと話したな」

東吾は淡々と話しだす。

「うかがいやした。たしか申年でござんしたね」

「その年父忠邦は十九歳で唐津六万石をつぎ、母若江は実家早水東左衛門の浪宅でわしを産みおとした。まだへや住みのおりの子だから、屋敷で産ませるのをはばかったのだろう。文政十年わしが十六になったとき、父はすでに遠州浜松へ国替えになって、大阪城代をつとめていた。母は成長したわが子を、父に対面させるために、わしをつれて江戸を立ち、浜松まで行ってそこで病死した。父の城下まで行って、そこ

でわしに死に水を取らせたのも、なにかの深い宿縁だったのだろう」

「お察しいたしやす、だんな。もうひと足というところまで来ていてねえ」

拾吉は何度もうなずいていた。

「わしは悲嘆のあまり、いっそ世を捨てようかという気になり、一度は寺へはいった。しかし、それでは母の素志にそむく。そこで、わしは天にはしごをかけてやろうと決心した。父と対等の口がきけるだけの身分になって、はじめて父の前へ出る。父が母の十六年の苦労に感謝の念を持って、わしにあってくれたときこそ、母の魂はよろこんで成仏できるだろう。それが母へのなによりの孝養だと、わしは堅く心に誓った」

「わかりやす。りっぱだなあ、だんなは」

「これを見ておいてくれぬか。おふくろさまがそのとき若殿から形見にもらってきた水野家の重宝なんだそうだ」

東吾は帯していた差し添えのほうをさやごと抜いて、むぞうさに拾吉にわたした。

「拝見いたしやす」

さやを払ってみると、いかにもにおいの深い古刀で、地はだは小杢目美しく、刃文は直刃で、総体に見とれるようなさえた鉄色が深沈とあかりを吸っている。

「だんな、あっしなんかには、とても目がとどきやせんが、すばらしい古刀でござんすね」

「藤四郎吉光だそうだ」

「なるほど、大名道具です。たしかにおもどしいたしやす」

「そこでな、拾吉うじ、わしはいま乗りかかった船で、どうやら大敵を向こうにまわすことになってしまったようだ。こんな悪党に負けるようでは、とても天にはしごをかけるなどはおぼつかない。負けはせぬ。きっと勝ってみせる。しかし、人には万一ということがある。だから、貴公にだけほんとうのことを打ち明けておいたんで、もしわしに万一の場合があったら、この吉光を水野家へ持っていって、ひととおり貴公の口からわしのことを話しておいてもらいたいんだ。今からたのんでおくよ」

東吾の真意はそこにあったのだ。

6

「だんなは、こんな道草は食っちゃいられなかったんでござんすねえ」

拾吉がきのどくそうにいう。

「いや、多くの人が迷惑している世の中の悪と戦うのは、男一生の仕事だと思う。悪を見のがして避けて通るのは、悪を行なうにも等しいひきょうだ。困っている人を救って善根を施すのは、また母への追善だとも考えている」

「なるほど、たしかにそうだ。だんなは偉いや」

「いまに、もっと偉くなろうと思っている。偉くなれなければ、わしは一生父に対面せぬつもりだ。なんだ、こんな無能な子を産んだのかと、おやじに思われるようじゃ、たいせつなおふくろさまを恥ずかしめるようなもんだからな」

「いや、だんなはげっして無能じゃありやせん。それだけのことを考えているだけでも、りっぱなもんでさ」

「とにかく、今いった父のことは、わしに万一のことがあるまで忘れてくれ。わしは今までどおり、拾吉うじの親友早水東吾でいいんだ」

「承知しやした。拾吉うじもこれからは、だんなのいい親友になれるように心がけやす」

拾吉は冗談のようにいってわらったが、自分の素姓についてはひとことも口にしようとはしなかった。

そこへ女たちが、ふろから上がって、ふたりともさくら色に湯ほてりのする美しい顔を見せた。

「いずれあやめかかきつばた」

拾吉が思わずそんな軽口をたたいて、
「失礼ですよ、拾吉」
と、お袖にたしなめられていた。
「東吾さん、和泉屋さんのこと、お嬢さんもそうしますって」
ふろ場でそんな話が出たらしく、お袖はあらためて東吾にそう告げた。
つまり、千鳥はもう屋敷へも帰れないし、たよる親戚もないことになるのだ。
鬼になっても親のかたきを討つ、千鳥はそういっているとお袖から聞いたが、ではどんな手段でそれを実行するつもりでいるのか、東吾にははなはだ心もとない。
が、そんなことはみだりに口にすべきではないので、いっさい当人の意志にまかせることにして、けさ品川から船を仕立てて乗りこんだのである。
「いよいよ江戸へ帰ってきやしたね、あねご」
船が石川島へかかってくると、拾吉がなつかしそうにいった。だれの胸にもその思いはある。
「あっしもきょうから、もとの捜し屋になるわけだ。あねご、道中はいろいろお世話になりやした」
「いいえ、あたしこそ」
お袖はそう答えてから、はっと気がついたらしい。

7

「あの、早水さんも拾吉うじも、お嬢さんといっしょに和泉屋さんへ行ってあげるんでしょう」
実は昨夜からそれが心配になっていたのだが、こわくてお袖は口にできなかったのだ。
「そいつはお袖うじ、そうはいきやせんや。いくらなんでも、あっしたちまで和泉屋さんへ迷惑をかけるいわれがありやせんからね」
はたして、思っていたとおりの返事が出た。

「じゃ、家へきたらどうなのかしら」
せめて東吾だけは家へつれていきたいお袖である。
「なあに、あっしはこれでも神田明神下にねぐらを一軒持っている。だんなは当分あっしが引き取りまさ」
よけいなおせっかいだわと、不満だったが、さすがに千鳥に遠慮があるので、
「やっぱり、みんなきょうで、てんでんばらばらになっちまうんですねえ」
と、なんだか悲しくなる。
「旅は道づれ、世は情けっていいまさ。旅が終われば道づれがなくなる。あとに残るのは世は情けっていうやつだけだ。まあ、てんでんばらばらになっても、おたがいに情けだけは忘れないようにしやしょうよ。ねえ、だんな」
「あたりまえだわ」
お袖がそのことばをひったくるようにいって、
「お嬢さんはまだ身がたっていないんですもの、そんなことというの、薄情のしるしだわ」
と、つい涙声になる。
「あれあれ、あねごにしかられちまった」
拾吉が頭をかく。
「お袖さんと道づれになったのは、神奈川の台の茶屋だったなあ」
東吾が感慨深そうに口を入れる。
「ええ」
「その晩、鈴ガ森で千鳥さんに出会ったんだが、四人でずいぶん長いあいだ旅をしてきたような気がする。数えてみると、まだ六日めにしかならないんだけれどねえ」
「その間に、東吾さんは三度も刀を抜いているんですものねえ」
千本松原ではいっしょに死ぬ気にさえなっていたのだ。このまま別れてしまうなんて、あんまりあじけなさすぎると、お袖はまたしても胸がいっぱいになってくる。

春の空に黒いにじをかけたような永代橋が、すぐ目の前になってきた。

「そうら、深川へ帰ってきた」

拾吉がわざと元気よくいう。

ちっともうれしくなんかありゃしないと、お袖は千鳥のほうをみると、これはふしあわせをわが身一つにしょわされて、じっと伏し目にすわったまま、なにを考えているのか、さっきからひとことも話の仲間入りをしていないのだ。

心なしか、青い横顔である。

8

船はまもなく永代橋のふもと佐賀町河岸へついて、桟橋をあがったすぐ左手のかどが、そば屋弥之助の家だった。

ほとんど半月ぶりで帰る家だから、お袖はさすがになつかしい。

「さあ、どうぞはいってくださいまし」

三人の先に立って店の土間へはいると、

「あ、お袖さん、お帰んなさい」

「ねえさん、お帰りなさい」

と、ちょうど店にいた出前持ちや小女が、びっくりしたように口々に出迎えてくれた。

「ただいま——おとっつぁんは奥?」

そうききながらも、もう正面ののれんをくぐって、釜場へ走りこんでいる。

「おとっつぁん、ただいま」

「ああ、帰ってきたか」

釜前に仕事着で立っていた弥之助は、男だから口ではあっさり娘を迎えた。

「ずいぶん心配した?」

「なにをぬかす。娘をひとり旅に出して、心配しない親がどこにある」

「ごめんなさい。こんなにおそくなってしまって」

「まあ、いいやな」

見合わせた父と娘の、よく似た目がどっちもじんわりとうるんできた。

「お客さまか、お袖」

「ええ、ずっといっしょだった三人なの」

「三人——?」

頭からことづてを聞いているらしく、稼業がらちょっと聞きとがめたが、

「いつまでもお待たせしておいちゃいけねえじゃねえか」

と、すぐに気軽に店へ出る。

「みなさん、お袖のおやじ弥之助でござんす。さあ、むさくるしいところですが、どうぞおはいりくだすって、ただいますすぎを取らせます。いいえ、ごあいさつは後ほどうけたまわります」

「では、ちょっとじゃまさせていただこう」

東吾は千鳥と拾吉をうながして、釜場へはいった。

すすぎを取って茶の間へあがると、そこから裏二階へあがる階段がある。

お袖は三人を二階の座敷へ案内しておいて、

「あたし、じきにまいりますから、遠慮なくおくつろぎになっていてくださいね」

と、いそいで茶の間へ引きかえしてきた。

「お袖、あれがお嬢さんとかいう人か」

炉ばたで手まめに茶の用意をしていた弥之助が、声をひそめてきいた。

「ええ、千鳥さんとおっしゃるの」

「どうしたんだ、小田原で親ごさんにあえなかったのか」

「千鳥さんのご尊父さん、あたしたちが小田原へ着いたら、その晩にもう人手にかかっていたんです」

9

「なにっ、人手にかかったと?」

弥之助は啞然としたように娘の顔を見る。

「おとっつぁんは八丁堀のだんなで、倉橋市之丞っていう人知ってる?」

「うむ、北の定回りだ」

「天草屋の息がかかっているんじゃない？」
「お袖、つまらねえ口をきくもんじゃねえ」
父親は苦い顔をする。
「だって、あたしたちもう天草屋と敵味方みたいになっちまったんだもの、しようがないわ」
いくぶん得意そうに、いきいきと目を輝かしているお袖だ。
「ほんとうか、お袖」
「ほんとうよ。東吾さんはもう三度も切り合いをやってるわ。一度はあたしもいっしょに戦ったのよ」
お袖は一気に、鈴ガ森以来の話を、かいつまんで父親の耳に入れた。
「東吾さんて人は、りっぱなのよ、おとっつぁん。乗りかかった船でしようがない、千鳥さんの身のたつまで、あくまで天草屋と戦うんですって、中津川さまも心からほめていたわ」
弥之助はまるで火遊びをたのしんでいるこどものような、お袖の熱心な顔をまじまじとながめながら、
「それで、おまえたち、これからどうしようっていうんだ」
と、重苦しい声音をかくしきれない。
「どうするって、拾吉さんは神田のほうに家があるけれど、まさか男ひとりのところへ千鳥さんをあずけるわけにはいかない。だから、あたしは当分和泉屋さんのおかみさんにたのんで、千鳥さんをあずかってもらおうと思って、きょうみんなを家につれてきたのです」
「お袖、そいつはだめだろう」
「あら、どうしてさ、おとっつぁん」
「相手が天草屋にねらわれている娘とわかっちゃ、和泉屋さんでも二の足を踏む。それどころか、いま和泉屋さんじゃ自分の家に大きな心配ごとが持ちあがっていなさるんだ」
「心配ごと――。どんなことなの」
「それがな、お店の者にも堅く口どめをして、まだ世間へはかくしていなさるようだが、だん

ながこの十日ばかり帰ってこない。それであ、おかみさんを急に箱根から呼びかえしたってわけだ」
「行くえ不明なの」
「うむ。心配するなって手紙はくるが、居どころが知れねえ。つまり、だれか悪いやつに人質にとられているんだろうって話だ」
「おとっつぁん、そんなのんきなことをいっていていいんですか。おなじ町内に住んでいて、あたしとおかみさんのこともあるし、おとっつぁんは十手をあずかっている人なんでしょ」
お袖の目がたちまち不満そうに、父親にくってかかる。

10

「そば屋の弥之も、御用のことで娘っ子にしかられるようになっちゃ、もうおしまいだな」
弥之助は苦笑して、
「そりゃ、おとっつぁんもほかならねえ和泉屋さんのことだから、そっと大番頭さんにきいてみたんだ。大番頭さんがいうには、弥之さん、おまえが心配してくれるのはありがたいが、これにはなにか奥の奥がありそうだ。だんなもけっしてさわいでくれるな、世間へもらさないように、手紙でいってきているし、どうか当分聞かないことにしておいてもらいたい。力を借りたいことがあれば、きっとこちらからたのみに行くからと、こう堅く念を押されているんだ。どうにもしようがないじゃないか」
といって聞かせる。
「お美乃さん、いいえ、おかみさん心配しているでしょう。どんな気持ちかしら」
お袖はわがことのように胸がいっぱいになってくる。お美乃のほうが一つ年上だが、どちらかといえば内気なたちで、小さいときからなにかあると、きかない気のお袖がかばってきた間がらなのである。
お美乃もおなじ町内の米屋の娘で、器量をの

そまれて大金持ちの和泉屋九郎右衛門のところへ、十七で嫁入りをした。当時九郎右衛門は十年上の二十七、しかもまえのおかみさんが離縁になっているし、あんまり身分違いでこわいとしりごみするのを、

「米屋の娘から将軍さまのご生母になる人だってあるわよ」

と、意地をつけたのはお袖だった。

「おとっつぁん、あたしちょっと行って見てきます。千鳥さんの話もあるし」

「待ちな、お袖。その千鳥さんの話だけは、おとっつぁんどうかと思うぞ」

「どうしてなの」

「どうしてって、おまえ、先さまは取りこみのさいちゅうなんだからな」

「いいえ、あたしはなにも、千鳥さんをお店へ置いてくれってたのむんじゃありません。根岸の寮だってあいているんだもの、寝るところさえ貸してもらえばいいのよ。煮たきのめんどうなら、あたしが行ってしてあげればいいんだもの」

つい躍起になっているお袖だった。

「そんな煮たきの世話まで、おまえが行ってしてやらなくちゃならないお嬢さんなのか」

弥之助はいささかあきれた顔である。

「だって、どこへ行きようもない人を、いまさら突っ放せないじゃありませんか」

「その意地っぱりがおまえのいいところで、悪いところなんだが――実をいうとな、お袖、和泉屋のだんなの件も、黒幕は天草屋じゃないかと、おとっつぁんはにらんでいるんだ」

「えっ」

お袖はびっくりして父親の顔を見すえる。

11

「おとっつぁん、とにかくあたし、おかみさんにあいさつしてきますから、二階の相手をしていてください」

お袖は父親にそうたのんでおいて、胸重く家を出た。

和泉屋は資産百万両といわれる三代つづいた金持ちで、質両替が本業だが、先代が事業好きで、いろいろな事業に手を出し、運よくそれがみんな当たって身代を太らせた。当主の九郎右衛門もその血をついで、まだ三十になったばかりだが、本業のほうは番頭たちに任せ、自分は事業あさりに日を暮らしていた。

「なんでもこのごろは、薪炭を一手に大奥へ入れようというので、だいぶ話が進んでいたそうだが、その仲に立っているのが天草屋だったと、おとっつぁんはちらりと耳にしているんだ」

だから、こんどのだんなの雲がくれにも、天草屋の手がのびているのだろうと、父親は話してくれたが、それ以上のことは弥之助にもまだなにもわかっていないという。

――そんなこと、だろうじゃわかりゃしない。

自分にならお美乃はなんでも話してくれるはずだし、たいていのたのみはいつもきっと聞いてくれる。直接ぶつかってみるにかぎると思ったから、お袖はあたふたと家を出てきたのだ。

――けど、和泉屋でどうしても千鳥さんをあずかるのは困るとなったら、どうすればいいかしら。

まさか、家の二階へおくということもできないし、拾吉の家では男所帯だからなお困るだろう。それに、東吾と千鳥を一つ家におくのは、どうしても気のすすまないお袖なのだ。

いちばんいいのは、やっぱりお美乃にあずかってもらうことで、それでなければ根岸か今戸の寮を当分貸してもらい、それなら東吾も拾吉もいっしょに引き取って、自分が行って世話をする。

そんな義務がどこにあるんだと、父親はさっき変な顔をしていたが、お袖としては当分四人

でいっしょに暮らせれば、こんな安心なことはない。ぜひそうしたい、とはじめから考えていたことなのだ。

——少し自分かってだったかしら。

お袖はどうにも胸が重かった。

和泉屋は中ノ橋の手前にあって、来てみると、なるほどいつものように店はやっているようである。

表通りにある門のくぐりからはいって、内玄関のこうしをあけると、声を聞きつけたらしく、すぐに女中がしらのお松が出てきてくれた。

「お松つぁん、あたしいま江戸へ着いたばかりなんです。さっそくおかみさんにごあいさつに出たんですけど——」

12

「お袖さん、おとっつぁんからもう聞いたでしょ」

お松は心やすだてに、あいさつ抜きでいきなり声をひそめる。

「たいへんなんですってね」

「外へもらしてもらっちゃ困るけれど、あたしたちまで毎日生きたそらがないのよ」

「そうでしょうねえ。いったい、どうしたっていうんでしょう。ほんとうに、まだだんなの居どころわからないんですか」

だれからでも聞き出せるだけは聞き出しておこうという心構えだった。その岡っ引き根性が、親子って争われないものだと、お袖はわれながらおかしい。

「それが、まだまるっきりわからないんです。さっきも手紙が届いたくらいだから、ご無事なことはご無事なんでしょうけれどね」

「その手紙ってのは、だれが持ってくるの」

「家へ出入りの、やお屋とかさかな屋とかの小僧がたのまれて、さっと台所から持ってくるんです」

「いちばんはじめにだんなから手紙がきたのは、いつごろなんです」

「さあ、あれは八日だったかしら、たしか七日のおひるごろお出かけになって、その夜お帰りがない。お帰りのないときは、きっとどこに泊まるからと知らせがあるのに、その日にかぎってそれがないんで、大番頭さんが心配しているところへ、手紙がとどいたんです。すぐ帰るから心配するな。商談で手間取っているのだ。けっして外へもらすなと、書いてあったそうです」

「なんだか変な手紙ね」

「変ですとも。だいいち、そんな手紙、出入りの小僧さんがたのまれて、台所から持ってくるなんて、ただごとじゃありません。大番頭さんもおかみさんのお里ですから、米屋のだんなにだけはわけを話して、心配しながら様子を見ていると、中一日おいて、十日にまた手紙がとどいたんです。まえと同じことが書いてあって、ただお美乃をすぐ箱根から呼びもどしておくようにとあったんです」

「十日は、あたしがおかみさんに別れて、箱根を立った日だわ」

そして、翌十一日にお袖は東吾たちに出あい、十二日は藤沢泊まり、十三日小田原へ向かう途中、大磯でお美乃が江戸へ帰るのに行きあっている。

「さっき届いた手紙ってのは、どんな手紙なんです」

「おかしいのはね、お袖さん、まえの手紙はみんな大番頭さんあてなのに、こんどのはちゃんとおかみさんあてになっているんです。どうして家のことがだんなにわかるのかしら」

お松は意味ありげに、いよいよ声をひそめながら、こわそうな顔をして見せる。

13

「そりゃお松つぁん、敵はもうこの和泉屋さんへ、どこからかちゃんと見張りをつけているん

です」

お袖はずばりといいながら、思わずぞっとした。そんな見張りがついているとすれば、自分が今ここへきたことも、いや、そば屋の二階に東吾たちが待っていることまで、もう天草屋のほうへ知れてしまったのではないだろうか。

「そうなの。それがあるんで、大番頭さんもうっかりしたまねはできないって、ひどく心配しているんです」

「とにかく、あたし、おかみさんにお目にかかれないかしら」

お袖はもうぐずぐずしていられないと思った。さっき届いたという手紙は、どんなことをいってきているのか、直接お美乃にあって聞いたほうが早い。

――負けるもんか、あたしには東吾さんがついているんだもの。

じいんと胸がうずいてくるお袖なのだ。

「うかがってみるわ。お袖さんならかまわないから、いっしょにいらっしゃい」

「お願いします」

玄関から長い廊下を幾間か通り抜けて、その廊下が突き当たって左へ折れたところに、お美乃の居間があった。裏は庭をへだててすぐ大川になっている。

「おかみさん、そば屋のお袖さんがあいさつにきました」

お松が廊下から取り次ぐと、

「どうぞ――」

なつかしいお美乃の声が迎えてくる。

「さあ、お袖さん」

お松はそういって、これで役目がすんだというように、そこから引き返していった。

「こんにちは、お美乃さん」

お袖が障子をあけてはいると、

「まあ、いつ帰ってきたの、お袖さん」

と、お美乃もお袖にだけは娘っぽい口ぶりになる。

まゆを落として、歯をそめているから、年よりは二つ三つふけて見えるが、それだけにしっとりとおちついて、水もしたたるといいたいような色女房ぶりのお美乃だ。

「あたし、たったいま家へ着いたばかりなの。おとっつぁんに話を聞いて、すぐに飛んできたんだけど、あたしもこんどばかりは途中で死にはぐってきたのよ」

「ああ、あのお嬢さん、小田原で父上にあえましたか」

「それなんです。そのご尊父さん、あたしたちの着くまえの晩に人手にかかっていて、それからが大騒動だったんです」

お袖は、まず相手の話を聞くまえに、千鳥を売りこんでおく必要があるのだ。

14

「お袖さん、あんたそんなめにあって、だいじょうぶなのかしら」

お袖がこともなげに、自分たちがこんど道中で渡ってこなければならなかった数々のあぶない橋の話をして聞かせると、お美乃はただあきれたように青いまゆをひそめていた。

「だいじょうぶかどうかわからないけれど、乗りかかった船で、もうあとへひけなくなっちまったんです。これでも深川っ子ですものね」

「でも、よくまあけが一つしないで、こわかったでしょう、千本松原のときは」

「ただもう夢中よ。東吾さんの手にしっかりつかまって、死なばもろとも、ついそんな気になっているのよ。あとで東吾さんにしかられちまったわ」

「どうして――」

「先へ逃げてくれれば、両手が使えたのにって――。見ると、東吾さんは着物をほうぼう切り裂かれて、肩に一ヵ所かすり傷さえうけているんです。そのときは、あたしもからだじゅうがふるえちまって」

「けど、うらやましいわ。その千鳥さんやあなたには、東吾さんという強い人がついていてくれるんですものね」

お美乃はわが身に降りかかっている不幸を思い出したらしく、ほっとためいきをついた。

「ごめんなさい、お美乃さん。自分かってなことばかりおしゃべりして。あたしのは、いってみれば、意地で自分から飛びこんでいったことだけれど、——お美乃さんも、だんなさまが帰らないんですってね。どうしたっていうんでしょう」

お袖はすかさずその話を持ち出す。

「もう知ってるのね、お袖さんは」

「そりゃ、あたし、これでも岡っ引きの娘ですからね。やっぱり天草屋が黒幕らしいって、ほんとうなの」

「まだはっきりしないけれど、たぶんそうだろうって、大番頭さんも、里のおとっつぁんもいうんです。あたし、どうしていいかわからない」

「しっかりしなくちゃだめよ。天草屋なら、あたしたちと一つ敵なんだもの、あたし東吾さんに相談してみる。さっきまた手紙がきたんですってね。どんなことをいってきたの」

「話してだいじょうぶかしら、そんなことまで」

さすがにお美乃はためらわずにはいられないようだった。

「お美乃さん、あたしたち小さいときからきょうだいのようにしてきて、今こそ身分は違うけど、心はかわらない、これからもどんなことでも力になりあおうねって、このあいだも箱根で約束したばかりじゃありませんか。あたし、そりゃ千鳥さんのこともあるけれど、きょうはあなたのために死ぬ気できているのよ。みずくさいわ」

けっしてうそではなく、それもお袖の本心の一つだった。

15

「違うのよ、お袖さん。あたしは自分がこわいから話さないんじゃない。よけいなことを耳に入れたばっかりに、あなたにまでとばっちりがかかっちゃたいへんだもの」

お美乃にはまたお美乃らしい分別があったようだ。

「ああ、その心配ならいいのよ。いってみれば、あたしはもう天草屋にねらわれている女なんだもの、いまさらとばっちりをこわがったってまにあいません」

さばさばといってのけるお袖だ。

「そういえばそうねえ。あなたは昔から気が強いんだから」

お美乃はつりこまれるように、ちょっとわらって、

「実はねえ、今夜大番頭さんをつれて、ふたりきりで根岸の寮へ出向くように。会って相談したいことがあるからって手紙なの」

と、さすがに声をひそめる。

「じゃ、今夜だんなさまにお目にかかれるのね」

「ええ」

「根岸の寮って、お宅の寮のことなの」

「そうだと思うの、ほかになんとも書いてないから」

「ほんとうかしら」

お袖はまじまじと、お美乃の顔をながめてしまった。

「だんなさま、くるにしてもひとりじゃないわね、きっと」

「あたしもそれがこわいんです。もし縛られてでもくるようだったら、どうしようと思って」

「それに——」

ことによると、根岸へひっぱり出しておいて、お美乃までとりこにしようという手かもしれない。お袖はそう口まで出かかったのをやめ

かんで、強い顔をした。
「死ぬ気になるなんて、まだ早すぎるわ」

16

「どうしたの、お袖さん」
お美乃はびっくりしたように、涙の目をみはる。
「あたし、東吾さんにたのんであげる。今夜いっしょに根岸の寮へ行ってもらうように」
「いいえ、それはだめ。けっしてほかへもらしてくれるなって、堅く口どめしてきているんです」
急にお美乃がおろおろしだす。
「お美乃さん、そんな気の弱いことでどうするんです。天草屋は、なにもだんなさまを殺すのが目的で、こんなまねをしているんじゃない、殺す気なら、もうとっくに殺しています。なにかたくらみがあるから、生かしておいて、いろんなことをいってくるんだわ。そんな悪党のいっ

て、
「それで、出かける気、お美乃さん」
と、息をのむ。
「出かけます。たとえどんなめにあったって、だんなさまからそういってきているのに、行かないのは道ではない。行けば事情もわかるだろうし、死ぬ覚悟で行け。行くのが女の道だと、里のおとっつぁんがいうんです」
お美乃の目に涙が光ってきたのは、それをいうときの父親の涙を思い出したのだろう。
「そうね、現在だんなさまが苦しんでいるのに、お美乃さんだって、あとへひけないわね」
そういいながら、お袖も急に目の中が熱くなってくる。
「あたし、もう覚悟きめているのよ、今夜、だんなさまといっしょに死にます。お袖さんとも、これがお別れになるかもしれない」
「お美乃さん、いいことがある」
お袖はいきなり、いじらしいお美乃の手をつてくることを、いちいち本気にしてこわがるから、悪党がいよいよつけあがるのよ。これがお上へ訴え出たとか、岡っ引きをたのんだとかいうんなら、敵も破れかぶれで、またどんなあだをしないとはかぎらないけれど、たかが東吾さんひとりぐらい用心棒につれていったからって、それほどの悪党なら、そう気になんかするもんですか」
「そうかしら」
「どうせいざとなりゃ、どっちみち死ぬ覚悟なんじゃありませんか。こっちもやるだけのことはやる、そのくらいの意地がなくてどうするんです。東吾さんなら、きっとうまくやってくれるからだいじょうぶよ。あたし、たのんでみます」
「そんなことをして、ほんとうにいいかしら」
「じゃ、お美乃さんは悪党のいうなりしだいになる気なの。それで女の道がたつと思うの。人間ひとりが、いいえ、だんなさまとあなたが死ぬか生きるかの境なのよ」
お袖は気の弱いお美乃の手を握りしめて、ぼろぼろとくやし涙がこぼれてきた。
「ありがとう、お袖さん、あたし、やります。お願いできたら、東吾さんをたのんでみてください」
やっと美乃も決心がついたようだ。
「いいわ、あたしすぐ行ってくるから、あなたも大番頭さんやお里のおじさんに話しといてください。あたし、ほんとうはたのみがあってきたんだけど、それはあとにするわ」
「どんなこと、たのみって」
「いま話した千鳥さんね、帰る屋敷がなくなっちまったんで、当分根岸か今戸の寮をお借りしたかったの」
「そんなことだったら、かまいません。大番頭さんに話しときますから、いつでも使ってください。根岸の寮は今夜だめだけれど」
「それはそうねえ。とにかく、あたし、すぐ行

鳥のことがたのみにくい場合でもあった。
いや、もう一歩突っこんでいってみれば、お袖は自分の好きな男に、天草屋のような世間から憎まれている悪党を退治させて、ぜひ男をあげてもらいたい、そんな夢のような稚気が捨てきれないのだ。
——東吾さんなら、きっとできるんだもの。
お袖はまるで駆けこむようにして家へ帰ってきた。
「どうした、お袖」
釜前で働いていた弥之助が、娘の興奮しているような桜色の顔を見て、心配そうにきいた。
「おとっつぁん、べつに変わったことない？」
「なにをのぼせているんだ。そんな変わったことがのべつあってたまるもんか」
父親は苦笑する。
「おとっつぁんは、のんきね」
「おまえのほうがあわてているんだ。いい娘が、すそをけ散らかして、町中を駆けて歩くもってきます」
お袖はいきおいこんで和泉屋を出たが、表へ出てからふっと心配になってきた。

17

——あたしだけひとりぎめに、かってに承知してきてしまったけれど、東吾さんうんといってくれるかしら。
いや、それより、そんなあぶないところへあの人をつけてやって、もし命にでもかかわるようなことにでもなったら、あたしはどうすればいいんだろうと、お袖は焼きつくような不安に襲われてくる。
が、あんなにまで自分のほうからお美乃を説きつけてきた今となっては、もうどうにもあとへはひけないのだ。
——お美乃さんのことだって、あたしにはほうっておけないことなんだもの。
それに、東吾を売りこんでおかなくては、千

んじゃねえ。気ちがいとまちがわれるぜ」
「いいのよ、どうせあたし気が狂いそうなんだから。——二階のお客さまは」
「お疲れのようだから、ゆっくり休んでもらっている。お美乃さん、どうだった」
「あとで話すわ。たいへんなのよ」
お袖はそういいすてて、ずんずん二階へあがってしまった。
——おとっつぁん心配していてくれるのに、ごめんなさい。
ついわがまま娘になりたがる。すまないとは思うのだけれど、お袖はそれどころでなかったのだ。
「おそくなって、すみません。お待ちになったでしょう」
さっそうと二階座敷へはいっていくと、これはまたなんという陰気くさい姿なのだろう。東吾は柱によりかかって腕をくみ、拾吉は壁のほうを向いて横になっていて、千鳥の姿は見えない。おそらく、次の間で、これも横になっているのだろう。話すだけのことは話してしまって、だれもかれも思いあぐんでいるというかっこうなのだ。

根岸の寮

1

「ご苦労だったな、お袖さん」
東吾はねぎらうようにお袖を迎えて、火ばちのそばへ寄りながら、
「千鳥さん、お袖さんが帰ってきた」
と、次の間へ声をかけてやる。
「はい」
千鳥はすぐふすまをあけて出てきたが、目のふちをまっかにしている。どうやら、泣いていたらしい。
「あねご、さっき親分からちらっと聞きやした

が、和泉屋さんにもここんところ、なにか取り込みがあるんですってね。どんなぐあいでした」

拾吉も起きあがって、さっそく切り出す。

「それが、やっぱり天草屋市蔵のしわざらしいんですって」

「なにっ、天草屋――」

男たちはびっくりしたように、目をみはった。

お袖はひととおりわけを話してから、

「あたし、大番頭さんとふたりきりで行くのはあぶない。どうせ死ぬ覚悟で行くんなら、東吾さんにたのんであげるから、いっしょに行ってもらったほうがいい。悪党なんかのいうなりになることはないって、お美乃さんにすすめてきたんです。ひとりぎめにしてきて、ごめんなさい、東吾さん。いけなかったかしら」

と、さすがに不安そうに東吾の顔を見る。

「どうしたもんだろうな、拾吉うじ」

東吾はまず拾吉に相談する。

「天草屋がきっと出てくるんなら、いちかばちかぶつかってみるほうが早い。あぶない橋にゃちがいないが、ねらわれているという段になりゃ、こうしていたってねらわれているんですからね」

「虎穴に入らずんばというやつだな」

「そうです。ご尊父さんのほうだって、いまの和泉屋のほうだって、実をいうとほんとうに天草屋が黒幕なのか、いったい天草屋はなにをたくらんでいるのか、こっちにゃまだなんにもわかっていない。それがはっきりしなくちゃ、手のうちようがありやせん」

「そのとおりだ。わしもなんとかして、直接天草屋にあってみる手はないものかと、今も考えていたところなんだ。ちょうどいい、今夜思いきってぶつかってみよう」

「ありがとう、東吾さん。お美乃さん、きっとよろこぶと思います」

お袖はほっと重荷をおろした気持ちで、やっぱり東吾さんだわと思った。

「それから、千鳥さんのほうは、当分今戸の寮を借りることにたのんできたんです」

千鳥は黙ってうなだれているきりなので、お袖はいそいでいい足す。お美乃のほうへ東吾を横どりすると思われるのも、気がひけるからである。

「お世話をかけます」

千鳥は軽く会釈をしたが、なにか浮かない様子だ。

2

「千鳥さん、どうかしたのかね」

お袖がもう一度和泉屋へ打ち合わせに出ていったあとで、東吾はやさしくきいてみた。けさから千鳥は少しも口数をきかず、ひとりでなにか深い物思いに沈んでいるようだからである。

「あたくし、やっと決心がつきました」

千鳥はさえない顔をあげた。

「決心――」

「早水さま、あたくし思いきって屋敷へもどってみようと思います。いけませんでしょうか」

突然意外なことをいいだすのだ。

「それはどういうわけです」

それができるくらいなら、今までこんなに心配はしてこないのである。

「あたくし、鬼になります。逃げてばかりいたのでは、父の下手人の手がかりさえつかめません。いっそ屋敷へ帰って、直接なにか証拠をさがし出さなくては、いつまでたってもらちがあかないのではないでしょうか」

「しかし、屋敷へ帰れば綱次郎という男を養子にしなければならないと思うが」

「ことわります。それはあたくしのる す中にきまったことです」

「ことわりきれますか。養子は親戚じゅうできまったことだし、すでに公儀からもお許しが出

ている。綱次郎は腕力に訴えないともかぎらない男だ」

女の弱い力で身がまもりきれるだろうかと思うと、東吾はどうにもうんといいかねる。

「ですから、あたくし鬼になって戦ってみます」

そういいきってから、千鳥ははじめて意地が出てきたように、ほおへ血がさしてきた。

「もし、もし身がまもりきれないようでしたら、自害します」

「どうだろうな、拾吉うじ」

いくら千鳥が自分で気おいたってみたところで、屋敷じゅうが敵なのだ。証拠をつかんだときには、すでに自害しなければならないはめに追いこまれているだろうとしか、東吾には思えないのだ。なんとしても東吾は賛成できない。

「だんな、実はあっしもさっきから、お嬢さんとおなじようなことを考えていたんですがねえ」

拾吉が冷静な顔をあげた。これはどうやら、虎穴に入らずんばと考えているような顔つきである。

3

「拾吉うじは千鳥さんに賛成のようだな」

東吾は気むずかしい顔をした。

「あっしはねえ、だんな、これは自分だけの考えだが、天草屋のからくりを探り出すには、天草屋のふところへ飛びこんでいくのがいちばん早い。その道をつけるには、松浦の屋敷へお嬢さんを売りこむ。つまり、裏切り者になるよりほかはないと考えていたんでさ」

「なるほど――」

「綱次郎って男にお嬢さんの居どころを教えて、うまく取り入れば、あっしは松浦家へはいりこめる。松浦家へはいりこんでしまえば、自然と天草屋に近づける。当分天草屋の子分になって、根こそぎやつのからくりを探り出してやる。うまい考えだとは思ったが、それにはどうしてもお嬢さんを売りこまなくては、こっちの信用がつかない。そこで迷っていたんですがね、お嬢さんがその覚悟なら、きっとうまくいくと思うんですがねえ」

「そのかわり、へたをすると、ふたりとも命がない」

東吾はまだ釈然とせぬものがある。

「だんな、命がけはおたがいに初めから承知でかかっている仕事でさ。やれるところまでやってみようじゃありやせんか」

拾吉が目を光らせていう。獲物を追う猟師山を見ずの意気らしい。

「そうだな。むろん、戦えるだけ戦っていくよりほかに道はないんだが」

東吾は考え考え答えてから、

「千鳥さん、昔親のかたきを討ちたいばかりに、そのかたきに身をまかせ、子までなしてゆだんさせて、やっとかたきを討ったという話があ

る。しかし、それは国にまだ法というものが確立していなかった時代の話で、今日からいえば、身をほろぼしてまで親のかたきを討つというのは、かたき討ちにはならないと思う。そのために国には法というものがあるんだから、その法の力によって、身を全うしながらかたきを討ってもらう、そのほうがほんとうなのだ。自分の身があぶないと思ったら、いつでも屋敷をぬけ出してくる、そして、また新しく出なおす、わしはそういう覚悟で屋敷へもどるならもどってもらいたいと思う。どうだろうな」

と、意見をのべてみた。

「そりゃだんなのおっしゃるとおりです。及ばずながら、あっしがお屋敷へはいりこめば、なんとでも力になりやすから、けっして意地になって身をほろぼすこたありやせん。あぶなければいつでも逃げる、わかってますねえ、お嬢さん」

しかし、口ではそうはいっても、娘の身で実

際にはむずかしい仕事なのだから、拾吉も念を押さずにはいられない。
「はい」
千鳥はからだじゅうかたくしているようだった。

4

その日のたそがれどき——。
三丁の町かごがひそかに和泉屋の門を出て、根岸へ向かった。お美乃のかごを中にして、前のが大番頭卯兵衛、後ろのが東吾のかごである。
東吾がいっしょに根岸へ行くということは、大番頭卯兵衛にしても、お美乃の実父定右衛門にしても、心じょうぶには心じょうぶだが、主人九郎右衛門の身にこのうえのまちがいはおこらないだろうかと、だいぶ心配したようである。
「早水さま、さっそくでございますが、その点はいかがなものでございましょうな」
先代のときから大番頭をつとめているという卯兵衛は、もう五十を越したおちついた人がらだったが、事が事だけに、お袖の案内で東吾が和泉屋へ行くと、まずそれについて意見を求めた。
「このうえのまちがいというのが、命にかかわるかという懸念なら、その心配はないと思う。いわば、当家の主人は人質に取られているのだ。人質を殺してしまっては、先方の要求は通らない。だいいち、先方はまだその要求さえ明らかにしていないのだから、おそらく今夜はその掛け合いだろうと思う。それに、先方にとってわしがじゃまなら、わしひとりをかたづけてしまえばいいのだから、主人のからだにまで迷惑が及ぶとは考えられない」
東吾が率直に自分の意見をのべると、
「よくわかりました。それで安心いたしました。どうぞご後見をお願いいたします」
と、あらためてたのみこんでいた。

「どうでしょうなあ、早水さま、今夜大番頭さんやお美乃まで、人質に取るということはありませんでしょうか」
定右衛門はまた父親らしい心配をする。
「お美乃さんはともかく、大番頭さんまで人質に取ってしまっては、先方の要求を聞いて事を運ぶ者がこっちになくなってしまう。まずその心配はないでしょう。相手がもし天草屋なら、通りがかりの強盗などと違って、一文の得にもならない人殺しなどはやらぬ。その点は安心していてもいいと思う」
要するに、今夜いちばん命をねらわれるとすれば、東吾自身なのだ。
「あたし、とんだことをお願いしちまったかしら」
一同がしたくに立って、ふたりきりになると、お袖はいまさらのように青い顔をしていた。
「いや、愚痴はよそう。われわれは敢然と戦う、それでいいんだ。あとのことはいっさい拾吉うじにたのんであるから、お袖さんはわれわれが出発したら、家へ帰って待っているがいい」
「千鳥さんは今夜のこと、よく思っていないようですね。浮かない顔ばかりしているんですもの」
「いや、あれは違うんだ」
東吾はそう打ち消して微笑した。

5

「そうかしら——。あたしはみんながいいようにと思って心配しているのに、千鳥さんに恨まれているような気がして」
訴えるようにいうお袖である。
「いや、それはお袖さんの思い違いだ。どうして千鳥さんがあんなに沈んでいるのか、わしもさっきはじめてわかったんだが、千鳥さんはご尊父の下手人を突きとめるには、小川町の屋敷

へ帰ってかたきの様子をさぐるのがいちばん早道だと考えた。が、その決心がなかなかつかない。いくら鬼になろうと思っても、そこは女だから、容易に自分の身が捨てきれない。それで、あんなに深く考えこんでいたらしい」

「まあ、お屋敷へ帰るなんて、そんな乱暴な、——とめてあげたんでしょう、東吾さん」

「むろん、わしは反対だが、しかし、千鳥さんがどうしてもご尊父のかたきを自分の手で討ちたければ、やっぱりそうするよりほかにないんだ。逃げていたのでは、かたきの手がかりはつかめないからねえ」

「だって、屋敷へ帰れば、いやでも綱次郎さんって人をおむこさんにしなければならないんでしょう。きらいだわ、あたしあんなやつ」

お袖は一度藤沢で綱次郎を見ているだけに、むしずが走るような顔をする。

「まあ、その話も今夜わしが根岸から帰ってきてからということにしてあるから、あとでよく三人で相談しておいてもらいたいな」

東吾はそういいおいて、お袖と別れてきたのである。

——屋敷へ帰れば、千鳥はおそらくからだがまもりきれないだろう。

それを思うと、東吾も胸が暗い。

かごは大川ばたぞいに新大橋をわたって、両国へ出るころ、ようやく日が暮れてきた。

えんほい、えんほい。

かご屋は足並みも軽く掛け声を合わせて、十六日の月が明るくなった町筋を走りつづける。そのひと足ごとに、問題の根岸に近づいてくるのだ。

はたして、どんな敵が、どんなふうにそこに待ちうけているのか。

千鳥の重く沈んだ端麗な顔、意地っぱりでいきいきと明るいお袖の顔、漫然とそれをまぶたに思いうかべていた東吾の目先へ、ふっとお美乃の悩ましげな白い顔がちらついてきた。青い

まゆ、黒々と歯をそめた口もと。人妻だけに、これは娘たちふたりにはない熟れたようなながめかしさが、深沈とはだによどんでいる。

今夜の敵がもし悪どい天草屋だとすれば、主人九郎右衛門の名にかこつけて、わざわざお美乃まで根岸の寮へ呼び出す目的の半分は、お美乃のからだにあるのではないかと、東吾にもうなずけるだけに、今夜の用心棒は責任が重いのである。

6

和泉屋の根岸の寮は、御行の松へ出て小橋をわたり、王子川から流れてくる音無川という小川にそって、数町のぼった梅林の隣にあった。

いつもなら玄関へかごを横づけにするのだが、今夜はむろん悪党のほうが先へきていて、どんな手くばりをしているかわからない。大番頭の卯兵衛はひとまず往来でかごをおり、石橋をわたって、わらぶき門のくぐりをたたいた。

はたして、くぐりをあけて顔を出したのは、縞物の対を着て、堅気の手代ふうによそおってはいるが、どこか目つきの鋭い三十がらみの男で、

「和泉屋さんだね」

と、往来のかごのほうをじろりと見ながらきく。

「はい、和泉屋の大番頭卯兵衛でございます」

「おかみさんとふたりきりできたんだろうね」

「いいえ、おかみさんの義理の兄にあたるかたが心配しまして、いっしょについてきております。うちの主人はもうみえておりましょうか」

男はそれには答えず、

「どうして、ふたりきりでこなかったんだね」

と、声は低いが、ちょっとおどすような口ぶりになる。

「てまえは大番頭とは申しましても奉公人のこと、若いおかみさんとふたりきりで寮などへまいりましては、世間の口がうるそうございま

す」

卯兵衛はおちついて答えた。三人ではいけないというなら、ここから引きかえせばいいので、おそらくそうはいうまいという東吾の意見だった。

「まあ、来てしまったものはしようがあるまい。通ってもらおうかね」

「承知いたしました」

卯兵衛はかごのそばへもどって、お美乃と東吾にその旨をつたえた。

かご屋にはそこでしばらく待っているようにいいつけて、三人はくぐりから中にはいる。

門の左手に寮小屋があって、惣吉という老夫婦が住んでいるのだが、これは顔を出さず、その門口に浪人者らしいのがふたり、ぬっと立っていた。

「さあ、案内しよう」

きっきの男が人の寮をわがもの顔に先に立つ。

門から玄関まで二十間あまり、茶の木が道なりに生けがきを作って、自然のままの庭木の手入れもよく行きとどいているようだ。

玄関は質素な式台づくりで、名主の家といった感じである。

「お着きだよ」

案内の男が声をかけると、待ちかねていたように暗い障子へさっと手燭の灯が流れてきた。

7

手燭を取って出てきたのも、おなじように目つきの鋭い精悍そうな若者だった。

こういう連中は、親分の掛け声一つで、善悪にかかわらずいつでも命がけになれるだけの山犬根性を持っているから、堅気な者から見るとからだじゅうがたえず殺気がみなぎっているようで、いつかみつかれるかもしれないぶきみなものを感じさせられる。

「上がってもらおうかね」

「はい」

さすがに卯兵衛はおちついているが、お美乃はもう恐怖に全身がかたくなっているのだろう、足の運びさえぎごちない。

暗い廊下を通っていくと、奥の間にそこだけあかあかとあかりのともっている座敷がある。その手前の間の障子の前を通るとき、

——ここは伏勢がいるな。

と、東吾はそれをびんとはだに感じた。

「親分、おつれ申しやした」

「うむ」

中の返事を待って、手燭の男はさらりと障子をあけ、自分はわきへ身をひく。

「さあ、おはいんなさい。ここはおまえさんがたの寮なんだから、遠慮することはない」

十畳の間の床柱を背にしてすわっている四十五、六の、小太りに太った、一見大店のだんなとも見える柔和な顔の男が、気軽に声をかけてきた。

——これが天草屋市蔵だな。

東吾がそう直感したのは、その左右にすわっているのが、意外にもひとりは小田原で呼び出しをかけてきたやくざだぬき、もうひとりは今夜は頭巾こそかぶっていないが、本陣で桜井浪右衛門と名のったあの宗十郎頭巾の浪人者にちがいないからだ。

「失礼いたします」

卯兵衛がまずはいってすわり、お美乃がそのかげへかくれるようにすわろうとする。

「おかみさん、そんなにこわがることはない。ずっとお進みなさい。ほかの場所じゃ気味が悪かろうと思って、わざわざお宅の寮を選んだんだから、気を楽に持ってもらわなくちゃ、なんにもなりやせんや」

天草屋はゆったりと構えて、ひどく如才がない。

「はい」

お美乃がおずおずと少しひざをすすめる。そ

のお美乃を中にして、東吾も静かに座についた。

「今夜はとんだご足労をかけましたが、わしは天草屋市蔵です。見知りおいてください」

「てまえは和泉屋の番頭卯兵衛、おさしずのとおり、おかみさんのお供をしてまいりました」

「おことばだが、大番頭さん、だんなが手紙でいってやったのとは、ちょっと違うようだね」

天草屋がにやりとしながら切り出す。

8

「主人の手紙には、ふたりきりでとございましたが、若いおかみさんとふたりきりで寮などへまいっては、あとで世間の口がどうかと存じましてな」

卯兵衛は年だけに、ものなれた態度だった。

「いっしょに来てしまったものをいまさら文句をいってもしようがないが、今夜は和泉屋さんとおまえさんがた三人、顔の合ったところで話がつけたかった。他人がはいったのでは、おたがいが本音を出しにくい。むだだと思って、和泉屋さんはつれてこなかった。いずれ四、五日うちに、また場所をきめるとしよう」

天草屋はおだやかな口ぶりのなかにも、じゅうぶんすごみをきかせている。今夜東吾がいっしょに来ることはまえからわかっていた、だから、和泉屋をつれてこなかったというのがそれで、おまえたちのやっていることは、いちいち見とおしだぞといっているのだ。

「恐れ入ります。主人は病気などもせずにおりましょうか」

「多少気はたかぶっているようだが、元気でいる。こっちにとってもたいせつな預かり人だから、けっしてそまつにゃしていない。それだけは安心してもらいましょう」

「ありがとうございます。どうしてこういうことになりましたものか、お聞かせは願えませんでございましょうか」

卯兵衛が一歩突っこんでいく。

「そうだな、他人には聞かせないほうが、和泉屋さんのためだと思うんだが、たってここで聞きたいというのなら、こっちは話してあげてもかまわないんだ」

切れ長な天草屋の細い目が、きらっと冷たく光る。その目はまだ一度も東吾のほうは見ていない。用心棒など頭から無視しているという豪胆さをてらっているのだろう。

「おかみさん、うかがっておいたほうがいいと思いますが」

大番頭はいちおう女主人を立てる。

「はい」

お美乃はうつむいたまま、わずかにうなずいた。

「おかみさんにはきのどくだね」

天草屋はお美乃を見て、ちらっと同情の色を見せてから、

「じゃ、ひととおり話しておこう。そのほうがあとの話がわかりよく、つごうがいいかもしれない」

と、むぞうさに切り出した。

「和泉屋さんは商売のことで、大奥の役づきのお女中にひっかかりをつけたがっていた。なにか手づるはないかと、相談をうけたんで、本丸の表使いのお中老、浪島さんなら知っているというと、それにあわせてくれぬかといいなさる。ちょうど浪島さまが芝増上寺の年納めの代参に立つことになったんで、去年の暮れ、わしが境町の師走のしばいへそっと誘いをかけてみたんだ」

9

「大奥の女中が乗り物だけを寺へやっておいて、自分はしばい見物にうつつをぬかしているなどは、江島生島以来いくらやかましく取り締まったって、なかなかやまるもんじゃない。裏にゃちゃんと仕かけの抜け穴ができているんだ

からね」

天草屋はにやりとわらって、そういう裏の世界はおれの天下だといいたげなずぶとい顔をする。

この寮には庭に泉水があるらしく、びしゃっとこいのはねるような水音がして、すぐに消えた。そんな水音にさえ、桜井用心棒とたぬきやくざの目がゆだんなくちかりと光る。

裏街道を歩いている悪党の悲哀だと、東吾はひそかにけいべつしていた。

「その日、和泉屋さんはしばい茶屋で、お中老浪島さまとはじめて出あったんだ、おれの手びきでね。しかし、どんな商談があったか、ふたりきりの一幕だから、そこまではおれも知らない。が、あとで聞くと、おかみさんの前だが、和泉屋さんはあのとおり役者のような男っぷりだ。いや、いつも大仕事をもくろんでいるくらいの度胸と才覚のある人だから、役者など足もとにも及ばない男っぽさがある。ふだん男禁制の女護ガ島にいるお中老さまのほうが、たぶんもやもやとなってしまったんだろう。お役をつとめるくらいで、ずいぶん男まさりじゃあるが、二十三という年までまるっきり男を知らずにいたんだから、無理はない。どうやら、帯まで解くぬれ場があったようだ」

さばさばといってのけながら、天草屋の目はそれとなくお美乃の様子をさぐっている。

「浪島さまのしばい見物は、正月にもあった。今月も無理をしてしばい茶屋へおしのびになっている。一度男の味を知った女はそんなものだが、今月無理をしたのには、ほかにもわけがあった。浪島さまは懐妊したようだというんだ」

「主人のたねでございますか」

卯兵衛が思わず念を押す。

「そうだろうねえ。和泉屋さんにはじめて女にしてもらったというんだから、ほかのたねがはいるはずはないやね。相手は女郎や芸者とは違うんだ」

天草屋はむっとしたようである。

「ごもっともで――」

「これが表ざたになると、浪島さまも和泉屋さんもただではすまない。天草屋、どうしましょうと、そもそもふたりの仲に立ったのがおれなんで、相談をうけた。浪島さまはお城をさがって、子までなした仲だから、ぜひ和泉屋さんと夫婦にしてくれという。和泉屋さんは家内があるから、まさかそれを離縁してまでというわけにはいかないという。だいいち、浪島さまの親もとは三百石取りのお旗本だから、町人とは縁組みができない」

10

――そろそろ悪党の本音が出るぞ。

と、東吾は黙って耳を澄ましていた。

「いちばんやっかいなのは、夫婦になるの、しないのの話ではなく、まずその親もとを納得させることなんだ」

天草屋はもっともらしく切り出す。

「そこで、おれは和泉屋さんに、とにかく十万両お出しなさい、なんとかそれで親もとを説きおとしてみようというと、和泉屋さんは十万両は法外すぎる、五千両で話はつかぬかと、さすがに商人だ、そろばんが高い。――冗談いっちゃいけない、これは商いの取り引きとは違うんだ、当人の前じゃいえないが、いってみりゃ将軍さまのほかに手はつけられない高嶺の花と、人にはできないいい夢を見たんだと思や、十万両は安いもんだ。まかりまちがってこれが表ざたにでもなりゃ、浪島さまもお役のてまえ死罪、和泉屋は欠所のうえ、身は遠島をまぬがれない。十万両の損か百万両の損か、どっちを取りなさるというわけで、その話がつくまでは、おれのほうにも仲に立った責任てやつがあるんで、当分和泉屋さんのからだをあずかっているというわけなんだ」

「お中老さまは、どうしているのでございまし

ょう」

「浪島さんはお役があるから、まだお城にあがっている。しかし、そろそろつわりの月にはいるので、一日も早くお暇を願いたいと、ひどく気をもんでいるようだ」

「ごもっともでございます」

「どうだ、大番頭さん、おまえさんの考えでも、十万両は高いかね」

一本さぐりを入れてみるといった顔つきの天草屋である。

「はい。一存にはまいりませんが、高い安いではなく、主人の身にはかえられないと存じます。なにぶん、主人にあってみませんことには」

卯兵衛は当たらずさわらずに逃げる。

「そうだろうな。こっちも急いでいるんで、いずれ場所は知らせるが、外へもれると十万両ではおっつかなくなる。そのつもりで、なるべくよけいな人間の耳には入れないほうがりこうというものだ」

「念のために、ひとことだけうかがっておきますが、万一、十万両出した節は、おかみさんは離縁にならずにすむのでございましょうな」

「さあ、それはおかみさんが、こんどだんなにあったとき、ゆっくり相談してみることだね」

天草屋はただ冷淡に突っ放しておいて、

「用心棒さん、おれになにかいいたいことがあるかね」

と、はじめて東吾のほうを向いた。

「そのお中老浪島さまの親もとというのはどなたか、聞いておきたいな」

東吾はなにくわぬ顔をして、おだやかに挑戦していく。

11

「その親もとを聞き出して、おまえさんどうしようというのだね」

天草屋は貫禄が違うというように、うすらわらいをうかべている。

「貴公たちの世界と、われわれの世界とではだいぶ違うようだから、直接こっちから話をつけてみてもいいと思ってね」

東吾は平気でいってのける。

「用心棒さんも五千両に値切りたいほうか」

「いや、話さえよくわかれば、わしは十万両出してもいいと思う。ただ、なるべく裏街道を通りたくないんだ。いろいろ弊害がおこるんでね」

「おまえさんはまだ若いからそんなことをいいたがるんだが、表街道に裏街道はつきものさ。人間の手にも表裏があるようなもので、こいつはどうしたって切り離すことはできない」

天草屋はあくまで貫禄を見せながら、

「まあ、若いうちだから、なんでもやってみるがいいが、松浦の娘千鳥だけは、早く屋敷へ帰してやったほうが当人のためだぜ。そうでないと、千鳥は松浦の籍をぬかれてしまうからな」

と、さとすようにいう。

「松浦どのを切ったのは、親分のさしがねだという向きもあるが、ほんとうなのかね」

東吾はわらいながら、ずばりと逆襲する。

桜井用心棒とたぬきやくざが両方から、とっさに天草屋の顔色をうかがったのは、切れという合い図を期待してのことだったろう。

「おまえさん、ずいぶん思いきった口をきくねえ」

天草屋はびくともしないつら魂で、

「ついでだからはっきりいっておくが、おれは松浦さんに恩は売ってあるが、恨みをうけるおぼえはない。正直なところ、松浦さんのるすにのち添えさんに手を出したが、それだって男どうしがあって話せば、それで話のつくことだ。おれはべつに松浦さんをどうしようとは少しも考えちゃいなかったが、身内の中に気の早いのがいて、松浦さんのほうでおれをねらっていると、勘ぐったやつがいる。また、そんなけはい

が松浦さんのまわりにないでもなかった。それがまあ、あんなことになってしまったんで、できたことはしようがないから、あとをなるべくうまくまとめようと思ってほねをおっているんだ。わかったかね」

と、ずぶといことをいう。

「つまり、さしずはしないが、責任は持つというわけだな」

「若僧、いいかげんにしねえか。てめえはでしゃばりでいけねえ」

たぬきやくざが、たまりかねてかみついてきた。

「あんまりいい気になっていやがると、ただはおかねえぞ」

「吉松、まあやめろ」

天草屋が軽く目で押える。

12

「用心棒さん、そろそろうちの連中がつむじを曲げだしたようだから、今夜はもう穏便に引き取ったほうが、りこうというもんだな」

天草屋は言外にじゅうぶんすごみをきかせていう。

「そうか。では、そうしよう」

そんな脅迫などには乗らないよといいたげに、にっと東吾はわらってみせながら、

「大番頭さん、出かけよう」

と、卯兵衛をうながした。

「はい。――親分、それでは主人の儀は、なにぶんよろしくおたのみいたします」

「うむ、そんな心配はいらない、そっちが変なまねをしさえしなければな」

天草屋は鷹揚にうなずいて、

「おかみさん、ご亭主にあえなくてきのどくだったね。そのうちに、きっとあわせてあげるよ」

と、お美乃にはひどくやさしい。

「お願いいたします」

お美乃は口の中でやっと答えていた。

「おい、若僧、てめえの心がけしだいで、今夜かぎりおれたちとは敵味方だから、よく考えておくんだな」

たぬきやくざの吉松が毒づいてきた。

「わしは鈴ガ森以来、おなじ道を歩いている」

「よし、それがてめえの返事だな」

「貴公には小田原でもよく話しておいたはずだ。無鳥里の蝙蝠にならんように気をつけたまえ」

東吾はもう一度、にっと白い歯を見せてから、さっさと廊下へ出た。その廊下のはずれに、さっきの男が手燭を持って待っていた。

「親分、どうしやす」

三人の足音が遠ざかるのを聞きながら、吉松が目を光らせてきいた。

「今夜はほっておけ」

「そうですかねえ」

「十万両の雌をおどかすと、あとの仕事がしにくくなる。なあに、災難というやつは、いつどこで起こるかわからない。だれを恨みようもないしな。おまえさんたちは、わざと世間を騒がしたがるからいけねえ」

天草屋はちょっと苦い顔をしてみせる。

「たしかにそうだ。あの若僧には三度失敗しているからな」

桜井用心棒が苦わらいをした。

「ねらったら失敗しちゃいけねえ。失敗しねえように、じゅうぶんねらうんだ。失敗しそうなときは手びかえる。しかし、あの若僧め、いい度胸だ。人をこうもりにたとえやがった」

「若いうちはむてっぽうだからな。ほっておくとなにをやりだすかわからん。こんどこそうまく災難をこしらえてみよう」

「あの十万両の雌は、なかなかいい女だったな」

桜井のことばはわざと聞き流して、天草屋はにやりとずるいわらい方をする。

春雷

1

翌日、東吾は西丸下の大久保家の官邸へ、無事に江戸へ着いたあいさつかたがた、中津川主膳をたずねてみることにした。

昨夜天草屋は、大奥の中老浪島の親もとの名は、他のことにまぎらせて、ついに明かしていない。大番頭卯兵衛は和泉屋へもどるなり、「早水さま、あのお中老さまの話は、ほんとうでございましょうかなあ」

と、暗い顔をしながら、まずそれを疑わしそうに口にしていた。

「ご主人が去年の暮れと、この正月と、今月と、しばい見物に出かけているのは、事実だろうか」

「それはたしかにまいりました。今月は七日に出かけまして、それっきりもどらないということになるんです」

「すると、しばいへ行くには行ったが、相手のお中老さまが怪しいと、大番頭さんは見るんだね」

「はい。こればかりは大奥のことで、直接行ってそのお中老さまに会ってみるというわけにはいきませんのでな」

「なるほど、その浪島というお中老に直接会って聞くのがいちばん早いわけだな」

「だいいち、そんなお中老さまが大奥にいるかどうかも、疑えば疑えます」

「そうか。では、まずそれから調べてみよう。大久保家の中津川さんにあえば、なにかいい手づるがあるかもしれぬ」

東吾の心はそのときまったのだった。

「そうしていただければ、いちばんよろしいにはよろしいのですが、どうしても事件が表へ出る、主人の身はだいじょうぶでしょうか」

卯兵衛はそれがまた心配になってくるようだ。

「それを心配していたのでは、手も足も出ない。たとえば、お中老さまの真相がどうであろうと、ご主人はすでに天草屋へ人質にとられている。天草屋の要求どおり、十万両出さなければ家へ帰れない。真相などどっちでもいいということになりはせんかね」

「なるほど――」

そういわれれば、話はよくわかる大番頭なんだが、主人の命がかかっているだけに、迷わずにはいられないのだろう。

「わしにいわせれば、今夜天草屋がわれわれを無事に帰したのも、けっきょくは十万両ほしいからだ。どうしてもその十万両が出ないとなれば、どんなまねをするかわからないが、出る望みがある間は、けっして人質は殺さない。それをこっち側からいえば、その十万両を出さないで、ご主人を無事に取りもどすには、ひそかに天草屋の悪事を公儀へあばいて、公儀の力で天草屋を取り押えてもらう以外に手はないと、わしは思う。もう一つは、だれかがふいに天草屋を切って、ご主人を取りもどすという直接手段だが、これはおそらく不可能に近い」

2

東吾はもうひとこと卯兵衛に注意しておきたいことがあったが、お美乃のあまりにも傷心な姿を見ていると、いわずもがなという気もして、昨夜は黙って帰ってきてしまった。

天草屋は四、五日たってから、もう一度お美乃と大番頭をあらためて呼び出そうとしている。しかし、東吾にいわせれば、こっちが十万両出す気にならないうちは、行ってもむだだ。いや、こんど行けばお美乃まで人質にとられて、どんなめにあわされるかわからない。

ということはまた、この四、五日のうちに、こっちはこっちで、なんとかそれを防ぐ手段

を講じなければならない、ということにもなるのだ。

「とにかく、天草屋というやつは下司で、陰険で、ずるくて、実にいやみな男だ。どうしてあんな男に子分がみんな心服しているのか、わしにはわからぬ」

そば屋の二階へもどって、心配してまだ起きて待っていた三人にひととおり根岸の話をつげてから、東吾が拾吉にそういうと、

「そこなんでさ、だんな。天草屋はほかの者にはまったく鼻持ちのならない、いやらしい悪党だが、身内の者、つまり自分の味方には惜しまず金をまいて、よくめんどうをみる、そこがとりえなんでしょうねえ。だから、いくら金があっても足りないんだが、それにしても十万両とは吹っかけやしたねえ」

と、さすがに拾吉も目を丸くしていた。

「東吾さんも、今夜はとうとう天草屋と正面からぶつかってしまったのね。だいじょうぶかしら」

お袖がいまさらのようにためいきをつく。

「いや、だいじょうぶではないな。今夜はそんなわけで無事に帰してよこしたが、和泉屋の問題にしても、千鳥さんのことにしても、敵としてはわしがいちばんじゃまになる。あすからは手を変え品をかえ、ずいぶん風当たりが強くなるだろう」

東吾はわらいながら答えた。

「ごめんなさい、東吾さん」

「なあに、へたな細工をすればするだけ、敵はぼろを出すことになるんだ。わしにとっては、これも天へはしごをかける一つの試練だからね」

そういう東吾の顔を、千鳥はちらっと見上げただけで、そのときもけっして話の仲間入りはしようとしなかった。

――ふしぎな娘だ。無口になればなるほど、この娘は美しくなってくる。

ふっと東吾はそんな気がしたが、それはそれなりで、べつに深くも考えてみたわけではない。

翌日、東吾は朝飯がすむとすぐ、弥之助の家を出た。永代橋をわたりながら、それとなく気をつけてみると、はたして若い手代ふうのやつが尾行しているようである。

3

敵の目が相当うるさく身辺に光りだすだろうとは承知のうえの東吾だから、知らんふりをして北新堀町から茅場町へ出る。

少し風はあるが、きょうもいい天気だった。

東吾がこうして江戸の町を歩くのは七年ぶりである。さすがににぎやかなものだなと感心しながら、数寄屋橋から日比谷御門をはいり、内ぼりにそって西丸下へ出てきたのは、やがて四つ（十時）すぎごろであった。

大久保老中の官邸は、役目がら人の出入りが多い。各藩の留守居役が、別段用はなくてもごきげんうかがいと称して、毎日顔を出すからで、その応対にあたるのが公用人の仕事だった。

――中津川さんあってくれるかな。

ここまで来て、東吾はちょっとそんな不安を感じたが、内玄関へかかって取り次ぎの者に、来意を告げると、まもなく引きかえしてきて、

「お目にかかるそうです」

と、案外簡単に、やや奥まった小座敷へ案内してくれた。

そのかわり、火おけが運ばれ、茶が出て、

「ただいまご来客中ですから、しばらくお待ちを願います」

ということで、そのしばらくは小半時（一時間）近くも待たされてしまった。

「やあ、東吾うじ、だいぶ待たせたな」

中津川はいってくるなり、親しげな微笑を見せて、

「あの連中も無事に着いたんだろうね」
と、すぐそれを心配してくれる。
「おかげで、昨日、みんな無事に着きました」
「それは祝着、千鳥どのけどこへ身を寄せられたろう」
「それについて、ご報告かたがたご意見をうかがいたくあがったのですが、しばらくかまいませんか」
「うかがいましょう。千鳥どののことは、拙者にも一部の責任があるのだから、実は心配していたところです」
その場の辞儀にもせよ、中津川がそういってくれると、東吾も話がしよかった。そこで、千鳥がひとまず深川のお袖の家へ身を寄せたことから、和泉屋の事件をひととおりのべ、それとは別に、小川町の屋敷へもどりたいという千鳥の決心を、あらまし中津川の耳に入れてみた。
「すると、東吾さんは昨夜、天草屋市蔵に直接あったわけだな」
「あいました」
「天草屋は化け物とおなじで、めったに人に顔を見せたことがないそうだが、その意味では東吾さんは拝顔の光栄に浴したわけだ。しかも、四、五日うちにもう一度あう機会を持っている」
「たぶん、そうなるだろうと思います。実は、それまでに、いま申し上げた中老浪島という人物が、はたして大奥に実存するかどうかを、こちらの手でいちおうお調べ願いたいと思うのですが」

4

「なるほど、お中老さまが身重になっているとすると、捨ててもおけないことになる。よろしい、なんとか手をまわしてみよう」
中津川はあっさり承諾して、
「しかし、東吾さん、松浦家の事件といい、こんどの和泉屋の問題といい、それだけでも化け物のやっていることはすでに死罪に値する。証拠をにぎるとか、探るとかいう段階ではないと思うが」
と、なぞめいたことをいう。
「すると、公儀ではもう天草屋を召しとることに方針がきまったのですか」
「公儀でなくとも、ああいう化け物はだれがつかまえても、あるいは手にあまって切っても、世の中のためということになります。ただ困るのは、こっちがそう思っても、化け物は念入りに姿をくらましている。うっかり騒ぎだてると、化け物のほうから必ず逆襲してくる。まったく始末におえないしろものです」
「もし、その機会があったら、わしが切ってもかまいませんか」
東吾は念のためきいてみた。
「かまわぬでしょう。しかし、東吾さんがその気なら、いいご仁を紹介しよう。そのほうが仕事がしやすい」
「どなたです」
「お目付役跡部良輔どのです。このご仁は、西の丸老中水野越前守さまのご舎弟でしてな、お目付役の息がかかっていれば、あとの心配がない」
あっと東吾はひそかに目をみはった。忠邦の弟なら、自分には叔父にあたる。
「中津川どの、よろしければぜひ跡部さまにお引きあわせ願います」
「よろしい。それでは、跡部家の用人永井周平という人に手紙を書きましょう。屋敷は六番町だが、こんなことが化け物のほうへ知れると、たちまち用心されてしまうから、たずねるときはじゅうぶん気をつけなければいけません」
「承知しました」
東吾はまもなく、跡部家への紹介状を書いてもらって、大久保老中の官邸を辞した。
「あせってはいけませんぞ。くれぐれも敵にけどられないように注意して、うまく機会をつか

むことです」

中津川は別れぎわにも、重ねてそう念を押していた。が、千鳥のことについては、小川町の屋敷へもどったがいいとも悪いとも、一言も意見はのべていない。

うっかりしているのではなくて、化け物を退治するためになら、それもまたしようがないではないかといっているように、東吾には思える。

官邸の門を出てから、それとなく気をつけてみると、あいかわらず尾行らしいやつがついている。まずこれをまかなくては、六番町へは近づけない。

5

東吾は大名小路をゆっくり神田橋のほうへ歩いていた。

中津川が目付役跡部良輔にあえといったのは、むろん大久保老中から跡部に、なにか化け物退治の内意が下っていると見ていい。

自分がうっかりこのまま天草屋の尾行をつけて、六番町の跡部の屋敷をたずねることは、わざわざそういう事実を敵に知らせるような結果になる。

――あすでも出直したほうがいいかもしれんな。

大事をとるなら、そうするほうがいいのだが、また考えようによっては、今夜のうちに事態がどうかわらないともかぎらない。できるだけ早く、跡部に連絡をつけておいたほうがいいようにも思える。

一つには、思いがけないことから父の実弟に近づく道がひらけたのだ。もちろん、今が今わが身の上を名のる心は毛頭ないが、そこは人情で、東吾は今すぐにも叔父にあってみたい気がしきりにする。

――ここでは叔父と一つ仕事をして、自分なりの力がみとめてもらえれば、天にかけたはしごを一段のぼることになるのだ。

若い東吾の胸は希望にあふれてくる。

しかし、その叔父跡部良輔には、絶対に小田原での松浦の二の舞をさせてはならないのだ。

「卒爾ながら、そこへ行くご仁――」

やがて和田倉御門の前あたりへきたとき、ふっと、うしろから呼ぶ者がある。このあたりは大名屋敷へ用のある者のほかは、そう人の往来の多いところではないから、

「拙者ですか」

東吾が振りかえってみると、年ごろ三十四、五の、羽織はかまのりっぱな侍が、心やすそうに微笑しながら、すっと肩をならべてきた。

「早水東吾さんですな」

「そうです」

「歩きながら話しましょう。あなたはだれかにあとをつけられている。知っていられるかな」

「知っております」

いまうしろを振りかえったついでに、東吾は尾行の男がなんとなくほりばたの柳のかげへ立って、ほりのかもをながめているのを、目はしにかけている。

それにしても、いきなりそんなことまでなれなれしく話しかけてきたこの男は何者なのだろう。

「失礼ですが、拙者はあなたにはじめてお目にかかるような気がするが」

「そうです。きょうが初対面です。しかし、これからはいろいろご協力を願わなければならんでしょう」

その男はまだ名のろうとはせず、意味ありげに微笑している。

6

「あなたは、拙者の名をご存じでしたな」

東吾はふっと頭にひらめくものがあった。

「さよう、早水東吾さんと承知しています」

「拙者にもひもがついていることもご存じのようだ」
「知っています」
「中津川どのに関係のあるかたですか」
それ以外に思いあたる節がない。いや、それ以外の者だとすれば、天草屋の息のかかった者ということになる。
「当たりました。拙者は目付役跡部家の用人永井周平です。実は、主人の名代で、化け物退治の儀につき、いろいろ中津川どのにご指示を仰ぎに出たのですが、あなたに協力を願ったほうが、案外早く道がつくのではないかとうかがっているところへ、ちょうどあなたがあいさつにまいられたということでしてな」
そう聞いてみれば、なるほどと東吾にもすぐうなずけることだが、
「奇遇ですなあ。しかし、それならどうして、中津川さんは屋敷であなたに引きあわせてくれなかったんでしょう」
と、ちょっと不審がおこる。
「いや、いっしょに屋敷を出るのはあぶない。あなたには化け物のひもがついているかもしれないという意見でした。それに、人が悪いようだが、少しびっくりさせてごらんなさいと、知恵をつけられました」
つまり、人物をためされたことにもなるらしい。
「なるほど、中津川さんのやりそうなことですな」
「気を悪くしてはいけません。政治家というものは、とかく策の多いものです」
「それでは、あなたは中津川さんから、拙者のことはだいたい聞いているわけですね」
「だいたいうかがっています。これからすぐに主人のところへおつれするといいのですが、ひもがついていてはまずい。ここはひとまず神田橋であっさり別れることにして、今夜六つまでに柳橋の亀清へご足労願えますか。必ず主人も出向くよう計らいますが」
さすがに、永井はてきぱきと話を進めていく。
「承知しました。そうしましょう」
「しかし、万一そのまえに化け物が動きだすようなけはいがありましたら、いつでも屋敷へ使いを走らせてください。どのようにも協力を惜しみません」
そして、永井は神田橋へ出ると、自分でいっていたように、あっさり九段のほうへ別れていった。
——これで道はついた。
ここから九段の練兵館はほんのひとまたぎのところだから、ついでに顔を出してこようかとも思ったが、ひもがついているし、なにか千鳥たちのことが気になる。東吾は寄り道はあきらめて、日本橋のほうへ歩きだした。

7

——今となっても、千鳥を屋敷へもどす必要があるだろうか。
東吾はまたしてもふっと、そんな疑問がわいてきた。
天草屋の罪状は、公儀ですでにみとめている。小田原で千鳥の父を暗殺したのは桜井浪右衛門で、討たせたのは天草屋市蔵だとは、昨夜根岸の寮で天草屋が自分の口から白状したのもおなじことだ。
いまさら千鳥が屋敷へ帰って、なにを探り出そうというのか。たってその必要があるとすれば、天草屋はいまだにのち添え萩江のもとにしばしば忍んできているにちがいない。容易にその所在を人に知らせぬ天草屋だから、その忍んできたところを千鳥に連絡させる、その役にたつぐらいのものだ。
ただそれだけの用のために、まかりまちがえ

ば綱次郎のえじきにされてしまう危険な屋敷へ千鳥をもどす、東吾としてはどうしても賛成しかねるのだ。

——もう一度よく話してみよう。そうあせらなくても、天草屋の運命はすでにきまっているのだ。

しかし、拾吉がなんというか、きのう相談がきまっていることだけに、その出ようがちょっと気になる。

いずれにしても、綱次郎が小田原から江戸へ帰るのは、早ければ今夜、おそくてもあすだから、きょうのうちにぜひ相談をまとめておかなくてはならない。

そんなことを考えながら、やがて永代橋近くまでもどってくると、急になまあたたかい風が吹きだして、東の空からまっくろな雲がぐんぐん江戸の空へひろがりだした。

「一雨来るな」

なんとなく町じゅうがあわただしくなりだして、いそぎ足に永代橋をわたるころには、ぬぐうように日ざしが消え、橋も水もたちまちたそがれのように暗くなってきた。

まだ雨は落ちてこないが、往来の人足はみんな小走りになっている。

橋の上を、行く手から、小さなつむじ風がほこりをまいて走ってくる。

東吾は思わず顔をそむけながら、ふっと背後に異様な殺気を感じ、とっさに身をひねった。

「野郎ッ」

その目の前へ、わずかに空を突いた匕首がきらっと流れ、

「うぬっ」

はっしとそのきき腕へ手刀を打ちこんだが、くせ者はものともせず、だっと東吾の右側をすりぬけて、脱兎のごとくつむじ風の中へ飛びこみ、そのまま橋をわたりきっていく。

——すばやいやつだ。

たしかに、けさから尾行していたやつの後ろ姿を目にとめながら、東吾は冷やりとせずにはいられない。

8

それは機会をうまくつかんだほんの一瞬の殺人行為で、おそらく近くを歩いていた者さえ、目の前でそんな物騒なことがあったと気のついた者はほとんどなかったろう。

橋の上の往来は、暗澹たる雨雲に追われて、みんな前かがみにせかせかと気ぜわしい。

——そうか。天草屋一味の尾行は、ただの尾行ではなく、みんな刺客と見るべきだった。

けががなかったからいいようなものの、そこまで考え及ばなかったのは、やっぱりこっちの不覚である。

東吾は苦笑しながら橋をわたりきって、やっとそば屋の店へ飛びこむと、それを待ちかねてでもいたように、ざあっと激しい雨がいちどに軒を打ってきた。

店は気の早い雨宿り客で、珍しくたてこんでいる。

「おや、お帰んなさい。ぬれやせんでしたか」

釜場へはいっていくと、釜場で働いていた若い衆が、雨の音に負けない声で迎えてくれた。

「いや、うまくここへたどりついたんで、ぬれずにすんだ。——親方は出かけたのかね」

弥之助の姿が見えないので、きいてみると、

「番屋からいましがた、使いがきやしてね」

と、これだけは声をひそめる。この若い衆も、実は岡っ引き志願だという。

「いそがしくてたいへんだな」

東吾はねぎらうようにいいながら、二階へあがった。

「お帰りなさいませ」

千鳥が出迎えて、三つ指をつく。へやの中は西の窓の雨戸をしめたので薄暗く、ここは階下より雨風の音がものものしい。

「ただいま帰りました」

東吾は帯刀を取って床の間へおいてきて、
「拾吉うじが見えないようだが」
と、火のない小火ばちの前へすわりながらきいた。
「あの、なんですか、小川町の様子を見てくると申しまして、さきほどお出かけになりました」
「小川町へねえ。——お袖さんも階下にいなかったようだな」
「おねえさまは、和泉屋さんでございます」
すると、この二階はしばらくふたりきりということになる。千鳥の本心を聞きただすには、いい機会だと東吾は思った。
「拾吉うじは、どこでこの雨にあたっているかな」
東吾は自分の前で、妙にからだをかたくしている千鳥の気持ちからほぐしてやろうと、まずそんなことを話しかけてみる。
千鳥はじっと目を伏せたまま、話に乗ってこようとしない。絶えず重い胸が晴れぬらしく、ひそかにためいきさえついているようだ。

9

「千鳥さん、あんたが屋敷へ帰るの、わしはどうも賛成しかねるんだがなあ」
東吾は軽く切り出した。
千鳥はじっとうなだれたままである。いまさらそんなことをといいたげな、意地の強い姿に見える。
——これだから、お袖が反感を持ちたくなるんだな。と、東吾は思わず見すえながら、
「昨夜も話したが、ご尊父を討ったのは桜井浪右衛門という用心棒だ。討たせたのは天草屋だ。天草屋はいまだにのち添えのところへ通ってくるだろうから、屋敷へもどれば、むろん天草屋を討つ機会はつかめる。しかし、千鳥さんは女だ。天草屋を討つまえに、きっと綱次郎という男から、身がまもりきれなくなる」
と、こっちも多少意地になって、それを断定してかかりたくなる。
「では、早水さまは、早水さまは親のかたきを黙って見ていろとおっしゃるんですか」
千鳥はちらっと挑戦するような目をあげる。
「いや、黙って見ていやしない。あんたはすでに天草屋と戦っているから、こうして屋敷を出てきているんじゃないか。あんたが自分の身を破滅させてまで天草屋を討たなくても、天草屋はもう公儀から召しとり状が出ている人間と見ていいんだ。いいかえれば、天草屋はあんたひとりのかたきじゃない。ほかにもかたきを討ちたい人はたくさんいる。それを代表して公儀がかたきを討ってくれるんだから、なにも自分から手を下さなくてもいいと思う」
「それで、それで子としてのつとめがすむでしょうか」
「すみます。あんたは女だ、身をほろぼしてまで、孝子節婦の名を求める必要はない」
「あたくし、自分のからだなど、どうなってもかまわないんです」
千鳥がそんな捨てばちなことをいいだす。
「ほんとうか。千鳥さん、あんたはそんな気持ちでいるのか」
「親を討たれた子のくやしい気持ちなど、早水さまにはわからないんです」
「そうか」
それならかってにするがいいと、口まで出かかったのを東吾はさすがにぐっとのみこむ。激しい怒りが胸いっぱいにこみあげてきそうになって、ふっと、おれはなぜ千鳥のからだのことばかり気にするんだろうと、苦々しい反省がきた。
——千鳥がその気なら、もうしようがないじゃないか。
と、目の前のみずみずしい娘の姿がのろわしくさえなってくる。
雨は今が峠らしく、樋をあふれて滝なす水がどうどうと耳につき、へやの中は薄墨を流した

ように暗かった。

10

東吾の胸から、怒りは容易に消えなかった。命にかけて守ってきた千鳥が、自分から求めて陰惨な運命の淵へ身を投げ出そうとする。どうにも納得できないのだ。

かたきの片割れに貞操をじゅうりんされてまで、娘がかたき討ちの美名を求める、東吾はなんとしても不服なのだ。

が、千鳥はもう冷静にかえったらしく、自分は自分というように、ひざの上で白々しくたもとを折っている。憎い姿だが、風雨にとざされた暗澹たるへやの中で、幽暗に咲いた白ゆり、そんな感じさえ持っている美しい千鳥だ。

——しょせんは旅の道づれにすぎない娘。

東吾もようやく興奮からさめかけてきた。

「よく降るなあ」

「なにかおいいになりまして——？」

千鳥が放心したような目を向ける。

突然、紫色の火柱がへやじゅうをつつんだと見る間に、脳天から腹の底まで突きぬけるようなすさまじい雷鳴が、ばりばりっと頭の上で炸裂し、

「こわいっ」

はじかれたように千鳥がひしとすがりついてくる間に、ごうっと家鳴り震動させて去る。

東吾はその千鳥のからだをしっかりと胸の中へ受けとめて、愕然としながら、次の雷鳴を待ちうけていた。荒れ狂う豪雨の底の秒分がすぎていく。

第二の雷鳴はまだ起こらない。

東吾は甘い熟れたような千鳥のはだの香を感じてきた。気がついてみると、重心を失って持ち重りのする女体を、力いっぱい胸の中へ抱きしめているのである。右から斜めになった姿勢で、軽く両手を首へまきつけている柔軟な女体は、もう全身から力をぬいて、左の肩にある顔がせつなげにあえいでいた。

千鳥のからだを抱いていると意識したとたん、東吾はじっとりと汗ばんできたが、両腕の力はぬかなかった。女体が火のように燃えているのをはだに感じて、

「雷はもう鳴らないよ。春雷というやつだったんだ」

と、口ではさりげなくいう男だ。

「東吾さま」

ふいに千鳥がしがみつくようにほおを押しあててきた。

「あたくし、あたくしは悪い娘」

「なぜだ、千鳥さん」

「おとうさまがあんなめにあっているのに、どうしても、どうしても東吾さまが忘れられないなんて」

東吾は返事のかわりに、荒々しくほおを放して、千鳥のくちびるへいきなりくちびるを重ねていった。

——そうか。おれは千鳥が失いたくないから、さっきあんなに腹がたったんだ。

やっとそれを自覚して、今は歓喜に全身の血が燃えてくる東吾だった。

11

雷鳴はついに一つで終わり、雨あしは急におとろえていった。へやの中がうそのように、たちまち明るくなってくる。

息苦しくなって、そっとくちびるをはなした東吾は、その明るさの中で軽く目を閉じ、桜色に上気した花のような千鳥の顔を、すぐ目の下に美しく見つめた。長いまつげがかわいかった。

まだしっかりと抱きしめている千鳥の厚い胸が、せつなげにあえいでいる。

——わしは誤りをおかしたのだろうか。

ふっと軽い反省がきた。しかし、満ちたりたようにぐったりとからだをあずけて、目をあこ

うともしない千鳥の、たった今わがものにしたぬれぬれと赤いくちびるを見ると、またしても激しい愛情に胸がふくらんできて、そんな反省などはうたかたのごとく消えてしまった。

「千鳥――」

静かに呼んでみる。その名さえ自分のもののような気がする。

「千鳥――」

「はい」

やっと答えて目をあけた千鳥は、そこにあまりにもちかぢかと東吾の目を見て、いそいでまたつむりながら、紅をはいたようにほおを赤くした。

そのほおにほおをふれてみると、火のようにほてっている。

――いつまでも放したくない。

そう思う心が、さすがに人に見られてはという気がねにせきたてられてきて、

「さあ、すわって話そう」

東吾は思いきって千鳥のからだをもとへ押しやった。

千鳥はすぐ髪を気にしながら、急にはこっちの顔が見られないようである。

「わしはなんだか、世の中が変わってしまったような気がする」

東吾は正直にいった。

「長い間、わしはたったひとりだった。きょうからはそうじゃない。千鳥さんがいる」

「あたくしも――」

千鳥はそれだけいって、まだ顔をあげようとしない。容易に上気した色がおさまらないらしい。

「誤りをおかした、そんなことは考えちゃいないだろうね」

千鳥ははっきりとうなずいてみせた。

「それならいい。雨戸をあけておこうか。もう雨はあがったようだ」

「はい」

千鳥はすなおに立ち上がって、西の窓の雨戸をあけはじめた。さっと明るい日ざしが流れこんでくる。すずめがいきおいよくさえずりだしていた。

しばらく窓べに立って、大川のほうへ目を細めていた千鳥が、もとの席へもどってきて、

「あの、あたくしおねえさまに悪い気がして」

と、突然いいだす。

12

「千鳥さん、あんたは小田原以来、みんなが気にするほどふきげんで、陰気な顔ばかりしていた。やっぱり、お袖さんのこと考えていたのか」

東吾は微笑しながら千鳥の顔を見る。

千鳥はこくりとうなずいて、ほおを赤らめながら、

「おねえさまも東吾さまがお好きなのですもの。それに、あたくしはそんなことを考えてはいけない場合ですし、どうしても鬼にならなくてはと、ずいぶん自分の心にいいきかせたんですけれど――」

と、ちょっと当惑したような目を伏せる。

「千鳥――」

東吾はわざと呼び捨てにして、まじめな顔をした。

「はい」

「おまえはさっきのこと、後悔しないといったね」

「そんな、そんなことおっしゃっては、いやでございます」

はっとして、すがるような目をあげる。

「だから、それでいいんだ。一つに結ばれる男と女は、一生にただひとり、それは前世からきめられているものだと思う。わしはあの雷のとき、お袖さんとふたりきりでここにいても、けっして千鳥とのようなまねはしなかった。千鳥だから心を許して、天にも恥じない、地にも恥

じない。まして、人に恥じることなどみじんもない。そのかわり、他日そのときがくれば、わしはきっと千鳥とりっぱな家庭を持ってみせる」

「うれしい、東吾さま」

千鳥の目から涙があふれてきて、いそいでたもとを顔にあてていた。

「つまらないことは、考えるのはよそう。考えなくちゃならないことが、ほかにたくさんありすぎるんだ。わしは、なによりもまず、天草屋の手から、綱次郎の手から、千鳥さんをまもらなくちゃならないんだ」

「あたくし、あたくしもう屋敷へは帰りません」

涙をふいてから、千鳥がしゃっきりと顔をあげる。

「急にこわくなりだしたね」

「あたくし、もう鬼ではないんですもの、こわい」

「そう、千鳥はもう東吾のお嫁さんになったんだものな」

明るい顔を見あわせる東吾と千鳥だった。

階段をだれかあがってくる足音がする。

耳ざとく聞きつけて、千鳥の顔がひとりでに赤くなってくるのを、東吾はやっぱり娘だなあと思いながら、たのしく見た。

「ごめんなすって――」

障子の向こうへ立ったのは弥之助のようである。

13

「早水さん、困ったことになりやした」

まだ羽織姿の弥之助は、座につくなり顔を曇らせながらいった。

「番屋へ呼ばれていたそうだね」

東吾は、自分たちのことだなと、すぐぴんときた。

「へえ、八丁堀の倉橋市之丞さまに呼ばれやしてね」

「倉橋――。おぼえてるかね、大森へはじめてお袖さんたちと泊まった夜、宿改めにきた同心だ」

千鳥の顔を見ていうと、千鳥はこくりとうなずいてみせた。

「こいつはよけいなことですが、天草屋はもと倉橋のだんなの手下だったんでさ」

「なるほど。今は天草屋のいぬをつとめていると見てもいいわけだな」

「おやじは十手をあずかっているてまえ、だんながたのかげ口はきけやせんが、――きょう顔を出すと、そば屋、お袖は無事に帰ってきたかと、いきなりおききなさる。へえと頭を下げると、実はこのあいだの晩大森でこれこれだが、拾吉って子分は娘のむこにする男かって、まじめな顔なんでさ」

弥之助は苦わらいをする。

「大森でも倉橋はそんないやがらせをいっていた」

「そのいやがらせには裏があるんでしてね、聞くところによると、小田原の帰りにお袖と拾吉は千鳥組とけんかをして、ふたりだけひと足先に江戸へはいったっていうことだが、ほんとうかと突っこんでくる。なんだか、そんな話でござんしたと、こっちはあたらずさわらずに返事をしておきやすとね、今もいうとおり松浦千鳥は屋敷から家出娘の届けが出ている。江戸にはどこにもたよる家がないんで、ひょっとするとお袖をたよるかもしれねえ。そのときはすぐ知らせてくれなくっちゃいけねえと、おっしゃるんでさ」

「ここにいることを、もう勘づいてのなぞだな」

「そうなんでしょうねえ。そのあとのせりふがおもしろくありやせん。倉橋さまがいうんだから、気を悪くしないでくださいよ。千鳥にはどうせまだ早水って虫がついているだろう。屋敷

のほうじゃ、その早水を娘をかどわかした下手人として、届け出ているようだ。早水東吾がいっしょだったら、これはすぐ番所へ突き出してくれと、こうなんです」

「まあ」

千鳥ははっとしたように、東吾の顔を見た。

「天草屋め、いろいろな手を考え出すなあ」

娘かどわかしの下手人として、町奉行所へ引っ立てられれば、いやでも取り調べがすむまで入牢させられなければならない。牢舎はこの世の地獄だ。一服盛られてやみに葬られてしまえば、死人に口なしで、それっきりの話なのである。

14

「牢内で一服盛られてはかなわんからな」

東吾は苦笑する。

「おじさま、どうすればよろしいのでございましょう」

千鳥の顔から、さっと血のけがひいていた。

「お嬢さん、おやじは自分が迷惑するからいうんじゃありやせん。なあに、八丁堀がなんといおうと、こんどのことは出るところへ出りゃ、こっちはちゃんと申し開きがたつ。まあ、それがあるから、あっちもいきなりここへ踏んごんではこられないんでさ。しかし、たとえあとではまちがいとわかったにもせよ、お嬢さんはつかまると、いやおうなしに屋敷へ引きわたされる。早水さんはともかくも娘かどわかしの疑いで、お奉行所へ引っ立てられる。今も早水さんがいいなさるとおり、ご牢内には一服盛って、口をふさぐという手もないとはいえやせん。ことに、相手は裏から裏へ、よく網を張っている天草屋ですからね」

「あたくし、こわい。どうしましょう、東吾さま」

「おやじどの、表にいぬが見張ってやしなかったかね」

東吾は弥之助にきいてみた。

「そりゃ見張りはついているでしょう。けど、昼間は手出しはしないでしょうよ。あっちにもひけめがあるから、思わぬじゃまってやつを用心しなくちゃならない。それに、落人は日が暮れてからだと、たかをくくってもいるでしょう。こっちには裏口からぬけて、裏路地づたいに深川屋っていう船宿の台所口へ行く抜け道があるにゃありやす」

「そうか。すまんが、とにかくその深川屋まで送りこんでくれぬか。あとは船で落ちよう」

「それがいちばんだと、あっしも腹をきめていたんですが、かくれ家の心あたりはござんすか」

「うむ、それはある」

「じゃ、せきたてるようだが、すぐにおしたくをなさいまし。おやじは念のために、ちょっと路地のほうを見まわってきやす」

弥之助はそういいおいて、いそいで立っていった。

したくといっても、東吾が帯刀をとり、千鳥がひきずっているすそをしごきで締めあげれば、あとはめいめい小ぶろしき包みを一つずつ持っているだけである。

「それ、あたくしが持ってまいります」

千鳥は東吾のふろしき包みを取って、自分のと一つにできるのも、今は一つに結ばれたあかしのようで、落人の気ぜわしいなかにもなにかうれしさが胸にうずいてくる。

「おねえさまに、ごあいさつもしていけませんのね」

「うむ。どうせわしは今夜、もう一度ここへ引っかえさなくちゃならんのだから」

「あら、ではあたくし、今夜はひとりになりますの」

と、たちまちうらめしそうな顔になる千鳥だった。

その夜

1

お袖が和泉屋から帰ってきたのは、東吾たちが裏口から弥之助に案内されて、路地へぬけ出していったのと、ほんのひと足違いだった。

「直さん、おとっつぁんは」

父親の姿が見えないので、茶の間の上がりかまちに腰かけてひと休みといったかっこうの若い衆にきくと、

「お袖さん、家の前に変な野郎がうろついてやしませんでしたか」

と、岡っ引き志願の直吉は真顔で声をひそめる。

「さあ、うっかりしてたけど、どうかしたの」

「親分あの雷のまえに番屋へ呼ばれていきやしてね、倉橋のだんなからなぞをかけられたんですってさ」

「なぞ――？」

「つまり、松浦のお嬢さんや早水さんを家においちゃいけねえ、追っ払えっていうんでしょうね。いましがた、早水さんとお嬢さんをつれて、裏口からこっそりどこかへおつれしていったとこです」

「まあ」

お袖は思わず目をみはる。

「じゃ、東吾さん家へ帰ってきていたのね」

「ええ、ちょうどあのにわか雨といっしょに帰ってきたんでさ」

「拾吉さんは――」

「あの人はまだ帰りやせん」

「おとっつぁんはふたりを、どこへつれていったのかしら」

「さあ、そいつは聞きやせんでした」

倉橋は天草屋の御用をたしている男だ。大森での行きがかりはあるし、それにねらわれたとなると、東吾も千鳥もここにいてはあぶない。だから、すぐに落としてやるのも、落ちていくのも当然だが、ふたりきりでというのがお袖にはなんとなく気に入らない。

いや、あのまっくらな雷のとき、東吾はすでに千鳥とふたりきりで、二階にいたことになるのだ。

「千鳥さんひとりで、あの雷のときどうしたかしらと、あたし心配してたんだけど、東吾さんが帰っていたんなら――」

「そうですよ。店も雨宿りの客でいそがしい盛りだったし、早水さんとふたりだからと思って、あたしたちもほうっておいたんでさ。つまらねえじゃまをしても、かえって悪うござんすからね」

「それなんのこと――」

「あの雷がいいきっかけで、あれえっと女が男にすがりつく、しばいでよくやるやつだが、そんなことがまるっきりないともいえやせんからね。あっしはこれでちょいと気がきくほうでしてね」

「バカばっかし――。そんな東吾さんじゃありません」

相手は冗談口とわかってはいても、ついむらむらとせずにはいられないお袖だ。

2

――どうしてあたし、あの雨のまえに帰ってきていなかったんだろう。

お袖は二階へあがってきて、間のふすまをあけ放してある六畳二間の、やや古びて見える座敷じゅうを、どこかにそんなけはいでも残っていないかと、鋭く見まわした。

われながらあさましいと、ほおがほてってきながら、たったいま直吉が冗談にいっていた千鳥の姿が、いや、そこから当然落ちていくはずの若い男と女のあやしくもなまめかしい交渉が、いつかお美乃のたんすの中からうっかり見つけ

てしまった絵巻き物となってまぶたに焼きついてくる。

——いいえ、千鳥さんは鬼になった人だし。

そう打ち消してもみる。が、屋敷へ帰ればどうせただではすまないからだなんだもの、そのまえに好きな人にと、きっかけさえあればかえって女のほうが大胆になれるものではないかしら。

——あたし、とうとう東吾さんを取られてしまった。

もともと、東吾さんは千鳥さんのほうが好きだったのだと思えるだけに、お袖は目の前がまっくらになってきた。

全身から力がぬけてしまって、そこへへなへなとすわりながら、千鳥がねたましいというより、ただ世の中があじけない。東吾となら平気で死ねるとまで思いつめていた自分が、あまりにもみじめである。

お袖はちょっと帯の間へかくして持ちつづけてきた、千本松原であの東吾の傷口にあてた懐紙を取り出して、もう黒くなってきた血の跡をながめてみた。これもただ自分のはかない夢だったのかと、涙が出てきそうになる。

ふっと階下で父親の声がして、

「そうか、二階か」

そういいながら、もう階段をあがってくるので、お袖は懐紙をいそいで帯の間へかくす。

——なんでもない顔をしていなくちゃ。

むらむらっと勝ち気が出てくる。

「お袖、帰っていたか」

「ひと足違いだったんですってね、おとっつぁん」

こっちからいきなり切り出していく。

「うむ、ぐずぐずしちゃいられない。とにかく深川屋へたのんで、いそいで船で落ちてもらったんだ」

「どこへ落ちたんだろう、ふたりは——」

「そいつは聞かなかったが、行く先の心当たりはあるといっていた。いずれ今夜、早水さんだけ引っかえしてきて、拾さんやおまえとも相談するといっていた」

「じゃ、今夜、東吾さん来るには来るのね」

さっと胸があかるくなりかけたが、いまさら会ったってもとの東吾さんじゃないと、どうしてもそんなふうにしか考えられないお袖だった。

3

「おとっつぁん、いったい倉橋はなんだっていうんです。どうしてそんなに急に、ふたりを落とさなけりゃならなかったの」

ついお袖はなじるような声になってくる。

「倉橋のだんなはなあ、お袖、拾吉はおまえの家のむこになる男かって、念を押しなさるんだ」

弥之助の顔は暗い。

「あいつ、大森でもそんなこといってたわ。よけいなお世話じゃありませんか」

「ところが、そうじゃねえ。早水さんは良家の娘をかどわかした罪に問われているんだ。裏にどんなからくりがあっても、お屋敷からそう届け出があれば、一度は奉行所へ引っ立てられてもしかたがない。だんながいうには、いきなりおまえの家から引っ立てたんじゃ、しだいによっちゃ、いっしょに旅をしていたお袖も拾吉もただじゃすまない。それではお袖がかわいそうだからなあと、恩にきせておいて、その次が、拾吉はお袖のむこになる男かとなるんだ。わかるか、お袖」

「わからないわ」

「そうか。つまり、だんなは、お袖をおれのめかけに出せといっているんだ」

「なんですって、おとっつぁん」

かっと父親の顔をにらみつけているお袖だ。

「だからよう、おとっつぁんはなぞがわからねえふりをして、ありがとうござんす、娘も拾吉

も承知のようでござんしてと、返事をしておいたんだ」

「そんな、あたし、——いつあたしが拾吉なんかを」

「お袖、かりにも男一匹をつかまえて、拾吉なんかと、そんな口をきいちゃいけねえ。むろん、今のは倉橋のだんなに対して、その場かぎりのおとっつぁんの逃げ口上だが、よしんばこっちでほんとうにそう望んでも、拾吉さんは家のむこになるような男じゃなさそうだ。あの人は三下のまねはしているが、どこか育ちが違う」

「そうかしら」

そういわれれば、お袖にも道中で思いあたることがいくつかあるから、なんとなく顔が赤くなってくる。

「まあ、そんなこんなで、早水さんたちはどうしても急に立ってもらわなくちゃならなくなったんだが、倉橋にねらわれているとなると、おまえもあんまりひとりで外を飛び歩いちゃいけねえぜ。どこにどんなわながこしらえてあるか、わかったもんじゃないからな」

「拾吉さんはだいじょうぶかしら。まだ帰ってこないけれど」

「あの人はちゃんと筋を考えている人だ。ほっておいても心配はねえ」

そういって、弥之助は階下へおりていった。

ひとりになると、お袖はまたしても狂いだしたいばかり東吾が恋しくなってくる。なんとしてもあきらめきれないのだ。

4

次の間のふすまをしめきって、押し入れからまくらと夜着を持ち出し、お袖は起きていても大儀なからだを横にした。

まるで自分ひとりが青春から置き去りをくったような、せつなくわびしい胸の底から、しきりに涙が流れてくる。

——東吾さん、あたしのこの気持ち、少しはわかっていてくれるかしら。

東吾のあのときの顔、このときの顔を甘く思いうかべているうちに、いつかうとうとしたらしい。

「お袖さん——」

さらりとふすまがあいて、

「やあ、こいつはすみません」

あけたふすまをあわててしめる音で、はっと我にかえった。拾吉の声である。

「帰ってきたの、拾吉さん」

これが東吾さんだったらなあと思いながら、お袖はいそいで起きあがって、髪を直し、次の間へ出ていった。

「知らずにあけたんだから、悪く思わないでおくんなさい」

拾吉はそこへすわって、人のいい顔をしている。もうあたりはすっかりたそがれかけていた。

「東吾さんと千鳥さん、あたしたちを置いて、ふたりきりで行っちまったわ」

「そうですってね。いま下で、おとっつぁんに聞いてきやした。いよいよしりに火がつきやがった」

「いくら火がついたって、あたしたちに黙っていっちまう法ってないわ。いままでみんなでいっしょに苦労してきたのに、東吾さんだけいい子にならなくたっていいじゃありませんか」

つい目がつりあがってくるお袖だ。

「べつに早水さん、ひとりでいい子になろうって気もないんだろうが——」

「いいえ、東吾さんは自分ひとりで、千鳥さんに親切にしたかったんです。ちゃんとわかってるわ」

「あねご、その戸塚で、あねごが千鳥さんになって残ったときねえ」

拾吉はそういいながら、じっとお袖の顔を見ている。

「それがどうしたっていうの。思わせぶりしないで、はっきりおいいなさいよ」
拾吉にはなんでもいいよいお袖である。
「あの晩はあねごは東吾さんとふたりきりだった。早水さんあねごの手でも握りやしたか」
「なんですって――」
「おこっちゃいけやせん。もし、東吾さんそんなことしたんなら、千鳥さんとふたりきりでおいても、心配ないっていいたかったんでさ。あのだんなは、自分のしたことには、ちゃんと責任を持つ男ですからね」

5

お袖はかっとからだじゅうが熱くなってしまった。拾吉は、戸塚であの晩、東吾と自分の間になにかあったから、やきもちをやいているんだと取ったらしい。
あの晩はべつになにもありはしなかった。そのなにもなかったのが、かえってうらめしいお袖なのだ。
「あたし、東吾さんとは、なんでもありやしません」
「それなら、なにもそんなにおこることはないと思いやすがねえ」
拾吉はけげんそうな顔をする。
「ああ、そうか。わかりやしたよ、あねご」
「なにがわかったのよ」
「早水のだんなは、天にはしごをかけている人でさ。あの人はいまに、どんどんそのはしごをのぼっていってしまう。あっしたちにゃどうにもついていけねえ人でさ」
「じゃ、じゃ、千鳥さんもついていけないの」
お袖はもう自分のやきもちをかくそうとはしなかった。
「さあ、むずかしいかもしれねえな。そいつをうっかり情におぼれてしまうと、千鳥さんだって、あねごだって、あとで泣くようなことにならないともかぎらねえ」

拾吉の目になんとなく同情するような、深いものがあふれていた。
「東吾さんて、そんなに薄情な男なの」
「薄情なんじゃありやせん。なんていうかなあ、あの人は女なんかと遊んじゃいられない男なんだ。現にいまだって、強敵と命を張っている。すぐれた男を亭主に持つと、女はかえって心配の多いもんでさ」
「そうかしら」
そんな心配ならいくらしたってと、お袖は思いながら、
「じゃ、あたし、拾吉さんぐらいがちょうどいいのね」
と、つい皮肉が口に出る。
「ご冗談で――。あっしは地の底へはしごをかけるやつでござんして、とても娘っ子にもてるがらじゃござんせん」
平気でわらっているのが、これも父親がいっていたように、ひどくたくましい顔つきに見える。
「だって、しようがないわ。倉橋のだんなが、もうそうきめちまっているんだもの」
「そうそう、あねごは倉橋のおめかけにねらわれているんですってね。ふてえ野郎でさ」
「つまらない、あたし」
思い出すと、お袖はまた狂いだしそうにせつなくなってきて、だだっ子のように身をもまずにはいられなかった。
その東吾が深川屋から使いをよこして、拾吉に出向いてくれるようにといってきたのは、その夜のやがて五つ半（九時）に近いころであった。

6

船で深川屋へ引きかえしてきた東吾は、今夜はじめて柳橋の亀清であった跡部良輔のことより、その跡部にあずけてきた千鳥の、別れぎわの悲しげな顔がいつまでもまぶたに残って離れ

なかった。

千鳥を跡部家へ託そうと思いたったのは、そば屋を出るときからの東吾の腹だったのである。

約束どおり用人永井周平をつれて亀清へ微行した跡部は、三十六、七のいかにも名門の出といったおちついた人がらで、少しも才気走ったようなところはなく、むしろ平凡な常識人、そんな第一印象をうけた。

「わしが跡部良輔だ、永井の話では、このたび化け物退治について力になってくれるそうで、なにぶんたのみおく」

跡部は率直にそうあいさつをして、これは差し古しだが、近づきのしるしにつかわそうといって、わき差しをひと振り引き出物にくれた。

「早水さん、今夜は世間の裏を行く内密の会談ですから、身分の遠慮など無用にして、腹蔵なく話してください」

そばから永井も如才なくそうすすめる。

東吾ははじめからこの主従に親しみが持てたし、話もしよかったので、天草屋市蔵についてっさいくわしく主従の耳に入れた。

人から聞いたこと、自分が見てきたことを、い

「すると、そちはもう町方の者にねらわれていることになるのだな」

跡部はまずそれを心配してくれた。

「はい、表からは町方、裏からは刺客、だいぶいそがしくなりました」

「裏のほうは、腕がたつようだから心配はあるまいが、表は刀ですますわけにはいかぬ。万一の場合は、跡部の家来だと名のるがよい」

「ありがとうございます。そうさせていただければ安心です」

主持ちとなれば、町方でもいきなり奉行所へ引き立てるというわけにはいかなくなるのである。

「そこで化け物のほうだが、どこにいるかわからぬというのが難物だな」

「殿、その化け物にあう機会を、早水うじはいくつか持っているわけです」

周平がわらいながら口を出す。このほうはいかにも才人のようだ。

7

「周平、そちと東吾とで、化け物をおびき出す手段を考えてみてくれぬか。わしはそちたちのいうなりに動くことにしよう」

跡部はむぞうさにいう。

――さすがに大将の器だな。

と、東吾は感心した。

「では、そうさせていただくことにしましょう」

永井は万事心得顔で、

「早水さん、第一の機会は化け物が和泉屋の女房お美乃を呼び出すときだと思う。その時と場所がわかったら、すぐ屋敷へ使いを走らせてもらいたいんですがなあ」

と、これもむだ口は入れずに、てきぱきと段どりをつけていく。

「承知しました」

「場合によると、あるいは使いがまにあわぬようなことがないともかぎらない。要は化け物を退治すればいいのだから、そのときは早水さん、跡部の名代として、かまわず化け物を切っていただく。つかまえても、どうせ公に取り調べるわけにいかんやつだから、見あたりしだいに切る。殿、それでよろしゅうございましょうな」

「うむ、それでよい」

跡部は鷹揚にうなずいて、

「東吾、そちは天にはしごをかける男だそうだが、化け物に逆を取られぬよう、じゅうぶん自重するがよいぞ」

だれから天のはしごのことを耳にしたか、そんなことをいって、あたたかい微笑を見せていた。

「永井どの、それについてお願いがございます」
東吾はあらためて切り出した。
「どんなことです」
「てまえが和泉屋へ身を寄せますと、さきほどお耳に入れました松浦の娘、千鳥を見てやることが当分できなくなります。しばらくお屋敷へおあずかり願えませんでしょうか」
「なるほど、ごもっともです。早水さんとしては、こんどの事の起こりは千鳥どのからだった。そのご本尊をほうっておくわけにはいかぬ。当方としては、松浦どののお娘ご、見すごしにしておくのは武士の作法にかけます。いかがでございましょうな、殿」
「よかろう、あずかってつかわせ」
跡部が承知してくれたので、東吾はすぐに別間に待たせてある千鳥を迎えに行った。
「千鳥さん、跡部どのが承知してくれた。わしといっしょにおいで」
「はい」
返事はしたが、千鳥は浮かぬ顔をして、立とうとしない。
「どうしたんだ、不服なのか、千鳥さん」
「そんな、そんなこわい顔をなさってはいや」
千鳥はうらめしげにいって、目を伏せてしまうのである。

8

東吾はいざり寄るように、つと千鳥のひざへひざを突きあわせてすわりながら、ひざの上の白い両手を両手でつかみ取った。
「千鳥――」
「はい」
「わしの魂は、もうあんたにあずけてあるはずだ。どこに別れていようと、あんたの心に変わりがないかぎり、東吾はあんたのものなんだ。しかし、ふたりがいっしょになるまでには、あんたもわしも、まだいくつかのいばらの道を踏みこえていかなくちゃならない。勇気を出さなくちゃだめじゃないか」
しっかりと両手を握りしめてやると、千鳥は燃えるような目になりながら、はっとしたようにうなずいてみせる。
「好きだからただ好きだけに生きたいというなら、ここでふたりで死ぬほかはない。それはどんな意味ででも人間の負けだ。人間はだれだって悲しい苦労をしょわされているんだ。その苦労に歯をくいしばって戦い勝ってこそ、ほんとうの幸福が得られるんだ。わしは千鳥さんだけを得た幸福に満足して、くだらない男で一生を終わってしまうのはいやだ。りっぱな男になって、その生きがいを千鳥さんとふたりでよろこびたい。そのためには、どんな苦労にも負けない覚悟でいる」
「ごめんなさい。あたくし、勇気を出します」
千鳥の顔が安心したように、いきいきと輝いてきた。
「このわき差しをあんたにあずけておこう」
東吾は自分の帯びていた小刀を取って、千鳥に持たせてやった。
「これは母がわしにくれた父の形見です。わしにとっては、いちばん、いや、千鳥さんの次にたいせつなものだ。このわき差しのことは、拾吉うじにだけ話してあるから、わしに万一のことがあったら、拾吉うじと相談して、これを跡部どのに見せてください。ただし、わしの目の黒い間は、わしだと思っていつもそばにおいてもらいたいな」
「きっとそういたします」
そのわき差しを両そでひしと胸に抱いて、千鳥はほおずりをしていた。
まもなく、跡部のかごのあとから、永井につれられて、形見のわき差しを抱きながら、千鳥はひと足先に亀清を出ていった。あるいはそれが死別になるかもしれない別れだから、人目のてまえしゃっきりとはしていたが、その目はあ

きらかに涙をがまんしている青い顔だった。
——あのとき、もう一度肩を抱いてやればよかった。
めめしくありたくないと思って、そうしてやらなかったのが、いまさら哀れにも思える東吾である。
「お客さまがおみえになりました」
ふすまの外で女中が取り次いでくれる。

9

「だんな、今夜はたいへんだったんですってねえ」
拾吉は座につきながら、ねぎらうように微笑をうかべていた。
「心配をかけてすまなかったな」
この男の顔を見ると、東吾はなんとなく心がなごんでくる。
「なあに、あっしよりお袖あねごのほうが、ひどくご心配の体でしてね」
「そうか。あいさつをしていく暇さえなかったんだ」
「それで、松浦のお嬢さんはどこへあずけてきたんです」
「実はなあ、拾吉うじ、わしは今夜中津川どのの紹介で、お目付役跡部良輔どのにあうことになっていた」
「へえ。跡部さまというと、たしか水野さまのご一門じゃありやせんか」
「うむ、ご舎弟だ。ふしぎなまわりあわせだが、どうやら大久保ご老中から化け物退治の内意が出たらしい」
「大久保さまからねえ」
拾吉はまじまじと東吾の顔を見ながら、
「わかりやしたよ、だんな。大きな声じゃいえやせんが、大久保さまは松浦さんで失敗している。こんど失敗すると、めがね違いってやつが人の口にのぼるようになる。跡部さまなら、うしろに水野の殿さまっていう切れ者がひかえていやすからねえ。ご老中ともなれば、さすがに知恵のある考え方をしやすねえ」
と、うがったことをいいだすのである。
「なるほど、わしはうっかりしていたが、そういうものかなあ」
「で、千鳥さんはその跡部の殿さまにあずけてきたんですか」
「うむ」
「そのかわり、化け物退治にひとはだぬぐ約束ができた。ここで働きのあるところを見せておくと、いつかは天にはしごがかかる。どうして、だんなの考え方も、ご老中さまなみ以上だ。しっかりたのんますぜ」
拾吉はうれしそうな顔をかくそうとしない。
「そこで、貴公がきのう話していた、千鳥さんを売って小川町の屋敷へはいりこもうという話なんだが」
「なあに、あれは無理にって話じゃありやせん。あっしにはほかにいくらでも手がありまさあ。けど、千鳥さんは鬼になっても自分で親のかたきを討つ覚悟だったんでしょう。よくおとなしく跡部さまのお屋敷へ行く気になりやしたね」
「わしがすすめたんだ。女は身を危険にさらしてまで、孝子節婦の美名を求める必要はない」
しかし、こんどの場合はもう一つ奥があるので、東吾はちょっと面はゆい気がする。
「そりゃそうです。それで、だんなはこれからどうしやす」

10

「わしは当分和泉屋にかくれていて、化け物の呼び出しを待つつもりだ。今のところ、それ以外に化け物をつかまえる手段はないと思うが、どうだろうな」
東吾はいちおう世なれた拾吉に意見を求めてみる。
「まあ、それがいちばんでげしょうよ。跡部さ

まにご内意があったとすりゃ、もう化け物の罪状をさぐり出す段は通り越しているわけだ」
「そうなんだ。見つけしだい切る。それでいいんだ。もっとも、それがあるんで化け物も用心しているんだから、そう簡単にはいくまいと思うが」
「簡単どころか、あっち側にいわせれば、だんなはもうこの世から消される帳面に、ちゃんと載っていやすぜ」
「実は、きょうあの雷のまえに、わしはそば屋へかけこんだんだが、永代橋のまんなかで朝からわしのあとをつけていたやつが、いきなりうしろから匕首を突っかけてきてね」
「あぶねえなあ。どうしやした、それで」
拾吉がまゆをひそめながらきく。
「どうもこうもない、あっとわしが身をかわしている間に、どんどん逃げ去ってしまった」
「そいつが化け物のいつもの手なんでさ。だれがどうして殺したんだか、証拠もなにも残さない。だんなはあっと身をかわしたから助かったが、一つ身をかわしそこなうと、あっといったきりで世の中から消されてしまう。どこへしりの持っていきようもない。気をつけてくださいよ、だんな」
「うむ。あっと世の中から消されてはたまらんからな」
東吾は苦笑しながら、妙に闘志がわいてくる。
「それから、もう一つの手が、きょうの倉橋を使って牢屋へほうりこむやつ。一服盛らせりゃそれっきりですからね」
「拾吉うじ、わしは断じてやる。こうなれば、食うか食われるかだ」
「そのとおりでさ。あっしはひとつ小川町で張っていてみやしょう。化け物はきっとあそこへも通っているにちがいありやせん」
「ぜひたのむ。貴公は当分そば屋にいてくれるんだろう」

「そういうことになりそうです。倉橋のやつが、あっしをお袖あねごの養子にきめてくれたそうでござんしてね」
拾吉はにやりとわらってから、
「そうそう、例の浪島さまっていうお中老さまね、あの親もとがきょうわかりやしたぜ」
と、意外なことをいいだす。
「そうか。すると、そういうお中老さまがほんとうにいることはたしかなんだな」
東吾は思わずひざを乗り出さずにはいられなかった。

11

「本郷金助町に水谷監物って御先手組頭がいやしてね、これがこんど加役をおおせつかっている。ここへ化け物がいつものように手をまわして、賭場をひらいているんだが、浪島ってのはそこの娘なんだそうです」
「ふうむ」
親もとへ天草屋の息がかかっているとすると、ゆうべの話はまんざらうそではないことになる。
「すると、そのお中老さまに和泉屋のこどもができているというのはほんとうなのか」
「さあ、そこまではまだあっしも手がとどきやせんが、犬も歩けばの口で、きょうはもう一つ妙な拾いものをしてきやした」
「どんな拾いものなんだ」
「あっしはあの雷のまえに、金助町からいそいで明神下の古巣へかけこんだんだが、そのときひょいと、近くの妻恋坂の下に、春月庵お藤っていう茶の湯生け花の師匠がいるのを思い出したんでさ。見越しの松に黒板べい、なかなかぜいたくな家だが、これがもと大奥に奉公していたこともある厚化粧の、こってりしたしろもので、いまだに家にいるときは打ち掛け姿だって話です。化け物はこの女にもちょっかいを出しているように聞いていたんで、家の前まで行っ

てみると、まだそこにちゃんと住んでいやした。ただそれだけの話なんですがねえ」

にっとわらってみせる拾吉だった。

「なるほど、茶の湯の師匠なら、ぶつかってみることもできるわけだな」

東吾は思わず目を輝かす。

「そりゃぶつかってみられないこともありやせんが、ぶつかりようがありますか。まさか、当人に、和泉屋の子をはらんでいやすかともきけやせんからね」

「それもそうだな」

「それに、化け物がかげで糸を引いているとすると、へたに飛びこんでいくなあ、まるで消されに行くようなもんでさ」

「たしかにそうだった。考えてみると、もう化け物の罪状をさぐる段階じゃないからな」

「そのとおりです。ただ、浪島さまの替え玉になれるような女が、あっちにはいるとわかっただけでいいんでさ」

拾吉はもう一度わらってから、

「ときにだんな、さっきから見ているんだが、そのわき差しはいつものと違うようですね」

と、まじめな顔になる。さすがに目の早い男だ。

「ああ、これは今夜、跡部どのから引き出物にもらったんだ」

「それで、たいせつなやつのほうはどうしやしたね」

「あれは千鳥にあずけてきた」

なにげなくいいながら、身にひけめがあるから、正直な東吾はやっぱり顔が赤くなっている。

12

「だんな、母上にもらったたいせつな形見のわき差しを、また千鳥さんにわたしておかなくちゃならない、もうそんな間がらになっているってわけじゃないんでげしょうね」

半分は冗談のように拾吉がきく。

「いや、千鳥さんには親兄弟がなく、たよりになる身寄りをひとりも持っていない。境遇からいえば、わしも同じだ。だから、他日そのときがきたら、ふたりでりっぱな家庭を作ろうと、きょう約束したんだ」

東吾はかくさずにそう告げた。

「けっこうでげす。あのきのどくなお嬢さんにゃ、どうしてもたのみになる突っかえ棒が一本入用だったんでさ。つまり、あのわき差しは、結納がわりになすったわけだ」

「それもあるが、女というものはことばの誓いだけでは、なにか安心できないようなので、あのわき差しをあずけた。一つには、人間には万一ということがある。そのときは、このわき差しのいわれは拾吉うじにだけ話してあるから、貴公と相談して、跡部どのにこれを見せるようにといっておいた」

「じゃ、まだだんなはあのわき差しのいわれを、千鳥さんにゃ話してないんでげすか」

「話さなかった。わしは裸一貫の早水東吾で千鳥をしあわせにしてやれると自負しているし、千鳥も裸一貫のわしを信頼してくれたんだから、それでいいと思う」

「憎いなあ、だんなは、ほかにも泣きたくなる娘っ子ができるわけでさ」

「じゃ、わしは和泉屋へ引き取ることにする。勝負はこの四、五日のうちだろうと思うから、たのむよ、拾吉うじ」

「心得ていやす。あっしはどうせ使いやっこの役にしかたちやせんが、だんなを死なすようなことがあると、こんどこそ大騒動になりやすからね」

裏口から船でそっと和泉屋の桟橋へつける東吾を、船まで見送って、拾吉はふらりと深川屋を出た。

横町を一つ突っ切って、路地づたいにそば屋の台所へ出るつもりで、それとなくあたりへ気

をくばりながら、路地口へ飛びこもうとすると、

「拾吉――」

そこの物かげからふいにお袖が出てきて、いきなりぎゅうっと両手で腕をひっつかんだ。なにかひきつったようなこわい顔である。

「痛いなあ。どうしたんでげす、あねご」

「黙ってこっちへ来て」

横町をまっすぐ突きあたると、大川ばたへ出て、どこかの材木置き場の桟橋になっていた。むろん、用のない者がくる場所ではないから、この夜ふけに人っ子ひとりなく、目の前にひらけた大川が月にあかるく満々と夜潮をたたえ、すぐ川下に永代橋が墨絵のように黒い虹をかけている。

13

「ここで待ってて――」

お袖は手ごろな材木の積み荷の上へ、むりに拾吉を押しつける。

「どうしたんだ、あねご」

拾吉はどすんとしりもちをつくようにそこへ腰かけながら、あきれたように苦笑している。

お袖はかまわず桟橋の上へ出ていって立った。潮の香をふくんだ夜潮をぼんやりと見つめながら、今はなにも考えてはいなかった。ただすっかりからっぽになってしまった自分のさびしい心を、じっとかみしめて、興奮をしずめているだけだった。

東吾が千鳥のものになってしまったと、はっきりわかったからは、もうきれいにあきらめるよりしようがない。

「千鳥にはたよる者がひとりもいない。わしもおなじだ」

だから、たいせつなわき差しをきょう結納がわりにしたのだと、東吾は拾吉に話していた。

「けっこうでげす」

と、拾吉もまじめに答えていた。

――人の気も知らないで。

いや、拾吉はあたしの気持ちをちゃんと知っているくせにと、お袖はかっとなりながら、ふすまの外を離れて、深川屋を飛び出してきたが、東吾がうらめしいとも、千鳥が憎いとも、むろんそんな気持ちにはなれない。ただ、自分がみじめなだけである。

――あたしだって命がけだったんだもの。

その真心が通じなかったと思うと、たまらなく世の中があじけない。

しかし、どんなにつらくても、ふたりの幸福のために、自分の恋はきっぱりとあきらめなくてはいけないのだ。

お袖は帯の間から、東吾の血のついた懐紙を取り出して、いくつにも折りたたみ、身をかがめてそっと夜潮にうかべた。

――さよなら、東吾さん。

といおうとして、これっきり東吾に別れるわけではないのだからと思いなおし、

「さようなら、あたしの初恋はこれでおしまい」

と、口の中で別れを告げる。

水にほの白く浮いた小さな紙は、なにかの魂のように、ゆらゆらと静かに潮にのって、少しずつ川下へ離れていく。

じっとそれを目で追いながら、お袖のまぶたを一筋熱い涙があふれてきた。

「あねご、そんなとこでなにをしているんだね」

拾吉が向こうからきく。

「だいじょうぶよ、身投げなんかしやしないから」

お袖は涙をふいて、冗談のように明るく答え、もう一度紙の行くえを追ったが、もうそれと見さだめることはできなかった。

胸の中を秋風が吹きぬけていくように、しみじみとやるせない。

14

「拾吉、あたしすっかり立ち聞きしちまったのよ」

お袖は桟橋からつかつかと材木置き場へもどってきて、わざと拾吉の前へ立ちはだかりながら、挑戦するようにいった。

「立ち聞き――？」

はてなといいたげな拾吉の顔である。

「千鳥さんは東吾さんの結納がわりのわき差しを持って、どこかの屋敷へあずけられてしまったんですってね」

「あれえ、そいつを立ち聞きされちまったのか」

「はしたないまねをする女でしょ。あいそをつかしてもいいわ」

「まあ、しようがありやせんや。やお屋お七はだれやら恋しさに火つけまでしたっていいやすからね」

拾吉はおだやかにわらってみせてから、

「けど、立ち聞きされたのがあねごでよかった。化け物のほうのやつにでも聞かれたひにゃ、とんだことになるところだった」

と、しんけんな目になる。

――そうだわ、みんな命をねらわれている人たちだった。

ふっとお袖も我にかえって、いろだの恋だのと夢中になっていた自分が恥ずかしいにつけても、自分だけひとりが三人からのけ者になってしまったようなひがみさえおこってきて、

「拾吉、あたしのおむこさんになって――」

狂ったように力いっぱい、拾吉の首っ玉へしがみついていった。

「あぶねえよう、あねご」

拾吉は思わずうしろざまに両手をついて、自分のからだをささえる。

「いやなの、拾吉。あたしを、あたしを抱いてくれないの」

お袖はぞっと背筋へ悪寒が走ってきた。せっぱつまったどたん場へ自分を投げ出して、みじめになるなら思いきりみじめになれ、川へ飛びこんでしまうばかりだと、もうやけくそな気持ちである。

「こんな三下じゃ、東吾さんのかわりにならないぜ、あねご」

「そんなこといっちゃいやだ。あたしは、あたしはそんな気持ちじゃないのに」

かっと男のほおにほおずりしながら、

「いいわ、そんなことというなら死んじまう」

魂も消える気恥ずかしさに、いきなり拾吉を突っ放して、川のほうへ駆けだすつもりだった。

が、男の両腕がすばやく胸を抱きとめていて、

「あとで、後悔しねえがいい」

と、その腕の力に急に情熱がこもってくる。

「東吾さんなんていっちゃいやだ。恥ずかしい」

「恥ずかしいのは、おれのほうかもしれねえ」

いとしいという感情が男の全身にたぎってくるのを、お袖は敏感にからだじゅうで感じながら、十九の青春を男の両腕の中へぐったりと託して、もうなにも考えたくなかった。

悪の巣

1

天草屋が加役水谷監物の大べやの賭場を出たのは、もう真夜中に近かった。供は用心棒の桜井浪右衛門と吉松のふたりである。

「吉、あの様子じゃ、今夜はだいぶあがりそうだな」

修羅場のような賭場の勝負は、興奮したあぶらくさい人いきれとタバコの煙がうずをまいて、これから明けがたまでつづくのだ。

「まあ今夜のテラは、びんと百両をはねあがるでしょうねえ」
それが自分のてがらでもあるように、吉松ははずんだ声で答える。
「うむ、金はいくらあっても足りねえ」
それが天草屋の口ぐせで、また得意でもあった。はいった金は惜しげもなく人にばらまく。そして、人のできないかってなまねをして暮らす。おれは公方さまとおなじ身分だと、自負している天草屋市蔵なのだ。
「お帰りでござんすか、親分」
通用口のところに立ち番をしているふたりの若い者が、天草屋を見ると、いそいでおじぎをした。
「ご苦労だな。そら、手を出せ」
「へえ」
天草屋はふたりの手へいくらかの金をのせてやる。
「なまけるんじゃねえぞ」
だいいち、綱次郎が小田原からもどってくると、葬式やなにやかやで、人の出入りが多くなるから、人質をおいておくのは危険だ。
——こんどは和泉屋の今戸の寮を使ってやるかな。
天草屋はふっとお美乃のみずみずしい若女房ぶりを思いうかべる。あのやわはだが、反抗の力つきて、むしり取られた花のように、わが力に組みしかれていく姿が、まざまざと目に見えるようだ。
——そして、十万両手にはいったら、こんどはお中老さまの番だ。
不敵な微笑が市蔵の顔にうかぶ。

2

町々はひっそりと寝しずまって、空に半弦の月が春らしくおぼろにかすんでいた。
「吉、千鳥とあの若僧は、どこへもぐりこんでいるかまだわからねえか」
そばから吉松が兄貴株らしくことばをそえた。
「へえ、ありがとうござんす」
若い者のひとりは、そっと木戸のしまりをあける。ひとりがするりと表へ出ていって、往来の前後を見まわし、だいじょうぶでござんすというように、こっちへおじぎをした。
先頭が吉松で、それから天草屋、しんがりが浪右衛門の順で、往来へ出ると吉松と浪右衛門はすかさず親分の左右につく。
「親分、今夜はどっちへ帰りやす」
吉松がきいた。
「そうよなあ。——やっぱり、小川町にしよう」
ここ四、五日は松浦の屋敷を巣にしている天草屋だった。ちらっと妻恋坂の濃厚なはだがまぶたに浮かばないでもなかったが、小川町には十万両の人質が閉じこめてある。きょうあすには、その始末もつけなければならない。

天草屋はふっと思い出して、吉松にきいた。
「へえ、今んところまだはっきりしやせん」
「どこで糸が切れたんだっけな」
「根岸の晩の翌日、あの雷のなった日に、若僧は西丸下をたずねやした。たぶん、中津川にあいに行ったんでしょう」
「うむ、その話は聞いた」
「帰りに政の野郎が永代橋で突っかけたが、やりそこなって、若僧はたしかに一度そば屋へ帰ったんですがね、あの雷のさいちゅうに裏口からお嬢さんをつれてぬけ出したんじゃねえかと思うんでさ。それっきり、ふたりともそば屋にゃいないようなんで」
「そいつはおとといの話だな」
「へえ」
「ありゃ八丁堀が弥之助をおどかして、わざとふたりをそば屋から追い出したんだ。八丁堀はたぶん逃げ出すのは日が暮れてからだろうと踏んでいたのが、手ぬかりだったと頭をかいてい

た」

どっちみちすぐ見つかるだろうと、天草屋はたかをくくって、それっきり気にもしないでいたのが、いまだに見当がつかないとすると、ほっておけないような気がしてくる。あのすかんぴんの若僧ひとりに、どれだけの力があるとは思えないが、天草屋一家に敵意を持っているやつは、かたっぱしからたたきつけておかないと、ついそれがとんだ災いのもとになるかわからないのである。

――悪党に情とゆだんは禁物だ。

それを信条にして、この十年あまりここまでのしあがってきた天草屋なのだ。

「吉、若僧をつり出す手はねえのか」

思わず意地の悪い声になる。

「ありやすよ。そば屋のお袖をひっぱり出すか、和泉屋の若女房を親分の名で呼び出すかすりゃ、あの野郎おせっかいだから、きっとのこのこついてきやす」

即座に答える吉松だ。

「あのなんとかいった三下は、まだそば屋にごろごろしているのか」

「拾吉って野郎でさ。あの野郎は、お袖の亭主になるやつですからね」

「うちの賭場へも、ちょいちょい遊びに来たことがあるやつだってな」

「へえ、あっしも顔は知っていやす」

「一度素姓を洗ってみろ。案外くわせ者かもしれねえぞ」

ただの道楽者が、天草屋の敵にまわるのを承知で、若僧などの片棒をかつぐはずはないと、そんなところまで市蔵の神経はとがりだしてきた。

3

湯島一丁目から明神下通りへ出て、昌平橋をわたると、この辺一帯駿河台から神保町にかけて、どっちへ行っても大名旗本の屋敷町ばかり

つづく。

松浦の屋敷は、小川町通りにある土屋采女正の上屋敷の裏手になっていた。

「親分、じゃいっそ拾吉のやつをひっぱり出して、痛めにかけてみやしょうか。野郎ならたぶん、若僧の居どころも知っていると思うんですがねえ」

吉松は至極簡単そういう。

「消しちまう気ならそれでもいいが、まあ待て。あすは先に人質のほうからかたづけることにしよう」

天草屋はとっさに腹をきめた。気長に責めていけば、けっきょく和泉屋はまいると考えていたのだが、これ以上ぐずぐずしていると、どうもわきからじゃまがはいりそうな予感が、急にしだしたのである。

「といいやすと――」

「今戸の和泉屋の寮をあす借りて、昼間のうちに人質を運んでいく。このあいだとおなじように四つ、桜井とふたりで膳ごしらえをしてみてくれ」

「へえ」

「むろん、若僧も出てくるだろうし、出てくるからには、それまでに拾吉という野郎がきっと動きだす。和泉屋とそば屋から目を放しちゃいけねえ。たぶん、それでどっちもいちどにかたがつく」

「なるほど。そのほうが早うござんすね」

「そのかわり、いうまでもねえことだが、おまえたちの膳だてに手ぬかりがあると、とんだ逆を取られる。わかってるだろうな」

「じゅうぶん気をつけやす」

「桜井――」

天草屋は黙々と歩いている浪右衛門のほうを向いた。

「なんだな、親分」

「おまえさんは二度まで若僧と物わかれになっているようだが、正直にいってどうなんだね」

「いや、じゃまさえはいらなければ、二度ともこっちのものだったことはたしかだ」
「じゃ、安心していてもいいんだな」
「命にかけて引きうける」
べつに力んでいるふうも見えない。それだけ自信はあるのだろう。
「それじゃ、わしは暮れ六つまで小川町にいるから、ふたりでうまくやってみてくれ」
「承知した」
「いちばん鬼門は西丸下だ。いいな」
ここから出るさしずというやつ以外には、世の中にこわいものはない天草屋である。
やがて、道は松浦の屋敷のある小路へはいってきた。片側は土屋家の長い土べいになっている。

4

松浦の屋敷の表門へかかると、吉松は道の前後を見まわしてから、門番小屋のこうし窓の下に立ち、軽く雨戸をたたいて合い図を送った。
中からすぐに返事があって、まもなく小屋から出てきた門番中間がくぐりをあけてくれる。
「お帰んなさいまし」
ここにはいっている中間小者は、みんな天草屋の手を通ってきているから、子分もおなじである。
「べつに変わったことはねえだろうな」
と、吉松がきく。
「へえ、無事でござんす」
「ご苦労だった。——じゃ、親分、あっしたちは引き取りやす」
「うむ。さっきの話、うまくやれよ」
「心得ていやす。ご安心なすって」
「桜井、ご苦労だったな」
「なんの——。いずれまたあすお目にかかる」
桜井と吉松のふたりは、これから鎌倉河岸の天草屋へ帰るのである。
市蔵がくぐりから屋敷内へはいると、

「では、おやすみなさいまし」
門番は外のふたりにあいさつをして、くぐりのしまりをした。
「親分、すぐ奥へ引き取りやすか」
「そうだな」
ここの大べやに和泉屋九郎右衛門が閉じこめてある。ときどき顔を見せて、相手の精根のつきるのを待っているのだが、若だんな育ちにしては、九郎右衛門もなかなか強情だった。
「おまえさんにいっぱいくわされたのは、こっちの不覚なんだからしようがない、一万両だけ出すことにしましょう」
五千両がやっと一万両にはねあがったが、
「金は商人の命だ。その金をいわれなくただゆすられるのは商人の恥だ」
と、はっきり割り切って、意地を通しつづけているのだ。
が、その勝負もあすはつく。今までこうとねらった仕事で、一度も失敗したことはない天草屋なのだ。
——今夜はそっと寝かしといてやろう。
市蔵はそう思ったので、
「すぐ奥へ行こう」
と、玄関のほうへ歩きだした。
「へえ」
門番は先に立って、玄関わきの木戸をあける。もうこの屋敷じゅうに天草屋の敵はひとりもないが、まさか深夜の出入りを表玄関からするわけにもいかない。あくまでも旗本屋敷の面目だけはたてておく必要があるから、庭づたいにいきなり萩江の寝所の雨戸をたたくのが例になっていた。
——天草屋公方のおしのび。
かえってそのほうが市蔵にはたのしみが深い。

5

門番はいつものとおり、寝所の庭のしおり戸

の前までくると、
「それでは、おやすみなさいまし」
と、あいさつをしてもどっていった。
天草屋はそこから飛び石づたいに寝所の軒下へすすみ、こととと雨戸をたたく。
——見ているものは月だけか。
もうなれてはいるが、やっぱり忍び男という軽い興奮が胸をくすぐってくる。
どっちかといえば内気なたちの萩江は、いまだに家人をはばかって、こんなときけっして返事はしなかった。黙って起きてきて、そっと雨戸をあけるのである。
庭の月あかりに、しどけない寝まき姿がすらりとすそをひいて、素足が白い。
「目がさめていたのかね」
上に上がりながらきくと、重たげな丸まげが黙ってうなずいてみせて、手早く後ろの戸じまりをする。
しめきった家の中は、熟れたような女のにおいがおもくよどんで、四十男の男心をゆさぶらずにはおかない。
「すぐお着替えになる——？」
茶の間へはいると、萩江ははじめて安心して、甘えた声になるのだ。
「そのまえに、水を一杯もらいたいね」
天草屋はそういいながら、どっかりと長火ばちの前へあぐらをかいた。ここまでくれば、外はともかくも、武家屋敷という城郭にまもられ、内は自分の息のかかった者ばかりだから、天草屋もはじめて敵の心配なく、くつろぐことができる。
そして、こうしてくつろいだときの市蔵は、女のからだをどうたのしんでやろうかという欲望以外に、なにもなかった。
「はい、お水——」
差し向かいに長火ばちの前へすわった萩江は、ギヤマンの水差しに用意してある酒を、大きな湯のみについで、ねこ板の上へおいた。

市蔵はその一杯の冷や酒をゆっくり味わいながら、二十七という女盛りの萩江の寝まき姿を、まず目でたのしむことにしているのだ。
ぽったりと男好きのする面だちで、天草屋がなによりうれしいのは、器量よりむしろこの女ののびのびと厚ぼったい白絹のような膚だった。いや、絶えず不倫の自責におびえて、顔にも姿にも濃いうれいを含みながら、しかも市蔵のあくことを知らぬろこつな閨房の遊びに、そのたびに面をそむけながらも、心とは裏はらに火のような女体がそれを歓喜して、今はひそかに愛情をさえたぎらせている、そういった女心のあやにたまらない魅力があった。
「夜は冷える。どうだね、ご新造、おまえさんも一口やらねえか」
酒はそう強くない市蔵は、湯のみが半分になるともう陶然と目のふちをそめて、ことばつきまでねっとりとしてくる。

6

「あとで苦しくなるから、あたくし——」
萩江はうす寒そうに寝まきのえりをかきあわせながら、なにか浮かない顔である。
「はあてね、ご新造さまは殿さまがおなくなりになったばかりだのにと、そんなことを気にしているのかな」
天草屋は平気でそんなむごい冗談をいう。
「いいえ、あたくしはもうあのときから公方さまのものなのですから」
さびしくわらってみせる萩江だ。
それは三年まえ、松浦が大阪へ立ってまもなく、やっぱりこの茶の間で、殿さまのことについて密談があるからと、人払いをしておいて、しかもまっ昼間、いきなり手をつかんで引きよせたときのことである。
萩江はまっさおになって、声をさえたてられなかった。

「ご新造、おれは死ぬほどおまえさんが好きなんだ。おまえさんが好きなばっかりに、おれは殿さまにこれまで大金をまわして、出世させてあげた。いやだといいなされば、おまえさんを殺して、おれもここで死ぬ」

市蔵の死ぬほど好きというのは、女を落とすときのきまり文句ではあるが、しかしまるっきり心にもないうそではなかった。だから、平気で女の前で哀願もできるし、脅迫もできる。

萩江もその四十男の体面をすてた哀願と、脅迫とに、反抗の力がつきて、ついに不倫をゆるしてしまったのだ。

「ご新造さん、おれはこう見えても、殿さまなんかよりずっと力のある公方さまなんだ。いまにりっぱに殿さまに話をつけて、おまえさんをもらってみせるし、おまえさんの一門はきっとおれが出世をさせてみせるよ」

あとで、おかした罪におびえて人ごこちもない萩江を、市蔵はいつまでも小娘のように愛撫してやりながら、そう豪語したのである。そして、そのことばどおり、萩江の兄石垣常之進は新御番に出世し、弟の綱次郎はお先手組頭松浦の家をつぐことになった。隠居した父綱右衛門は、いまこの屋敷の用人に住みこんでいる。

その意味では、市蔵は萩江にとって、たしかに公方さまのような力を持っている男だった。

「そうだとも。あのときのおれのことばにうそはねえ。殿さまがこんど小田原で病死してしまったんで、ご新造をもらった話はつけずにしまったが、なあに、松浦さんの親戚じゅうだって、おまえさんとおれのことは、もうちゃんと知っているんだ。なにも心配することはないやね」

市蔵はずぶとくわらっている。

「親分、あたくしお願いがあるんですの」

萩江はふっとまじめな顔をあげた。

「あれえ、ご新造さん、なにかいったかね。そこじゃ話が遠すぎて、聞こえないよ」

にやりとしながら、市蔵はそらっとぼけてみせる。

7

「そんな——あたくし、まじめですのに」

萩江はそんなまねをする天草屋の下心を早くも読んで、うらめしげにいう。

「聞こえねえなあ、どうも。こっちへきて、もう一度いってみな」

市蔵はわざと耳のうしろへ手をかざしてみせる。

「まじめな話ですというのに」

その次にくる悪ふざけに、心は当惑しながらも、萩江はしかたなく立って市蔵の横へ行ってすわった。

「さあ、つかまえた」

市蔵はすばやく左の腕を萩江の首にまいて、羞恥にかたくなっている女体をぐいとひざの上へねじ倒すようにして、

「たのむから、ご新造、おれの酒を一口のんでくんな」

湯のみの酒を口いっぱいにふくんで、目の下に押えつけている萩江の口へ持っていって、むりに流しこむ。

青いまゆをひそめて、ごくりと白いのどが一つ鳴った。

「親分、もうかんにんして——」

おはぐろの口が、赤いくちびるが、酒にぬれて、あえぐように哀願する。

「いいとも。さあ、おれのかわいいご新造さん、そのまじめな話ってのを、なんでも聞くよ。おれには公方さまの力があるんだからな」

「あたくし、あたくし、弟が帰ってきたら、この屋敷を出たい」

すぐ目の上に、もうけだものじみた市蔵の濁った顔のあるのを恥じて、萩江は目をつむったままいう。

「つまり、弟の前じゃ、おれとこんなことをす

るのは、気がひけるっていうのか」
「千鳥の目が、あたくしこわい」
「よし、わかった。かわいいご新造さんのいうことだ、どんな御殿でも建ててやろう」
そんなうれしがらせをいいながら、左手で胸へかかえこんでいた顔をぐいと逆にかえすと、萩江の上体がのぞけるようにたわいなくあおむけにささえられて、市蔵のえげつない右手はすかさずゆたかな胸乳をさぐりに行きながら、
「けれど、あの高慢ちきな娘は、もう屋敷へは帰らねえだろうよ」
と、人ごとのようにいう。
「どうして、どうしてです」
萩江はびっくりして、思わず目をあいた。
「あの娘には、早水東吾っていう虫がついている。そら、このあいだ話した、こんどいっしょに道中をした若僧だ。おなじ宿屋へ若い男と女が幾日も泊まりをかさねて、ただですむもんかな」
「そうでしょうか」
「きまってるじゃねえか。いくら娘が強がっても、男のほうでただおくはずはねえ。こんなあんばいにな」
市蔵はにたりとわらいながら、胸乳の手が急に大胆に、前にむすんだ女の寝まきのはでなしごきの結びめをときに行く。

8

翌朝——。
萩江はいつものように起き出して、身じまいをしながら、鏡にうつるさえない自分の顔色をしみじみと見た。
——悪魔のとりこ。
朝のさわやかな日ざしの中で、ふっとそれを思うと、われながら気恥ずかしさにほおが赤くなってくる。
この青白く濁ったような顔色は、悪魔の執拗な夜ごとの責め苦に生き血を吸いとられていくからだろう。あられもない姿にされて、息も絶え絶えにのたうちまわりながら、からだじゅうが火のように燃えてくるあさましさ、生きながらの地獄だと思う。
しかも、その悪魔の足が遠のいて、しばらく地獄の責め苦からのがれていると、狂わしいまでにそれが恋しくなり、激しい嫉妬さえ感じてくるのだ。
——自分だけがそういう淫婦に生まれついてきたのだろうか。
そう思うと、萩江はわが身の罪深さに恐ろしくさえなってくる。
こういう不倫の責め苦からのがれたいと、萩江は何度か決心しながら、どうしても市蔵からのがれることはできなかった。もともと、親子ほども年の違う松浦ののち添えになったのも、父の組頭という身分をかさにきての暴力に負けてのことだった。
「男が女をただおくものか」
昨夜も市蔵は、千鳥のことをそういってわらっていた。
——あの勝ち気な娘でもそうだろうか。
なにかふしぎな気がする。
男と女の世界というものは、一歩道をあやまると、だれでも不倫に落ちやすい宿命を持っているのかもしれない。
だからといって、不倫はやっぱり不倫なのだ。許されることではない。
——せめて、早くこの屋敷から出て、世間の目からのがれたい。
のがれていった先がたとえ地獄でも、ここにいていつまでも松浦の妻という仮面をかぶっているより、よっぽど気が楽だと、萩江は思う。
——どうせあたしは、悪魔のおもちゃにされてしまったからだなんだもの。
いつからかそうあきらめてもいる萩江だった。
夜がしらむまで、生きたおもちゃをもてあそ

び疲れた悪魔が、次の間でぐっすりと眠りこけながら、やがて四つ（十時）をすぎてもまだ目をさまさなかった。

きちんと身じまいをすませた萩江は、茶の間の長火ばちの前へすわって、朝の膳もとらず、悪魔が起きるのを待っている。

からだじゅうがけだるくて、もうなにを考えるのもものうかった。

9

廊下を父綱右衛門がせかせかと走りこむように、茶の間へ姿を見せた。

「萩江、親分はまだおやすみか」

なにかただならぬ顔色である。

「どうかなすったのですか、おとうさま」

絶えずひけめがあるから、萩江はぎくりとせずにはいられない。

「うむ、ぜひ親分の耳に入れたいことがあるんだが」

その声を聞きつけたか、

「ご新造さん、おれは目がさめているよ」

と、寝間から天草屋がのんびりと声をかけてきた。

「はい、ただいま――」

萩江は父の顔を見ないようにいそいで立って、しとやかに寝間へはいり、後ろのふすまをしめきる。不倫の寝間を人にのぞかれるのは、やっぱり面はゆい。まして、あさましい自分の姿が、まだ記憶になまなましいのだ。

「すぐお着替えになりますか」

へやのすみに置いてあるみだれ箱を持って、まくらびょうぶの中に運んでいくと、

「うむ」

市蔵はむくりと半身起きあがり、

「ご新造さんはいつ見てもきれいだな」

と、たくましい手がひょいと胸をなぶりにくる。

さすがに声はたてられず、身をかたくして当

惑する顔が、悪魔にはおもしろいたわむれなのだろう。

しかし、綱右衛門の用というのがなにかいわくありげなので、それ以上悪ふざけもせず、市蔵は着替えをすませ、廊下へ出てあっさり顔を洗ってから、茶の間へはいってきた。

「おはよう。ご用人どの、なにか用かね」

長火ばちの前へどっかりとすわる市蔵は、下司ではあるが、もう一分もすきのない親分の貫禄をすっかり身につけていた。

「実はな、親分、ふしぎな仁がいましがに千鳥さんを連れて玄関へきてな」

「千鳥――」

市蔵はきらりと細い目を光らせたが、そばで茶を入れていた萩江も、あっと目をみはらずにはいられない。

「だれが千鳥をつれてきたんだね」

「お目付役跡部良輔と名のってな、ぜひ内密にこの綱右衛門にあって、たのみたい儀があるといっているが、どうしましょうと取り次ぎがいってきた」

「跡部といえば、たしか西の丸老中水野さまのご舎弟だが」

「そうだ。わしはあとでわかったんだが、とにかくわしにという名ざしだというから、そっと行って、物かげからのぞいてみると、なるほど、頭巾をかぶったりっぱな侍が、用人、若党をしたがえ、そのうしろにたしか千鳥が、わき差しがはいっているらしいにしきの袋を胸に抱くようにして、しょんぼり立っている」

10

「それで、跡部はいったいなにしにきたんだね」

市蔵はじっとゆだんのない目を光らせている。

「とにかく、わしにというのだから、玄関わきの座敷へあがってもらうことにした。跡部どの

は千鳥たちを玄関に待たせておいて、おひとりで座敷へ通られてな、そこでかぶっていた頭巾をとって、身は番町の跡部良輔である、見知りおいてくれと、ひどく丁重なあいさつなのだ」

網右衛門はその丁重だったのがうれしいらしく、ぐっとそり身になって、

「跡部さまにはご自身でわざわざのお運び、どういうご用でございましょうと、正直にいえばこっちが少し薄気味が悪い。すると、跡部さまは、きょうはごく内密の話でまいったのだから、絶対に他言は無用、そのつもりで聞いてくれと念をおされ、実はさる人から当家の息女千鳥どのをあずけられた。およその事情は千鳥から聞いている。が、当節どの屋敷にも、大なり小なり裏話というものはあるもので、わしは頭から千鳥の申すことを信用もしておらぬ。それはそれとして、わしにも目下大いに当惑している儀があってなと、なかなか物わかりのいい話しぶりだ」

「ふうむ。すると、千鳥のことできたわけじゃないのかね」

「うむ、用はほかにあった。あっちの話はさすがに大きい。こんど兄の水野越前守さまが西丸老中から本丸のご老中に乗り出されるような話がある。兄上は知ってのとおり政治が好きで、唐津から浜松へ国替えを願い出たくらいだから、いよいよ本丸へ乗り出すとすれば、当人はさぞ本望であろうが、ただ一つ困ったことがある。正直にいって、浜松は貧困の地で藩の財政が苦しい。老中としての出費まではなかなかまかないきれぬ。そこで、これはわし一個の思案から出たことだが、天草屋市蔵はその方面の才覚にたけた人物と聞いている。めったに人にはあいたがらぬは承知のうえで、実はおてまえに仲介の労をたのみにきた。そのかわり、ご息女の儀は、おてまえの取り計らいにまかせてもよい腹だ。ざっとそういうお話なのだ」

「つまり、千鳥を引き出物にして、おれにあいたいというわけだね」

「そのとおりだ。先方はよほど親分の才覚を高く買っている様子だった」

「ご用人さんは、なんと返事をしたんだね」

まんざらでもなさそうな市蔵の顔色である。

「わしはすぐにも親分に取り次ごうかと思ったが、いや、そうではない、親分にはまた親分の考えもあろうからと思い直してな、必ず天草屋の耳に入れて、こちらからお屋敷へご返事をいたしますからと、きょうはいちおう引き取ってもらった。いけなかったかな」

「ご新造さん、ここを少したたいておくれ」

市蔵はそこにつつましく控えている萩江のほうへ、自分の肩を押えてみせる。

11

――おれはやっぱり天草屋公方だ。

おやじの見ている前で、その娘のしかもれっきとした旗本のご新造に、平気で肩をたたかせる。これで、水野老中の部屋頭にでもなってひっかかりがつけば、まさかそこの大部屋で賭場もひらけまいが、まったく天下にこわいものなしということになると、市蔵は内心いい気持ちになりながら、

「ご用人どの、それでいいのさ。なにも天草屋はこっちからそんなご老中の部屋頭になりたいとは思わねえ。たってなってもらいたけりゃ、また何度でも先方から足を運んでくらあね」

と、鷹揚にかまえこむ。

「それはそうだ。しかし、跡部さまがご自分から足を運んでくる。親分の貫禄もたいしたもんだ。これで、天下のご老中とひざをくんで話ができるようになれば、もうしめたものだからな」

網右衛門にとっては、せがれたちの強力な後ろだてではあり、娘の婿同様の市蔵だから、思わず目を細めている。

「しかし、千鳥はだれの手から跡部へわたった

のかな」

そこにちょっと不審が起こらないでもない。

「さあ、それはうっかりしていたが、これも跡部さまの手にあずけられているとわかれば、まず安心ではないかな」

「うむ。まあいいだろう、こんど跡部にあったときけば、わかることだ」

「では、とにかくこんど跡部さまがみえたら、いちおう取り次ぐことにするから」

綱右衛門はそういって、茶の間にさがっていった。

とんとんと、しなやかなこぶしがかわるがわる肩を打つたびに、ほのかな女のにおいが鼻をなぶって、市蔵はまたしても眠けをもよおしてくるような、とろんとした気持ちにされてくる。

が、きょうは忙しい。和泉屋の十万両とお美乃とを、いちどにこの手で握る日だと思うと、急に市蔵の全身へ不敵な血が燃えあがってきた。

そのころ——。

両手をやぞうにきめこんだ拾吉は、土屋家の横町からぶらりと小川町通りへ出てきた。

いましがた同じ横町から通りへ出て、九段のほうへ歩きさったのは、たしかに跡部良輔のしのびの一行である。その中に、千鳥が例の結納がわりの東吾のわき差しをにしきの袋におさめて、しっかりと胸に抱きながら、うなだれがちに歩いていた。

——まさか、跡部さまがあと押しをして、かたき討ちに乗りこむ、そんなことは考えられないからな。

ぼかんとそのかどへ突っ立っている拾吉だが、内心はけっしておだやかではなかった。

12

——そうか、跡部は千鳥さんをおとりに使って、天草屋にあいに行ったんだ。

はっと拾吉は思いあたった。

先方のほしがっている千鳥を、無条件でわたすからという口実なら、用心深い化け物でも、ひょっとあう気になるかもしれないとは、だれしも考えやすいことだろう。

が、万一化け物のほうがもう一枚うわてだった場合は、ことによると千鳥をただ取りにされないともかぎらないのだ。

——あぶないまねをしたものだ。

と、拾吉はまゆをひそめずにはいられない。いや、悪くいえば、自分の功名心のために、こっちが武士と見こんでたのんだ千鳥を平気で危険にさらす。その当節ふうの策士根性が拾吉にはおもしろくない。

なにか重い気持ちで、ぼんやり九段のほうを見ていると、

「おい——」

ぼんとうしろから肩をたたくものがあった。

「へえ」

振りかえってみて、内心ぎょっとした。たぬきの吉松と桜井浪右衛門が、ぬっと立っているのだ。

「こりゃ親方、このあいだはどうもありがとうござんした」

「お袖はその後無事か」

「へえ、おかげで無事に江戸へ帰りやした」

「うそをつけ、なにが無事なもんか。お袖の腹ん中にゃ、もうてめえの餓鬼のかたまりができているんだろう」

にやりとわらってみせる吉松だ。

「からかっちゃいけやせんや。そんなことにでもなったひにゃ、親方にどやしつけられまさあ」

「そういや、てめえはそば屋の二階へ、あの若僧と千鳥をかくまっているんだってな。ほんとうか」

すかさずずるい吉松がかまをかけてくる。

「そ、そんなことはありやせん。そりゃ一晩だけ泊めてくれっていうもんだから、しようがなくて泊めてやりやしたが、あっしは親方に戸塚(とつか)

で約束したとおり、もう手はひいたんだ。だから、翌日はすぐ帰ってもらいやした」
「ふたりはどこへ帰ったんだ」
「そこまでは知りやせん。なにしろ、お袖とも相談して、ちゃんとあのふたりとは縁を切っちまったんですからね」
「この野郎、もうお袖呼ばわりをしてやあがる。いい気なもんだ。おい、正直に白状しねえと、大べやへひっぱりこむぞ」
「親方、かんべんしておくんなさい。あっしはうそはいわねえ。ほんとうに知らねえんでさ」
「先生、どうしよう」
「そうよなあ――」
桜井はじろりと拾吉の顔をにらむようにする。

13

「吉、きょうはかんべんしておけ。こっちも少し忙しい」
「それもそうだったな」
吉松は思い出したようにうなずいて、
「おい、三下、桜井があいうから、きょうはかんべんしておく。そのかわり、てめえ、きょうにも若僧と千鳥の行った先をきっと聞き出して、おれんところへ知らせるんだ。いいだろうな」
と、念を押す。
「へえ、お袖ともよく相談して、できるだけやってみやす」
「そのことばを忘れるなよ。てめえで話がわからなければ、こっちはお袖をひっぱり出して聞くって手もあるんだ。おぼえておくがいい」
そんなすごい捨てぜりふを残して、吉松と桜井は土屋家の土べいにそって曲がっていった。おそらく、松浦の屋敷へ出向くところなのだろう。
――すると、天草屋はいま松浦の屋敷にひそんでいるんだな。

拾吉はなにか安からぬ気持ちだ。市蔵が松浦の家にいて、よく千鳥をおとなしく見のがしたものだと思う。
――いや、見のがしたんじゃあるまい。なにか次の手を考えているのだ。
跡部にどんな力があっても、裏からまわる化け物の魔手にはかなわない。けっきょく千鳥の身があぶないということになる。
東吾がうっかり跡部を信用したのがまちがいだった。早く東吾に知らせてやって、善後策を考えなくてはならぬ。
拾吉はそう気がついたので、急に深川のほうへ急ぎだした。
――千鳥さんばかりじゃない。お袖もこの様子だとあぶないかもしれぬ。
ぐんぐん歩きながら、拾吉はまゆをひそめる。正直にいえば、千鳥などより今はお袖のほうがずっと身近なものになっている拾吉なのだ。
――その点、おれたちは東吾さんたちより行儀が悪かった。
それをべつに後悔はしていないが、やっぱりいささかうしろめたい気はする。
初恋に破れて、半分狂っていたお袖は、口約束だけではどうしても安心できなかったのだろう。あの晩そっと二階へ忍んできてしまったのである。
「おやじにも話さねえうちに、こんなことになっちまって、おれは少し気がひけるぜ」
「いいのよ。おとっつぁんはあんたを、ぜひうちのお婿さんにしたがっているんですもの」
昨夜も大胆におうせをかさねたお袖は、年だけにもうすっかりおちついた女になっていた。
「けれどなあ、お袖、おれはことによると、この養子にはなれない男かもしれないぜ」
拾吉は絶対に口にしてはならないことを、うっかり口にしてしまった。

14

「どうして、——どうしてさ」

お袖はもう別れ話にでもなるかと思ったか、ぎょっとしたように胸へしがみついてきた。

「まちがっちゃいけねえ。おれは女をおもちゃにして、ててなし子を産ませっぱなしにするほどひきょうな男じゃないつもりだ」

拾吉はわらいながら、いとしくその肩を抱いてやった。

「じゃ、どうしてそんなこといいだすの」

「おれはこれでも、家へ帰りゃ跡取りむすこなんだ。といったところで、どうせなに様の家がらってわけじゃなし、どっちへころんだっていいようなものの、やっぱり養子は困るだろうと思うんだ」

「あたしがお嫁に行けばいいのね」

「うむ、それなら文句なしさ。おとっつぁん、ひとり娘を嫁にくれるかなあ。今が今ってわけじゃねえけれど」

「おとっつぁんがなんていったって、あたし行くわ。今さら別れるなんて、死んじまうから」

「バカだなあ。別れるくらいなら、だれがこんな仲になるもんか」

しっかりと抱きしめてやると、それで安心したらしく、お袖の全身からぐったり力がとけゆるんでいく。

まくらもとの大川の流れが耳につくかとばかり、しいんと寝しずまった深夜で、雨戸もる月あかりがどこかにあるねっとりとした春のやみだった。そこを手さぐりで、物音をしのびながら、階下へ帰っていかなければならないお袖である。

「お袖、眠っちまっちゃだめだぜ」

「眠りゃしないわ」

「もう帰ったほうがいいな、うっかり朝帰りにでもなろうものならことだ」

「帰りたくないんだもの」

とけいるような甘い体温の中へ、お袖はうっとりと身をゆだねながら、いつまでも帰ろうとしない。眠ってしまう気かなと、心配していると、

「ねえ——」

いきなり、こっちの腕をつかんできた。

「どうしたんだ」

「あたし、あんたって人は、ふいにあたしの前から消えてしまいそうな気がするのよ」

「冗談いうなよ」

内心ぎょっとしながら、なにげなく打ち消したが、

「いいわ、どうせあたしには過ぎたあんたなんだもの、あたし、あたし、先のことは、もうなんにも考えたくない」

と、身もだえしながら、さめざめとすすりあげていた。

——女なんて、案外敏感なものだな。

拾吉はそんな昨夜のお袖を思い出しながら、いずれ一度はそうならなければならない自分の宿命を、いまさらながらほろ苦くかみしめさせられる。

15

拾吉が永代橋をわたってくると、その橋たもとに立って、ぼんやり大川をながめているふたりづれの地まわりふうのやつがいた。

——天草屋の見張りだな。

こんな手まわしをするようじゃ、今夜はなにかある。拾吉はそう見て通りながら、ふらりとそば屋へ帰ってきた。

やがて時分どきだから、店は客がたてこんでいそがしい盛りのようだ。釜場へはいると、おやじの弥之助も、若い衆の直吉もせっせと立ち働いているが、お袖の姿は見えない。まだ和泉屋からもどってこないのだろう。

「親方、ただいま帰りやした」

居候だから、まさかお袖はとおおっぴらには

きけない拾吉だ。
「ああ、拾さんか、お帰り」
「洗い物でも少してつだいやしょうか」
東吾も千鳥も引きあげてからもう二日にもなるのに、自分だけずるずるべったりに二階へ残っているというのも、なんとなく気がひけるうえに、娘にまで手をつけてしまっているのだから、さすがに黙って二階へはあがりにくい。
「なあに、客人にそんなまねをさせると、娘におやじが追い出される。うちの娘は気が強いんでね。まあ、おまえさんは二階で昼寝でもしていなさるがいい」
弥之助はわらっていて、相手にならなかった。
「すいませんねえ。あっしはからっきしぶ器用なもんだから」
ひとりごとのようにいいながら、逃げるように二階へあがってくると、お袖がそこにすましてほどき物をしていた。
「なあんだ、帰ってきていたのか」
自分のものにしてみて、見まさりのするお袖の器量が、拾吉にはひどくたのしい。
「お帰んなさい。もう帰る時分だと思っていたのよ」
「けど、帰っていたんなら、忙しいときぐらいお店をてつだわなくちゃ、悪くねえか」
「いいのよ。うちの娘はわがままで気が強いから、ぐずぐずいったらおとっつぁんを追い出してやる」
「ちゃんと聞いてやがる。おっかねえ娘だ」
「それで、小川町のほう、きょうはどうだったんです」
「うむ、ちょいとおかしなことがあったが、おまえのほうはどうだったんだ。お美乃さんなにかいってなかったか」
「まだべつに変わったこともないようよ。でも、かわいそうね、お美乃さん夜もおちおち眠れないんですって。もう二十日の上もだんなさまに会えないなんて、あたしなら気ちがいになってしまうかもしれない」
お袖の目が熱ぼったく拾吉を見つめて、あたしでなくてよかったといいたげな顔だ。

16

「わが身に思いくらべていうやつか、お袖」
拾吉はちょいとからかってみたくなる。二晩つづいたおうせのふたりきりの甘い秘密が、まざまざとまぶたにうかんでくるのだ。
「人間て正直ね。あたし、お美乃さんに同情しながら、居ても立ってもいられなくなるほど、だれかさんにあいたくなってくるんですもの。ついそわそわしちまって――」
目もとをとろんとさせて、わらっている。
「かわいいことというぜ」
手をのばせばすぐ届くところにいるのだから、思わず肩を抱きよせると、
「人が、人がくると恥ずかしいから」
と、さすがにお袖は赤くなりながら、男のなすがままである。
「べつになにもするものか、ただこうするだけよ」
じっと胸の中へ押えつけて、熱いくちびるをかさね、
「うれしいか、お袖」
と、耳もとへささやくと、
「うれしいわ」
せつなげに目をつむって、あえいでいるお袖だ。
「あっ、いけねえ。おふざけはあとまわしにしようぜ。実はな、お袖、おれはきょう小川町で千鳥さんにあってきた」
思い直してお袖をそっと放した拾吉が、急に真顔になる。
「まあ、お嬢さんに――」
いそいで鬢に手をやりながら、お袖は目をみはる。

「いっしょにいたのは、たしかに跡部の殿さまだろう。小川町の屋敷へはいっていくのを見ていたんだ」
「なにしに行ったんでしょう」
「たぶん、跡部さまは千鳥さんをおとりにして、化け物にあいに行ったんだろうが、やがて無事に出てきたところを見ると、化け物にはあえなかったんだな。あぶねえまねをすると思ってね、小川町通りまであとをつけて、ぼんやり見送っていると、こんどはおれが、たぬきの吉松と、桜井浪右衛門のふたりにつかまっちまったんだ」
「それで、どうしたの」
お袖の顔がさっと青くなる。
「東吾と千鳥の居どころを白状しろ、白状しなければ大べやへひっぱっていくぞと、おどかされたが、一日だけ待ってもらうことにして、いそいで帰ってきた。というのは、別れぎわに、てめえでらちがあかなけりゃ、お袖をひっぱり出して聞くぞと、ぬかしやがる。おまえをひっぱり出されたひにゃ、おれの立つ瀬がなくなるからな」
半分は冗談のようにいいながら、
「お袖。おまえ、もうひとりで外へ出ちゃいけねえ」
と、これだけは本気の拾吉だった。

17

「お袖――お袖」
階段の下から弥之助が遠慮そうに呼ぶ。
「はあい」
「ちょっと用があるんだ」
「いま行きます」
拾吉のほうへ首をすくめてみせて、
「そらね、おやじのほうで遠慮してるでしょう」
と、小声でわらいながら、いそいで下へおりていく。

そこで二言三言、なにか話しているなと思う間に、すぐ引きかえしてきて、
「和泉屋さんからなのよ。東吾さんがあんたに、裏から船で桟橋へきてくれってことづてなんですって」
と、いきなり耳へしがみつくようにしていう。
「そうか。いよいよきたんだな」
「天草屋の呼び出し状かしら」
「たぶんそうだろう。こっちはそれを待っていたんだ。すぐに行ってくる」
「ねえ」
お袖は首っ玉へまきつけた両手を放そうともしない。
「どうしたんだ」
「あぶないまね、してもらいたくないの。あたしのいること、忘れちゃいやだわ」
「あねごは急に弱くなっちまったんだな。しっかりしてくれよ。深川っ子じゃねえか」
「だって、あたしいやだわ。心配なんだもの」
「なあに、あぶないまねは、みんな東吾さんが引きうけてくれるんだ。おれはただの使いやっこの役だけだ」
「そんな気やすめ――。あたしちゃんと知ってるわ。あんたは鈴ガ森のときだって刀を抜く気だったし、戸塚のときだって度胸がありすぎるんだもの。こわい、あたし」
ぴったりとほおを寄せて、たわいなく胸がふるえているようだ。
「お袖、心配するな。どうしても天草屋に勝たなくちゃ、おれもおまえも、やつらにねらわれているんだ。おれはおまえをやつらのえじきにはしたくねえ。きっとうまくやってきてみせるから、安心して待っているんだ」
拾吉はきっぱりといいながら、お袖をいとしく抱きしめて、
「おれが帰ってくるまで、ひとりでどこへも出るなよ。表には見張りの目が光っているんだ。

こんなかわいい女房、おおかみにとられると、それこそたいへんだからな」

と、つい甘くなってくる。

——男と女なんて、まったくたわいのないものんだ。

まもなく深川屋から船を借りて、自分でこぎだした拾吉は、まだからだじゅうに残っている濃厚なお袖の移り香を、まっ昼間の川風に吹かせながら、こうしてけろりとしていられる自分がふしぎにさえ思えた。

18

拾吉の船が、やがて岸づたいに和泉屋の桟橋へすべりこむと、そこに待っていた十二、三の小僧が、

「そば屋の拾吉さんですか」

と、声をかけてきた。

「うむ、その拾吉だよ」

わらって答えると、こっちへきてくださいと先に立って、裏口から庭をまわり、奥座敷の縁先へ案内してくれた。

大番頭の卯兵衛が障子をあけて廊下まで出迎え、

「お待ちしておりました」

と、初対面だからそれとなくゆだんのない目を向ける。

座敷には大磯の宿で一度見かけたお美乃もいて、東吾を上座に、三人で話しこんでいるらしい。

「やあ、拾吉うじ、とうとう化け物から呼び出し状がきた」

東吾は顔を見るなり、さっそくそれから告げた。

「あっしもたぶん、そのことだろうと思いやした」

拾吉はわざと下座へ着いて、あらためてお美乃と大番頭にあいさつをする。

「このたびは、早水さまにもあなたにも、とんだお世話になりまして——」

人なれている大番頭には、もう拾吉の人がらがのみこめたらしく、ていねいなあいさつである。

「あの、お袖からいつもお話はうけたまわっています」

お美乃はことばすくなに、ちらっと親しい目を向けていた。

お袖のやつ、どんな話をしているのかと、拾吉は内心いささかてれながら、

「それで、だんな、また根岸の寮ですか、場所は」

と、いそいで話をそっちへ向けた。

「いや、こんどは今戸の寮へ、今夜四つ(十時)までにきてくれというんだ」

「むろんおかみさんと大番頭さんと、ふたりでこいというんでしょうね」

「べつにわしをつれてきてはいけないとも書いてないが、まえとおなじように、ふたりでくるようにと指定してある」

「なるほどねえ。すると、こんどはだんながいっしょに行くことを、敵はちゃんと勘定に入れていやすね」

「おそらく、そうだろうな」

「化け物め、今夜は最後の掛け合いと腹をきめたな。今夜の今戸の寮は、こっちにとっちゃ地獄の一丁目ということになるわけだ」

「おかみさんを、そんなところへおつれしても、だいじょうぶでしょうかな」

そばから大番頭が不安そうに口を入れる。

19

「とにかく、だんな、ひととおり敵の様子を瀬ぶみしてこなくちゃ、今夜の計略はたたねえんでしょう」

拾吉はそれとなく東吾をうながした。ここではうっかり跡部の話もできない。いや、その跡部に一刻も早くあって、今夜のてはずをきめて

おく必要があるのだ。
「うむ。拾吉うじは船できたんだな」
「川よりほかに抜け道はありやせん。もうどこもすっかり化け物の目が光っていやすからね」
「大番頭さん――」
東吾は卯兵衛のほうへすわりなおした。
「はい」
「今夜のことはいっさい、及ばずながらこの東吾が引きうけます。いずれにしても、いちかばちか、おかみさんはご主人にあわなくてはならんと思う。わしはこれから出かけて、夕がたまでに必ずたよりをします。あまりむだな心痛はせずに、からだをやすめておいてください」
「よくわかりました。どうぞよろしくお願いいたします」
東吾としては、自分の命をかけるのだ。自分の命がある間は、きっと責任は持つが、万一その命がなかったときは、お美乃にも大番頭にも死んでもらうほかはないのである。

「だんな、ここまでくればもうだいじょうぶだから、あっしのほうの話をしやしょう」
拾吉は和泉屋の桟橋から船をこぎだして、やがてその船が新大橋の下へ近づいてから、けさ小川町で跡部と千鳥に出あった話をした。
「ふうむ。跡部が千鳥をつれてねえ」
東吾もまた、まゆをひそめずにはいられない。
「そんなわけで、偉い人というものは、自分の野心のためには、人の命なんかどうでもいい、大の虫のためには、小の虫はかまっていられない、とかくそう考えがちになるもんでさ。そいつを頭から悪いとあっしはいうんじゃないが、今夜の跡部さんとの計略も、そこんとこをよく考えて、きめなくちゃいけないと、あっしは思うんですがねえ」
「ありがとう。たしかにそうだ」
犠牲をできるだけすくなく、どうすれば今夜の目的が達せられるか、これはたいへんな仕事だと、東吾はいまさらのように考えさせられる。
「拾吉うじ、犠牲をいちばんすくなくしようと思ったら、まず犠牲になる腹をきめてかかる、これならどうだろう」
「なるほど、おっしゃったねえ、だんなは」
艪をこぎながら、拾吉はにやりとわらって、
「けど、それじゃ千鳥さんが泣きゃしないかなあ」
と、ちょっと気をひいてみる。
「やむをえない。だれかが泣くことになるんだ。しかし、せめても、わしは情欲に負けていなかったのが、いくらか救われるような気がする」
ひとりごとのようにいうのを聞いて、拾吉は内心、あっと胸をつかれずにいられなかった。

夜潮

1

その日、小川町の松浦家では、夕がた綱次郎が小田原から岩見守の位牌と遺髪を持ってもどったので、屋敷は急にいそがしくなってきた。
位牌と遺髪はさっそく表座敷へ祭壇を設けて安置され、今夜は近親が集まって通夜、本葬の相談をしなければならないのである。
「では、後刻また出直すでな、それまでに親戚じゅうへ使いをまわしておいておくれ」
小田原まで同行した親戚がしらの高橋新左衛門は、後家萩江、当主をついだ綱次郎、ふたりの父綱右衛門にいいおいて、ひとまず牛込の屋敷へ引きとっていった。
「父上、千鳥はまだもどらんのですか」
位牌の間で、親子三人きりになると、綱次郎

がむっつりとした顔つきで、はじめて千鳥のことを口にした。

「それがな、やっとけさ手がかりがついた。まもなくもどるようになるだろう」

父綱右衛門はいささか得意そうに、けさの跡部の話をしていた。

——あの人が帰ったあとでよかった。

位牌の前へ手をあわせるのさえ後ろめたい萩江は、ぼんやりとそこにすわりながら、胸の中でためいきをつく。

天草屋はひと足違いで、子分たちをつれて屋敷を引きあげたばかりだった。

「ご新造さん、葬式がすむまでは、当分お別れだよ。いくらなんでも、仏がいる間は、ここでご新造さんをかわいがっちゃ、義理が悪い」

帰りぎわに、天草屋はちょいと萩江のほおをこづいて、そんなろこつなことをいっていた。

「それまで、どこにおいでなの」

「ほうぼうでせっせと金もうけさ。ご新造さんに御殿をこしらえてやる約束だからね。しかし、どこにいたって、女の子とねんねなんかしないから、やきもちだけはやかなくてもいいよ」

うそばかりと思った。天草屋にはたくさん女がいる。それを思うと、やっぱり情けなくなってくる。

「ねえさん、早水東吾って男を知らないかな」

ふいに綱次郎がきいてきた。

「早水——？」

「こんど千鳥といっしょに小田原へ行って帰ってきた男だ。あの人は知っているはずなんだがなあ」

天草屋からなにか聞いているだろうといいたげな、鋭い目である。

「ああ、その人——」

それなら、もうただの仲じゃなかろうと、昨夜聞いたばかりだが、

「でも、千鳥は跡部さまがあずかっているのだから、心配ないと思うけれど——」

萩江はさりげなく答えて、綱次郎はそんなに千鳥がほしいのかしらと、急に不安になってくる。

2

「千鳥が帰ってこなくちゃ、ここの葬式を出せないじゃないか。高橋がもう少したのみになる人間だとなあ」

綱次郎は不満そうにいう。千鳥のいない松浦家などついでもしようがないという口ぶりでもあり、行くえがわかっているなら、なぜすぐにも引きとりに行かないのかと、じりじりしているようでもある。

「なあに、千鳥はあすにも屋敷へもどるようになる。跡部さまはよく話のわかったおかたでな、わしは安心しているのじゃ」

綱右衛門はけさ自分で跡部とあって話を聞いているので、少しもそれを疑わなかった。

「しかし、わしはどうも千鳥が信じられない。もうあの男にだまされているんじゃないかと思うんだ。それなら、たとえ屋敷へもどってきても、わしは断じて許せぬ」

綱次郎のはんもんは、やっぱりそこにあるらしい。

「まさか、そんなこともなかろう。あれはなかなかしっかりした娘だでな、まああってよく話してみることじゃ。なあ、萩江」

「はい。あたくしはそんなことより、千鳥がすなおに屋敷へ帰る気になるかどうか、そのほうが心配です」

すべては千鳥のるすの間にきまってしまったことなのだ。いや、こういうふうに事を運ぶために、天草屋がわざわざ千鳥を家出させたのではないかという疑問さえ、萩江は持っている。むしろ、千鳥にあうのがこわい気さえする萩江なのである。

「まあいい、すべては千鳥がもどってからのことじゃ。今となっては、なんとかうまくまとめ

ていく、それがいちばんたいせつなことなんだからな」

多少の無理はあっても、ここはともかくせがれに松浦の跡めをつがせてしまってと、それが綱右衛門のずるい考えである。

こうして親子三人がおもいおもいに宵を迎えてまもなく、取り次ぎの若党が、

「ご用人さま、けさの跡部さまが、またお嬢さまをおつれになって玄関へまいられ、ご用人さまにちょっとお目にかかりたいと申していますが」

と、取り次いできたのだ。

「なにっ、千鳥が――」

はっと綱次郎が目を輝かす。

「まあ待て、わしが出てみよう」

綱右衛門はそういって、思わず萩江と顔を見あわせる。跡部の用件はわかりきっているが、こんどはかんじんな天草屋がるすなのだ。

「おまえ、なにかあの人に聞いていないかな」

「いいえ、べつに――」

萩江はかむりを振ってみせる。

「そうか。――とにかくあってみるか」

綱右衛門は考え考え、ゆっくりと立ち上がった。

3

千鳥は再度悲しい気持ちで、わが屋敷の表玄関へ立ったが、どこからともなく流れてくるしめった香煙の香を感じて、はっと胸をうたれた。

――おとうさまの位牌が着いたにちがいない。

心なき人の手に運ばれて、あさましいわが家にもどった父、どんなにかおさびしいだろうと思うと、千鳥はたまらない気がしてくる。

しかも、その娘は、ここまできていながら、焼香一つかってにはしてあげられないのだ。

――ごめんなさい、おとうさま。でも、今夜は千鳥も、ことによるとおとうさまのおそばへ行くかもしれません。

千鳥はすぐに気を取りなおして、しゃっきりと立った。

けさここへつれてこられたときは、ただ恐ろしかった。

「殿さまに少し考えがありましてな、あなたにお屋敷の玄関先までご足労を願いたいのです。これが成功すれば、あなたはきょうにも晴れて家へもどれるのだし、あなたの身にまちがいがあるようなことは、殿さまの名にかけて絶対にさせません」

用人永井周平にそういわれてみると、

「あの、それは東吾さまも承知していることでございましょうか」

と、それだけきくのが千鳥には精いっぱいであった。

「むろん、東吾さんも承知のうえです」

永井はあっさりそう答えていた。

それなら、どこかで東吾にあえるのかしらと、そればかりを心だのみにしていたが、小川町へ出向いて帰るまで、とうとう東吾にはあえなかった。

その東吾が永井の案内で、ふいに居間をたずねてきたのは、七つ（四時）近くでもあったろうか。かかり人の身のなすこともなく、ただひとりで、こしかた行くすえをさびしく思い案じていたときだったので、

「まあ、東吾さま――」

千鳥は夢かとばかり、目をみはってしまった。

「どうぞゆるりとお話しください、東吾さん、いずれまた後刻――」

気さくな永井は、けっして若いふたりのじゃまはせず、なにもかも心得ているように、さっさと座をはずしていく。

4

「千鳥――」
「東吾さま」
ふたりきりになると、若いふたりはどっちからともなく、ひざをつきあわせるように進み寄って、手を取りあっていた。
ただそれだけではたがいに物足らず、東吾の手が千鳥を強く引きよせて、つと肩を抱く。それを待っていたように、千鳥のからだは我から男の腕の中へ倒れかかっていった。
「わしの千鳥――」
千鳥は耳もとへうれしい男の声を夢のように聞いて、黙って目をつむった。次にくる愛撫のくちびるを待っているのだ。息苦しいまでに胸がはずんで、そのくちびるが激しくのしかかってくるのを受けると、全身が酔ったようにしびれてくる。なぜか甘い涙が流れてきた。
――このまま死んでしまいたい。
千鳥はほんとうにそう思った。また別れてさびしい思いをするくらいなら、この幸福の絶頂にいるとき死んでしまったら、どんなにしあわせだろうと思った。
「千鳥、おまえは今夜わしと死ぬんだぞ」
もっと強い力が、千鳥を抱きしめてきた。
「ほんとう、――ほんとうなの」
千鳥はうっとりと目をあける。
「わしと死ぬのはいやか、千鳥」
すぐ目の上に、熱ぼったい東吾の目が、くい入るように千鳥を見ていた。
「あなたとなら、あたくし――」
いまそれを考えていたばかりだから、千鳥は恐れげもなく、ひしと男の目を見かえした。
「そうか。だれかが犠牲にならなければ、しあわせはこないんだ。おまえとわしは死のう。いいか、おまえが死ぬそばには、きっとわしがいる。千鳥だけを殺すんじゃない。わしもいっしょに死ぬんだ。死ぬときはこうして、千鳥をしっかりと抱いて死ぬ。はっきりと誓っておくよ」
返事もしないうちに、もう一度くちびるをくちびるでふさがれて、ああ今夜はなにかあると、千鳥ははじめて気がついた。けれど、東吾といっしょならと思い、急にこっちからも放さじと男の胸を抱きしめていた。
天草屋から和泉屋へ呼び出し状がきて、今夜そこがふたりの死に場所になるかもしれない、今夜の戦いに勝てば、自分たちの幸福もそこからひらけるのだと、東吾が話してくれたのは、ややあらしのような感情がおさまってからで、それでもきょうの東吾は、千鳥を抱いたままいつまでも放そうとしなかった。
そして、最後にいっていた。
「じゃ、わしはこれで帰るが、今夜の千鳥の役は、いっさい永井さんが心得ている。永井さんのいうなりに動いていれば、きっとわしのところへくるようになるんだ。わかったかね」
なにか一抹の不安がないでもなかったが、千鳥は東吾のいうことを信じて、納得するほかはなかった。

5

「千鳥どの、これからもう一度、小川町へご足労ねがいたいのですがな」
日が暮れるとまもなく、永井が居間へ迎えにきた。
「はい」
小川町へ行くのはこわいが、永井のいうとおりにさえしていれば、今夜はまた東吾にあえる。それがあるから、千鳥はすなおに立って、跡部のかごのあとについてきたのである。
しかし、こうしてわが家の玄関に立ってみると、やっぱりあさましい人たちの顔を見るのさえいやで、なんとなく身がすくんでくる千鳥だった。
「これはこれは、お待たせいたしました」

まもなく玄関へ出てきたのは、けさの綱右衛門であった。
「綱右衛門か。またきた。しのびゆえ、かぶりものはゆるせ」
「どうつかまつりまして」
「せつくようだが、けさの用件な、当方はいそいでおる。そちの才覚で、なんとか計らってくれぬか」
跡部は声をひそめるようにして、たのみこんでいる。
「殿さまじきじきのおはこび、綱右衛門いかようにもお役にたちたくは存じますが、あいにくあの仁はここにおりませんので」
「いるところはわからぬか。案内してくれれば、どこへでも行くぞ。三顧の礼という故事もある、むだ足になっても苦しゅうない」
「しかし、ちと遠方でございましてな」
「そのためにもと思い、身は今夜はかごじゃ。かごでは礼を失するかな」
「さようなことはございません」
こどもっぽい跡部の執念に、綱右衛門は思わず微笑しながら、
「念のためにおうかがいいたしますが、お役にたちましたおりは、けさほどのお話のほうは、たしかにお約束いただけますでございましょうか」
と、ひそかにずるい目を光らせる。
「武士に二言はない」
こうして同道しているではないかというように、跡部はちらっと千鳥のほうを目でさす。
「しばらくお待ちくださいませ」
綱右衛門はそういって、一度奥へ引き取り、すぐに綱次郎をつれて出てきた。
「てまえせがれ綱次郎でございます。よろしければ、せがれにご案内いたさせますが」
「そうか。身は跡部だ。なにぶんたのむ」
跡部は綱次郎を見ながら、軽く会釈をする。
「承知つかまつりました。すぐしたくをしてまいります」
綱次郎は少し離れて、じっとうなだれている千鳥のほうは見ないようにして、立っていった。
「綱右衛門、松浦どののお位牌が着かれたのか」
跡部があらためてきく。

6

「先刻、せがれがお抱きしてもどりましてございます」
綱右衛門は神妙に答えながら、これは千鳥にも聞かせたいことばだったのだろう。
「周平、千鳥どのといっしょに、わしの名代として焼香をさせていただけ。わしはしのびゆえ、人に顔を見られては悪い。かごに遠慮して待っておる」
「はっ」
「綱右衛門、そうさをかけた。恩にきるぞ」
跡部は玄関をはなれて、つと門のほうへ歩きだす。かごはわざと遠慮して、門の外に待たしてあるのだ。若党がいそいであとを追っていく。
「ご用人、お聞きおよびのとおりでござるから、てまえ名代つかまつります」
「ごていねいに恐れ入ります」
「さあ、千鳥どの、ごいっしょに――」
永井は千鳥をうながして、玄関へあがる。
「はい」
千鳥はあとへつづきながら、こんな姿を親戚一門の前にさらすのかと思うと、さすがに胸がふるえてきた。
が、さいわい親戚の者はまだひとりもきてないらしく、位牌の間には継母の萩江がただひとり、じっとうなだれているだけである。
千鳥はその顔を見ないようにして仏前へすすみ、焼香をすませると、如才ない永井がまだなにか萩江にあいさつをしている間に、さっさと

玄関へ出てきてしまった。

——こんなまねをしたって、おとうさまは少しもおよろこびにはならない。

小田原で会ってきた父の変わり果てた死に顔が、はっきりとまぶたにうかんできて、千鳥はひそかに涙があふれてくる。

「千鳥どの——」

玄関へ出てくると、意外にもそこにもう身じたくをして待っていた綱次郎が、ふいに前へ立ちはだかってきた。

「あなたは、あなたはどうして早く屋敷へもどらんのです」

千鳥はその焼きつくような無礼な目を、ちらっとにらみかえして、かまわずそばをすりぬけ、はきものをはいて玄関前へおりてしまった。

「ここは、ここはあなたの屋敷だ。あなたがおらんでは、お父上の葬儀は出せないのだ」

綱次郎は平気で追ってくる。

千鳥はけがらわしいと思いながら、わざと背を向けて、思わず東吾のわき差しにほおずりしていた。

「あなたは、あなたはわしと、口をきくのもいやなのか」

いまにもつかみかかってきそうな語気だ。

ちょうどそのとき、永井が綱右衛門に送られて出てきて、

「やあ、お待たせしました。ご苦労ですな、綱次郎さん」

と、これはだれにでも至極あいそがいい。

7

門前の跡部のかごは、供侍四人、若党、中間にまもられて、いつでも出発できるように、六尺はもう棒に取りついていた。

「綱次郎さん、棒端はどっちへ向けさせましょうかな」

綱次郎と肩をならべて門を出た永井がきく。

「今戸です」

むっつりと綱次郎が答える。

「多喜蔵、行く先は今戸だ。お立ちい」

永井が若党の多喜蔵に声をかけると、

「お立ちい」

多喜蔵がもう一度呼んで、先頭のちょうちんの中間のところへ走っていく。次が供侍ふたり、かご、そのあとに永井が綱次郎とならんでつづき、ひと足さがって千鳥、しんがりがまた供侍ふたりという順で、かごはあがった。

「綱次郎、では、たのんだぞ」

門の外まで送って出た綱右衛門が、しっかりやれよというように声をかけていた。

そのころ——。

拾吉は和泉屋の裏の桟橋から、お美乃と大番頭卯兵衛をのせた屋根船を、川上へ向けてこぎ出していた。

「拾吉さん、あなたを疑うというわけではないが、てまえにはてまえの責任がありますので

な、おかみさんを今夜おつれして、ほんとうにだいじょうぶでしょうかなあ」

東吾がいっしょでないので、大番頭はどうしたものかと、だいぶ迷ったようである。

「無理もありやせん。こっちはこれならよかろう、このほかに手はないとまで、ちゃんと計略ってやつをたててのことだが、その東吾さんの計略がずに当たるかどうかは、やってみなけりゃわからないことだ。けど、大番頭さん、東吾さんにすれば、今夜は自分が死ぬ気でかかっているんだ。しかも、その東吾さんのうしろには、れっきとしたお旗本のお殿さまがついていなさる。そして、その計略がうまく運んだかどうかは、この船が今戸へ着くまでに、きっと合い図がとどくことになっているんでさ。つまり、そこまで早水のだんなは念には念を入れているんですからね」

それ以上の説明は、今のところ拾吉は口にしかねるのだ。

「すると、その合い図で早水さまのほうが計略がうまくいかなかったときは、どういうことになりますので」
「そのときは、早水のだんなが自分でこの船へ乗りこんできてくれやす」
「なるほどな」
卯兵衛はしばらく考えこんでから、
「どうしますな、おかみさん。早水のだんなは死ぬ覚悟までしていてくださる。どっちみち、おかみさんは今戸へ行かぬというわけにもいかないでしょうしな」
と、やっぱり腹をきめるほかはなかったようだ。

8

拾吉はふたりを説得して、やっと船にはのせたが、しかし東吾がたてた今夜の策に、確固たる自信があったわけではなかった。
こっちの策は、最後のどたん場まで、うまくいけばの話であって、どこで一歩誤ってもお美乃はあぶないかもしれぬ。いや、お美乃よりもっとあぶないのは千鳥なのだ。が、それをいっていては、とうてい化け物に近づけない。
「この手以外にわしはないと思う。決心しようじゃないか、拾吉うじ」
永井をまじえて三人で段どりを相談した結果、断然東吾がそういいきるのを聞いて、そうか、東吾は千鳥といっしょに死ぬ気だなと拾吉は早くも察したので、
「いいでしょう。どっちへころんでも、今夜の今戸の寮は地獄の一丁目でさ。いちかばちか、やっつけてみることにしやしょう」
と、拾吉も賛成したのであった。
——しようがない、乗りかかった船なんだ。
へたをすれば、東吾や千鳥の最期を見とどけなければならない拾吉なのだ。そして、お美乃だけは安全にしておくというわけにはいかない場合なのである。

——お袖、じゃ行ってくるぜ。
拾吉は船が和泉屋の桟橋を離れたとき、そば屋のほうを振りかえって、心の中で別れを告げた。今夜のことが成功しても失敗しても、拾吉は当分お袖の前から姿を消さなくてはならないのだ。
——東吾さんにゃかなわねえ。
拾吉はいまさらのように苦笑が出る。東吾と千鳥は最後まできれいな仲で死んでいくだろうが、こっちは早いところ深間に落ちこんでしまっている。それだけに、拾吉にとってはいとしくもあるお袖だった。
最後にひと目、お袖にあってくる暇がないわけではなかったが、あえてそれをしなかったのは、東吾や千鳥へのせめてもの義理だての気持ちからだった。
——けど、命がありさえすりゃ、おれはきっとおまえをもらいに行くからな。
拾吉は暗い春の星空を見あげながら、ぐんぐん船をこいだ。
この船にも、ひょっとすると無事にはもどれない女が乗っていると思うと、拾吉の責任は重かった。
船が新大橋、両国橋とくぐりぬけて、やがて駒形堂の沖にかかったとき、拾吉はそっちへ合い図のちょうちんを振ってみた。
そのあたりのやみへ、ふわりとちょうちんのあかりが一つ浮いて、ゆっくりと丸を描いてみせる。
しめた、小川町のほうは段どりどおりうまくいったのだと思い、
「大番頭さん、早水のだんなはうまくやったようですぜ」
と、船房へ声はかけてやったが、実際はこれからの段どりがむずかしいのである。

9

和泉屋の今戸の寮は、今戸八幡社の筋向かい

に表門がある。裏木戸は隅田川の河岸っぷちにあって、敷地三千坪といわれ、もとは日本橋のさる金持ちの寮だったのが、三、四年ほどまえに、抵当流れになって和泉屋の所有に帰したものだった。

天草屋市蔵が吉松と、用心棒の桜井をつれて、その今戸の寮へはいったのは、宵をややすぎてからであった。

むろん、寮の裏表は昼間から子分の者がかため、江戸方面からここへくるには、どうしても渡らなくてはならない今戸橋には、一味の同心倉橋市之丞が手下をしたがえて網を張っている。役目で通行人をいちいち取り調べ、怪しい者と見ればすぐ寮へ急報してくれることになっているのだ。

ことにこの寮は、河岸っぷちへ船の用意さえしておけば、いざというときの逃げ道は簡単につくのである。

「どうだ、人質はおちついているか」

玄関へあがった市蔵は、出迎えに出た子分のなかでも古株の音五郎というやつにきいた。

「へえ、奥の座敷におとなしくしていやす」

「深川のほうから、なにか知らせはとどいていねえか」

吉松はまずそれをきく。

「へえ、いましがた知らせがありやして、おかみさんと大番頭が和泉屋の裏の桟橋から屋根船で、たしかに出たということです」

「ふうむ、ふたりきりでか」

「ふたりきりだったといっていやした。もっとも、船頭は別でしょうがね」

「おかしいな。あの若僧はどうしやがったんでしょうね、親分」

吉松はあてがはずれたような顔をする。

「そうよなあ。たぶん、千鳥のほうへくっついているんだろう。野郎にとっちゃ、そっちのほうがだいじだろうからな」

その千鳥は跡部があずかっているとわかって

いるから、市蔵はにやりとわらって、

「とにかく、人質におおう」

と、子分たちをうながした。

「へえ、ご案内いたしやす」

音五郎が先に立って廊下へ出る。

和泉屋九郎右衛門は奥の十畳に、ふたりの子分にまもられながら、からだを折り曲げるようにして、横になっていた。

べつに手足を縛られているわけでもなく、座敷牢へ入れられたこともない。寝起きする家は転々と変わったが、いつもふたりずつ子分が交替でついているきりだ。ただし、変なまねをすると、親分のいいつけでずぶりとやることになっているから、どうかおとなしくしていておくんなさいと、念は押されている。

九郎右衛門にとっては、寝ても起きてもそういうおおかみの目に見張られている。まったくやりきれないこの半月あまりであった。

10

「和泉屋さん、おやすみかね」

吉松と桜井をつれてはいってきた市蔵は、ちょっとひやかすように声をかけながら、ゆっくり座についた。

「いや、眠ってはいない」

九郎右衛門はむくりと起きあがった。顔に疲労の色はかくしきれないが、案外腹はすわっているらしく、目の光は少しもおとろえを見せていないようだ。

「どうだろうね、だんな、今夜はひとつぜひ腹をきめてもらいたいと思うんだが」

市蔵はいきなりずばりと切り出す。

「どう腹をきめろといいなさるんだね」

「いまさらいうまでもないだろう。お中老浪島さまの腹の中へこどもをこしらえたのはだんななんだ。今のおかみさんを離縁して、あらためて浪島さまを女房にしてくれるか、それが無理

なら、手切れ金として十万両出してやってくれるか、おれはどっちでもいい。しかし、どっちもいやだといわれたんじゃ、仲に立ったおれの顔がまるつぶれになるんだがね」

「その話なら、わたしの返事はおなじことだ。うっかり親分の手にのったのはこっちの不覚、だから一万両だけは、なんにもいわずに出します。しかし、人を監禁同様にして、こんな脅迫がましいまねをするのは感心しない。ひきょうだと思う。わたしはあのお中老さまがほんものかどうかさえ、今は疑っているのだ」

九郎右衛門は一歩も負けてはいない。

「疑うのはおまえさんのかってだが、いいことをしてこどもをこしらえたのはだんななんだからね」

「その掛け合いなら、家へ帰ってからあらためてうけましょう」

「ここはだんなの今戸の寮じゃないかね」

「いや、腕力で人を縛って、自分のいいぶんを通そうというのは、あんまり無法すぎます」

「公方さまは権力で人を縛る、おまえさんのよう金持ちは金で人を縛る、おなじことさ。おまえさんを家へ帰せば、金でいろいろと細工をしたがる。それでは掛け合いが長びくばかりだ。お中老さまのおなかは、そういつまでも人目につかずにはいない。だから、こうやって差しで掛け合っているんだが、だんなはどうしても一万両しか出さないというのか」

「出しません」

「強情だねえ、だんなも」

「わたしがどうしても一万両しか出さないといったら、けっきょく親分はわたしをどうする気だね」

「まあ根くらべだろうね。おれはおまえさんが十万両出すまで待つさ。といったところで、今もいったとおり、中老さまの腹のほうは、そういつまでも待っちゃくれないから困る。今夜はおかみさんと大番頭さんが呼んであるから、こ

こはおまえさんの寮だし、家へ帰ったつもりで、ようく三人で相談しあって、きっぱりと話をきめてもらうことにしよう」

11

「だれがきても、わたしは脅迫などには負けません。一万両だけはしようがない、相場で損をしたとあきらめもするが、商人の金は、侍の刀とおなじで、一文たりとむだにはできない」

九郎右衛門はあくまでも不敵なつら魂だ。

「親分、この野郎、ちょいと痛めにかけてみやしょうか」

吉松はじりじりしてきたようだ。

「みっともねえ、そんなけちなことを口にすると、だんながわらいなさる。やせても枯れても天草屋には公方さまの力があるんだ。てめえたちは黙って見ているがいい」

市蔵はおだやかに吉松を制して、

「だんな、おまえさんはまったくりっぱな商人だ。たいていの者なら、もう今ごろ気力がつきているところだ。感心しましたぜ。しかし、商人にはそろばんというものがあるはずだ。損得のそろばんがうまくはじけないようじゃ、大きな商人にはなれない。まあ、そこんところを今夜はもう一度、ゆっくりと考えてみなさるがいい」

と、さとすようにいう。

「そろばんのことなら、親分におそわらなくても、わたしはそろばんの音の中で産湯を使った男だ」

「二一天作の五なんてのは、小商人のはじくそろばんだよ、だんな」

「親分のはどんなそろばんだね」

「おれはいつも公方さまなみのそろばんをはじいている。得を取らせて、得を取る。損には損をくれてやる。だんなは十万両の損を、ただ損だとそろばんをはじいているようだが、そんなけちな了見だと、もっと大きな損をするばかり

だ。だんなにはおれって男が、普通の悪党にしか見えないかね」

さすがに九郎右衛門はぐっとことばに詰まったようだ。

「たとえそうにもせよ、お中老さまをかつぎ出して、白昼あれだけの大しばいを打ちながら、いまだにぼろ一つ出さない男だ。はばかりながら、おれには天下のご老中を動かすだけの力がある。二一天作の五なんて、けちなそろばんではじいているとと、一文惜しみの百知らずってことになるよ」

平気でそんなことがいえる天草屋なのだ。無法もこれだけ大きくなると、常識では口がきけなくなる。

九郎右衛門の顔に、はじめて苦悩の色が出てきた。

「親分、いま和泉屋のおかみさんと大番頭が、裏の桟橋へ着きやした。すぐこっちへ案内しやすか」

子分のひとりが廊下へきて取り次いだ。

「そうよなあ」

市蔵はじろりと和泉屋の顔を見てから、

「とにかく、大番頭さんだけこっちへきてもらえ。だんなもおかみさんの前じゃ話しにくいことがあるだろう」

と、あっさり取り次ぎにいいつける。

12

「親分、お美乃をどうしようというのだね」

九郎右衛門の目がぎらぎらと血走ってきた。

こうして久しく自由を奪われ、苦悩の日がつづいている九郎右衛門にとって、いちばん気になり恋しくもあるのは、やっぱり女房のお美乃だったろう。しかも、天草屋という男は、人妻だろうと娘だろうと、美しい女には目のないおかみなのだ。

「心配になるのかね、和泉屋さん」

市蔵はわざとひやかすように、にやりとして

みせる。

「罪もない者を、あんまりひどいめにあわせてもらいたくないな」

「なあに、おまえさんの腹がちゃんときまるまで、おれは離れでおかみさんのお相手をしているだけさ。そのつもりで、まあ大番頭さんと、とっくり相談してもらいたいね」

そんなすごい捨てぜりふを残して、市蔵はゆっくりと立ち上がった。

「親分――」

九郎右衛門はまるでのどへ匕首を突きつけられたような悲痛な声で呼んだが、市蔵は聞こえないふりをして廊下へ出る。その実、わしの負けだ、十万両出すと叫びだす和泉屋の次の声を待っていたのだが、ついにそのことばは聞けなかった。

「和泉屋もなかなか強情だな」

廊下から庭へおりてから、桜井が感心したようにいった。

「若だんな育ちにしては見上げた度胸さ。つまり、和泉屋はたいていのことでは命の心配はないと、たかをくくっているんだろう」

市蔵は苦わらいをしている。

「いっぺん絞め殺してみやしょうか、親分」

いまいましそうにいう吉松だ。

「やめておけ。人間には死ぬよりつらい拷問ってやつだってあるもんだ」

市蔵はずぶとくわらってから、

「桜井、おまえさんには玄関のかためをたのむよ。今夜は十万両の取り引きだからな」

と、思い出したようにいいつける。

「心得た」

桜井はそこから玄関のほうへ引き返していく。

「若僧なら裏木戸からじゃないでしょうかね、親分」

「若僧のひとりやふたり、どっちからきたって心配はない。おれのこわいのは老中だけだ」

離れの茶室がある林の小道へはいろうとすると、子分がひとり裏のほうから駆けてきて、
「ああ、吉松兄い、いま裏へそば屋の拾吉ってやつがきやしてね、早水ってやつと千鳥の居どころがわかった、兄いにあいたいといっているんですがねえ」
と、取り次いできた。
「親分、くさかああありやせんか」
吉松は、そらきたというように、市蔵の顔色をうかがう。

13

「吉松、ちょうどいいや、野郎がきたんなら待たせておいて、こっちがすんだら、あとでひとつひっぱたいてみろ」
口ではそういったが、市蔵はもううわのそらで、心は茶室のお美乃にひかれていた。
吉松たちを庭の見張りに残して、市蔵が茶室へはいっていくと、お美乃はおびえたように、はっとからだじゅうをかたくしたようだ。この町家の色女房は、まだどこかにういういしい面かげを残して、青いまゆのあたりににおうばかりの美しさがある。
「和泉屋さんのお内儀だね。おれは女にはやさしいほうだから、心配しなくてもいいよ」
ずるい市蔵は、人のよさそうな笑顔を作って、ゆったり獲物の前へすわった
「は、はい」
お美乃は思わずじりじりと後ろへさがる。
「どうも困ったことになってね、このあいだも根岸で話したとおり、だんながお中老さまの腹へこどもをこしらえてしまったんだ。十万両でなんとか話をつけようとほねをおっているんだが、どうしてもだんなが承知しない」
「あの、あたしをどうか主人に、あわせてくださいまし。きっと十万両出させます」
必死の目をあげるお美乃だった。
「いや、いま大番頭さんが相談しているから、その返事を持ってくるだろうが、まあだめだろうね」
「いいえ、どうかあたしを、あたしを主人のところへつれていってくださいまし」
「そんなにおかみさんは、だんなにあいたいかね」
「はい」
「もっとも、おかみさんは箱根へ行っていて、もう二十日近くもだんなとはあっていないんだからな。あいたいのは無理もないな。あわせてあげようかね」
「はい、お願いいたします」
正直に目を輝かせたとたん、
「よし、承知した。あわせてあげよう」
市蔵はすっとひざをすすめて、お美乃の白い両手を、すばやくへびのようにつかんでいた。
「あっ、許して――。それだけは」
びっくりして身もがきするのを、じっと手を押えてかってにさせながら、

「ねんねだねえ、おかみさんは。だれも見ていやしないよ」
と、わらっているのだ。
「いいえ、いいえ、それだけは、お願い――」
「まあお聞き。おかみさんがひとりでいるところへ、おれがひとりではいりこんだんだ。なんにもしなかったと、だんなにいったところで、それをほんとにするかね。どうせあとで疑われるくらいなら、黙っていうことを聞いて、だんなの命を助けてもらう。常磐御前の話もあるくらいだ、そのほうがりこうじゃないかね」
だんだんずぶとくなってくる市蔵だ。

14

ひざができるだけ離れるように、じりじりとしりごみしながら、つかまれている手を振り切ろうと必死に身をもむのを、そうさせておいては限度までくるとぐいと引きもどす。二度三度それをくりかえしているうちに、ひざ前がなま

めかしくくずれ、お美乃の息がしだいにせつなげに、肩、胸にはずんできた。

網にかかった小鳥のようで、市蔵にはひどくたのしい遊戯である。

「放して、——放してくださいまし」

さすがにはしたなく大きな声はたてない。いくら外へ救いを求めても、それはむだなのだ。

「いいとも、おれはべつに、なにをしようってわけじゃない」

市蔵はわらいながら、お美乃の力が少しゆるむのを見すまして、こんどは思いきり手もとへ引きつけた。

「あっ」

わずかに悲鳴をあげて、女体はたわいなく市蔵の分厚い胸の中へ倒れこみ、争いの熱に熟れみだれた甘い女のはだのにおいが鼻にむらがる。

「そら、つかまえた」

市蔵はすばやくお美乃を両手で抱きすくめ、のけぞりのがれようとあいた手を肩へ突っ張ってもがくのをほどよくあしらいながら、ずるい手がいつの間にか器用に女の帯を解きすてていく。

「あっ、かんにんして——」

それと気のついたお美乃は、はっとわが胸をいだいて身がすくんでしまった。

「いいともいいとも、おれはなにもしやしねえ」

裸にしてしまえば、いやでも力がつきてしまう女だと、ちゃんと承知しきっている市蔵なのだ。

「親分、——すいませんが、ちょっと」

障子の外のぬれ縁から、吉松が遠慮そうに呼んだ。

「なんだ、吉」

市蔵はまだ獲物を放さず、ふきげんな声できいた。

「へえ、その、小川町から綱次郎さんがきやしてね、跡部の殿さまと千鳥を案内してきた、けさの話だっていうんですがね」

「ふうむ」

もう細帯一つ解けば、着物をひっぺがすばかりのお美乃だった。惜しいところへきやがったとは思ったが、跡部がそれほど自分に執心なら、会っておくのも悪くはない。お美乃のほうはあとでもゆっくりたのしめるのだ。

「吉、跡部さんと千鳥だけを、座敷へ案内しておくんだ。供の者はひとりも門から中へ入れちゃならねえ。それでよかったらお目にかかりやすと、綱次郎にいわせてみろ」

「かしこまりやした」

吉松は足音もたてずに去っていく。

「おかみさん、聞いてのとおり、ひょんなところへご老中さまから使いがきやがった。ぜひ、おれにたのみたいことがあるといってね。このあいだうちから、うるさくいってくるのさ。ちょいと行ってあってくるから、おとなしく待っているんだぜ。おかみさんの心一つでご亭主の命が消える、わかっていなさるね」

市蔵ははっきりそういい聞かせてから、そっとお美乃を放した。

「は、はい」

お美乃は息も絶え絶えにあえぎながら、はだかった胸を夢中で押え、そこへくずれるように突っ伏してしまった。

15

和泉屋の今戸の寮の門前へついて、綱次郎の返事を待っている千鳥は、ひそかに気が気ではなかった。

今夜はきっといっしょになれる、死ぬも生きるもふたりでいっしょなのだからと、あれほどいっていた東吾が、いまだに姿を見せないのである。

——それとも、どこかその辺にかくれているのだろうか。

筋向かいは今戸八幡社で、森が深い。それとなくそっちを見ていたが、ただ黒々として人のけはいさえしない。

そして、ふっと気がついた。いましがた今戸橋をわたってきたとき、町方の者の取り調べがあった。綱次郎が出ていって、話はすぐについたが、相手はたしかに倉橋市之丞のようであった。

——あんな見張りがあるので、東吾さまはこの寮へ近づけないのではないかしら。

それだとたいへんなことになる。思わずそばに立っている永井の顔色をうかがったが、永井はそれどころではないらしく、じっとくぐりのほうをにらんでいた。

門は厳重で、こっちが跡部と名のっても、綱次郎ひとりしか中へ入れなかった。

かごの中も、供侍たちも、今はその綱次郎の返事ばかりを待ちかねているらしく、だれも口をきくものはなかった。

——東吾さま、あたくしひとりで死ぬのはいや。

千鳥はせつなくなって、ひしと東吾の形見を抱きしめてしまった。

ぎいとくぐりがあいて、綱次郎がひとりで出てきた。

「やあ、どうでした、綱次郎さん」

待ちかねていたように、永井がすすみ寄った。

「殿さまと千鳥だけ、おはいり願いたい。それならお目にかかるという返事です」

綱次郎はぶっきらぼうにいう。

「ごもっとも——」

永井はあっさりうなずいて、

「それがほんとうでしょうな。うかがってみましょう」

と、いそいで跡部のかごのわきへ行ってしゃがんだ。

小声で二言三言なにか話していると見る間に、かごのとびらがあいて、中間がいそいで前へぞうりをそろえる。

頭巾の跡部がかごを出て、すっと立った。

「綱次郎さん、よろしくたのむとのおおせでございます」

永井が綱次郎のところへもどってきて会釈をする。

——あっ。

千鳥はそれを聞いてまっさおになってしまった。

16

「千鳥どの、お供をお願いします」

むぞうさにこっちに向く永井が、千鳥はうらめしかった。

「はい」

すなおに返事はしたが、むろんただの供ではないのだ。場合によっては、二度と生きてこの門はくぐれぬ死の供なのである。

——とうとう東吾さんはまにあわなかった。

しかし、この場になっては、もう覚悟するほかない。

「永井さま、あの、これをしばらく、おあずかりくださいませ」

東吾のたいせつなわき差しを、敵の手にわたしたくない。とっさにそう気がついたので、千鳥はそれとなくもう一度ほおずりしてから、袋ごと永井のほうへ差し出した。

「承知しました」

簡単に右手を出した永井の顔を見て、千鳥はぱっとした。たのみますといいたげな深いまなざしが、一瞬訣別をこめて、わき差しの袋をうけとると、あっさり主人のほうを向き、

「よろしゅうございます」

と、頭を下げていた。

「よろしければご案内いたします」

綱次郎がそれを見てうながす。

跡部はおうようにうなずいて、綱次郎のあと

につづいた。

——永井さまは、なにもかも知っていてくれたのだ。

それなら、あのわき差しもあとで無事に東吾の手へかえるだろうし、自分のこのせつない気持ちを永井の口から、よく話してもらえるだろう。それをせめてもの心のなぐさめに、千鳥は思いきって跡部のあとからくぐりをくぐった。

門の中に五、六人の男がうごめいていて、千鳥が中へはいるのを待ちかねていたように、ばたんと戸をしめて桟をおろす音が、ものものしく耳についた。

——東吾さん、さようなら。

もうたのみになるのは跡部ひとりである。千鳥はじいんと胸をしめつけられてくるような気持ちだった。

綱次郎に案内されて玄関へくると、ここにも天草屋の若い者が四、五人詰めていて、みんなおじぎをしているなかに桜井浪右衛門がいて、じろりとこっちへ目を光らせているようだ。

さすがに跡部はゆったりとおちついたうしろ姿であった。気軽にぞうりをぬいで玄関へあがると、腰に帯していた大刀をさやぐるみ取って、出迎えの若い者のほうへ差し出す。

「へえ」

思わず受けとった若い者がきょとんとしているのへ、軽くうなずいてみせて、そのまま綱次郎をうながす。命はそっちへあずけるという念の入った跡部の心づかいなのだろう。

17

「ただいま天草屋がまいりましょうから、しばらくお待ちを願います」

跡部と千鳥を玄関近くの客間へ案内した綱次郎は、そうあいさつをしてから、臆面もなく焼きつくような目を千鳥に向けていた。

「なにぶん、たのみおく」

跡部の声はひくいが、いんぎんだった。

その跡部から三尺あまりさがってすわり、思わず綱次郎の目を見てしまった千鳥は、ぞっと身がすくんできた。

——もうおまえはのがさぬ。

綱次郎のいやらしい目は、ちらっと勝ち誇った色を見せて、黙って座を立っていった。

跡部とふたりきりになった十畳の座敷は、しいんと明るい。そのひっそりとしたしずけさの底に、なにかぶきみな、いってみれば緊張しきった多くの人間のいぶきが感じられるのは、こっちの気のせいだろうか。

——殿さまはいったいどうあそばす気なのかしら。

化け物にあうのが今夜の目的だと、東吾はいっていたが、たとえ化け物にあっても、殿さまとふたりきりではどうしようもない。話のしだいによっては、自分が人質に残るほかはなくなりそうだ。

なにかこっちの手はずに、大きな行き違いができているのではないだろうか。ついに東吾が顔を見せないのもそのためで、自分はその誤算の犠牲にされるのかもしれない。

千鳥は息苦しくさえなってきて、そっと跡部のうしろ姿へ目をやったが、跡部はことば一つ、いや、振りかえってみようとする関心さえ持ってはくれないようだ。

——偉い人というものは、平気で人を利用したがりやすからねえ。

いつか拾吉が冗談のようにいっていたことばを、いまさらのようにさむざむと思い出す。

廊下で人のけはいがして、すっと障子が左右にあいた。

「ごめんなすって——。てまえがおたずねにあずかりやした天草屋市蔵でございます」

さすがに市蔵は敷居の外にすわって両手をつく。左右に吉松と桜井浪右衛門のふたりが、用心深くつきそっていた。障子ぎわに綱次郎がひかえる。

「天草屋か――。身は跡部じゃ。まず、進んでくれ。そこでは話が遠い」
「はあ、恐れ入りやす」
市蔵はおじぎをして、べつに恐れるふうはなく、座敷の中へひざをすすめたが、しかしまだ敷居ぎわを離れようとはしない。
「そちがきてくれなければ、身のほうからまいるぞ」
跡部は心やすだてに、わらいながらすっと座を立つ。
そのかっこうに、いくぶんおどけたところさえ見える跡部の軽い調子だった。

18

「いいえ、それでは恐れ入りますから――」
市蔵は佩刀まで若い者にわたして、誠意を見せた跡部を、すっかり信用している。こっちも笑顔になりながら、思わず中腰になってひとひざ乗り出したとたん、
「悪党、覚悟――」
ぐいとひと足踏みこんで一喝するなり、跡部の手が差し添えにかかり、火の出るような激しい抜き打ちだった。
「わあっ、――うぬっ」
左の肩先をしたたか切りこまれた市蔵は、それでもさすがに気丈に、一瞬凶悪な顔をゆがめながらよろよろっと立ち上がろうとしたが、たちまちその気力がつきたらしく、両手で虚空をつかむように、どっと前へ突んのめっていく。
ひらりと飛びさがった跡部は、残る敵へ血刀を青眼につけながら、
「千鳥、わしの後ろを離れるな」
と、おちついた声でいった。
それは跡部の声ではない。たしかに聞きおぼえのある、なつかしい声だ。
「あっ、東吾さま――」
夢中で立って、ぴたりと背後へ寄りそった千鳥は、あまりにも事の意外に、わなわなと全身

がふるえてきた。
いつ東吾は跡部と入り替わっていたのだろう。小川町の屋敷の玄関先までは、たしかに跡部だった。それからずっとかごのあとについてきたのだから、入り替われば屋敷の門前でかごへ乗るときである。
――そうか、あたしはずっと東吾さんといっしょにここへきたことになるのだ。
うれしいと、千鳥は思った。
「うぬっ。きさまは若僧――化けやがったな」
これも啞然としていた桜井が、相手は跡部ではなく東吾だったとわかると、憤然と刀を抜いて立ちあがる。
「ちくしょう、やっちまえ。逃がすなよ、桜井」
吉松も形相すさまじく、ふところに忍ばせていた匕首を抜く。
「千鳥、あぶない。早く、こっちへくるんだ」
廊下に立っていた綱次郎が、うろたえながら、青くなって叫んだ。ほうっておいては、千鳥もそばづえをまぬがれないのである。
千鳥は意地の悪い顔をして、はっきりかむりをふってみせた。
「千鳥、――千鳥」
「うるせえ。てめえ、よくも親分をこんなめに、――こんちくしょう」
この手違いは、すべて綱次郎の責任なのだ。
吉松は急に憎悪が燃えあがってきたらしく、匕首をかまえて、だっとからだごと綱次郎にぶつかっていった。
「ううっ」
綱次郎は悲鳴をあげながら、ひとたまりもなく廊下から庭へあおむけに転落していった。

19

「親分がやられたぞ」
「みんな来うい」
暗い庭先からも、廊下からも、どたばたと血

相を変えた子分どもが駆けつけてくる。
——刀のつづくかぎり。
東吾は床の間を背にして千鳥をかばいながら、冷静に浪右衛門と相対していた。浪右衛門はまた、直接千鳥の父松浦岩見守を手にかけた下手人でもある。
「ちくしょう、親分のかたきだ。やっつけろ。たのむぜ、桜井」
綱次郎を倒した吉松は、血なまぐさい目をぎらぎらさせながら、絶えずうめくように口走りつづける。
桜井の残忍な目も、今夜こそという自信と、見ている前で親分をだまし討ちにされた憤怒とで、火のように燃えていた。しかも、敵は袋のねずみ同様なうえに、武器はこっちの大剣に対して、短いわき差しである。
——くそっ、青二才め。
と、必勝を信じて疑わなかった。
「えいっ」
「とうっ」
東吾は武器の短いのを少しも気にしていなかった。他日天にはしごをかけたとき、異変はたいてい屋内で起こる場合が多いと考えて、最近は小太刀の修業を身につけていた。それが偶然にもここで役にたったのだ。
一撃必殺の気魄が、じりじりとお互いの命を刻むようにせりあい盛りあがって、やがて頂天に達してきた。
「えいっ」
桜井の大剣が左へかえって、激しく踏んごみながら、胴を払ってくる。
「おうっ」
天井の低い家の中だから、そうくるだろうと覚悟していた東吾は、とっさにがっきとつばもとで受けとめ、だっとこっちも思いきった体当たりに出た。
はっと飛びさがった桜井は、我にもなく二の太刀を振りかぶった。大剣のきっさきが天井板

を突きあげた一瞬のすき、
「とうっ」
東吾のすさまじいもろ手突きが正確に敵のみずおちへきまった。
「わあっ」
桜井の絶叫がぞっと人々の耳を打った。
「くそっ」
とたんに、横合いから匕首を胸に構えた吉松が、黒ひょうのように東吾に殺到していったが、
「あれえ」
思わず千鳥が悲鳴をあげたのと、ひらり東吾が身をかわして、片手なぎに敵の背を払ったのと同時、
「ううっ」
吉松はそのままふすまぎわまで突んのめっていって、ばさっとふすまの中へ首を突っこんでいた。

20

東吾はこの激闘で、もとの床の間を背にして立ったときには、いつか頭巾が飛び、ざんばら髪になっていた。
「東吾さま——」
むせるような血のにおいに、千鳥は生きた空もなく、ひしと東吾の背に身を寄せる。
「千鳥、ご尊父のかたきは討った」
「はい」
「あとは刀のつづくかぎり、戦えばいい」
「ごいっしょに、千鳥はあなたとごいっしょに——」
「その覚悟で、わしのそばを離れてはいかん」
廊下から庭いっぱいに、敵が手に手に武器をきらめかしながら、ただわあっ、わあっと殺気だっている。が、急には我から座敷へ踏んごもうという勇気のある者もないようだ。
「ちくしょう、だれか飛び道具を持ってこい」

「いや、かまわねえ、家へ火をかけろ」
「そうだ、焼き殺しちまえ。火だ、火だ」
いずれはなにをやりだすかわからない連中である。
そういう命知らずどものうしろをまわって、拾吉は影のように表門のところへ忍び寄っていた。さいわい、ここにはもう敵はひとりもいない。手早くかんぬきをはずして、門扉を引きあけ、
「永井さん、永井のだんな、東吾さんが天草屋を討ち取りやしたぜ」
と、大声にどなった。
「おお、拾吉うじか」
永井がつかみかかるように走り寄ってきた。
「さあ、討ち入りだ。だんな。東吾さんたちがあぶねえ」
門前には約束どおり、跡部の手の者が十数人詰めかけて、御用ぢょうちんも二つ三つ目につく。
「待て、拾吉」
永井は拾吉を制しておいて、
「殿、いまが潮どきかと存じます」
と、うしろへ声をかけた。
跡部の白い顔がはっきりとうなずいて、
「倉橋、さっきも申すとおり、ほかにけが人を出したくない。あとのことはいっさい、跡部がよきように取り計らってつかわすから、この騒動をおだやかに取りしずめよ」
と、そばに立っている倉橋市之丞にいいつける。
これは三人できめたてはずの中にはなかったが、ひと足あとから追ってきた跡部は、今戸橋に出張っている倉橋を見かけて、急に説得役にと思いついたのだろう。
「承知いたしました」
倉橋も、ここでてがらをたてておけば、天草屋との腐れ縁は不問に付してもらえる。殺気だっている子分どもが、はたしてこっちの制止を聞くかどうかは、命がけの話だが、
「それッ、わしにつづけ」
御用ぢょうちんを先頭にして、思いきって門内へ走りこむ。

21

「しずまれ、倉橋市之丞だ。一同しずまれ」
「倉橋のだんなのご出役だ。みんなしずまれ」
倉橋は自分でも叫び、手下の者にも叫ばせて、乱闘の座敷の廊下へ飛び上がっていった。
「おう、倉橋のだんなだ」
「倉橋さんがきてくれた」
子分どもは倉橋を味方だと承知しているから、一同ほっとした気持ちで、ともかくも倉橋のまわりに集まってくる。
すでに親分を討たれ、たのみに思う桜井と吉松まできられているのだから、利害をあきらかにした説得は、そう手間のかかることではなかった。
その間に、拾吉はまず奥座敷の九郎右衛門と大番頭卯兵衛を助け出し、離れにふるえていたお美乃をつれてきて、じゃまのはいらぬうちに、裏河岸からさっさとつないである屋根船へ移してしまった。
「拾吉さん、恩にきます」
大番頭はただそれだけを何度もくりかえして、ほかのことばは忘れてしまったようである。
九郎右衛門は夢中で取りすがるお美乃の肩を抱きかかえるようにして、これがまだほんとうとは思えぬらしく、逃げるようにわくわくと船房の中へのがれていった。
「大番頭さん、あっしはちょいと早水のだんなの様子を見て、すぐ帰ってきやすから」
拾吉がそういいすてて、裏木戸からもう一度取ってかえそうとすると、東吾のほうでもお美乃たちの様子を心配して、千鳥といっしょに、ちょうどこっちへ走りだしてくるところだっ

た。
「やあ、拾吉うじ、おかみさんやみんなは無事か」
出あいがしらに、まずそれからせきこんできく東吾である。
「うれしいねえ、だんなは。みんな無事ですよ。いま船へ乗ってもらったところでさ」
「そうか、それで安心した」
「だんな、おてがらで、おめでとうござんす」
「ありがとう。拾吉うじのおかげだった」
東吾はひしと拾吉の両手を両手で握りしめて、
「感謝している」
と、目をうるませる。
「あっしは、あっしはねえ、だんな、ただうれしいや」
そばに立っていた千鳥が、急にたもとで顔をおおっていた。
「お嬢さんご尊父さんのかたき討ちができて、ようござんしたねえ」
しかし、千鳥は顔もあげえず、嗚咽するばかりだった。
おなじ嗚咽の声が、ひっそりと夜潮にうかんだあかりのない声の中からもれてくる。
夜空の春の星がきれいだった。

22

この天草屋事件はいっさい表へは出さず、市蔵は今戸の寮で、仲間げんかのためにきり殺されたことにして、事ずみになってしまった。
小川町の松浦家は、先代の急病死についで、養子綱次郎が横死したので、当然家名が断絶するはずだったが、大久保老中の計らいで、まだ手もとにあった養子届けの名が東吾と変えられ、親戚一同に内命があって、娘千鳥と近く祝言の式をあげることになっている。
一度跡部の用人永井の手にあずけられた吉光のわき差しは、その夜すぐに東吾の手へもどったから、東吾の身分はまだ拾吉のほかだれも知らない。
それからまもなく、三月一日付けで水野越前守忠邦は西丸老中から本丸老中に任命された。越前守がそのお礼言上に、はじめて将軍家斉の前へ出たおり、
「越前、そちには落とし子があるそうな、藤四郎吉光のわき差しを形見に所持しているそうだから、心当たりをたずねてみよ」
と、わらい話のように突然いいだして、忠邦をおどろかした。
が、多忙な忠邦はその場かぎりに忘れるともなく忘れてしまったか、べつに心当たりをたずねるふうもなかった。
和泉屋夫婦の間へふたたび春がかえってきたことはいうまでもないが、きのどくなのはそば屋のお袖だった。
あの晩、和泉屋夫婦を船で深川の家まで送りとどけたまではたしかにわかっている拾吉が、それっきりどこへ行ってしまったのか、幾日たってもお袖のところへ帰ってこないのだ。
「なあ、お袖、いくらくよくよしたってしようがねえ。拾さんのことはもうあきらめろ。あの人はとてもそば屋なんかの婿になれる男じゃなかったんだ」
弥之助はふびんそうにお袖をなぐさめるのである。
「だいじょうぶよ、おとっつぁん。あたし、ちっともがっかりなんかしていやしないんだから」
お袖はつとめて平気をよそおっていた。そして、あの人はきっとあたしを迎えにきてくれると、ひそかに信じてもいる。
ただ困ったことには、三月、四月と日がたって、お袖は拾吉の子を宿していたことに気がついた。
——あたし、とうとうてなし子を産むのかしら。

青春峠

さすがに胸重く五月を迎えたある日、ふいに勘定方吟味役杉山十三郎という人が、そば屋をたずねてきた。お庭番からこんど出世した人で、お袖を嫁にほしいというのである。

「ひどいわ、拾さん」

お袖がそのひざにうれし泣きに泣きくずれたとき、

「いや、わしは拾吉などという名は知らんよ」

と、十三郎はあくまでもいいきって、にやにやわらっていた。

1

戸田の渡しをわたると、志村まで二十町あまり原道がつづく。途中にぽつんぽつんと人家が散らばっているだけの草原だから、よく追いはぎが出たり、いたずら者が女などを担ぎこんだりする物騒なところだった。

志村の名主をつとめている杉下長左衛門老人は、上戸田まで用談があって出かけ、もどりがつい夕方になってしまった。渡し舟でこっち側へわたった時は、もう夕日がまっかになって野末の森へ落ちようとしている。早春とはいっても、まださえ返るという季節だから、この分では志村へ入る前にたそがれてくるだろう。

「名主さま、きょうはひとりかね」

あいにく同じ舟でわたったのは二十歳ばかりの若い旅の武士ひとりで、ほかに道づれもなさそうだから、顔なじみの渡しもりが心配そうに聞いた。

「なに、途中までだれか迎えに出ているだろうから」

「そうかね。では、気をつけておいでなせえまし」

「ありがとう」

老人は礼をいって渡し場から土手へあがり、自分の前を大股に原道へかかっていく若い武士に追いついて、

「もし、お武家さま、お武家さま」

と、うしろから呼びとめた。

「わしかね」

若い武士はゆっくりと立ち止まって振りかえる。身なりはあまり豊かそうではないが、凛とした面立ちで、いかにも若々しく澄んだいい目をしている。

「わしはこの先の志村の者ですが、この草っ原は二十町ほどつづきましてな、ひとりで歩くとなかなか長い。ご迷惑でなかったら、話し相手になってくださらんか」

「承知いたした。ごいっしょしましょう」

若者は快くうなずいて、肩をならべ、老人の歩調にあわせてくれる。

「これはありがたい。わしは志村の杉下長左衛門といいます」

「名主さまだそうですな」

船頭との話を聞いていたらしい。

「まあ、そんなような者です」

「拙者は秩父小太郎という浪人者ですが、志村から板橋まではどのくらいの道のりだろうか」

「ざっと一里でしょうな。この草っ原が二十町、つまりまだ一里二十町ということになります」

「すると、どうしても途中で日が暮れる」

「そういう勘定です。江戸へおいでかな」

「そうです」

「ご修業ですか」

「まず修業をしてそこで身を立てようと思います」

「お若いうちですな。おうらやましい。それに、こういうご時勢ですから、いくらでも出世の機会はつかめる」

うっかり口にしてしまってから、はてな、この若者が江戸へ行くと、当時流行の尊攘浪人になるのが目的ではなかろうかと、変な気がしてきた。

黒船が浦賀へきてから、時勢は急激にけわしくなってきた。幕府は開国の方針を取っているのに、朝廷は攘夷の実行を迫ってゆずらない。幕府の開国は外国にせまられてやむをえない事情にあるらしいし、朝廷はその公儀の弱みにつけこんで、公卿の勢力を少しでものばそうとしている。それを西国の外様大名たちがしり押しをして、これも目的は自分の藩の立場を有利にしようと考えてのことだという。

そういう時勢の動揺につけこんで、得たりと

騒ぎ出したのは、江戸にも地方にもありあまるほど満ちあふれている浪人たちである。それが、去年、桜田門外で水戸の浪士が井伊大老を倒してから、口々に尊皇攘夷をとなえ、大手を振って天下を闊歩しだした。尊攘浪士になれば、なんとか食うには困らないし、その一方の旗頭になれば大名から内密の金が出る上に、だれとでも対等に口がきけるのだという。

むろん、それは命がけの仕事には違いないが、不遇にいる若い浪人者たちにとっては、ぜひやってみたい派手な仕事に違いない。

現に、家のせがれ長一郎なども、あわよくば京都へ飛び出していきたいと、ひそかにねらっている。あぶないことだと思うと、杉下老人はなんとなく心が寒々としてくるのだ。

「出世ということも、昔と今とでは変わりましたな」

「そうですねえ」

「わしどもの若いころは、学問にせよ、武芸にもせよ、一流にひいで、大名に抱えられるか、公儀へ召し出されるか、それが一番の出世だった。まあ、一流の人物になるという点では変わりはないが、——あなたなどもやっぱり尊攘のほうですか」

「いや、まだそこまでの人間になってはいません。これから修業をして、まず人間になろうと思っている」

「なるほど、まず人間にな」

「そうです、出世などはどっちでもいいのです」

妙なことをいい出す若者だ。

「といいますと——」

「わしは、去年の夏、たったひとりの母親を亡くしました。別にほかに兄弟はないし、もう親孝行をする人がなくなったと思うと、がっかりして、出世などどっちでもいいと考えるようになった。そのうちに、ふっと気がついたんです。自分は死んだおふくろさまひとりに育てられたわけじゃない、世間の人の情けがあったから、母子が生きてこられたのだ。親孝行はできなくなったが、世間へはいくらも恩がかえせる。やっぱり、一人まえの人間にだけはならなくちゃうそだと思った」

「なるほど、なるほど」

「小太さん、おかあさんはあなたに、偉い人になっておくれとは望まないけれど、一人まえの男にはなってもらいたいと思いますよと、それが死んだおふくろの口癖だった。ご老人の前だが、実にいいおふくろさまでした」

しみじみとした若者の声音である。

「偉い。失礼だが、小太さん、この老人すっかり感心しました。うれしいことをいいなさる」

杉下老人は思わず若者の顔をながめてしまった。あやうくつまずきそうになるのを、若者はひょいと腕をささえて、

「ご老人、わき見をして歩くところびますよ」

と、邪気のない微笑をたたえる。

「や、これはこれは。——それで、なにかな、小太さん、江戸へはだれか知るべでも頼って行きなさるのかね」

「別に知るべというものはありませんが」

いいかけて、小太郎は急に口をつぐんだ。

もうとっくに夕日が沈んで、半分道も歩いたところだろうか。やがてたそがれに近い荒涼たる草っ原道の一本松のあたりに、浪人者らしい旅の男が二人ぬっと突っ立って、こっちを見るでもなく見ないでもなくといった、なんとなく怪しげなそぶりである。

これはいけない。

杉下老人も目ざとく見つけて、はっとした。

「小太さん、知らん顔をして通りぬけることです」

「そうしましょう」

が、こっちだけそうきめていても、そうはいかないかもしれぬ。

「もし、それでもなにかいいがかりをつけてくるようだったら、この年寄りにまかせておいて

「われわれ両名はいささか国事に奔走している者だ、このたび同志の招きによって京へ急ぐ途中だが、両名ともあいにく懐中が乏しい。迷惑だろうが、天朝へ忠節をつくすつもりで、路銀の合力にあずかりたい。どうだな」

のっぽのほうが臆面もなくのべたてた。いやだといえば切るぞといわぬばかりに、ちゃんと左手で刀の鍔口をぐいとわしづかみにしている。連れのひげだるまのほうは、じろじろと油断なく小太郎をにらんでいる。

「京までの路銀でございますな」

「そうだ」

「かしこまりました。出先のことで多分のことはいたしかねますが――」

老人はちょっと横を向いて、ふところの紙入れから小判を二枚取り出し、手早く紙包みにして、

「軽少ではございますが、お受け取り願います」

と差し出した。

もらいます」

老人は念を押しておく。若い人が血気にはやって、けがでもしては取りかえしがつかないと思ったのだ。

「承知いたした」

小太郎は穏やかに答えて、少しも強がった風は見えぬ。

――これがやせがまんでなければ、大したものだ。

杉下老人はちらっと、そんな意地の悪いことも考えていた。

「老人、しばらく待て」

はたして、浪人者ふたりは、そばへ近づくと肩を怒らせて、つかつかと行く手へ立ちふさがってきた。身なりがみすぼらしい上に、わざと目を光らせているから、えさをあさるおおかみといった感じだ。

「なんぞわしにご用でございますか」

老人はおとなしく小腰をかがめる。

「そうか」

のっぽはそれを受け取って、見ている前で紙包みをひらき、

「老人、これは二両だな」

と、不服そうに念を押す。

「はい、おひとりに一両ずつ、ほんの京までの路銀でございます」

ひとり一両あれば、路銀だけのことなら、京まで行って帰ってこられる金だ。

「これだけでは足らん。われわれは普通の旅とは違う。幕府の犬に追われている道中だ。有り金を残らず献金してくれ」

「それはちと無理というものでございます。わたくしどもにとって一両は大切な金、朝から晩まで野良を耕してひと月半あまりも働かなければ手に入らぬ高でございます。それも天朝さまのためにということですから、京までの路銀に差し上げましたので、どうかそれにてお許しを願います」

「黙れ黙れっ。われわれは命がけで国事に奔走しているのだ。それもみな、きさまたちのためにではないか。さんざん皇恩に浴して今日を安穏にすごしてきながら、いざという時に金を惜しむ、皇恩に背く者は国賊に等しい。国賊は切る。おやじ、金が惜しいか、命が惜しいか、性根をすえて返事をしてみろ」

のっぽは居丈高になって、刀の柄に手をかける。

「ご老人、拙者がかわりましょう」

「いや、小太さん、それでは約束が違う」

「まあ、任せておいてください」

かまわず小太郎は前へ出て、

「そこのご仁、貴公がたはほんものの尊攘浪士ですか」

と、話しかけるように聞く。

「なにっ」

「京までの路銀を合力しろといわれるから、老人は一両ずつ差し上げた。一両あれば京へ行っ

て帰ってこられるはず。その上有り金をよこせといわれるのは、もう合力を請うのではなく、天朝の名を借りて追いはぎを働くとおなじです。志士国士の名をいたずらに侮辱してはいけません。一言忠告します」

「おのれ、われわれを追いはぎだとぬかしたな」

「人を道に擁して、刀で有り金を出せというのは追いはぎの行為です」

「許さん」

のっぽはまっかになってわめき、

「たたっ切れ」

と、ひげだるまが目をむいて、同時に抜刀した。

「ご老人、あぶない」

小太郎は杉下老人をかばうようにして、柄に手をかけ、切ってくるようなら抜き打ちに払う構えをとる。

「小太さん、いけない、待った、待った」

その小太郎をかきのけて前へ出た杉下老人は、

「あなたがたもどうぞ待ってくだされ、お望みどおり有り金は紙入れぐるみ差し出します。刀をおさめてください」

と、ふところから紙入れを出した。

「そうか。しかし、その青二才は許さん」

「まあ、そうおっしゃらずに、わしはここで血を見たくないから有り金を出しますので、まげて刀をおさめてくださらんか」

杉下老人が押していう。

「どうする、浅田」

のっぽがひげだるまのほうへ相談すると、

「われわれは先をいそぐ旅だ。許しがたいやつだが、こんどだけは見のがしておこう」

と、もっともらしいことをいって、さっと刀を鞘におさめてしまった。

「よし、じゃそうしよう。忙しい旅だからな。老人、聞いてのとおりだ」

「ありがとうございます。さあ、これを差し上げます」

老人が出す紙入れを、のっぽは威張って受け取って、

「青二才め、命冥加なやつだ」

ふたりはそんな捨てぜりふを残しながら、戸田の渡しのほうへさっさと歩きだす。

あたりはすでに寒々とたそがれかけていた。

2

「小太さん、ただ金を取られたわけではない、あれだけいっておけば、あの人たちもいくらか考えるでしょう。さあ、出かけますぞな」

老人は小太郎をうながして、歩き出しながら、

「しかし、あなたは相当剣術のほうは修業していなさるようだな」

と、たのもしそうにいう。

「いや、まだほんの修業中です」

「それはまあ何事によらず、修業は一生ということになっていますからな。しかし、ふたりが抜いたのに小太さんは抜かなかった。ふたりが抜いたのは脅しだが、本当に切ってくるようなら自分も抜こうと、落ち着いていた。中途半端の修業では、なかなかできないことです」

「そういえば、ご老人こそ、はじめから金はやる気でかかって、無法者にあれだけの心得を説いてきかせる、さすがだと思いました」

「あれはただ年の功でしてな」

老人はうれしそうにわらっている。道は一足ごとに夜になっていくが、十五日に近い月あかりが夕やみにかわって、しだいにあかるくなってくる。まもなく原道がつきて、志村へ入ってきたようだ。

「小太さん、これから一里歩いて板橋へ行っても、今夜はそこで泊まりで、あしたにならなければ江戸へは入れない。どうです、こうして道づれになったのもなにかの縁、今夜はうちへ泊まっていきなさらんか。いろいろ話もあるし、聞きたいこともある」

杉下老人はこの若者にひどく興味を感じたのである。

「そうですな。ご迷惑ではありませんか」

小太郎としても、そう親切に持ちかけられてみると、別に今夜はどうでも板橋まで行かなければならないという旅でもなかった。

「なんの、迷惑などということはない。せがれが剣術気ちがいでしてな、現に、この半月ばかり剣術の先生をお泊めしているくらいで、年じゅうほとんど泊まり客の絶えたことがない家なのだから」

「その剣術の先生は、なんといわれる方です」

小太郎は十三の時から、秩父の二代目逸見多四郎について甲源一刀流を学び、最近では逸見道場の師範代をつとめていた。こんど江戸へ志すのも、まずその腕にみがきをかけるのが目的だから、剣客と聞いては聞きのがせない。

「野辺地太造という先生で、九段の練兵館の高弟だそうです。当節はまあ公儀のご威勢がおとろえたとでもいいますか、むやみにああいう浪人たちが騒ぎだして、夜は軍用金狩り、強盗のたぐいが横行する。なかなか物騒でしてな、いまにどういうことになるかわからない。村のことは村でまもろうと、せがれたちがいいだして、夕方から若い者がうちの庭へ集まり、野辺地先生に剣術を教えてもらっています。それが、いざという時どれほどの役に立つものかわかりませんが、まあ若い者が悪い遊びに走るよりはましだと思いましてな」

そんなことも口にしてわらっている杉下老人だった。

向こうからちょうちんの灯が一つ、ゆらゆらと近づいてきたと思うと、

「あれ、だんなさまかね」

と、月あかりにこっちの顔が見えたか、急に五十ばかりの作男らしいおやじが走り寄ってきた。うしろに十六、七の、美しい娘がついている。

「惣吉ではないか。お千代もいっしょに、どうしたのだ」

「なあにね、ついいましがた、近所の人がきて、もう少し前、風体のよくない浪人者がふたり、しきりに門の中をのぞいては、なにか相談していた。またなにかわらじ銭でもねだりにきたんだろうが、ちょうど庭で剣術のけいこがはじまった時で、竹刀の音を聞いたもんだから、あきらめて戸田の渡しのほうへ行ってしまったと教えてくれたでね、お千代さまが心配して、大だんながまだもどらねえ、草っ原道でその浪人者たちと行きあう時分じゃないだろうかとあんまり気をもむもんだから、じゃ、おれがそこまで行って見てくると、出かけてきたところだ」

「そうかそうか。それはご苦労だったな。いや、そのふたりの浪人者になら、草っ原道でたしかに出会った」

「まあ、だいじょうぶだったの、おとっつぁん」

娘がまじまじと老人の顔を見あげる。ふっくらとした面立ちの、つぶらな目がひどく印象的な少女だ。

「なあに、だいじょうぶだとも。このお武家さまが道づれになってくだすったでな。——小太さん、娘の千代です。お千代、この方は秩父小太郎さまとおっしゃって、これから江戸へご修業に行かれるのだそうだ」

老人は娘が自慢らしく目を細めながら紹介した。

「千代でございます。父がお世話さまになりまして」

お千代が顔を赤らめながら、行儀よくあいさつをする。

「秩父小太郎です、おとうさんはわしがお助けしたのではありません。むしろ、わしのほうがおとうさんに助けられたんです」

小太郎は正直にあいさつをかえした。

「まあいい、まあいい、客人は今夜うちへ泊まっていただくでな。さあ、うちへ帰ってゆっく

りと話すことにしよう。——小太さん、出かけましょう」

老人は小太郎をうながして先に立つ。

そこからいくらも歩かない街道端の左手に、茅ぶき屋根の立派な門があって、なるほど、奥のほうから勇ましい竹刀の音と、元気のいい胴間声が手に取るように聞こえてきた。この月あかりで、庭の剣術のけいこはいよいよ活気づいているのだろう。

門を入ると、道なりに茶の木が生け垣を作り、両側には江戸へ売り出す庭木がいっぱいに植え込んであるようだ。敷石づたいに一町ほども奥へ歩き、急に広庭へ出ると、左手に吹き出し井戸がこんこんと清冽な水をあふれ流し、その前が池になり、母屋の座敷へつづいているようだ。

広場の正面は納屋になっているらしく、その前で一方にたき火をしながら、村の若い者が十人ばかり集まり、いま一組みがけいこ道具をつけて、夢中で打ち合っている。

たき火を背にしてふたり、ひとりは二十七、八の上背もあるたくましい青年で、おそらくこれが練兵館の高弟と称する野辺地大造だろう。もうひとりは小太郎と同年配ほどの、いくぶんやせぎすなひょろりとした感じの男で、わがままそうに傲然とけいこを見おろしている態度から見て、たぶん杉下老人のせがれに違いない。

「小太さん、岩見重太郎と宮本武蔵がやっていますぞ」

老人が小声にささやいてわらった。

「はあ、結構です」

小太郎は当たらずさわらずに答えておく。

「やあ、名主どの、お帰りか」

けいこ場を右に見て、母屋の玄関のほうへ折れていこうとすると、やや離れたたき火の前から、野辺地が如才なく声をかけてきた。

「はい、ただいまもどりました。先生、ご苦労さまですな」

「いやいや、なにか今聞くと、怪しい浪人者がふたり、しきりに門内をうかがっていたが、竹刀の音を聞いて逃げていったそうです。その辺で見かけませんでしたかな」

それがわかっていて平気でここでけいこをやっているこの男は共に談ずるに足らぬ人物だと、小太郎はすぐに見ぬいてしまった。

「いいえ、別に大したことではありません」

老人はあっさり答えて、行きすぎようとする。

「おやじさま、お客人のようですね」

こんどはせがれのほうが、小太郎をじろりと見ながら声をかけてきた。

「おうよ、秩父小太郎さんといわれる方でな、後ほどお引き合わせしよう」

「剣術修業のお方のようだが、どうです、後ほどといわず、ついでだからここで一本けいこされては。修業には待ったのないのが本当でしょう」

せがれはいどみかかるようにいう。

「こりゃ長一郎どののいわれるのが本当だ。なにをおいてもまず修業という熱心がなければ、腕まえは上達しない。どうですな、秩父さん、さっそく一本おやりになっては」

野辺地がそばからおだてあげる。

小太郎はなにか苦々しい気持ちで、苦笑するほかはない。

「まあいい、まあいい、お客人は疲れていなさるでな」

老人が手を振ってとりなしてくれる。心配そうに見ていたお千代が、それと見るなり、

「小太郎さま、ご案内いたします」

と、きっぱりいって、小太郎をうながした。

なかなかしっかりした娘らしい。

3

思わぬ縁から志村の名主杉下長左衛門の屋敷へわらじをぬいだ小太郎は、まず、すすめられるままにふろを浴びて、旅のほこりを流すことにした。

ぶろ場は老人が自慢していただけあって、広広と流し場を取り、ここにも片すみに吹き出し井戸が水を吹いている。からだが白くすきとおるような湯にひたって、こんこんと流れる水の音を聞いていると、小太郎は身も心もあたたかくゆるみとけて、旅愁とでもいうのだろうか、なにか物の哀れがそこはかとなく胸にしみてくる。

「おかあさん、わしは今夜、名主さまの好意で、ここへ一晩泊めてもらいます」

ついひとりごとが口に出るのだ。

「よかったねえ、小太さん、どこへ行ってもおかあさんはあなたのそばについていますから、しっかりやってくださいよ」

母の顔がやさしく励ましてくれる。

「やりますとも、あすはいよいよ江戸ですからねえ」

江戸は長い間、ぜひ一度出てみたいと望んでいたあこがれの地であった。自分に力さえあればきっと一人まえの武士になれる。早く一人まえになって、母のよろこぶ顔が見たいとそればかりを夢に見てきたが、急にその母に世を去られて、その希望は悲しく消えてしまった。

一時はもう世をすてて、一生母の墓守をしてくらそうかとも考えたが、それでは母の日ごろの教えに背くのである。

「あなたのおとうさまは立派なお侍でした。あなたもそのおとうさまに恥じない侍にならなければいけません」

母は物心がつくころから、いつもわが子にいいきかせてきた。

小太郎はその父は死んだものとばかり思っていた。が、母の臨終の折のことばで、意外にもたぶん生きているはずだと知れた。

「あなたのおとうさんはお旗本の次男で、もとの名は和久兵馬さま、お屋敷は本郷湯島です。そこへ行ってうかがえば、たぶんどこにおいでになるかわかるでしょうが、無理にたずねてはいけません。あなたが人にわらわれないだけの侍になってから、たずねてごらんなさい」

母のことばはたったそれだけで、それもいおうかいうまいかとよっぽど迷った末のことらしく、後はもう口がきけなかった。そして、なにか重荷をおろしたような安らかな顔になって、

「しっかりね」

と、わずかにくちびるを動かしたのが最後だった。

——美しい母だったから、なにか悲しい恋物語でもあったのではなかろうか。

そんなことを考えるようになったのはやっとこのごろのことで、それまでは父などどうでもいい、わしは母ひとりの子だと、まだ見ぬ父に反感さえ持ってきた小太郎だった。

だから、こんど江戸へ行くのも、父をさがすのが目的ではなく、

——ともかくも一人まえの侍にならなくては、おかあさんにすまない。

そう思い立ったからであった。

「よし、やるぞ」

ざあっと湯をかきわけて、小太郎は元気よく流し場へ出た。その湯の音を聞きつけたのだろう、

「加減はどうかね」

さっきの惣吉じいやが、釜前のほうの切り戸をあけて入ってきた。

「ありがとう、とてもいい湯だ」

「そうかね。背中を流すべ」

「いや、ありがたいが、遠慮しよう。わしはまだ人に背中を流してもらうほどの人間にはなっていないんでね」

「まあいいだ。今夜はお客さまだからな」

じいやはわらいながらうしろへまわって、押さえつけるように背中を流し出す。

「おまえさまはいいからだをしていなさる」

「うむ、これだけはおふくろさまに感謝しているんだ」

「それもそうだろうが、よっぽど剣術やったな」
「よくわかるなあ」
「わかるとも。おれの目は節穴と違う。腕まえは免許かな」
無遠慮に口をきくおもしろいおやじだ。
「田舎免許というやつでね、大したことはない」
「なんていう流儀だね」
「甲源一刀流っていうんだ」
「ああ、おまえさまは秩父の人だったな。逸見多四郎先生のお弟子かね」
「くわしいなあ、じいやさんは」
「若だんなが剣術気ちがいでね。うちへはよく剣術の先生が泊まるから、耳学問てやつだ」
「いまいる先生は、九段の練兵館の高弟だそうだね」
「あれは油断ができねえ。おまえさまにたのみがあるんだがなあ」
惣吉おやじは急に声をひそめる。
「たのみ――？」
「二、三日ここへ泊まっていってくれないかね」
「どうして――」
「わけは後で話すべ。承知してもらえるだね」
「ひどくまたわしは信用されたんだな」
「目でわかるだ。それに、ひとりごとにもおふくろさまが口に出る人間に、悪い者はいないさ」
「なんだ、ひとりごとまで聞かれているのか」
小太郎は苦笑せざるをえない。
「たのみましたぞ。――さあ、これでいい」
おやじは流した背中へざあっと湯をかけ、ぽんぽんと三つ四つ肩をたたいて切り戸から出ていった。
なにをたのもうっていうのかなあ。
いや、それより、一晩という約束でここへつれてこられたのに、あすの朝になってぐずぐずしているのは、なにか物ほしそうで具合いが悪い。
小太郎はちょっと当惑してしまった。
ふろからあがって、納戸へ出ていくと、炉端に杉下老人がぽつねんとタバコをのんでいた。

一方ではお千代が女たちを指図して、夜食の膳ごしらえに忙しそうである。杉下老人は家内を亡くしたらしく、自然、娘のお千代が主婦代理という格になっているのだろう。
「ご老人、お先にちょうだいしました」
小太郎が炉端へ行ってあいさつをすると、
「どうでしたな、ふろ加減は」
「立派なふろですなあ。おかげでさっぱりしました」
「それは結構。この辺は水が自慢でな。どれ、それでは、わしも失礼して」
と、キセルをおいて立ち上がった。
野天道場ではまだけいこがつづいているらしく、にぎやかな竹刀打ちの音が聞こえている。
お千代が炉端へきて、茶を入れ、
「渋茶でございますけど」
と、しとやかにすすめてくれた。いきいきとした見るからに美しい娘である。
「どうもありがとう」
湯上がりでのどがかわいている。さっそく茶わんを取りあげると、
「あの、二、三日お泊まりくださるのでございますってね」
と、お千代はほおを赤らめながら、親しげに微笑する。
「だれから聞きました」
「いまじいやがそう申していました」
「ああ、じいやさんからか。わしはじいやさんから、ふろ場でそうたのまれたんだが、ご老人に悪くないかなあ。だいいち、一晩と約束してきて、いまさら二、三日泊めてくださいというのはおかしい」
「でも、もしご病気ならしかたがございませんでしょう」
「病気――？」
「あすの朝になって、おなかが痛くなるかもしれませんもの」
お千代はつぶらな目でにっとわらってみせな

がら、
「お願いいたします。あたしくしたちにお力を貸してくださいませ」
と、急に真顔になる。
「さあ、わしにできることかなあ」
「きっとおできになりますわ。わけは後でお話しいたします」
お千代もまた人に怪しまれるのを恐れるように、女たちのほうへなにげなさそうに立っていってしまった。
——さあ、わからん。
問題は野辺地大造にあるらしいとおよその見当はつくが、いったいどうしてくれというのか、小太郎は判断に苦しむのである。

4

座敷へ膳が出て、一同が夜食についたのはそれからまもなくだった。一同といっても、正面に野辺地大造と小太郎が並び、杉下父子がそれと向かいあって、座敷は主客四人である。
お千代と、手伝いの娘がひとり給仕役についていた。
「さあ、皆さん、なにもないが、ゆるりと一杯やってください」
杉下老人は如才なく客に杯をすすめてから、
「そうそう、小太郎さんははじめてだったな。こちらが野辺地大造先生、これはせがれの長一郎——それからこの方は、今日わしが途中で世話になった秩父小太郎さん、これから江戸へ修業に行きなさるんだそうだ」
と、ひととおり紹介の役をつとめる。
「秩父小太郎という若輩者です。どうぞよろしく」
小太郎はていねいに会釈をした。
「やあ」
大造は横柄にうけただけである。鼻の高い鋭い目の男である。
「おやじさま、よろこんでください。わしはもうそろそろ免許だそうです」
長一郎は他人のことなどどっちでもいいというように、さっそく切り出す。
「そうか。みんな野辺地先生のおかげだな」
「いや、長一郎さんは根がいい。毎日、朝と晩みっちりけいこをする。あれで上達しなければうそです」
野辺地がおだてあげるようにいう。
「それで、野辺地先生は近いうちに九段へ練兵館の試験をうけにつれていってくれるそうです。斎藤先生から免許をもらえば、もうどこへ出ても大威張りですからな」
長一郎は一本気らしく、目を輝かせている。
「それはそうだな、九段の斎藤弥九郎先生といえば、天下にひびいた名人だからな。それだけに試験も難しいだろうて」
「なあに、自信はあります。わしの籠手打ちは野辺地先生もほめてくれているんだから」
「さよう、貴公の籠手はたしかに名人芸だ。杉下流の籠手と名乗っても恥ずかしくない」
またしても大造がまじめな顔をしておだてあげる。
「おやじさま、わしが練兵館の免許を取ったら、約束どおり京へやってくれるでしょう」
「さあ、わしとしてはあまり希望しないことだが、約束だから、たっていけないとはとめまい」
杉下老人の顔に、はじめて憂いの色が出た。
「京へなにしに行かれるんです」
小太郎がのんびりと聞く。
「京には天下の志士が集まっている。わしは尊攘のために思いきり活躍してみたいんだ。人間男に生まれたからには、天下に杉下長一郎ありとその名を知られるような、大きな夢を持っているんだ」
長一郎は昂然といい放つ。これはただの剣術気ちがいではなく、そこに野心があったのらしい。
「しかし、尊皇はまずいいとして、攘夷などと

いうことは、そう簡単に実行できることかな」
老人は老人らしい心配をする。
「いや、それはできるできないの問題ではないのです。攘夷は安政以来朝廷不変の意思なんですから、ぜひ実行しなければならんのです。だからこそ、天下の志士が命を投げ出して奔走しているのです」
「危ないことだな。幕府の力をもってしても、攘夷には成算がないのではないか」
「そういう無力の幕府は、一日も早くわれわれの手でなんとかしなければいかんのです」
「これこれ、そんな過激なことはめったに口にせんことだ」
父子の争いに心を痛めながら、千代は座が近いから、さっきから小太郎にばかり酌をしている。当人は半ば上の空なのだ。
「秩父うじは江戸へ剣術の修業に行くのかね」
野辺地がじろりとこっちを見ながら話しかけてきた。

「はあ、まずそんなところです」
「今まで何流を修業していたんだね」
「甲源一刀流です」
「ああ、秩父の逸見多四郎さんの門弟か」
「そうです」
「免許を取ったのか」
「やっとこ免許です」
「名主どの、さっき草っ原道で怪しい浪人組にお会いしませんでしたか」
大造が老人のほうへ聞いた。
「出会いましたよ。尊攘のために京へ行くんだ、路銀の合力にあずかりたいというから、ひとりに一両ずつ二両包んでわたすと、有り金をみんなわたせと追いはぎに変わりました。しかたなく、紙入れごとやってきましたが、尊攘浪士の中にはそんなのが多い。困ったことです」
老人はせがれに聞かせるようにいって、まゆをひそめる。
「秩父の免許先生は、黙ってそれを見ていたのかね」
野辺地には野辺地の腹があったようだ。黙って見ていたのは、むしろ自分のほうだとは気のつかない大造である。
「いや、君子は危うきに近寄らずでな、わしがとめました。紙入れと命の取りかえっこではそろばんにあいません。なあ、小太郎さん」
杉下老人は苦笑している。
「貴公が秩父の免許ならちょうどいい、あした、ぜひ一本わしを試してみていただきたいな。もし貴公に破れるようでは、練兵館へ行ってもむだだ。そうでしょう、野辺地先生」
長一郎が意気ごんでいいだす。
「なるほど、たしかにそうだな。それはいいところへ気がつかれた。どうだね、小太郎うじ」
「そうですなあ。なにも修業ですから、一本やってもいいです」
小太郎も後へはひけなかった。
「おもしろい。試合などというやつは、なるべくおおぜい人が見ていないと、はずみがつかんものだ。あしたの晩、けいこにくる村の連中にも、後学のために見せてやろう。それがいいだろう、長一郎さん」
試合を見せ物にする。変なことをいうやつだと思ったが、小太郎にとってはどっちでもおなじことだから、黙ってわらっていた。
「よし、じゃあしたの晩ということにしよう。わしにとっては、門出の他流試合にもなるわけだな」
長一郎は自信があるらしく、ひとりで勇み立っていた。おかげで、翌日の逗留だけは、腹痛の仮病をつかわなくてもすむことになったわけである。
翌朝、例の納屋の前で、長一郎が野辺地に激しくけいこをつけてもらっている竹刀の音がしばらくつづいていたが、小太郎は別にそこへ行ってみようともしなかった。小太郎としては、たとえきょうの試合に負けても勝っても、どう

ということはない。ただ実力だけの試合をすれば、それでいいのだ。いや、本当のことをいえば、どこか心がけに狂ったところのある彼らに、負けようなどとは少しも考えていなかった。

野天道場の竹刀の音はやがてやんだ。いつまでもこっちが誘いに乗って出ていこうとしないので、張り合いがなくなったか、それともおくびょう者くみしやすしとでも見たか、まもなく彼らは連れ立って、どこかへ出かけていったようである。杉下老人は板橋の本陣に寄り合いがあるとかで、もうさっき出かけていた。

「小太郎さん、わざわざ足をとめさせて、とんだ迷惑をかけますな。きょうの試合は、せがれだからといって、決して遠慮いらん。十分打ちすえてやってください」

出がけに老人は、そっと小太郎にそうたのんでいた。老人としては、なるべくせがれを京へなどやりたくない。それには試合に負けてくれたほうがいいと望んでいるのだろう。

小太郎は野うぐいすが鳴いている庭の植え込みの中をしばらく歩きまわってから、座敷の縁先のほうへもどってきた。そこの泉水にこいが泳いでいる。縁に腰かけて、こいをながめながら、うっとりと早春の日差しを浴びていると、

「小太郎さま、お茶が入りました」

と、納戸からお千代が盆をささげて出てきた。

「ありがとう、いいお天気ですねえ」

そういえば、まだお千代のたのみというのを聞いていなかった。聞かなくても、ゆうべの話で、今はほぼわかったような気もするが、

「お千代さん、けさはおかげで腹痛をおこさずにすんだようだ」

と、わらいながら誘いをかけてみた。

「ごめんなさい、ご無理ばかり申し上げて」

「あしたの朝はどうしようか。もっとも、きょう試合に負ければさっそく逃げ出さなくてはならないんだから、あしたの心配は無用かな」

「あたくし、それが心配なのです。小太郎さま、きょうはぜひお勝ちになってくださいまし」

お千代は真剣な顔をしている。

「さあ、そううまく問屋でおろしてくれるかなあ」

「いいえ、じいやはきっとだいじょうぶだと申しています。父はどうしてもにいさんを京へやりたくないんです」

「そうだろうねえ、跡取り息子だからな」

「にいさんはどうして京へなどあんなに行きたがるんでしょう」

「男というものはだれでも天下に名をあげたい野心を持っている」

「小太郎さまも、それで江戸へおいでになるんですか」

「そう聞かれるとちょっと困るが、人間には分というものがあるからねえ。階段は一段ずつのぼらなくちゃならんものだ。まあ、わしは一人まえの人間になれればいいと思っている」

「おかあさまはお亡くなりになったんですってね」

「死にました」

「おとうさまは？」

「父はどこかに生きているかもしれない。しかし、わしは母ひとりに育てられた。だから、母ひとりの子どもだと思っている。その母がせっかく丹精して大きくしてくれたんだから、わしは母が悲しむような人間にはなりたくない。ただそれだけを心がけています」

「にいさんにその十分の一の心がけがありましたら、父がどんなに――」

いいかけて、お千代はふっとうなだれてしまった。

「いや、にいさんは決して悪い人じゃない。ただ、望みが大きすぎるんだ。悪くいえば、夢を見ているんだな」

「あの、小太郎さまは、野辺地先生をどうお思いになります」

それは打って変わったようにきびしい目にな

「じいやは、野辺地先生をにいさんにつけておいてはよくないというのです。ただにいさんをおだてているだけでなく、陰でなにか悪だくみをしている、野辺地先生にはたしかに陰に仲間がついていると、しきりに心配しているのです」

「悪だくみというと――？」

「にいさんが出ていってしまえば、あたくしがこの跡をつがなければなりません。そのあたくしを、いいえ、この杉下の家をあの人はねらっているのだ、きっとそうに違いないとじいやは申します。あたくし、恐ろしくて――」

なるほど、そういうことが絶対にないとはいいきれない。それにしては、野辺地という男はどこかに抜けたところもあるようだ。だいいち、十六、七の小娘にそこまで見抜かれてしまうようでは、そう知恵のあるほうとはいえない。

が、知恵はなくても、暴力さえあれば軍用金狩りができる時勢なのだ。事実、野辺地に陰の仲間があるとすれば、決して油断はできないのだ。

っていた。

「人の悪口はいいたくないが、あまり感心しないな。だいいち、ご老人がゆうべあの草っ原道で怪しい浪人組に行き会うだろうとわかっていて迎えに行こうともしないのは、親切心がないんだ」

「あたくし、にいさんもそうだと思います。にいさんのは自分のことばかり夢中になっていて、ついうっかりしたのでしょうけれど、そんな心がけで京へなど行っても、なんにもできないんじゃないかと思います。いいえ、だから、父もあたくしも、にいさんのことを心配するのです。そんなにいさんだから、野辺地先生などを信用するのだと思います」

「わしはお千代さんのいうことに賛成する。しっかりしてるなあ、あんたは」

小太郎は感心した。虫も殺さぬような顔をしていて、よくずけずけとこれだけのことがいえると、思いがけなかったのである。

だ。

「いったい、ご老人はそこまで気がついているのかしら」

「いいえ、父はただにいさんのことばかり心配していますので、――それに、じいやも野辺地先生が板橋で仲間のような浪人者ふたりと話しているのを見かけたというだけで、まだたしかな証拠を握ったというわけではないからと、父の耳には入れていないのです」

「わかった。お千代さんもじいやも、わしにそれを探ってくれとたのみたかったんだね」

「きっとご迷惑だとは思ったのですけれど、ほかにおすがりする人がいないのですもの」

「しかし、問題が問題だからなあ。こいつは試合のようにそう簡単にいくかなあ」

だいいち、人の悪事をあばくなどという仕事は、そう気持ちのいいものではない。

「いいえ、別になんにもしていただかなくても、小太郎さまのような方にうちに泊まっていただくだけでも、あたくし安心なのです」

「すると、わしは当分、毎朝、腹痛をおこさなくちゃならないんだねえ」

小太郎は思わずそんな冗談が口に出たが、とにかく現にここに災難にあおうとしている者があるのに、男として見捨ててもいけない。

「よし、なんとか考えてみよう。せっかくお千代さんがわしを信用してくれたのに、それを裏切っちゃ悪いからね」

「うれしい、あたくし」

お千代は飛び立つようにたもとを胸に抱いて、おとめらしいよろこび方をかくそうとしない。

ふっと玄関のほうから庭へまわってきた惣吉が、せかせかと近づきながら、

「お千代さま、すっかり話したかね」

と、目を光らせながら聞いた。

「お願いしたわ、じいや、小太郎さま引きうけてくれますって」

「そうかね。それはよかった。——ところで、小太郎さん、いま若だんなから、変な使いがやってきたぞ」

ただごとでない顔の色だ。

5

「じいや、にいさんからなんといってきたの」

お千代は心配そうにじいやの顔を見る。

「なあにね、いま新田の三造が裏口からやってきて、野良へ出ていたら若だんなが通りかかって、使いにたのまれたからやってきた。口上は、お客さまの秩父小太郎さんにぜひ話しておきたいことがある、草っ原の三本松のところで待っているから、すぐ出向いてくれるようにっていうことだ」

「野辺地先生もいっしょなのかしら」

「いっしょにいたって話だ」

「にいさん、小太郎さまをそんなところへ呼び出して、どんな話があるんでしょう」

「さあ、若だんなが話があるんでなくて、野辺地がなんかたくらんでいるんだろう。三本松だなんて、場所がおもしろくねえだ。小太郎さん、どうするね」

惣吉は目を光らせながら聞く。

「じいやさん、その使いの者は、まだ返事を待っているのかね」

小太郎は念のために聞いてみた。

「いいや、返事はいらねえっていったといって、もう帰ったです」

「ふうむ」

すると、大造の腹は、逃げるんなら今のうちだぞ、来るんなら来てみろと、半分は脅迫、半分は果たし状を突きつけたつもりなのだろう。

「じいやさん、とにかくわしは行ってみることにする」

「行きなさるかね」

「うむ。ことによると、野辺地の本性がわかるかもしれない」

「おれも、なんだかそんな気がするんだが」

「あの、小太郎さまおひとりでだいじょうぶでしょうか」

お千代はたった今、自分が野辺地の素姓をさぐってくれるようにとたのんでいたばかりなので、もし小太郎の身に間違いがあったらどうしようと、おろおろせずにはいられない。

「お千代さん、そんなに心配しなくてもいいんだ。ことわざにも、案ずるより生むがやすいということがある」

小太郎はわらいながら刀を取って立ちあがり、

「じいやさん、草っ原の三本松というのは、どの辺だね」

と、惣吉に聞いた。

「村を出外れて、きのう通ってきた草っ原道を少し行くと、左手に大きな三本松が見える。そこまでずっと小道がついているから、すぐわかるだ」

「ありがとう。じゃ、ちょっと行ってくる」

「気をつけてください、小太郎さん」

「あたし、どうしたらいいかしら」

いまさら引きとめることばもなく、お千代はひしとたもとを胸へ抱きしめている。すがりつくような熱いまなざしだ。

「だいじょうぶ——。すぐ帰ってきます」

その目へ、にっとわらってみせながら、小太郎は大股に庭から納屋の前の作場へ出てきた。

きょうの夕方、この野天道場で長一郎と試合をすることになっている。その長一郎が今、三本松で待っているという。ゆうべ見たところでは、若だんな育ちで、かなり自尊心が強そうだから、無論、試合の勝負をゆずってくれなどという交渉ではあるまい。

——やっぱり、じいやのいうとおり、野辺地になにかたくらみがあるんだろう。

お千代の話では、野辺地は長一郎に親切にして、早く京へ旅立たせ、老人の信用を得て、お

千代の婿養子になりたい野心があるのだという。それが本当だとすれば、長一郎がきょう試合に負けると京への出立がそれだけ延びることになるのだから、都合が悪い。今のうちになんとか口実を設けて自分が挑戦し、じゃま者を追っ払ってしまう、そんな虫のいいことをたくらんでいるかもしれない。

——小細工をするやつだ。

小太郎は野辺地など少しも怖いとは思わなかった。立ち会ってみなければどのくらいの実力があるかはわからないが、策をろうしたがるやつにかぎって、腕のほうは案外未熟なものである。

きのうの草っ原道へ出ると、なるほど、じいやがいっていたとおり、左手のやや奥へ入ったあたりに、松の木が三本ひょろひょろと空へのびているのが目についた。

草っ原は枯れ草の根元に青草の芽はもえ出しているが、見た目の表面はまだ一面に深い枯れ草におおわれ、晴れた空の色も寒々として、いかにも春浅しといった風景である。

小太郎はまもなく三本松へ出られそうな小道を見つけ、ゆっくりと草原へ入っていった。小道は案外うねうねと曲がりくねりながら、三本松まで七、八町もあったろうか。その辺からは振りかえってみても、もう街道も志村も枯れ草の下へ沈んで見えなくなっていた。足にはそれほど感じないが、土地はゆるい高低を作って、この辺は低地になっているのだろう。

小太郎はずっと三本松を目あてに注意して歩いてきたのだが、まだどこにも人影一つ見えない。

「おかしいな、わしのほうが一足早くきたということになるのかな」

そんなはずはないがと、やっと三本松のあたりへかかろうとすると、そこの土手の枯れ草の中から、浪人風の男がふたり、いきなりぬっと立ち上がった。いかにもこっちの近づくのを待っていたという態度、顔つきである。

——はてな。

小太郎はびんと頭へくるものがあったので、黙ってふたりを見ながら立ち止まった。

「やあ、貴公は名主の杉下さんの家へ泊まっている秩父小太郎うじだろうね」

はたして、背の高いほうが、心やすげに話しかけてきた。

「そうです。わしは秩父小太郎だが、あなたがたは——？」

「拙者は蒲原昌作、これなる連れは川村六之助、ふたりとも野辺地の同志です。見知りおいてくれたまえ。実は、野辺地にたのまれて、さっきから貴公のくるのを待っていたんだ」

「すると、野辺地さんはここへは来ないんですか」

「さよう。都合が悪くて来られないものだから、われわれが代理に来たわけです」

「ご苦労ですなあ。それで、野辺地さんの用件というのはなんです」

小太郎はもう大体の様子を察しながら、おだやかに聞いた。

「われわれはいうまでもなく、いささか国事に奔走しているものです。むろん、長一郎くんも同志のひとりなんだが、貴公もぜひ仲間へ入るように勧誘してみてくれと、野辺地がいうんだ」

「わしを同志に入れて、なにをしようというんです」

「われわれの目的は、さしずめ横浜の夷人街焼き払いにある。それを実行するにはもっと人数もいるし、軍用金もいる。長一郎くんは家の蔵から千両箱を一つ持ち出すことになっているんだが、老人の目がきびしくて、なかなかうまくいかない。貴公がもし同志になってくれるなら、いっそこの際非常手段に出るのも、勤皇のためにはまたやむをえないんじゃないかというところまで話が進んできているんだ。どうだろうなあ、貴公の考えは」

蒲原は小太郎が同志になることを承諾したかのごとく、そんな大事を平気で打ち明ける。本当に彼らが国事に奔走する志士だとすれば、軽率もはなはだしい。

「驚きましたなあ。長一郎さんは京都へ行きたがっているんじゃなかったのか」

小太郎はわざとびっくりした顔をみせる。

「むろん、こっちがすめば、われわれもいっしょに京へは行く」

「それで、非常手段というのは、どんなことをするんです」

「事は急を要する。まさか、長一郎くんが親を縛るわけにはいかんから、今夜貴公に名主どのを縛ってもらって、その間にわれわれの手で蔵の千両箱を持ち出してしまおうというんだ」

「つまり、軍用金狩りをやるんですな」

「尊攘のためにはやむをえん」

「わしは名主どのだけを縛ればいいんですか」

「いや、ついでに娘も、じいやも、家にいる者は全部縛ってもらう」

「野辺地さんは手伝ってくれないんですか」

「野辺地は今夜、長一郎くんと板橋で遊んでいて、ちょうどその時刻に帰りあわせる。そのほうが戸じまりがあいていて都合がいいんだ」

野辺地の計画はこっちを賊に落とそうという腹らしい。敵の手に乗ったと見せて、夜まで待ってやろうか。それとも、ここでふたりの両皮をはいでやろうかと、小太郎がちょっと思案していると、

「どうだ、やってくれるだろうね」

と、蒲原が狡猾そうな目を光らせる。

もうひとりの川村というやつは、始終むっつりとこっちの態度から目を放さず、人を食ったような凶悪な面魂である。

「わしは貴公らの尊攘にはくみしてもいいが、軍用金狩りは虫が好かないのでねえ」

小太郎は思わず口に出してしまった。

「なにっ」

「とにかく、よく考えてから、この返事は後で直接野辺地さんにすることにしよう」

「おい、小僧、われわれをあんまり甘く見るなよ」

蒲原はいよいよ本性を出してきたらしい。

「いや、別に甘く見ているわけじゃないんだが――」

「こっちがこれだけの秘密をもらしているんだ、そんな返事で、無事にここが帰れると思っているのか」

「では聞くが、貴公たちは本当に横浜の夷人街を焼き払う気なのかね」

「むろん、決行する」

「同志は何人ぐらい集まっているんだね」

「十人ぐらいかな。人数は軍用金さえあればいくらでも集まってくる」

「やめたまえ。金で集まってくる同志など力にはならんし、軍用金狩りは一歩誤ると押し込み強盗になる。わしは賛成できんな」

「うぬっ」

凶悪な面魂の川村が、いきなり抜き打ちにだっと踏みこんできた。

たぶんそう来るだろうと覚悟して、心に油断のなかった小太郎だから、

「あぶない」

ひらりと飛びのいて、とっさにこっちも抜きあわせた。

「やっちまえ――たたっ切れ」

蒲原もわめきながら、血相を変えて抜刀した。明るい春の日差しに、敵味方の白刃が殺気をきらめかせながら対峙する。やや西風の強い日で、風は木の枝をならし、枯れ草をなびかせ、三人の袴のすそを吹きすぎては、またごうっと吹きつけてくる。

小太郎はふたりの剣先にそうすごさは感じなかった。どっちも大した腕まえではないようである、と見たとたん、

「どうした、ご両所、そんなことでは軍用金狩

りもできんぞ」
と、つい不敵な罵倒が口に出た。
「くそっ、――えいっ」
川村というやつは命知らずの度胸免許らしく、またしてもだっとがむしゃらに踏みこんでくる。
すっと身をひいて、空を切った敵の体勢がのびきった肩先へ、
「とうっ」
小太郎の飛燕の太刀が、むろん命を取るまでのことはないから、軽く決まった。
「わあっ」
それでも敵はたしかに切られたと感じたのだろう、絶叫をあげながら前へ突んのめっていく。
「やったな、――くそっ」
蒲原は狂気のように一刀を振りかぶったが、それは二間以上も離れたところからで、しかも、じりじりしりごみをしている。もうまったく闘志を失っているのだ。
「よしたまえ、貴公の同志は浅手だ。早く介抱してやるほうが、友情というものだろう」
小太郎は刀をぬぐって鞘におさめ、さっさと今来た小道をもどりだした。
蒲原はぼうぜんと突っ立って見送っているようである。

6

――バカなやつらだ。
草っ原道を街道へ出てくるまでは、小太郎もそんな優越を感じて、若いからいささか得意でもあった。
が、はるかに志村の人家の屋根が目につき出してから、ふっと気がついたのである。
あのふたりは長一郎も同志だといっていた。むろん、彼らは本物の尊攘浪士ではあるまい。軍用金狩り専門の不逞浪人なのだ。万一、長一郎がだまされてそのしり馬に乗っているとすると、事は少し面倒になってくる。

――そうじゃあるまい。それほどあの若だんなはうかつでもなさそうだ。
すると、今のふたりはまったく野辺地だけの差し金で、あそこへ自分を呼び出したことになる。仲間にするか、それとも切るか、どっちかにしろといいつけられてきたのだろう。
が、そのふたりが失敗したとなると、当然、野辺地はもう杉下家へもどってこられなくなる。そんなことで金もお千代もあきらめてしまうような単純な野辺地だろうか。しかも、今、野辺地は長一郎という人質をちゃんと手もとへつかんでいるのである。
――失敗だったかもしれないな。やっぱり、夜まで敵の手に乗って様子を見ているべきだったかもしれぬ。
小太郎は急に不安になってきて、いそいで家へ帰ってみた。
「まあ、小太郎さま」
さっきの縁先へまわっていくと、足音を聞きつけて走り出てきたお千代が、くつ脱ぎの上に立った小太郎の胸へ、いきなりすがりついてきた。ほかに人目もなかったが、お千代のはたとえ人目があってもそうせずにはいられない必死なものがあったのだろう。
「うれしい、あたくし」
「無事に帰ってきたからね、お千代さん」
小太郎はやさしくその肩を抱きながら、お千代のおとめ心に思わず微笑せずにはいられなかった。
「あたくし、小太郎さまにもしものことがあったら、生きてはいられないと思いました」
「そんなにお千代さんにはわしが弱い男に見えるかなあ」
「うれしい、強い強い小太郎さま」
「ところがねえ、三本松へ来ていたのは、にいさんでも野辺地でもなかったんだ」
小太郎はそっとお千代を胸から放しながらいう。

「まあ、じゃだれがきていたんです」
お千代はびっくりしたように目をみはる。
「たぶん、じいやさんが板橋で見かけたという野辺地の仲間なんだろうね。浪人者がふたりで待っていたんだ——じいやさんはどこにいるかしら」
「あたくし、呼んでまいります」
利発なお千代はいそいで惣吉を呼びに行く。
まもなく三人で座敷へ額を集め、小太郎はかくしておくことではないと思ったので、三本松での委細をくわしくふたりに話して聞かせた。
「野郎め、やっぱりそんな大それたことをたくらんでいたんだな」
「にいさん、だいじょうぶでしょうか」
お千代もじいやも、おもいおもいに重いため息はついたが、ではどうすればいいかという知恵は出そうもない。とにかく、夕方まで長一郎の帰りを待ってみるほかはなかった。
その長一郎が野辺地といっしょにもどってきたのは、やがてたそがれに近く、納屋の前の野天道場では、集まってきた若い衆の門弟たちが、先生ぬきで勝手に申し合いげいこをはじめてからであった。
「小太郎さま、にいさんが帰ってきました」
お千代がすぐ小太郎の居間へ駆けこんできて告げた。
「野辺地もいっしょかね」
「いっしょなんです。どうするつもりなんでしょう」
「さあ——。しかし、無事でもどってきたのはなによりだった」
ことによると、野辺地は長一郎を人質にとって脅迫状をよこすのではないかと、小太郎は心配していたのだ。
そのいちばん最悪の場合はどうやらのがれたようだが、おそらく野辺地はそれにかわる第二の手段を講じてきているだろうから、まだ決して油断はできないのだ。

「ご老人はまだもどってきませんか」
「ええ、父はおそくなるかもしれません」
お千代はなんとなくほおを赤らめている。じいやの話では、杉下老人には板橋に愛妾があるのだそうだから、これはおそくなっても心配はない。
「お客さま、——お客さまはいますかね」
庭へきてだれか呼ぶ者がある。
「お客さまって、わしのことかね」
「はあ、若だんなが、一本教えてもらいたいで呼んできてくれといったです」
長一郎が若い衆を迎えによこしたのだ。
「よろしい。すぐ行く」
「はあ、お願いしますだ」
迎えの者が引きかえしていく足音を耳にしながら、
「お千代さん、今夜はなるべくじいやさんといっしょにいるほうがいい」
小太郎はお千代にそういいおいて、すぐに廊下へ出た。
「小太郎さま——」
お千代はあえぐように呼んで、必死な顔をしていた。
——いまさらなんのための試合。
小太郎がそう思いながら、たき火のあかるい野天道場へ近づいていくと、若い衆たちはけいこをやめて、なにかものものしくいっせいにこっちを見ている。
野辺地と並んで突っ立っている長一郎の顔も、ひどくきのうとは違っているようである。
「野辺地先生、やはり試合は決行しますかな」
小太郎はまっすぐ野辺地の前へ行って、じっとその目を見すえた。
「うむ、決行する。その前に、長一郎さんの希望でな、わしが一本貴公の腕まえを試してみることになったから、あしからず」
この悪党はぬけぬけといってのけるのだ。
「承知した。試していただきましょう」

「ただし、木剣試合だからそのつもりで」
木剣試合は真剣勝負とおなじで、へたをすると命にかかわる。そうか、おれを打ち殺す気だな、うぬぼれの強いやつだと小太郎は思いながら、
「よろしい。そのほうがおたがいに張り合いがあるでしょう」
と、にっこりわらった。
「そうか、承知だな」
ちょっと意外そうな顔をしたのは、木剣試合と聞いてこっちが逃げ出すとでも思っていたのだろう。
小太郎はわざと相手にならず、さっさと身支度をはじめる。
「ようし」
当てが外れたらしい野辺地は、ほえるようにわめいて自分も手早くたすきはち巻きに身をかため、若い衆の用意していた木剣を取ってそれへ出た。
小太郎もわたされた木剣を二度三度素振りをくれて試してから、すっと野辺地の前へ行って立つ。
「来いっ」
「おうっ」
敵があいさつぬきでいきなり木剣を構えてきたので、小太郎もすかさず青眼につける。
はじめからけんか腰の、妙に殺気をはらんだ木剣勝負だから、見ていた若い衆はあっと息をのみ、みんなわがことのように顔色を変えていた。
「えいっ」
「おうっ」
野辺地は一気に勝敗を決せんとするもののごとく、狂気のような気合いでのしかかってくる。
昼間のふたりより、たしかに腕は二、三枚上のようだが、やっと免許というところだろうか。田舎道場ではあるが、関東に知られた甲源一刀流の宗家で免許皆伝を許され、長く師範代をつとめあげてきた小太郎とは、修業からいっても、心がけからいっても格段の差があるのは当然なことだ。ぴたりと両眼の間へ剣先が吸いついてぐいぐいと圧倒してくる小太郎の底力を意識すると、野辺地はもう手も足も出なくなり、明らかに狼狽の色をうかべた。
「えいっ」
澄んだ小太郎の肺腑を突くような気合いに対して、
「おうっ」
彼はただ死に物狂いの絶叫をかえすばかりである。
「えいっ」
もう十分と見た小太郎の木剣が、青眼からさっと上段にかわった。一気に打って出ようとするすさまじい気魄に、野辺地はひとたまりもなく、
「まいった。——まいりました」
ぱっと必死に飛びさがり、どすんとそこへしりもちをついて、恐怖の顔をゆがめあえいでいる。
腕の一本も打ち折っておこうかと、小太郎はまだ半身になって上段の構えをくずさない。
「あやまる、まいりました。わしの負けです」
野辺地は身動きひとつできず、恥も外聞もなく哀願の声になる。
「よし。それなら、こんどのところは許しておこう。このまま黙ってここを立ち退きたまえ」
人のいい小太郎には、やっぱり尾をふる犬は打ちかねたのだ。
「わかった。すぐに立ち退くから、——たしかに参りました」
その声に、小太郎ははじめて木剣をひいた。
いそいで立ち上がった野辺地は、こっちの顔をうかがいながら、はち巻きを取り、たすきを外し、額の脂汗をふいて、ふっと長一郎のほうを向き、
「若だんな、わしはこれで失礼する。しかし、

約束のものだけは忘れてはいかんぜ。わかっているな」

妙な念の押し方をして、

「じゃ、諸君、失礼」

なんとなくふてぶてしい態度で、門のほうへ歩きだした。

ほっと息はついたが、まだだれも口のきける者はない。長一郎はと見ると、じっとくちびるをかみしめてうなだれているのだ。

「長一郎さん、ちょっと聞きたいことがある。いっしょに来てくれぬか」

小太郎は長一郎がかすかにうなずくのを見てから、

「一同はけいこにかかってくれ、わしもすぐもどってくる」

若い衆たちにいいおいて、長一郎を庭の植え込みのほうへ誘っていった。

7

青い月かげが明るく植え込みに明暗を作っていた。そこの小道へ長一郎をつれこんで、

「長一郎さん、貴公は浦原昌作と川村六之助という浪人者を知っているかね」

と、小太郎はまず聞いてみた。

長一郎は黙ってうなずく。

「わしはきょう、野辺地の呼び出しをうけて、草っ原の三本松へ出向いたが、野辺地は来ていなくて、蒲原と川村が待っていた。野辺地の同志だというから、なんの用かと聞くと、われわれは尊攘のために横浜の夷人街を焼き払う計画を立てている。それについて、長一郎さんが軍用金として家から千両持ち出すことになっているんだが、老人の目がきびしくて持ち出せない。事は急を要するんで、今夜非常手段を取ることになった。つまり、杉下家へ軍用金狩りに押しこむんだが、貴公も同志にならぬかと、相談を

うけた。むろん長一郎さんも承知だといっていたが、本当にそんな話があったのかね」

「うそだ、そんなこと――」

長一郎が吐き出すようにいう。

「そうだろうな。彼らの力で夷人街焼き払いなどできるもんじゃないし、また本当に実行するような腹のある連中なら、初対面の者などにそんな大事をべらべらしゃべる軽率はしない。要するに、彼らのはただ金が目的の偽浪士なんだ」

ここまで打ち明けて話してくれれば、もう長一郎の口がほぐれるだろうと思ったのだが、長一郎はあいかわらずむっつりと突っ立っている。

そんなに反感を持たれるはずはないんだがなあと小太郎は思いながら、ふっと気がついた。

「そういえば、わしも杉下家から見ればどこの馬の骨かわからん人間ということになるんだから、余計なお節介はしないほうがいいかもしれないんだが、人の災いを黙視しているのはひきょうだから、一言だけ注意しておこう。野辺地の仮面はついにはがれたんだ。あの男は今夜ここへ帰ってこられないのが本当だ。それを貴公といっしょに平気でのこのこもどってきたのは、木剣試合でわしを打ち殺せるというううぬぼれがあったからだろうが、そのわしを打ち殺した後で、彼はなにをたくらんでいたか、貴公はもうそれをちゃんと知っているはずだと思う。どうか、ご老人やお千代さんが不幸にならんよう、十分気をつけてあげてほしい。わしはこれで当家をおいとまする。いろいろ造作にあずかってありがとう」

小太郎としては、なにか野心があって親切を見せようとする、そんな誤解をうけてまでこれ以上とやかく世話を焼くのは、それこそ余計なお節介になるし、不愉快でもあるから、このまますぐ杉下家を立つ気になったのだ。

「待ってくれ、秩父さん」

はっとしたように長一郎がとめた。

「実は、わしは困っているんだ」

長一郎の顔にはあきらかに苦悶の色が濃い。
「どうしたんだね。なにか心配なことでもあるのかね」
「わしは野辺地に脅迫されているんだ。どうしていいかわからん」
一度弱音が出てしまうと、この若だんな育ちの強情者も、急に虚勢が張りきれなくなったのだろう。
「小太郎さん、たのむ、相談に乗ってくれないか」
と、哀願するようにうなだれてしまう。
小太郎は改めて長一郎の前へ立った。
「野辺地はきょうになって、五百両に負けておくから、なんとか都合しろというんだ。そのかわり、秩父小太郎は追っ払ってやるというんだ」
「わしを追っ払う――？」
「野辺地は、あんたも金が目当てで家へ入りこんだんだ、ほっておくと妹のお千代までいいようにされてしまうぞといっている。むろん、わしはそんなことは本当にもしなかったが、ただ困るのは、わしがうむといわなければ、軍用金狩りの仲間にして代官所へ密告すると脅迫しているんだ」
「念のために聞いておくんだが、長一郎さんは彼らといっしょに軍用金狩りをやったことが一度でもあるのかね」
「いや、そんなことは絶対にない。わしは今日まで、うかつといえばうかつだが、野辺地を九段の高弟だとばかり信じていた。今から思うと、あの男こそうちの金とお千代が目的で、今までねこをかぶっていたんだ。そこへおやじさまがあんたを連れてきたんで、じゃまになるから、きょう蒲原と川村に切らせようとした。それが失敗したんで、もうだめだと思い、急に居直ったに違いないんだ」
「まあ、そうだろうな。で、その五百両はどこへ持ってこいというんだね」
「今夜四ツ（十時）までに、三本松へ来いというんだ」
「なるほど、あそこなら捕り手を向けられてもどこへでも逃げられる。さすがに抜け目がないな。――それで、貴公の考えは」
「いろいろ考えたんだが、たとえ軍用金狩りのことは無実でも、密告されればこういう時勢だからただではすまない。やつらに五百両やってこの場をすませるとしても、一度弱みをつけこまれると後がうるさいと思う。わしさえ家にいなければいいんだから、この際いっそ京へ出奔しようと決心したんだ。ただ心配なのは、その後で彼らが家へ押し込みをかけやしないかということなんだ。どうだろうな、小太郎さん」
長一郎としても、こんどはよくよく考えてのことらしい。
「長一郎さんはどうしても京都へ行きたいのかね」
「行きたいと思う。わしは男と生まれて、ただ名主のせがれで一生を終わりたくないんだ。こんな未熟な腕まえでどれだけのことができるかわからないが、やるだけのことはやってみたい」
さすがにおのれの分だけは反省してきたようである。
「いや、国事に奔走するということは、腕だけの問題じゃない。むしろ、頭の働きだと思う。しかし、ご老人はあんたを手放したくないようだな」
「おやじにすまないが、こうなってはもうしようがない、無断で出奔しようと思う。あんた迷惑だろうが、後でおやじによくわけを話して、やつらに十分気をつけるようにといっておいてくれないか。たのみます」
はじめて長一郎が小太郎に頭をさげるのだ。
小太郎は考えざるをえなかった。長一郎がその気なら、とにかく京都へ行って見聞をひろくしてくるだけでも、決してむだではない。しか

こからすぐ長一郎を村外れまで送っていくことにした。

「小太郎さんは強いなあ」

我の折れた長一郎は、道々しみじみといった。

「なあに、腕力などいくら強くても、たかが知れたものだ。上の者とやれば、やっぱり負けるんだからね。人間は腕より心がまえだとわしは思う」

「なるほど、たしかにそうだな」

「わしは、ゆうべ、ご老人の帰りが夜になったのに、野辺地は道まで迎えに出ようともしなかった。しかも、怪しい浪人者が屋敷をのぞいていたのを知っていて、自分たちのけいこで追いかえしたのだと、それを自慢そうに話していた。こりゃ大して腕のある男じゃないと、わしはすぐけいべつしてしまった」

「そういわれると、なんだか恥ずかしいや」

「どこへ行っても、心を大切にしたまえ。邪心のない真心というやつは、剣でも切れない。世

し、親に無断で家を出るのは賛成しかねる。

「長一郎さん、こうしようじゃないか。あんたはこれから板橋の旅籠へ行って、今夜そこで泊まるんだ。ご老人のほうも、野辺地のほうも、ご老人がもどってきたらわしからよく話して、なんとか両方とも解決をつける。その上で、今夜かあしたの朝までには、ご老人といっしょに必ずあんたを板橋へたずねていく。どうだろうな」

「そうしてくれればありがたいが、野辺地のほうはうまく話がつくかなあ」

「まあ、なんとか骨を折ってみよう。わしに任せておいてくれ」

「すまん、どうかたのみます」

話がきまると、長一郎はやっと安心したようだ。いわば野辺地らにねらわれているからだなのだから、そうときまったら、今夜はだれにも行く先を知らせずに早く身をかくしたほうがいい。板橋の旅籠は伊勢屋ときめて、小太郎はその中にこれほど強いものはないんだ」

「真心ねえ。たしかにそうだなあ。わしはあんたともっと早く友達になればよかった」

「これからだって、おそくはないさ。われわれの人生はまだ長いんだ」

「あんたと話していると、たのしくなってくるなあ」

長一郎は正直にいってから、

「小太さん、おやじと妹のこと、本当にたのみます——これも真心のうちかな」

と、冗談のようにわらった。心がすなおになると、いっそう家のことが心配になるのだろう。

「引きうけた。できるだけのことはやってみよう。わしは真心の本家だからね」

小太郎もそんな冗談をかえして、村外れで長一郎と別れたのである。

8

「小太郎さま——」

杉下家へ引きかえしてきて、小太郎がくぐり門から入ると、いきなりお千代が飛びついてきた。

「どうしたんだ、お千代さん」

何事がおこったのかと、小太郎は時が時だけにどきりとした。

「あたし、あたし、みんな聞いていました」

「聞いていた——？」

「ええ、あの植え込みの中にいたんです。——うれしい、あたし」

「ああ、にいさんとの話か」

なあんだと、小太郎は思った。

「にいさんやっと目がさめてくれて、みんな、みんな小太郎さまのおかげです」

お千代は小太郎の胸へ顔を伏せたまま、いじらしくすすりあげる。

納屋の前の野天道場からは、まだ盛んに竹刀の音がしていた。

「さあ、もういい。みんなでなんとかして、に

いさんを無事に助けなけりゃならないんだ。おとうさんまだ帰らないのかね」
小太郎はお千代の肩をやさしく胸から放しながら聞いた。
「まだです。どうしたらいいでしょう。お金で、お金で、野辺地はにいさんを許してくれますかしら」
こんどは急にそれが心配になってくるお千代だ。
「いや、きっとなんとかなるだろう。わしは少し門弟衆のけいこを見てやるから、おとうさんがもどったら知らせてください」
「小太郎さま――」
「なんだね――」
「あたし、あたし、ご恩は一生忘れません」
十六娘の目はいっぱい涙をためながら、もう思慕の色をかくそうともしなかった。
「そんなに恩に着なくてもいいんだよ、お千代さん」
「いやっ、いやっ、きっとあたしたちを守ってやるといってくださらなくては」
「それは守ってあげるとも。さあ、行こう」
小太郎はお千代の肩を押しながら歩きだした。
今夜も月の美しい晩である。
野天道場の門弟たちは、この新しい若くて強い先生を迎えて、みんな大張りきりだった。小太郎もまた、あるいは今夜一晩の先生になるかもしれないので、できるだけひとりひとりに、親切にけいこをつけてやった。
まもなく杉下老人が帰ってきたので、その夜のけいこを打ち切ると、
「先生、またあしたもけいこをたのみます」
と、門弟たちは口々にたのみこんで、よろこんで帰っていった。
ふろ場へ行ってひと汗流し、さてこれからが少し面倒だと思い、茶の間へ行ってみると、炉端でお千代と惣吉が留守の間のことを、あらまし老人に話しているところである。
「ご老人、お帰りなさい」
「小太さんか。ただいまもどりました。あいにく碁敵に引っかかりましてな、おそくなりました」
微笑をたたえてはいるが、どこか気重い顔色はかくしきれない。
「さっそくだが、きょうはせがれがたいそうお世話をかけましたようですな。今これたちから聞いて、おどろいているところです」
「いや、敵ははじめから計画してかかったことですから、天災と考えるほかはありません。さしずめ問題は彼らが脅迫している五百両の金ですが、ご老人のお考えはどうでしょうな」
小太郎は単刀直入に切り出してみた。
「それだて――。まるでどぶへ捨てるような金だが、一つ間違うとああいう破れかぶれの人間はなにをやりだすかわからない。せがれの命を五百両で買ったと思えば安いものです。大難を小難とあきらめて、金は出してやろうと思います」
さすがに老人はわかりが早い。
「結構です。いくらあくどい彼らでも、要求どおりの金を手にすれば、もうご当家へいたずらをすることだけはやめるでしょう。長一郎さんのかわりにわしがそれを三本松へ持参して、よく彼らに意見をしてやりましょう」
「小太さん、それはいけない。あんたが行くと、向こうは試合の恨みがあるから、つい殺気立つ。間違いのもとだ。金は惣吉に持たせてやりましょう。――なあ、惣吉」
「それがいいです。おれならおおかみどもも安心して金がうけとれるだろうから、ようくいって聞かせてやるべ」
惣吉は大きくうなずいていた。
「なるほど、じいやさんならやつらも安心するだろう。――そこで、ご老人、長一郎さんのことなんですがねえ、この際ぜひ京都へ出てみた

いという希望が強いようです」
「あれは今、どこにいるのです」
杉下老人の顔が急に気難しくなる。
「とにかく、こっちの話がつくまで身をかくしているほうがいいと思って、今夜は板橋の伊勢屋へ泊まることになっています」
「小太郎さん、ああいう分別の浅い未熟者が、京都などへ出てなにができるだろうな」
片腹痛いといった苦々しい口ぶりである。
「世間知らずで、わがままで、気位ばかり高くて、あれはまだ一人まえの人間になっていない男だ」
「それは長一郎さんもこんどのことでよく自覚したようです。わしは村外れまで送っていきながら話しあったんですが、こんな未熟な腕ではだめなことはわかっているというから、そんなことはない、人間は腕より心だ、真心は剣では切れないと話しました。すると、長一郎さん感心してくれて、わしはあんたともっと早く友達になるべきだった、会うのがおそすぎたというんです」
「本当ですわ。小太郎さまもがもっと早くうちへきてくれたら、にいさんだって野辺地などにだまされなくてすみましたのに」
お千代がそばから悔しそうにいう。
「いや、わしは思うな。人間はいろいろな失敗をするから、だんだん偉くなるんだ。はじめから偉い人間なんていない。だから、長一郎さんにもそういったんです。今から友達になったっておそくはなかろう。われわれはまだ若いんだ。これからの人生のほうが長いとね」
「せがれはなんといいましたな」
老人が微笑しながら聞く。
「あんたと話していると、たのしくなるといっていました」
「それがわかれば、せがれも一人まえです」
老人は思わずいってしまってから、
「とにかく、五百両のほうが先ですな。惣吉、そろそろ支度をしてもらおうか」
と、口を濁して、炉端を立ち上がった。
「なあに、おれは別に支度もいらねえだが」
惣吉はどっこいしょと座を立って、主人の後へついていく。
時刻はかれこれ五ツ半（九時）をまわっていることだろう。
「おとっつぁんはどうしてもにいさんに行かれたくないんです」
ふたりきりになると、お千代が声をひそめていった。
「しかし、結局はご老人も許してあげるほかはないんじゃないかな」
「じゃ、そのかわり、小太郎さま、家にいてくださるの」
「さあ、それはちょっと困るな」
「だって、さっき、小太郎さまはあたしたちを守ってくれるって約束したじゃありませんか。いやだわ、うそをいっちゃ」
うまくことばじりをつかまえて、もう小太郎をどこへもやりたくないお千代である。
惣吉がちょうちんをつけて奥から出てきて、
「では、おれ、ちょっと三本松まで行ってくるです」
と、ふたりに声をかけて土間へおりた。
「ご苦労だなあ、じいやさん」
「なあに、なれた道だから、お千代さま、あんまり小太郎さんにわがままいうときらわれますぞ」
「知らない、じいやは」
惣吉が出ていくと、まもなく杉下老人が元の座へもどってきた。
「小太さん、わしはやっと腹をきめましたぞ」
なんとなく明るい顔である。
「長一郎さんのことですか」
「うむ、せがれのことです。あれの気性では、いい出したらやめろといってもなかなか承知すまい。望みどおり京へやりましょう」

「そうですか。長一郎さんもさぞよろこぶでしょう」
「そのかわり、せがれにも条件があるし、あんたにもたのみがある」
「どういうことです」
「いまのままでせがれは京へ行っても、なんの役に立つものではない。ここ半年の間、江戸でみっちり修業する、その修業の監督役を、面倒でもあんたにやってもらいたいんだが、どうだろうな、小太郎さん」
老人としてはそれが安心できる精いっぱいの親心なのだろう。
「さあ、長一郎さんがなんといいますかな」
「いや、せがれがなんといおうとも、これだけはぜひお願いしたいのじゃ」
「おとっつぁん、じゃ小太郎さんも江戸へ行ってしまうんですか」
お千代が不服そうにそばから口を入れた。
「そりゃおまえ、小太郎さんも江戸へ修業に来なすったんだから、ちょうどいいじゃないか。なあに、江戸はここからひとまたぎのところだ、いつでも遊びにきてもらえるんだし――なあ、小太郎さん」
老人はお千代の気持ちを早くも見てとったらしく、どぎまぎしながら、
「そうか、お千代も小太さんと話していると、その、たのしくなるほうか。そうかそうか」
と、わらいだす。
「知らない、おとっつぁんは」
お千代はまっかになって、たもとで顔をかくしていた。
「ご老人、じいやさんのもどりが少しおそいようですな」
気がついて小太郎がそういいだしたのは、それからまもなくだった。さっき四ツ（十時）の鐘を聞いてから、もうしばらくになるのである。
「そういえばそうだな。もうもどってもいいはずだ」

三本松まではそう遠いという道のりではない。大金を持っているだけに、杉下老人もちょっと不安な目をした。
「拙者がそこまで見に行ってみましょう」
「いや、そうまでしなくても――」
「しかし、相手が相手ですから、なにか間違いがあってはなりません。途中で出会えば、これに越したことはないし、――とにかく、迎えに行ってみます」
小太郎は思いきって立ち上がった。惣吉は案外がんこなところがある。ひょっとして余計な憎まれ口でもきいて、それが思わぬ災いをまねいたのではなかろうかと、小太郎は急に心配になってきたのだ。
「では、ご苦労でも、そうしてみてもらいますかなあ」
おなじ心配は老人にもあった。
「承知しました。すぐもどってきます」
「小太郎さま、気をつけてくださいね」
「だいじょうぶ、だいじょうぶ」
にっとわらってみせて、小太郎は戸口から出ていった。
――親切で、お強い小太郎さま。
上がりかまちまで見送ったお千代は、その人の足がやがて門のほうへ消えていくまで、うっとりとそこに立ちつくしていた。今別れた凛々しい笑顔がまぶたに焼きついている。なんだか胸が甘いような、切ないような。
――あたし、もうあの人を江戸へやりたくない。
かっとからだじゅうが熱くなってくるお千代だ。
「お千代、いつまでそんなところに立っているんだえ」
父親がやさしくたしなめた。
「おとっつぁん、おとっつぁんは、本当に小太郎さまをにいさんといっしょに、江戸へやってしまうつもり――？」

「だって、おまえ、あの人は江戸へ修業にきた人だ。まさかここへ縛っておくわけにもいかないだろう」
その父親の声をうらめしく背中に聞いて、お千代はすねずにはいられない。
——いいわ。なら、あたしもいっしょに江戸へ行ってしまうから。
ぷっとふくれて、まだそのまま突っ立っていると、今小太郎が出ていった戸口ががらりとあいた。
「あっ、おとっつぁん」
お千代は金切り声をあげた。
ぬっと戸口から押し込んできたのは、顔を宗十郎頭巾でかくしたふたりの浪人者で、ふたりとも抜き身を手にして、
「騒ぐな。声を立てると、たたっ切るぞ」
と、すごい目でお千代をにらみつける。

9

「どなたか知らんが、乱暴はしないでくだされ」
また軍用金狩りだなと見たので、杉下老人はあわてずに声をかけた。
「乱暴はせん。おとなしくしておれ。——おい」
背の高いほうの覆面が、素早く連れに目くばせをした。
「うむ」
この男はうなずいて、まだそこに立ちすくんでいるお千代のそばへ進むなり、手を引っつかんでぐいと土間へ引きずりおろす。
「あれえ、おとっつぁん」
お千代はもぎとられた花のようにたわいもなく土間へよろめき落ちて、恐怖の悲鳴をあげる。
「な、なにをするのだ。人の娘を——」
ぎょっと老人が血相を変えて立ち上がると、
「騒ぐな、人質にとるだけだ。早く金を出せ」
のっぽのほうがぐいと老人に刀を突きつけた。

「金はいくらでも出します。娘をかえしなさい」
「バカなことをいえ、金のほうが先だ」
問答のうちにも、お千代はぐいぐい引っ立てられて、
「放して、——助けてえ」
と、身もがきしながら、あけっ放しの戸口のほうへ連れ出されようとする。
老人はのっぽの切っ先におさえつけられて、どうしてやりようもない。
「野辺地さん、金は惣吉に持たせてやったはずだ。いくらなんでも、それではあんまり阿漕すぎますぞ」
顔はかくしていても、のっぽのほうはたしかに野辺地大造だと見たとたん、さすがの老人もそのあまりにもあくどすぎるやり方に、かっとからだじゅうが怒りにふるえてきた。
「なんだ、おれだとわかったのか、おやじ」
きらっと野辺地の目が残忍に光る。
「娘を、お千代を、どうしようというのだ」
「心配するな。さらっていこうとまではいわぬ。すぐ帰してよこすから、黙って待っておれ」
「いかん、いかん、そんなむごたらしい」
「むごいまねなどするものか、ほっておいても、どうせあの若僧に女にされる娘だ。おれが一足先にかわいがってやるだけの話よ」
「野辺地さん、金はいくらでも出す。それだけはたのむからやめてくれ」
「いや、金は五百両もらえばたくさんだ。煩悩の犬なんとやらでな、一度かけた男の執念。おやじ、変なじゃまだてをすると切るぞ」
凶悪な野辺地は、むらむらっと殺意を起こしたらしい。どうせ名を知られてしまってはという腹もあったのだろう、ぐいと片足を上がりかまちへかけた時、
「野辺地、——野辺地」
と、連れが庭のほうからけたたましく叫び立てた。

ぎょっとしたようにそっちへ聞き耳を立てた野辺地は、
「どうした、蒲原」
老人をにらみつけながら、思いかえしたように、つかつかと戸口のほうへ出ていく。
「むむ」
野辺地は思わずうめいた。
小太郎が三本松へ出かけるのを門内へかくれてたしかに見とどけたから、その間にと計画してかかった仕事だったが、その小太郎がどうして引きかえしてきたか、月あかりの庭に毅然とこっちを向いて突っ立っている。
蒲原はやっとお千代を縛り、手ぬぐいで口をふさいだところらしく、その獲物はそこへ置きっ放しで、ひとりでは到底かなわない相手だから、あわてて野辺地に救いを求めながら、じりじりとしりごみをしているところだ。
「野辺地、貴公ははらわたまで腐った男だったんだな」
小太郎は顔を見るなり、憤然とあびせかけた。
「貴様のはらわたはどうなんだ」
「なにっ」
「おやじにごまをすって、娘をたらしこみ、せがれを追い出して、この家の婿に入りこむ。やせ浪人が考えつくのはだれでもおんなじねらいだ。あんまりはらわたのきれいなほうじゃなかろう」
憎々しくいい放つ大造だ。
「下司の知恵はどこまでも下司、そんな覆面などをして、貴公は青空を持たない男とみえる。まさか、惣吉を手にかけはしなかったろうな」
「惣吉――？　そんなやつは知らんなあ」
野辺地はいけしゃあしゃあと空っとぼけた。金を手に入れてから、行きがけの駄賃にお千代を強奪にきた行為は、自分でもさすがに多少うしろめたいものがあるのだろう。
「知らねえ――？　うそをこけ」
その惣吉がぬっと植え込みの中から立ち上がった。

「てめえたちは人間の皮をかぶった畜生だ。こっちがそれでも人間並みにあつかって、いうなりにもったいねえ五百両という大金をとどけてやったに、そのおれに当て身をくわしてまだこんなひどいことをたくらむ。憎い外道だ。今、半鐘ぶって、村の衆を集めてやるから、待ってけつかれ」
心から憎悪にみちた惣吉の悪罵である。
「蒲原、やっちまえ」
小太郎ひとりなら、ふたりがかりでなんとかなるだろうが、村じゅうの者に取りまかれたのでは逃げきれない。野辺地がいささかあわて気味に一刀を取り直すと、
「心得た」
蒲原もやっと立ち直って必死に刀をつけてきた。
「よし、来い」
さっと小太郎が抜き合わせる。
今夜は許さぬと、小太郎もたぎるような義憤を愛刀にこめている。
「えいっ」
「おうっ」
「とうっ」
野辺地と蒲原は是が非でも逃げたい一心だから、これも死に物狂いだった。
ふたりにひとり、いくら自信があっても、小太郎はうっかりこっちから切って出るわけにはいかない。ひとりを切っても、ひとりにその虚を突かれる公算が大きいからだ。いきおい敵の切って出るのを待つほかはない。受け身だ。
「えいっ」
腕のできるほうの野辺地が、それと見てじりじりと押してきた。
「おうっ」
小太郎はうけながら、わざと押されて後ろへさがる。仕かけを誘う策に出たのだ。
「とうっ」

はたして、図に乗った野辺地は、真剣勝負をこっちのものと見たらしく、意気ごみ激しくもう一度じりじりと踏み出してきながら、

「えいっ」

だっと地をけった。

「おうっ」

こっちはその仕かけを待っていたところだから、敵が一刀を振りかぶった一瞬をとらえて、一足踏みこみざま片ひざづきの低い体勢を取り、胴へ火の出るような痛烈な横なぎを入れた。敵の振りおろす剣の下へ自分から身を投げ出すのだからよっぽど自信と度胸がなければできない。

意表を突かれた野辺地は、しまったと思った時にはもう目の前が真っ暗になって、

「わあっ」

絶叫しながら、どっと前へ突んのめっていく。同時にさっと反対側へ飛びぬけていた小太郎は、残る敵蒲原に備えて、素早く立ち直る。

あまりにも猛烈な小太郎の一撃一刀に、ぼうぜんと目をみはっていた蒲原は、その目の前へすっくと立った小太郎の颯爽たる姿を見ると、ものをもいわずばたばたと門のほうへ走り出す。その逃げっぷりもまた風のように敏捷無類で、

「待てっ」

小太郎はすかさず一喝はしたが、別に追いかけようとはしなかった。

「やった、——やりなすったなあ、小太郎さん」

はだしで戸口まで出ていた杉下老人が、思わず声をあげる。

やっと物吉になわを解かれたばかりのお千代が、

「小太さん」

金切り声をあげながら、小太郎の胸の中へ飛びこんできた。

「怖い、あたし、——怖い」

「お千代さん、怖いのはもうすんだんだ」

小太郎は苦笑しながら、さすがにじっとりとわきの下に汗を感じる。真剣勝負で人を切ったのは、この時がはじめてだったのである。

10

もちろん、切られた野辺地は強盗にもひとしいまねをしているのだから自業自得ということになり、小太郎はおかまいなしときまったのは、その翌日のことであった。

小太郎が三本松へ出向く途中、ふっともう一度家へ引っかえしてみる気になったのは、あるいはそんなこともあろうかと考えたからで、

「虫が知らすとでもいうんですかなあ。むだ足になるようなら、それこそ幸いなんだからと思ったんです」

と、控えめに話していた。

「こんどばかりは、小太さんのおかげで、大難が小難ですんだ。恩に着ますぞ、小太さん」

杉下老人は何度も何度もそれをくりかえしていた。お千代が助けられたばかりでなく、長一郎もこれで後顧の憂いがなくなったのだから、老人としては、いくら礼をいってもいいつくせない気持ちなのだろう。

「小太さん、わしは世界が明るくなったような気がする」

その夜すぐに板橋の旅籠から屋敷へ迎えられた長一郎は、晴ればれとした顔になっていた。ただお千代だけは、なんとなくふきげんで、あまり人の話の仲間入りをしようとしない。

「まあいい、まあいい」

人がそのことを心配すると、老人は当たらずさわらずといった顔で、そう口を濁している。

明日は小太郎といっしょに長一郎が晴れて江戸へ修業に立つという前の晩、これから野天道場の門弟たちを呼んで、にぎやかな祝いをしようという宵の口のことだった。

「先生、庭の植え込みでな、お千代さんが先生に餞別をあげたいからといって待っているです

ぞ。すぐに行ってやってくだされ」
惣吉がそっと小太郎に耳打ちをした。惣吉は、あの晩以来、小太郎を先生と尊敬して呼ぶのである。
「そうか。餞別をねえ」
小太郎はわらいながら、その足で庭の植え込みの小道へ入っていった。
お千代はあの晩長一郎と話した例の梅の木の前で、月に顔をそむけながらひとりで待っていた。なにかすねているようなかっこうである。
「どうした、お千代さん」
案の定、背を向けたまま、返事をしようともしない。
「はあてな。じいやさん間違えたのかな。お千代さんがここでわしに餞別をくれるといって待っているから、すぐに行けといっていたんだがなあ」
小太郎が冗談のようにいうと、お千代はくるりとこっちを向いて、
「お願い、小太郎さま、あたしも、あたしも明日江戸へつれていって」
と、まっさおになりながら、顔を見あげてきた。
「江戸へ――？」
「いやっ、あたしここへひとりで置いていかれるの、もういや！」
思い詰めたような、生一本なまなざしである。
「しかし、お千代さんまで江戸へ行ってしまったら、おとうさんひとりで寂しくはないかね」
諭すようにいってやると、さすがにお千代は返事に詰まって、急に顔をたもとでおおって泣きだす。
小太郎はちょっと当惑せずにはいられなかった。お千代の気持ちはわかりすぎるほどよくわかっている。が、そんな約束をここでふたりきりでしていってもいいものだろうか。
といって、このまま知らん顔をして気強く江戸へ立ってしまったら、後でどんな思い詰めたまねをしないともかぎらない。一面そんな激しいものを持っているお千代なのだ。聡明な娘なのだから、むしろはっきりと話をしておいたほうが、かえって道を誤らずにすむのではないだろうか。
「わかったよ、お千代さん」
小太郎はふっと月にぬれているお千代の肩へ手をおいて、
「お千代さんはわしのお嫁になりたいんだろう。どうだね」
と、明るく聞いてみた。
あまりにもさばさばとした声音に、お千代は疑わしそうにはっと顔をあげたが、そこに深沈と愛情をたたえた男のまなざしを見て取ると、
「小太郎さま」
身も世もなく小太郎の胸の中へ顔をうずめてきた。からだじゅうが火のように燃えている。
「わしもお千代さんは好きだ。だから、約束しようじゃないか。わしはこれから江戸へ身を立てに行く。もうこれならお千代さんをお嫁にもらってもだいじょうぶだという時がきたら、きっとここへお千代さんをもらいにくる。それまで、お千代さんはおとうさんに孝行しながら、ここで待っている。どうだろう、約束できるかね」
「きっと、きっと、迎えにきてくれますね」
「必ず迎えにくる。わしはいい加減なことを約束するような男じゃない」
「うれしい、あたし。待つのなんか、何年待ったって、――でも、いつごろ迎えにきてくれますの」
「そうだなあ、早ければ一年、おそくても三年」
「なるべく一年のほうがいいんですけれど」
うっとりと夢のような目をあげて、お千代は正直なことをいう。
「よし、なるべく一年にしよう」
「あたし、あたし、もう小太郎さまのお嫁だと思っていいんですね」

「うむ、お千代さんはわしのお嫁だ。約束をする」

こんなに一本気に慕ってくれる、かわいい花嫁だと思ったとたん、小太郎もまたじいんと胸が熱くなってきて、お千代の肩を抱きよせながら、思わずくちびるを重ねていた。

「お千代さん、わしはいい餞別をもらってしまったねえ」

「あたしの、あたしの小太郎さま」

「さあ、座敷へ帰ろう。みんなが待っている」

「もう行くの。いやだなあ、あたし」

「わがままをいっちゃいかん。わしの心は、もうお千代さんにあずけてしまったじゃないか。大切にしてくれなけりゃ困るぜ」

「大切にします、あたし。だから、だから、もう一度抱いて」

「お月さまがわらうぞ」

しかし、小太郎はもう一度しっかりとお千代を抱いてやって、静かに放し、

「これでいいだろう」

と、にっこりわらった。

「あたし、もう少しここにひとりでいたい。一足先にお帰りになって」

お千代はひとりで幸福な夢を抱きしめていたかったのだろう。

梅の花の香が心にしみる春の宵だった。

11

江戸へ出た小太郎と長一郎は、神田佐久間町の薪屋の二階へ寄食して、長一郎は九段の練兵館へ入門することになった。

小太郎は、剣の修業より、江戸で身を立てることが目的だ。幸い、両国矢ノ倉に先代の高弟で川中弥太夫という老剣客が、甲源一刀流の町道場をひらいて、相当門弟を集めている。国を出る時、先生からここへ紹介状をもらってきているので、長一郎のほうの入門がすむと、小太郎はさっそく川中道場をたずねてみた。

弥太夫はすでに六十に近く、どっちかといえば江戸に慣れて洒脱な風格を持った親分肌の老剣客だった。

「いいだろう。若先生の太鼓判があるんだから、頭から信用しよう。しばらく家で師範代をやってみなさい。そのうちにはなんとか身の立つようになる」

至極あっさり引きうけてくれたので、小太郎は翌日から矢ノ倉へ師範代として通うことになった。

「小太さん、練兵館はさすがだねえ、免許ぐらいのやつはざらで、それが火の出るような荒げいこをしているんだ。われわれなどまるで小僧っ子あつかいさ」

その夜、長一郎は道場から帰ってくると、目を輝かせて話していた。

「そうだろうなあ。九段の練兵館といえば、江戸三道場の一つだからねえ」

「小太さんもいっそ練兵館へしばらく入門してみたらどうなんだろう。そりゃあ、きみはもう一流に達してはいるが、上には上ってことがあるからね」

悪気ではなく、それは長一郎の心から出た好意なのだ。が、その口の裏には、いくら強くても田舎剣術では、練兵館の上の者にはかなわないだろうという気持ちがあるのだろう。

「いや、わしは別に剣で身を立てようという気持ちはないんだ。だから、修業はもうこのくらいでいいと思っている。それに、あしたから矢ノ倉へ手伝いに通うことにきめてきたんだ」

「ああ、甲源一刀流の先生のところへね。どんな風な道場だね」

「まあ、道場としては中ぐらいかな。門弟も、侍あり、町人あり、博徒あり、なにしろ下町の道場だからね、なかなかにぎやかだ」

時勢が次第に動揺してきて、なんとなく世間が殺気だっている。剣術が流行するから、おれもひとつやってみよう、そういう野次根性でに

ぎわっている道場が江戸にはかなり多かった。川中道場についている門弟たちも大半はそのロだと、小太郎はしばらく道場をのぞいてきただけでわかっていた。

「惜しいなあ。わしは小太さんの腕を惜しむんだ。どうせ師範代をつとめるにしても、どこかもっと名の知れた大道場のほうがいいんだがねえ」

「なあに、修業は心がけ次第さ。そういう道場にいても、結構人間修業はできるものだ」

小太郎は自分のことより、長一郎が練兵館で腕も人物も大成してくれることを、切に望んでやまなかった。

翌日、小太郎は川中道場へ着くと、すぐにけいこ道具をつけて、門弟たちにけいこをつけはじめた。ここも午前中の門弟は近所の旗本の子弟が多いから、なかなかやりがいがある。

川中道場には巻田富次郎と岩井要吉というふたりの内弟子がいて、今まではこれが代げいこをつとめていたようだ。どっちも免許の腕はある。

そこへ突然小太郎が師範代格で乗りこんだのだから、ふたりの内弟子も、門弟たちも、この新しい師範代がどのくらいできるか、ひとつ試してやろうという好奇心に駆られるのだろう。その日はわれもわれもと、門弟たちは待っていて小太郎にかかり、巻田と岩井はほかの者にけいこをつけながらも、常に関心は小太郎のけいこのつけぶりにあるようだった。

しかし、小太郎のけいこぶりは、逸見道場で十分経験があるから、強い者には強いように、弱い者には弱いように、決して自分をてらおうとはせず、一言にしていえば親切で真心のこもったけいこぶりであった。

「強い、まったく強い」

そう感心する者があるかと思うと、

「少し柔らかすぎるんじゃないかな。巻田さんとはどっちだろう」

中にはそんなことをいう者もいるようだ。とかく下の者には上の者の力量がわからないのが普通なのである。

ただ、朝から昼近くまで、もう一刻半（三時間）あまり立ちきりで、一度も面を取らずにけいこをつけ、少しもゆるみがない。その息の長さにはみんな感心しているようだ。

「一本お願いいたします」

ほとんどひととおりはけいこをつけたと思った時、またひとり出てきた。

中肉中背、色の白い美少年である。

「さあ、来なさい」

「えいっ」

「おうっ」

すっと竹刀を構えたのを見て、

——これはできる。

と、小太郎は感心した。どう見ても免許以上の腕である。油断はできない。

ふっと気がついてみると、ほかの者たちはみんなけいこをやめて、じっとこっちを見物しているようだ。

——なるほど、この美少年が門弟の中ではいちばんできる。腕試しをやろうというんだな。

小太郎は早くもそう見てとった。

といって、ここ一番おれの腕を見せてやろうなどというてらいの気は少しも持たぬ小太郎だ。

「えいっ」

美少年の竹刀が高青眼にかわった。突きをねらってきたのである。

けいこだから、先を取る必要はない。勝手に突かせておいて、後の先を取ってみせればいいのだ。小太郎はわざとのどをあけっ放しにしておく。

「とうっ」

はたして、美少年はからだごと猛烈な双手突きを入れてきた。思ったより敏捷無類である。

ぱっと切っ先三寸のところを払って、あざや

かに飛びぬける。
位置が入れかわってくるりと立ち直ったとたん、
「えいっ」
息もつかせぬ再度の双手突きだった。
「おうっ」
こんどは払わずに、さっとかわして飛びぬけたのと、敵の胴にばあんという竹刀の音がしたのと同時だった。むろん、敵の胴をうってから飛びちがえたのだが、見ている者の目には竹刀の音だけしか聞こえなかった。
三度くるりと立ち向かいながら、
——はてな。
と、小太郎は思った。鼻にただよう体臭が女くさい。脂粉の香がある。
——なあんだ、師範の娘だ。
面の中を見なおすと、たしかにきのう紹介された弥太夫の娘小夜の顔らしい。
「えいっ」
二度まで子ども扱いにされた小夜は、あきらかに敵愾心に燃えて、かっとまなじりを裂いている。よっぽど腕に自信があるのだろう。
——それにしても、気の強い娘だなあ。
きのう見た時はあんなにおとなしやかだったのにと、小太郎はあっけにとられてしまった。

12

小夜は突きがだめだとわかると、こんどは執拗に籠手をねらい出した。面から籠手へ切りおろしてくるなかなか巧妙な竹刀さばきだが、これも一本取らせずにしばらくあしらっていると、
「参った。——おけいこありがとうございました」
と、さすがに肩を波うたせながら、ついに降参して、さっさと奥へと引きあげていってしまった。
このけいこで小太郎の腕がはっきりわかったとみえ、門弟たちはもう強いの弱いのとあまり陰口はきかなくなったようだ。
翌日、昼食を食べに茶の間へ入っていくと、次の間で針仕事をしていた小夜が、
「小太郎さんは案外意地が強いんですね」
と、わらいながら話しかけてきた。
「どうしてです」
「おけいこなのだから、一本ぐらい打たせてくれるかと思ったのに、きのうは一本も取らせてくれませんでした」
「いや、あなたぐらいできる人に、もうそんな餡はいらんでしょう。しかし、お小夜どのは男に生まれてくるとよかったんですな」
「荒っぽいからですの」
「女には惜しい太刀筋だからです。男だったら、先生もさぞたのしみがあったでしょうになあ」
まんざら世辞のつもりではなかった。小夜にはそういう男勝りといった気性があると見ていたのだ。
「女だって、やれば男に負けないぐらいにはなれると思いますわ。ただ、世間から見せ物あつかいにされるのがいやなんです」
さばさばといってのけて、小夜はわらっていた。
その小夜が、この正月、両国広小路で地まわりのやくざふたりにからまれ、それを大川端までさそっていって、いきなりふたりとも川の中へほうりこんでしまった。それ以来、矢ノ倉の鬼娘といえば、このかいわいで知らぬものがないのだという武勇伝を、小太郎が門弟のひとりから聞かされたのはまもなくのことで、
——そうか、見せ物あつかいにされるというのはそのことか。
と、はじめて納得がいった。
とにかく、小太郎は川中道場の師範代として評判がよく、やがて花が咲き、花が散り、若葉の初夏がきて、三月の月日が夢の間に流れ去った。

長一郎はあいかわらず練兵館へ根よく通って、それだけにめきめきと腕のあがるのが自分でもわかり、それがまた張り合いにもなるらしく、

「小太さん、わしはせめて免許を取るまでは、江戸で修業をしてみようと思う」

といいだすようになっていた。

川中道場は毎月晦日（つごもり）がけいこ休みである。

その日、小太郎は長一郎を送り出してから、ふっと本郷湯島へ行って、和久という旗本の屋敷があるかどうか、さがしてみる気になった。

「一人まえの侍になったら、そこへ行って次男の兵馬さまをたずねてごらんなさい。それがあなたのおとうさまです」

小太郎はいまわのきわに母からそう教えられている。

まだ一人まえの男になっていないから、むろん屋敷へ入って父の様子を聞いてみようとは思わないが、そういう屋敷がいまだにあるものやらないものやら、一度さがしてみようとかねてから考えていたのだった。

佐久間町から湯島へは、そう遠い道のりではない。黒門町通りをまっすぐ上野へ突きあたって、左へ曲がると湯島天神の男坂へ出る。

その高い急な石段をあがると、湯島天神の境内になって、北東に上野の山をのぞみ、下に不忍池（しのばずのいけ）が初夏の日ざしをうけてきらきらと光っていた。

境内を表門のほうへぬけたところに旗本屋敷が並んでいて、これという目あてもないから、一軒一軒表札を見て歩くほかはなかった。

――もう二十三年も昔のことだからな。

そんな気持ちもあるし、数多い屋敷のことだから、見つかるにしてもきょう来てきょうというまいわけにもいくまいと、ぶらぶら見て歩いているうちに、門内からみごとな青柳の枝が垂れている屋敷があって、その時代のついた屋根門の門柱に、「和久」という表札が出ていた。

――あったぞ。

さすがに小太郎もかっとからだじゅうが熱くなって、足をくぎづけにされてしまった。がっしりとした門の様子から見て、二、三百石取りの家柄でもあろうか、中旗本というところだ。

兵馬は次男坊だということだから、ここはその兄の長男が跡をついで、父はおそらくどこかへ養子にやられていることだろう。兄弟の両親、つまり自分には祖父母――にあたる人たちは存命だろうか。

――とにかく、ここで聞けばいまにも父のことがわかるんだ。

小太郎は大きなよろこびに、胸がどきどきせずにはいられない。

が、その興奮は次第に淡い哀愁にかわってきた。

――いったい、母はこの屋敷でどんな身分だったのだろう。

むろん、父と正式の縁組みをした仲とは思えない。おそらく、行儀見習いかなにかにあがっているうちに、自分を身ごもり、黙って身をひいたか、それとも父の両親に諭されていとまになったか、そういう悲しい身分であったに違いない。

いま自分が見ているこの柳の木は、たぶんそのころあったものだ。屋敷を追われた母は、どんな気持ちでこの柳を見かえりながらここを去ったことか。

小太郎はなにか目頭が熱くなってくるような気さえする。

それに、母はずいぶん迷った上に父のことを打ちあけ、一人まえの男になるまでは和久の屋敷をたずねるなと、自分にいい聞かせていた。その言葉の裏には、やたらにたずねていっても、決していい顔はして迎えてはくれないだろうという、わが子への思いやりがあったと見るべきだ。ということは、母自身この屋敷からあまり好感は持たれていなかったということにもな

る。

——よし、わしは父のことはもうたずねまい。

小太郎は急にそんな気がしてきて、足重く二足三足きびすをかえしはじめた。

ちょうどその時、門のくぐり戸があいて、二十一、二の、紺がすりに小倉の袴をはいた青年が屋敷から出てきた。青年はこっちの様子にはなんの気もつかないらしく、颯爽と小太郎を追い越して、大股に湯島天神のほうへ歩いていく。

小太郎は我にもなくその青年の後を追って、歩調をあわせている。たった今、もう父のことはたずねまいと決心したばかりだのに、偶然にもこうしてその屋敷の者に出会ってみると、つい心をひかれるものがある。

——それとなく聞いてみるぐらいはいいじゃないか。

しきりにそんな気がしてくるのだ。

「もし、失礼ですが——」

湯島天神の境内へかかった時、小太郎はとう

とう声をかけてしまった。

「わしかね」

その青年はきっとなって振りかえった。相当激しい気性らしい。

「そうです。つかぬことをお聞きしますが、あなたは今、和久さまの屋敷から出てこられましたな。ご一門の方ですか」

「貴公はだれです」

「申しおくれました。拙者は秩父小太郎という剣道修業者で、ご存じかどうか知らぬが、目下両国矢ノ倉の川中弥太夫先生の道場に厄介になっております」

「鬼娘のいる道場なら知っている、わしの屋敷は矢ノ倉だから」

青年はいくぶん冷笑めいた微笑を見せて、

「貴公はどうして和久を知っているんだね」

と、不審そうな顔をしながら、かまわず歩き出す。

「どうしてと聞かれるとちょっと返事に困るのですが、和久家に昔ご次男で兵馬さまという方がいられた、いまどうされているか、江戸へ出たら、ついでの時うかがってみてくれと、ある人にたのまれていたのです」

「兵馬ならわしのおやじだ。いまは内藤兵馬、わしはせがれの兵太郎だが、昔の和久兵馬を知っているというのは、だれなんだね」

あっと小太郎は目をみはって、すぐにはことばがつづかなかった。これが和久兵馬のせがれなら、自分の腹違いの弟ということになる。

「意外ですなあ。わしがたのまれたのは、昔和久家に奉公していたという者ですが、お父上はご無事なんでしょうな」

折よく拝殿の前へかかっていたので、小太郎はそっちへていねいにおじぎをして、うまくばつを合わせてから聞いた。

「おやじは無事だ、いま大坂勤番でこっちにはいないが、奉公していたっていうとだれだろう」

「美代という女です。たぶん、女中奉公なんでしょう」

「いくつぐらいの女だね」

「ことし生きていれば四十ぐらいですが、あいにく去年死にました」

「美代という女中ねえ。和久のおばあさまなら知っているだろうが、——こんど聞いてみよう」

兵太郎はなんの話も聞いていないようなロぶりで、

「貴公はそれでわざわざ和久家をたずねるところだったのかね」

と、気がついたように聞く。

「いや、美代はもう死んでいるんで、わざわざというわけではなかったんです」

小太郎はあいまいに答えておいた。

「ふうむ」

「おばあさまはまだお達者なのですね」

「達者だ。わしは御徒町の伊庭道場へ通っているんで、近いからよくごきげんうかがいに寄るんだが——」

「ああ、心形刀流の伊庭先生ですね。盛んなもんでしょうなあ」

まだ聞きたいことはたくさんあるが、あんまり深入りしては疑問を持たれそうなので、小太郎はわざと話をそっちへそらせる。

「そりゃ川中道場などとは少し違うようだな。うちの道場は町人は入門を許さないからね」

兵太郎はちょっと得意そうにいってから、

「どうだ、鬼娘はまだ時々道場へけいこに出るんかね」

と、わらいながら聞いた。

「いや、このごろはほとんど出ません。女は見世物にされるからいやだといって」

「そうか。その方が利口だな。しかし、あの道場は半分は鬼娘ではやっていたんだから、中にはがっかりしている連中もあるだろう」

「そうかもしれませんな。わしは最近なんで、よくわからないが」

やがて黒門町通りへ出てきたので、小太郎は改めて礼をいって、なにげなく内藤兵太郎に別れを告げた。

13

——ふしぎだな。

今まで自分ひとりだったのに、この世の中に父がいて、弟までである。しかも、その弟とは偶然に出会って、ちゃんと口まできいてきたのだ。いや、血のつながりをいえば、自分には和久と内藤と両方に、何人かの肉親がいることになる。

小太郎はなにか力強い気がすると同時に、一方では、その血族からひとり疎外されて、一生を秩父の片田舎で、わが子ひとりの成長を唯一のたのしみに、寂しく世を終わってしまった母美代のことを考えると、

——わしはやっぱり、父とも兄弟たちとも、名乗りあわないほうがいいかもしれぬ。

と、やっぱりそんな片意地な気もしてくるのだ。

興奮の後の重い気持ちを抱いて、小太郎はもうどこへ行ってみようという気にもなれず、佐久間町の薪屋へ帰ってくると、

「ああ、小太郎さん、お帰んなさい。二階にお客さまが待っていますよ」

と、薪屋の女房が告げて、意味ありげににやりとする。

「お客さま——？」

「矢ノ倉の小夜だといってました。道場のお嬢さんでしょう。早く行ってごらんなさい」

「ふうむ、お小夜さんがねえ」

小夜がここへたずねてくるのははじめてだ。なにか急用でもできたのかと思って、いそいで二階へあがってみると、小夜は明るい窓際の長一郎の小机の前へ座って、いま巻紙になにか書こうとしているところだった。

「ああ、お帰りなさいませ」

「お待たせしました。どうかしたんですか」

「いいえ、あんまりお待ちしても変ですから、いま置き手紙をして帰ろうかしらと思いまして」

「なにか急用ですか」

「そうじゃありませんの。ただ、急にお話がしてみたかったものですから」

小夜はいくぶんほおを赤らめながら、しかし普通の娘のように決してうじうじはしなかった。

「そうですか。では、ゆっくりしていってください」

用ではなくて、ただ話がしてみたいというのなら、遊びにきたことになる。小太郎はそう答える外はなかった。

「ご迷惑ではございません？」

「いや、そんなことはありません。わしはもうきょうの用はすませてきたんだから」

しかし、娘が男のところへ遊びにきて、留守中にあがりこみ、いつ帰るかわからない男を待っているというのは、少しおだやかでないなと

思っていると、
「小太郎さん、あたくしはやっぱり表へ出ちゃいけませんでしたのね」
と、小夜が妙なことをいい出す。
「それは、どういうわけです」
「あたくし、本当はぜひ小太郎さんに聞いていただきたいことがあって、家ではいつも人目がありますし、けさ急に思い立って、ここをおたずねしたのですけれど、途中からやっぱりいやなやつに後をつけられてしまって、お留守でもひとりでは帰れなくなってしまいましたの」
「だれに後をつけられたんです」
「両国の地まわりだと思います」
「ああ、この正月あなたが大川へほうりこんだというやつですか」
「ええ。だれかにお聞きになりまして？」
「聞いています」
「おわらいにならないでね。あたくし、今は後悔しています。地まわりなど怖くはございませんけれど、またあんなまねをするのはいやだと思って、近所のほかはめったに家を出ないようにしていたのですけれど——地まわりなどというものは、執念深いものですね」
小夜は困ったように苦わらいをしている。困ってはいるが、恐怖の色などは少しもない。これはたしかに鬼娘である。しかも、娘としては大柄で、どっしりと重量感はあるが、すぐれた美貌の持ち主だから、よけい人目につく。
「お小夜さんは美人だから、地まわりもつい執念深くなりたくなるのかもしれない」
「あたくし、見せ物になるのはもうたくさん」
「そういえば、このごろはちっとも道場へ出なくなりましたねえ」
「小太郎さんにお願いしておけば安心でございますもの」
そんな口もきける小夜なのだ。
「それで、わしに話したいことというのは、なんです」

「きっとおわらいになりそうですわ」
こんどこそ、はっきりと顔が赤くなる。
「さあ、聞いてみなくてはわかりませんな」
「そうですね、あたくしおにいさまだと思って、お話しします」
「うかがいましょう」
「あたくしが間違っていたら、しかってくださいませ」
「むろん、しかります」
「あの、去年の秋、あたくし、ある人にいいよられました」
鬼娘もさすがに目を伏せたままだ。これはえらい話になったぞと、小太郎は思った。
「その人を、あたくしきらいではありませんでしたので、お嫁に行ってもいいと約束しました。けれど、あたくしに負けるような人ではたよりないからと、——本当はそれでもよかったのですけれど、やっぱり強くなってもらいたかったので、そういいました」
「相手は道場の門弟だったんですね」
「ええ。すると、その人は、よし、きっと強くなってみせるといって、ほかの道場へ行ってしまいました。それっきり、一度もたずねてこないで、このごろうわさに聞くと、ほかのひとをお嫁にもらうように話がきまったといいます。あたくしはこのまま黙っていたほうがいいでしょうか。それとも、その人にもう一度約束のことを話してみたほうがいいか、どうぞお教えくださいませ」
小夜は静かにそこへ両手をつかえて、もう赤い顔はしていない。
「先生は知っているんですか、それを」
「いいえ、知りません」
「お小夜さんは、もしその男に誠意がなかったら、あきらめられるの」
「あきらめられないかもしれません。でも、我慢はできると思います」
まことにいじらしい返事だ。

「失礼なことを聞くが、もうからだまで約束しているんですか」
「いいえ、それだけはお祝言がすんでからと、こばみました」
そのことばの裏には、男のほうはそれを求めた事実があるらしい。
「つまり、お小夜さんはわしに、一度その男に会って本心を聞いてみてもらいたい、そうなんだね」
小夜は黙ってうなずいてみせる。
「その男はなんという名です」
「内藤兵太郎、矢ノ倉に屋敷のあるお旗本です」
「なにっ」
はっとなる小太郎だ。
「ご存じですか」
小夜が思わず顔をあげる。
「いや、知っているというほどじゃないが、御徒町の伊庭の道場へ通っている人だね」
「ええ」
「一度だけ道で口をきいたことがあります、偶然なことで」
小夜の目はもっとなにか聞きたそうだ。
が、それ以上は今のところ口にできない小太郎である。そして、
——あの兵太郎はそんな男だったのか。
と、悲しい気がせずにはいられない。
さっき兵太郎は、鬼娘の話が出た時、あきらかに冷笑していた。もう恋が冷めている証拠だ。いや、小夜の今の話では、はじめからまじめな気持ちでいいよったかどうかさえ、大いに疑問である。小夜はどこか一風変わったところがあるから、おもしろ半分にうまくいったらなぐさみものにしてやろうと考えていたのではないだろうか。
「お小夜さんは、いまだに兵太郎さんがあきらめられないんだね」
「ええ」
「どこがそんなに好きになったのかなあ」

これはちょっと無理だったが、
「どこって、みんなですわ。きらいなら約束しませんもの」
と、小夜は正直である。
「よし、わかった。きっと、折を見て一度兵太郎さんに会ってみる。しかし、もしわしが会ってみて、これはだめだとわかったら、きれいにあきらめなければいけない」
「今から、今からそんなことおっしゃっちゃ、あたくし——」
小夜の悲しげな顔を見ると、
「うむ、こりゃわしが悪かったようだ。会って、話してみなけりゃわからんことだものな」
と、小太郎はいよいよ胸が重くなる。
「どうぞ、お願いいたします」
「承知しました。じゃ、お小夜さん、矢ノ倉まで送っていこうか」
小太郎はそういってから、ふっと気がついて、
「ああ、お小夜さんは武勇伝をやると兵太郎さんにきらわれると思って、わしの帰りを待っていたんだね」
と、思わず口に出る。
「あたくし、つい女らしくなくなってしまうのですもの」
「いや、そんなことはない。女だって男だって、正しいことは正しいとしなくちゃ。横車などに負けている必要はない」
「あたくし、小太郎さんのような方、本当にたのもしいと思います」
「わしのいいなずけさんもそういってくれます」
「あら、小太郎さんにもそういう方がおありになるんですの」
「あります、田舎にね。剣術はできないが、一本気で、しっかりしている点はお小夜さんに負けないかもしれない」
小太郎はお千代の愛くるしい顔を思い出して、なんとなく胸があたたまってくる。

やがて、身支度をして階下へおりてくると、
「小太郎さん、さっきから妙なやつが、ちょいちょい店をのぞきにくるんですがねえ、どうしたっていうんでしょう」
と、女房が気味悪そうにいう。
「やっぱりそうか」
小太郎は小夜と顔を見あわせて、思わず苦笑した。

14

小太郎が小夜といっしょに薪屋を出ると、はたして、そこの路地口からやくざらしい身なりの男がふたり、ふらりと出てきて後をつけはじめた。
「お小夜さんが大川へ投げこんだというのは、あのふたりなの」
念のためにそっと聞いてみると、
「ええ、あの背の高いほうは、たしかにそうだと思います」
と、小夜は肩を寄せてきながら答えた。
「ことによると、ほかにも伏勢がいるかもしれないな」
「そうでしょうか」
ふたりがかりでさえ小夜にかなわなかったのに、その小夜に自分がついているのを見ても、敵は平気でつけてくる。どこかに仲間が待っているからだと、小太郎は見たのである。
しかし、この白昼人通りのにぎかな往来中で、そう無法なまねもできまいとたかをくくって、かまわず和泉橋のほうへ出ていくと、その橋のたもとに、ご家人くずれといったかっこうのやつが、やくざを三、四人つれて突っ立っていた。みんなじろじろと、こっちの近づくのを見ているようだ。
「出たようだなあ、お小夜さん」
「あたくし、やっぱりひとりで帰らなくてよかった」
さすがに小夜はしっかりと小太郎のたもとを

つかんでいる。
「とにかく、知らん顔をして橋をわたってみよう」
たぶん、そうはさせまいと覚悟はしていたが、案の定、
「おい、待て――」
そこまで行くと、ご家人くずれがぬっと前へ出てきて、立ちふさがった。三十がらみの苦み走った男ぶりで、いわゆる三白眼というすごみのきく悪相だ。
「なにか用かね」
小太郎はおとなしく立ち止まる。
「その娘は矢ノ倉の鬼娘だそうだな」
「冗談をいってはいかん。このお嬢さんの顔が、貴公には鬼に見えるのかね」
にっとわらってみせる小太郎だ。
「おめえ、田舎のあんちゃんにしては、なかなか乙な口もきけるんだな」
にやりとわらって受けるところを見ると、この三白眼は相当腹もすわっているようだ。
「おめえ、この娘さんのなんに当たるんだね」
「わしは甲源一刀流川中弥太夫先生の門弟だから、このお嬢さんは恩師の娘さんということになります」
「ただそれだけか」
三白眼はじろりと若いふたりの顔を見くらべる。
「ただそれだけかとは、どういう意味です」
「血のめぐりの悪い男だな。いい仲になっているのかどうかって聞いているんだ」
「いや、お嬢さんもわしも、不義を働くような行儀の悪い人柄じゃありません」
「そうか。おめえのような田舎者にゃ、江戸の娘はくどけねえかもしれねえな。まあいいや、こっちの用というなあこうだ。この鬼娘が、この正月、ここにいるお化けの竹と、金時の熊のふたりを、女のくせに大川へ投げ飛ばした。女にそんなまねをされて黙っていちゃ、これから

両国かいわいで稼業ができない。その娘ともう一度勝負がしてえから、殿さま、立会人になってくれという。たのまれりゃいやともいえねえから、こうしてきょうここへ出張ってきたわけだ。すまねえが、そのお小夜っていう川中の鬼娘を、ちょっとこっちへ貸してもらいたいんだが、どうだね」

いかに無法を売り物にして世渡りをしている無頼の徒にしても、これは少し乱暴すぎる。

「わしは川中門の秩父小太郎という者だが、貴公のご姓名は――」

小太郎は改まって聞いた。

「おれの名か。名なんかどっちでもいいが、昔は浅井勝五郎、いまは殿さま勝で通る江戸の毒虫だ」

自分から毒虫を承知で悪たれているのだから、始末が悪い。こんな連中に理屈をいってみたところで、しようがあるまい。

「もう一度勝負をするって、どうやるんだね」

「これから柳原土手へ行って、こっちのふたりとその娘を、おれたちの見ている前で、もう一度けんかをさせるんだ」

「あなたがたは手を出さないのかね」

「けんかだからな、そいつはやってみなけりゃわからねえ」

殿さま勝はにやにやわらっている。つまり、なんでもかんでもみんで小夜をたたき伏せ、場合によったらどこかへかつぎこもうという腹なのだから、

「小太郎さん、行きましょう。あたくし、ならず者などとけんかをするの、いやでございます」

小夜は小太郎のたもとを引きながら、きっぱりといった。

「そうですな。けんかなどはだれがやったってほめたことじゃない。じゃ、断りましょう」

小太郎は苦笑して、

「浅井さん、小夜どのはけんかは迷惑だそうです。われわれはこれで失礼する」

と、身をひこうとした。

「黙れっ、青二才、なんだ、そのいいぐさは。あんまり人を愚弄すると、腕ずくでもその鬼娘は柳原土手へ引きずっていくぞ」

殿さま勝は居丈高にわめき立てる。のっぽのお化けの竹、ずんぐりむっくりしたよごれ金時の熊をはじめ、五人のやくざどもはおもしろ半分に目を光らせている。

往来も、橋の上も、もういっぱいの人だかりだった。

「貴公はわからん男だな」

「なにっ」

「いかに世をすねた無頼の徒でも、武士ならば多少物の道理はわかるはずだ。もともとふらちを働いたやくざふたりの肩を持って、堅気の娘を待ち伏せした上、――もう一度その恥知らずどもとけんかをしてみろとは、正気の男の口にすることばか。人間を闘犬と間違えてはいかん。少しは恥を知ってはどうか」

小太郎は凛然と一本をきめつける。

「ほざいたな。許さん、抜け」

浅井はかっとなって抜刀した。

「お小夜さん、これを――」

小太郎は差し添えのほうを鞘ぐるみ抜いて手早く小夜にわたし、

「けんかは迷惑だが、相手が気ちがい犬じゃしようがない。なるべくわしのそばを離れんように」

と、小夜をうしろにかばいながら、さっと抜刀した。

「はい」

そこは腕におぼえのある小夜だから、勇ましく差し添えを帯の間へたばさんで、顔いろこそ青いが、うろたえた風はみじんもない。

「おい、きさまたちは早く娘を引っさらえ」

殿さま勝がやくざどもにいいつける。

「合点だ。それっ、やっちまえ」

「刀を持っているから、気をつけろ」

やくざどもはばらばらっと小太郎の背後へまわる。

くるりとそっちへ向き直って、小太郎と背中あわせになった小夜は、こんな恥知らずどもの手ごめにあうくらいなら切り死にしたほうがましだから、必死の覚悟でこれも小刀を抜いた。

「それ、抜いたぞ」

「だれかあの刀をたたき落とせ」

やくざどもは手に手に匕首を抜いて、小夜をやや遠まきにしたが、得物が短いからうかつにそばへは寄れない。

「だれか、どこかへ行って、てんびん棒を持ってこい」

「丸太でもいいぞ」

「バカ野郎、たたきこわすんじゃねえや」

いずれも口だけは達者である。

川下のほうを背にして一刀を青眼につけている殿さま勝は、放蕩無頼に身は持ちくずしているが、腕は相当立つようだ。が、小太郎は相当以上に修業を積んでいる上に、すでに二度まで真剣勝負の経験がある。勝敗は紙一重のようだが、決して負ける敵ではないと見て取ったので、落ち着いて相手の出ようを待つことにした。たとえ悪党にもせよ、切らずにすむならなるべく人は切りたくなかった。

「えいっ」

「おうっ」

たかが青二才の田舎剣法、腕の一本も切り落としてやれば青くなって逃げ出すだろうぐらいに考えていたらしい殿さま勝は、意外にもがっしりとした小太郎の構えに、いささか当てが違ったようだ。

——くそっ、そんなはずない。

といったように、満面に朱をそそぎ、凶暴な目つきを露骨にしたが、その顔が次第に蒼白にかわってきた。小太郎の切っ先が鋭くのどについて、ぐいぐいのしかかってくるからだ。

——うぬっ。

それを外そうとして、じりじり左へまわりこむ。

「えいっ」

小太郎の切っ先はそれを追いながらすっと一足踏みこんできた。

「おうっ」

勝は力いっぱいはねっかえしたつもりだったが、我にもなく一歩後退していた。

——畜生、へたをするとこの青二才にやられるぞ。

ふっと恐怖心が起こった。人の命はなんとも思わないが、自分の命は惜しい殿さま勝だ。

15

背中あわせになって、たがいに背後をまもりあっていた小太郎と小夜の間は、いつの間にか六尺ばかり離れていた。小夜は真剣勝負ははじめての上に、相手は匕首とはいえ、あらくれた大の男が五人、いや、その時はひとり欠けて四人だったが、それがすきさえあれば手もとへ躍りこもうと、目をぎらぎらさせているのだから、ついうしろに気がつかなかった。

「見ろ見ろ、ねえちゃんだいぶ息づかいが荒くなってきたぞ」

「今なんだがなあ、だれかうしろへまわって押さえつけるやつはねえか」

「おめえ、やってみろよ」

「そのかわり、おれがつかまえたら、あのねえちゃんのからだ、おれのものにしてもいいか」

「ようし、それならおれが抱きついてやる」

やくざどもはかってなことをのべつ幕なしにしゃべり立てている。小夜のほうから切って出そうもないという安心もあるからだろうが、そうしてむだ口をたたいているのが、彼らの気合いがわりでもあり、ずるい手でもあった。

小夜がその悪態に少しでも惑わされて、どっちかへ注意がかたよると、そのすきへ彼らは猛然とおおかみのように殺到してくるだろう。

——油断してはならない。

小夜は必死に落ち着こうと息をためているのだが、その息が肩にも胸にも自然に大きくはずんでくる。

いっそこっちから切って出ようかと何度か考えたが、すそが気になる上に、長いたもともじゃまだった。

ただ、たのみにしているのは、うしろにいる小太郎が早く殿さま勝をかたづけて、こっちへかかってきてくれることだけである。

ちょうどそんな時、お化けの竹がどこからかてんびん棒をかっさらって、どいたどいたと、人垣を押し分けながら帰ってきた。

——しめたっ。

お化けの竹は小夜の側面へ出て、けだもののように舌なめずりをした。

小太郎との間はだいぶ離れているし、小夜は四人のほうへばかり気を取られている。躍りかかって刀をたたき落とすのは今なのだ。

「あまっ」

竹がてんびん棒を振りかぶって、びゅんとからだごと打ちこんでいったのと、

「あぶない、娘さん」

わあっと見ていた野次馬が一度に声をあげるのと、ほとんど同時だった。

全身に気が張りつめている小夜は、鬼娘といわれるだけの修業は身につけているから、空を切って飛ぶてんびん棒の気配に、はっと一足後ろへさがる。その目の前をてんびん棒が流星のように走り落ちてきたので、

「えいっ」

さっと一太刀、その半ばから切って落とし、二の太刀が無意識に、

「とうっ」

片手なぎに右を払っていた。

その二の太刀が、空を打って前へ突んのめって出た敵の左肩を、さっと切り裂いたのである。

「わあっ、やられた」

竹は悲鳴をあげて、どっとそのまま大地へのめりこんでいく。

「それ、やった」

「やっつけろ」

見ていた四人が血に狂って、一度にひしめき立った時、

「バカ者ども、女ひとりになにをするか」

人垣の中から大声に叱咤しながら、竹刀をふりかぶって飛び出してきた若者があった。

この一瞬の激闘が、殿さま勝からは正面に見える。

小太郎は声だけ聞いただけだ。

目で見た勝は、はっと狼狽せずにはいられない。

声だけ聞いた小太郎は、小夜があぶないと直感したから、相手が狼狽したすきをのがさず、

「えいっ」

それは、烈火のような激しい双手突きだった。

「あっ」

殿さま勝は夢中で引っ払いながら、だっと死に物ぐるいで横へ飛びのいた。あいにくそっちが川っぷちだったので、

「しまった」

声といっしょに足を踏みすべらせ、たちまちどぶうんと神田川へ思いきり水しぶきをあげていた。

「お小夜さん——」

小太郎が血眼になって、くるりとうしろを振り向くと、こっちは今やくざどもが竹刀に追い散らされて、ふたりは和泉橋へ、ふたりは河岸ぞいに川上へ、どんどん逃げ去っていくところだった。

「小太郎さん——」

小夜は血刀をさげたまま、ぼうぜんと立ちつくしている。

一度ぶっ倒れたお化けの竹は、小刀のほうだったから致命傷だけはまぬがれたらしく、どこへはって逃げたか、もうそこには倒れていなか

った。
「やあ、長一郎君じゃないか」
小太郎は竹刀の男を見て、思わず目をみはった。
「小太さん、こりゃいったいどうしたんだ」
長一郎が男らしい闘志にあふれた目を光らせながら、つかつかとこっちへ寄ってきた。
「ありがとう。おかげで助かった」
小太郎は刀を鞘におさめながら、感謝の目を輝かす。いや、本心をいえば、敢然と人の難儀におもむいてくれる、それだけの腕になってくれた長一郎の人間としての成長が、涙の出るほどうれしかったのである。
「お小夜さん、わしといっしょに同居している杉下長一郎君です。——長一郎君、川中先生のお嬢さんなんだ」
それだけいえば、おたがいに小太郎の口をとおして話には聞いているから、ふたりは黙っておじぎをした。
その長一郎が、急にあたりを見まわして、少し離れたところに脱ぎすててある小夜の下駄をいそいで拾ってきて、黙って小夜の足もとへそろえた。
「すみません」
はっとしたように、小夜がもう一度おじぎをする。
事が終わったので、いつか人垣はくずれ、橋をわたっていく者、往来を歩きだす者、橋の上に何人か立って川をのぞきこんでいるのは、落ちた殿さま勝がどうなったかを気にして見ているのだろう。
ちらっとそれらの動きを見まわした小太郎は、その橋のたもとに立ってこっちを見ている若い男と視線が合って、おやっと思った。それはけさ会ったばかりの内藤兵太郎だったからである。
「あっ」
小夜もそれに気がついたらしく、思わずから

だじゅうをかたくする。
兵太郎はなんと思ったか、冷たい顔に明らかに嘲笑のようなものを見せて、さっさと和泉橋をわたりだす。
「ありゃだれだ、小太さん」
その嘲笑は長一郎にもわかったらしく、むっとしたように聞いた。
「いや、いいんだ」
小太郎は軽く制しておいて、
「お小夜さん、さあ、刀をしまおう」
と、そっちへ手を出した。小夜はまだ抜き身を持ったままなのである。
「はい」
小夜はいそいで刀を懐紙でぬぐい、鞘におさめて、
「ありがとうございました」
と、鞘ぐるみ小太郎にわたす。
「出かけようか。いつまでこんなところで人の見せ物になっていてもしようがない」
小太郎はふたりを誘って、こっち河岸を新シ橋のほうへ歩きだした。
「わしも送っていくのか、小太さん」
長一郎がちょっととまどいした顔で聞く。
「うむ、用心棒は多いほうがいい。ほかに用があるのかね」
「いや。実は、小太さんが休みだから、きょうはどこかへ誘い出そうかと思って、わしもけいこを半日に切りあげて帰ってきたんだ。すると、この騒ぎだ。もっとも、わしはお小夜さんのほうしか目に入らなかったから、まさか用心棒は小太さんだとは、はじめ気がつかなかったんだがね」
長一郎はあかるく話しながら、小太郎の右へ肩をならべてくる。
——長一郎にさえ、これだけの真心がある。
小太郎は胸が重かった。兵太郎も御徒町の道場から家へ帰るとすれば和泉橋をわたるはずだから、あのけんかをさっきから人にまじって見

物していたに違いないのだ。

かよわい娘がやくざ者たちに取りかこまれている、しかもそれは自分が一度いいよったことのある娘だ。それを黙って見ていたのは、腕に自信がないからか、もう小夜には興味がなくなって、なまじかかりあいになるのを避けたかったのか、いずれにしてもそういう態度は男としてひきょうだ。

まだ名乗ってはいないが、おなじ父を持つ腹違いの弟だけに、小太郎はつらいのである。

「小太郎さん――」

左側をこれも沈んだ足取りで歩いていた小夜が、ふっと呼んだ。

「なんです」

「あたくし、あたくし、さっきお願いした兵太郎さんのこと、もうよろしいんです」

小夜はきっぱりといって、深くうなだれてしまった。

「そうか、あのことねえ」

小太郎は急には返事ができない。

16

江戸はすっかり夏に入って、毎日暑い日がつづいた。

じっとおとなしく座っていてさえ汗が出てくるのだから、面籠手をつけて竹刀を振りまわしていると、暑いのを通りこして、頭がくらくらしだす。むろん、道場着などは汗でたちまち水へつけたようになる。

が、本当の腕まえというものは、寒げいこよりこの暑中げいこのうちにあがるのだとされている。からだがなまって力ずくではすぐ疲れてくるから、自然技を使うようになるのだという。

こうして、暑い一日の代げいこを終えて、夕涼みをむかえ、井戸端で水をかぶる時の気持ちはまた格別だった。

「小太郎さん、今日はおそうめんをゆでましたから、召しあがっておいでになりません」

その日は小夜にすすめられて、内弟子たちといっしょにそうめんをちそうになり、小太郎が矢ノ倉の道場を出たのはもう宵になってからであった。

あの和泉橋で殿さま勝たちに待ち伏せをされてから、小夜はいっそうおとなしい娘になって、家事にばかりいそしんでいる。

「お嬢さんはこのごろ、まるっきり竹刀を取らなくなりましたねえ」

今夜も内弟子の巻田富次郎が思い出したようにそういうと、

「女なんてどこまで行っても生兵法ですもの、あたくし鬼娘はもうたくさん」

と、明るくわらっていた。

そして、小夜はまた内藤兵太郎のことも、あれっきり忘れたように口にしなかった。小夜があきらめてしまったのなら、よけいなまねはすることもないので、小太郎もそれっきり兵太郎には会わずにいるが、これだけはなんとも後味が悪い。あの時の兵太郎の男らしからぬ態度が、父をおなじくする異母弟とわかっているだけに小太郎は気になるのだ。

――わしには血をわけた弟があったと、よろこんでいたんだがなあ。

いずれ兄だと名乗る機会がきても、あの兵太郎ではすなおによろこんでくれるかどうかわからない。それを考えると、小太郎はなにか世の中が暗くなってくるような気がするのだった。

そこへいくと、今は長一郎のほうがよっぽど身近に感じられた。けさも早く起き出して、いっしょに井戸端で顔を洗っている時、

「小太さん、わしが練兵館へ通いだしてから、もう四カ月になる。どのくらい上達したか、一本試してみてくれないか」

というのである。

「そうか。じゃ、一本やってみようか」

まだ半年にも足らぬ修業で、いくら道場が九段の練兵館でもそう急に強くなるはずもないと

思ったが、当人は一生懸命なので、薪屋の裏の仕事場で一本けいこをつけてみた。

こっちはけいこのつもりでも、長一郎は自分からそれを望むくらいだから、大いに自信があって、試合の意気ごみだったに違いない。すさまじい気ぐみで四半刻（三十分）ほど火の出るようにぶつかってきたが、小太郎はついに一本も取らせなかった。

しかし、腕まえはおどろくほど上達していた。江戸へ出てきたころは目録（三級）ほどだったのが、もう順免許（二段）に近い腕になっている。

「長くん、すばらしく腕があがったなあ。神道無念流でいえば、まもなく順免許というところだろう」

なんとなくがっかりしている長一郎をそういって励ますと、

「うむ、このごろ自分でもそう思ってうぬぼれていたんだが、小太さんにはまだ歯も立たない。しかし、小太さんは本当に強いなあ」

と、いまさらのように感心していた。

「そりゃ長くん、少し無理だ。わしはいくら田舎の道場でも、十年から竹刀をつかんでいるんだからね」

しかも、普通の通い門弟ではなく、小太郎の実は内弟子として朝から晩まで鍛えぬかれたのである。

「そういわれてしまえば、たしかにそんなもんだが、どうだろう、小太さん、わしはまだ矢ノ倉の鬼娘にもかなわないかね」

長一郎が妙なことを聞く。

「そうだな、お小夜さんはあれで免許の腕はあるだろう。しかし、なんといっても女だから、この調子で長くんが進歩すれば、秋ぐらいにはちょうどいい勝負になるんじゃないかな」

「そうか。まだ女にもかなわないようじゃ、ますますがっかりだなあ」

「そんなことはない。お世辞ぬきにして、たった百日あまりの修業でこれだけ上達する、さすがに練兵館の修業だと、わしはびっくりしているんだ。いや、道場の問題ではなく、長くんにそれだけの天分があると見ていい」

「そうか、悲観するには当たらんか」

「悲観どころか、大いに有望とわしは太鼓判をおす」

「ありがとう。じゃ、がんばるぞ」

長一郎は子どものように張りきって、きょうも九段へ出かけていった。

それに、このごろ長一郎は、あれほど熱中していた京都行きのことについても、ふっつりと口にしなくなっている。練兵館に集まる天下の秀才たちと付き合っているうちに、自然と時勢を見る目も違ってきたのだろう。

――とにかく、一日ずつ人間ができてくる。

小太郎は責任があるだけに、その成長を心からよろこばずにはいられなかった。

そういえば、お千代にも久しく会わない。しかし、毎月いつも月末に必ず一度金をとどけにくる惣吉じいやが、お千代のことづてを持ってくる。

「小太さん、お嬢さんがよろしくいっていたです」

ことづてはいつもたったその一言にきまっていたが、それで十分だった。そのよろしくの中に、千代は約束を忘れずに元気で働いていますという真心がこもっているのだ。

だから、小太郎も惣吉が帰る時、

「じいやさん、お千代さんによろしくいっておいてください」

とだけことづけておく。

「承知したです」

なにもかも心得ているらしい惣吉はまた、そのことづてをうれしそうにしっかりとあずかって帰ってくれるのである。

ふたりが一つに結ばれる日は、まだいつのことになるかわからないが、ふたりが生きている

かぎり、おそらくこの心の誓いは変わらないだろう。

——わしの花嫁は、賢くてしっかり者だからな。

いつか小太郎は郡代屋敷の横から柳原土手へかかっていた。空はからりと晴れて星が美しいが、月の出のおそいころだから土手は暗く、目の前をほたるが一つ、すいすいと川のほうへ飛んでいった。

柳並木が夜目に黒々と涼風になびいている。

「えいっ」

突然、背後へ鋭い気合いが迫って、さっと火のような不意打ちをかけてきた者がある。この辺はよく辻切り強盗の出るところだから、小太郎も油断はしていなかった。異様な剣気と同時に、はっと身をしずめ、

「とうっ」

腰をひねって抜き打ちにうしろを払う。

「わあっ」

絶叫を耳にしながら、くるりとそっちへ二の太刀を構え、

「だれだ。名乗れ」

激しく叱咤した時には、くせ者のからだが突んのめるように地へ落ちていた。

「いけねえ、逃げろ」

そこの大柳のかげから、ばたばたと仲間らしい二つの影が浅草見付のほうへ夢中で逃げ去っていく。

——しまった。わしもやられている。

くせ者は一太刀で息絶えたようだが、小太郎もまた左の肩先に痛みを感じる。こんなところに長居は無用だ。とっさに刀をおさめて歩き出しながら、左肩を手でさぐってみると、傷口はかなり深いらしい。血が背を伝わってどくどくと流れていくのが、はっきりとわかった。

歩けるには歩ける。しかし、あまり出血が激しいと途中でまいるかもしれない。

——不覚だったなあ。

小太郎はしっかりと傷口を押さえながら、暗い気持ちで道をいそいだ。

くせ者はたぶんこのあいだの殿さま勝に違いない。逃げたふたりは、お化けの竹と金時の熊だろう。ほかに人から恨みをうけるようなおぼえはないのである。

——しかし、よくこれだけですんだ。もう少し切っ先が深ければ、こっちのほうがやられている。

小太郎はぞっとせずにはいられない。

17

家まではずいぶん長い道のりのように思えた。それでもどうにか途中で気力もつきず、やっと薪屋の店の土間までたどり着いた時は、全身にじっとりと脂汗がにじみ出ていた。おそらく、顔は死人のようにまっさおになっていたに違いない。

「あっ、若だんな、若だんな、大変です。早くきてください」

血だらけになってよろめきこんだ小太郎の姿を一目見るなり、薪屋の女房は二階へ金切り声をあげてがたがたとふるえていた。

「おお、どうした、小太さん。しっかりしてくれ」

何事かと二階から駆け下りてきた長一郎は、愕然として小太郎に飛びついてくる。

「やられた。思わぬ不覚を取ってしまった」

小太郎は店の上がりかまちへくずれるように腰をおろすと、からだじゅうから力が抜けてしまって、もう立つことができない。

幸いまだ宵の口だったので、薪屋の亭主が医者を呼びに行くと、医者はすぐに駆けつけてきてくれた。

「なに、傷は急所をよけているから、大したことはない。しかし、少し血を出しすぎたな。それに、時候がどうも悪いて」

傷口を五針ほど縫った医者は、そういってま

ゆをよせた。夏は傷口がうみやすいから、気をつけなければいけないというのである。

手当をうけた傷口は、なんとなく重く引きつるだけで、痛みは感じなかったが、その晩はからだじゅうが熱ぼったくて、さすがに熟睡はできなかった。

長一郎は一晩じゅう帯も解かず、親切に看病してくれた。

「すまんなあ、長くん」

「なにをいうんだ。こんな時ぐらい少し恩をかえしておかないと、おれたちは小太さんに世話になりっ放しなんだからな」

「ありがとう。しかし、わしはともかく人ひとりを切っている。番所へ届け出ておかなくてもいいだろうか」

小太郎はそれがいちばん気になった。しかも、たぶん殿さま勝だろうとは思うが、その切った人間を見とどけてきたわけではないのである。

「なあに、たとえだれにしたって、辻切りに出るようなやつだ、切りっ放しでかまわん」

長一郎は平気でそんなことをいうが、はたしてそれですむかどうか、小太郎はやっぱり心配だった。

心配といえば、この傷が幸いなおってくれても、左手がうまく利くかどうか、それも気になる。あれを思い、これを考え、まったく寝苦しい一夜だった。そして、小太郎がやっとうとうとと眠りに入ったのは、やがて夜が明けかけるころでもあったろうか。

「よくおやすみのようですわ」

そういう女の声にふっと目がさめると、意外にもまくらもとに小夜が座って、蚊帳越しに顔をのぞきこんでいるところだった。

「やあ、お小夜さんか」

「あら、お目ざめになりましたの、暑苦しいから蚊帳を外しましょうね」

小夜はかいがいしく立って、蚊帳を外してくれる。朝ももうかなり日が高くなっているのだ

「小太さん、きみがゆうべ切ったのは、やっぱり殿さま勝だった。わしも心配になるんでね、夜が明けるとすぐ、柳原土手へ行ってみたんだ」

長一郎がまくらもとへきて話してくれるのである。

「やっぱりそうだったか」

「もう役人が出張っていてねえ、いっぱいの人だかりなんだ。勝はあごからのどへかけて、たった一太刀、みごとな切り口で、役人もひどく感心していたぜ。この切られようは、うしろから不意に切りかかって、逆に振りかえりざま抜き打ちにやられた傷だと、さすがに目が高い。そして、日ごろが日ごろだからこんな目にあう、バカなやつだ、切られ損だなといっていた」

長一郎はそれを早く小太郎に話したかったのだろう。小太郎がどんなにそれを気にしていたか、ちゃんと知っていたのだ。

「ありがとう。これで安心した」

気力がおとろえているせいか、小太郎は思わず目がうるんでくる。

長一郎はそれを見ないふりをして、

「それから、わしはどうせ当分道場は休まなくちゃならないと思ったんで、ついでに矢ノ倉へまわったんだ。先生もお小夜さんもびっくりしてね、お小夜さんはなんでも見舞いに行くというんで、いましがたいっしょに帰ってきたところなんだ。我ながらけさは大働きさ。もうちゃんとかゆもできているんだぜ。もっとも、これはお小夜さんがこしらえてくれたんだがね」

と、わざと明るく説明する。

「小太郎さん、あたくしのために、こんな、こんなおけがをなすって、申し訳ございません。あたくし、なんとおわびしていいか」

小夜がそこへ両手をついて、申し訳なさそうにあいさつをする。

「いや、決してお小夜さんのせいじゃない、いってみれば天災のようなものなんだ。それに、幸い大したけがじゃないんだから、あんまり心

配されるとこっちが恥ずかしくなります」
「そうおっしゃっていただくと、あたくしいくらか気が楽になりますけれど、こんどこそ生兵法はもう本当に懲りごりいたしました」
「しかし、お小夜さんが悪いわけじゃないんだから。世の中に無法者があまりにも多すぎるんだ」
小太郎はしみじみとそう思うのである。志村の時の野辺地といい、こんどの殿さま勝といい、黙っていればこっちが切られるからやむをえず切ったようなものの、人を切った後味は決していいものではない。小太郎は彼らの無法を悲しまずにはいられないのだ。
その日、長一郎ははじめて練兵館を休み、小夜も一日じゅう矢ノ倉へ帰ろうとはしなかった。
「もうそんなにしてもらわなくても、病人というわけでなし、わしひとりでも大丈夫だから」
小太郎は長一郎にも小夜にも一応そういって辞退したが、
「まあ、きょう一日はわれわれにまかせておいてくれ。病人は黙って寝ていればいい」
と、ふたりともわらっていて受けつけなかった。
きょうも暑い日で、小太郎は日ごろの疲れが出たか、終日うつらうつらと眠っている時のほうが多かった。昼すぎに、ちょうど医者が傷口を洗いにきている時、川中弥太夫がわざわざ見舞いにきてくれて、
「なるほど、こりゃ相当な傷だ。もう少しであぶないところだったな」
と、まゆをひそめていた。
そして、しばらく長一郎と話し込んでから、大事にするようにといって、娘をおいてひとりで帰っていった。
その夕方、突然、志村からお千代が惣吉に送られて出てきた。
「毎日お小夜さんに来てもらうわけにもいかんし、わしも道場があるんで、お千代を呼ぶことにしたんだ」
ああそうかと、それで小太郎にも事情がのみこめたが、一時はまた志村になにか起こったのかと、どきりとせずにはいられなかった。

18

お千代という看病人が来たので、小夜は長一郎に送られて矢ノ倉へもどることになり、惣吉は杉下老人が非常に傷の様子を心配しているからと、ひととおり容態がわかるとその足ですぐに志村へ引きかえしていった。
やがて宵になろうとしている。
お千代は行燈に灯を入れ、窓の下へ蚊やりをたいてから、小太郎のまくらもとへ座って、黙って額に手をやってみて、
「お熱はないのね」
そうつぶやきながら、ついでに手ぬぐいで額の汗をぬぐってくれる。
「お千代さん、よくきてくれたなあ」
小太郎は本当にうれしかった。みんな親切にしてくれる。しかし、こっちは遠慮があるから、やっぱりなにか気苦労だった。いや、それより、さっきからお千代のしてくれることは、黙っていてもまるで母親のように行きとどいている。
「あたし、顔を見てやっと安心したの。もっとひどいのかと思って、ここへ着くまで夢中だったわ」
「わしはまさかお千代さんが来てくれるとは思わなかった。うれしかったなあ」
「千代、情けないわ」
「どうしてだね」
「ゆうべなんにも夢ひとつみなかったのよ。こんなに一生懸命、毎朝お天道さまに手をあわせて、小太郎さんが無事なようにって拝んでいるのに、まだ真心が足りないのかしら」
じいっと目に涙をためているのである。
「そんなことはない。大したけがじゃないんだ

から、神さまは知らさなくてもいいと思ったんだろう」
「そうかしら」
「それとも、あんまり暑いんで、神さま居眠りしていたかな」
お千代は思わずわらいだしながら、
「でも、よかったわ、そんな冗談がいえるくらいで」
と、うちわを取りあげる。静かに風を送ってくれるのだ。
「おかしいなあ」
こんどは小太郎がいった。
「どうして――」
「さっきまでは、妙に心細かった。こんな傷で死にっこはないとわかっている。なにがそんなに心細いのか自分でわからなかった。いまやっとそれがわかった」
「なにがそんなに心細かったんでしょう」
「本当はお千代さんに会いたかったんだなあ。いや、わしは母ひとり子ひとりのみなしごで、今はだれも甘えられる人がない。それが寂しかったんだ。お千代さんが来てくれたら、とたんに寂しくなくなってしまった」
「やっぱり、千代でなくちゃだめなのね」
「うむ」
「うれしいわ」
お千代は急におおいかぶさるように、くちびるをかさねてきた。
「もう志村へは帰らない」
涙がぽたぽたと小太郎のほおへ落ちて、
「あら、ごめんなさい」
いそいでそれを手ぬぐいでぬぐってくれるのだった。
そのころ――。
長一郎は小夜と肩をならべながら、和泉橋(いずみばし)をわたって、どっちからともなく柳原土手へ道を取っていた。
もう空はすっかり暮れきって、今夜も星がきれいだった。土手は川風が涼しい。
「お妹さん、おいくつかしら」
黙って歩いていた小夜が、ふっと聞いた。
「十六です」
「しっかりしていなさるのね。あたくし、かなわないと思いました」
小夜はそっとため息をついている。
「なにがです」
「看病の仕方が違うのですもの」
「あれは田舎育ちだから」
「いいえ、真心がこもっていますわ、むだ口はなんにもきかずに、手とからだのほうが先に動いています」
「そうですかなあ。もっとも、あれは小太さんとなにか約束しているようだから」
「それは、あたくし、小太郎さんからうかがっていましたけれど、――きょうは心から感心してしまいました」
お千代は居合わせた人たちにあいさつがすむと、黙って小太郎のまくらもとへ座った。ただ会釈をしただけで、なんにも言わずに、手が額をさわり、汗をぬぐってやって、それからすぐにうちわを取りあげていた。
――まるでもう奥さんのよう。
小夜は美しいなあと、それとなく感嘆し、ひそかに自分の至らなさを恥じていたのである。
「ああ、こりゃいかん」
ふいに長一郎が立ち止まった。
「どうかなさいまして」
「この土手は、ゆうべ小太さんが災難にあったばかりですからな」
「でも、そう毎晩出ますかしら」
「いや、万一出た場合、わしは小太さんよりずっと弱いから、たのみにならんです」
長一郎は正直だった。
「では、後もどりをしましょうか」
「そうですなあ。先へ行って新シ橋へ出るのと、後もどりをして和泉橋へ出るのと、どっちが早

いかな」
「新シ橋まで行きましょうよ。おなじことですわ」
小夜はわらいながらうながして歩きだす。どうしても鬼娘の気性がぬけきれないのだ。

19

「お小夜さんは免許の実力があるんだそうですな」
寂しい柳原土手を少しも怖がらないのは、やっぱり腕に自信があるからだと、長一郎は感心して聞いてみた。
「女の剣術なんて、当てになりませんわ。あたくしもう懲りごり――」
強いとほめられるより、今は女らしいといわれてみたい小夜なのである。
「実は、きのうの朝、わしは久しぶりで小太さんにけいこをしてもらったんだが、まだとてもお小夜さんにはおよばないといわれました」
長一郎はちょっと情けない気がする。
「そのお話、もうよしましょうよ。なんだか、あたくし、女のかたわみたいで恥ずかしいんですもの」
「しかし、お小夜さんは自分より弱い者とは結婚しない気なんでしょう」
「そんなことありません。あたくし、鬼娘はもうやめたんです」
小夜は自分にもいいきかせるようにきっぱりという。
「そうかなあ」
「人間はなまじ腕好みより、心のほうが大切なのだと、このごろしみじみ考えるようになりました」
「その心のほうも、わしはまだまるっきり未熟だ」
長一郎はため息が出てくる。
「だって、長一郎さんには真心があります。正直で、勇気もあります」

「本当ですか」
「あら、ご自分のことじゃありませんか」
「それが、自分でもよくわからないんです。なにしろ、こんなに人からほめられたのははじめてだからなあ」
「あたくし、お世辞ではありませんのよ」
小夜がたのしそうにわらいだす。
「ありがとう。うれしいです」
長一郎は本当にうれしかった。
「わしはお小夜さんが好きだなあ、こんなこといっちゃいけなかったかな」
ついロに出してしまって、はっとした。長一郎は小夜の男みたいにさばさばしたところが好きになって、好きとなると、一本気だから、その女としては大柄で、巴御前をおもわせるような重量感のあるからだつきまでむやみに好きになってしまって、おれの女房にする女は小夜よりほかにないとまで考えてきた。だからこそ、きのう小太郎に腕試しをしてもらったので、まだ小夜におよばないといわれた時は、まったくがっかりもした。
しかし、秋までにはなんとか追いつけそうだという。それなら、秋まで待って、一度試合を申し込み、勝てたら嫁にきてくれとぶつかってみよう、それまでは絶対にこの恋は胸にひめておこうと思っていたのに、小夜が例によって今夜もあんまりさばさばと口をきくので、つい好きが口に出てしまったのだ。
――こいつ、えらいことを口にしてしまったなあ。
と、すぐ後悔したが、もう間にあわない。
はたして、小夜はそれには返事をしてくれず、澄まして歩いている。
行く手に新シ橋が黒々と目につきだしたあたりで、足もとの草むらからすいとほたるが飛び立ち、それを追うようにまた一四、二つがもつれるように柳をかすめて、すいすいと川のほうへおりていく。

「まあ、きれい――」
小夜はふっと足をとめて、ほたるの行くえを目で追っている。そこには神田川が星あかりに満々と夜潮をたたえ、対岸の灯が二つ三つ暗い水面にゆれていた。
「お小夜さん、気にさわったんならあやまる。勘弁してください」
「それ、なんのこと――」
「好きだといったことです。考えてみると、まだ少し早かった。秋まで待てばよかった」
長一郎はまたしてもため息が出る。
「秋まで待てば、なにかあるんですか」
「秋になれば、お小夜さんの腕に追いつけそうだと、小太郎さんはいってくれるんです」
「いやな方――。あたくし、剣術はもうやめたといっていますのに」
小夜の白い顔がわらっている。
「がっかりだなあ。じゃ、どうすればいいんです」
小夜は答えない。ぼんやりと対岸の灯のほうへ目を遊ばせながら、こんどは小夜がそっとため息をついたようだ。
「あたくし、本当は怖い」
「なにが怖いんです。わしが、わしが無頼漢にでも見えるんですか」
「そんなこと――、あたくし、こんな男みたいで、欠点だらけな女ですから、後でそれがわかって、またがっかりされるのが怖いんです」
前に兵太郎との苦い経験がある。またそれをくりかえすのがつらくて、小夜はすっかり用心深くなっているのだろう。
長一郎はそういう小夜の心根が急にいじらしくなってきて、
「わしは、わしはそんな男じゃない。欠点も長所もみんな引っくるめて、お小夜さんが好きなんだ。後でがっかりする資格なんか、わしにあるもんか。むしろ、わしのほうががっかりされるかもしれないんだ。しかし、たった一つだけ

誓える。わしは平凡な男だが、真心だけはきっと墓場まで持っていくつもりだ」
と、思わずことばに力がこもってくる。
「あたくし、わかっています。あたくしも長一郎さんは好き――」
「本当か、お小夜さん」
小夜はまだうっとりと対岸のほうを見ながら、はっきりうなずいてみせた。
「お小夜さん、こっちを向いてくれ」
長一郎はかっと歓喜に全身をつつまれながら、いきなり小夜の肩へ両手をかけて、ぐいとこっちへ向けた。
「わしは幸福だ」
「だれか、だれかくると恥ずかしいから――」
「かまわぬ。お小夜さんはもうわしの妻だ」
厚ぼったい小夜の肩を、力いっぱいわが胸に抱きしめ、感情にまかせてくちびるをかさねていくと、一瞬羞恥にからだじゅうをかたくした小夜は、
「もう苦しいから――」
と、切なげにあえいでいる。
「いやだ、わしの妻だと、ちゃんと誓ってくれ、お小夜さん」
「あたくしの、あたくしのだんなさま」
「うむ、墓場までわしの花嫁」
有頂点になった長一郎は、いっそ小夜をここで食ってしまいたいとさえ思った。
濃い夏の宵闇につつまれたふたりきりの柳原土手である。

20

時候が悪いので、一時はうむかと心配された小太郎の傷が、お千代の心をこめた丹精でどうやらそのこともなく、やっと全快したのはもう秋口へ入ってからのことだった。
小太郎の床あげがすめば、お千代は志村へ帰らなければならない。それがあるから、お千代はなかなか床あげを承知しなかったが、

「じゃ、帰りはわしが志村まで送っていくから――」

という約束でお千代をどうにか納得させ、小太郎はようやく、ゆうべ心ばかりの全快祝いをすませたのだった。

その席へ招かれた客は、川中弥太夫親子と下の薪屋の夫婦だけの四人きりだったが、

「小太郎さん、あの晩あなたが血だらけになって家へ帰ってきた時は、本当のことあたしはもうだめなんじゃないかと思いました。それがこんなにすっかり元のとおりになれたのは、なんといってもお千代さんの看病が行きとどいたからです。あだやおろそかに思ったら罰があたりますよ」

と、本気になっていったのは、お千代の毎日をよく見ていた薪屋の女房おたねだった。

「うむ、こいつはおたねのいうとおりだ。一に看病、二に薬っていうことがあるが、このお千代さんのまねはできるもんじゃない。二日や三日の看病と違って、ひと月の余も、朝おかゆを作りにおりてきて、ついでにせんたくものをしていく時刻が、一日も狂ったことがない。だれにもできそうでいて、心がなければこれができないことなんでしてね」

働き者の亭主の仙蔵も、心から感心していた。

「おじさまおばさまのおっしゃるとおりですわ。本当はあたくしのために小太郎さんがこんなおけがをなすって、あたくしこそもっとお手伝いしなければなりませんのに、――お千代さん、本当にありがとうございました」

正直な小夜は、負け惜しみでなく、目までうるませながら、そこへ両手をついた。

「困ります、あたし。みなさんにそんなにおっしゃられると、恥ずかしい」

お千代はただ赤くなって、小さくなっていた。

「矢ノ倉のお嬢さんも、よくお見舞いに来てくださいましたものね」

おたねにそういわれると、

「いいえ、あたくしのはただおじゃまするばかりで――」

と、まっかになりながら、ちらっと長一郎のほうを見ていた。

「とにかくめでたい。大難が小難ですみ、小太郎が人々からこんなに好意をうけて全快したのは、つまり小太郎にそれだけの徳があるからだ、わしはそれがなによりもうれしい」

弥太夫は目を細めて、愛弟子小太郎のために祝福してくれた。

そして、翌朝、小太郎は志村へ帰るお千代をともなって、佐久間町の薪屋を立ったのである。

日中はまだ残暑がきびしいが、朝のうちはもう秋の風が肌に涼しい。きょうもからりと晴れた青空が澄んでいた。

神田から志村へは三里足らず、わらじにはおよばない道のりで、お千代は結いつけ草履だった。

「お千代さん、こんどはとうとう見物しなかったねえ」

「いいんです」

日ごろから口数のすくないお千代だが、けさはことに口が重かった。志村へ帰るのが悲しいのである。

「わしはこんど寝ているうちにいろいろ考えさせられた」

それをなぐさめるように、小太郎が話しかける。

「どんなこと――」

「ゆうべもみんなからもいわれたが、わしはこんどまったくお千代さんのおかげで治ったようなものだ。ありがたいと思っている。いや、それよりも、わしはお千代さんがそばにいてくれると、とても安心だった。つまり、お千代さんはわしにとって、どうしてもなくてはならない力であり、希望なんだね。お千代さんとふたりでなら、どこででもたのしく暮らせると、しみじみ考えさせられた」

「千代だっておなじです」
「わしは江戸で身を立てようと思って故郷から出てきた。だから、このあいだまでは、出世をしたらお千代さんをもらいに行こうと、漫然と考えていた。しかし、こんど寝ているうちに、考えが少し変わってきた。お千代さんならどんな苦労にも負けない。それならふたりで苦労して、一足ずつ自分たちの生活を築いていく、それが本当じゃないか、そんな気がしてきたんだ」
「千代、どんな苦労でもします。でも、無理に出世してもらわなくてもいいんです。あたし、小太郎さんが出世する人だからいっしょになりたいのではなくて、いっしょに苦労してもたのもしい人だから好きなんですわ」
お千代はやっときげんがなおったらしく、そんなおとなびたことをいいだす。いや、しっかり者のお千代は、このひと月あまり小太郎といっしょに暮らしているうちに、いつか人の妻としての心構えを、すっかり身につけてしまったのだ。
「かなわんなあ。わしのお嫁さんは、わしよりよっぽどしっかりしている。わしはきょう志村へ行ったら、ご老人に改めてお千代さんをくださいとたのんでみる気だ」
「本当、小太郎さん」
「うむ。わしはお千代さんのいない一生なんて、もう考えられない。だから、ちゃんと話をきめておいて、長一郎くんの修業がひととおりすんだら、われわれは江戸で家を持つことにしよう」
「うれしいわ、あたし」
「長一郎くんもこのごろあまり京都へ行くとはいわなくなった。これで江戸の修業がすんだら、志村へ帰ると言いだす気になってくれればいちばんいいんだがね」
「にいさん、きっと志村へ帰りますわ、お小夜さんをお嫁さんにして」
お千代が意外なことをいいだす。
「本当かね。そんなことを、長一郎くん、お千代さんに話したのかね」
「話しはしませんけれど、お小夜さんがあんなに度々お見舞いにきたのは、一つはにいさんに帰りを送ってもらいたいからですわ。にいさんもそれがたのしみで、このごろいっそう修業に夢中なんです。お嫁さんにかなわないだんなさまなんて、自分でもみっともないと思うんでしょう」
お千代はふっと微笑している。
「そうかなあ」
なるほど、そういえば、このごろ長一郎と小夜は口のきき方が時々ひどく親しさになれて、はっと気がついたように、いそいで他人行儀になっていることがあった。それに、小夜を送っていった日は、長一郎はたいてい外で夕飯をすませてきている。
「わしはうっかりしていたなあ」
「でも、お小夜さんならにいさんにちょうど似あいだと思いますわ。にいさんはわがままで向こう気が強いけれど、お小夜さんはおおざっぱで、なんていうのかしら、どっしりと落ち着いているほうですから、きっとにいさんのほうがかないませんわ」
よく人を見ているお千代だ。
「たしかにそういうところはあるな。そういえば、わしだってお嫁さんにかなわないほうかもしれない」
「いや、そんなことおっしゃっては」
やがて道は本郷追分へ出て、そろそろ日ざかりになってきた。
——兵太郎はどうするだろう。
ふっと小太郎はそれを思い出して、なにか不吉な予感がせずにはいられなかった。

21

その日、長一郎は昼までけいこをしまって、練兵館を出た。八辻ガ原から柳原土手へ出て、足はまっすぐ両国矢ノ倉へ向かっている。

——口実はちゃんとある。弥太夫先生にゆうべの礼をいって、けさ小太郎は妹を送って志村へ立ちました、先生によろしくといっていましたといえばいい。

その実、矢ノ倉訪問の目的は、むろん小夜にあった。

小太郎が全快してしまっては、小夜はもう佐久間町へ見舞いにくるわけにはいかない。といって、こっちから矢ノ倉へそう度々小夜をたずねていく口実はないし、なんとか今のうちにその点を小夜と相談しておかなくてはならないのだ。

ふたりの結婚は長一郎が練兵館の免許を取ってからと、これはあの晩腕にひけめのある長一郎からいいだして、

「あたくしはいつでもいいけれど、じゃ、そうきめましょう」

と、約束ができている。

が、それまで会わずにいるというわけには、どうもいかないのだ。長一郎は三日小夜に会わないでいるとなんとなく世の中が味気なくなってくるし、小夜は小夜で、

「こんなに度々お見舞いにくるの、とても気がひけるんですけれど、どうしてもあなたに会いたくなってしまうんですもの」

と、熱はどうやらあっちのほうが少し高いようなのである。

「わしはお小夜さんにめぐり会って、本当に世の中がたのしくなってきた。これまで、長い間よく退屈しないで生きてきたなあと、我ながら変な気がするくらいだ」

このあいだも小夜を送っていきながらそういうと、

「あたくしはそれどころではないのよ。毎日毎日あなたのことで胸がいっぱいで、さよならをしたその時から、こんどはいつ会えるかしらと、そればかり考えているのよ」

と、ため息をついていた。つまり、あんまり度々見舞いにくるのは恥ずかしいし、見舞いにこなければ会えないし、そればかりが気苦労になるらしい。

だから、今までは長一郎が自分で会う日を工夫しなくても、小夜のほうで苦労して会いに来てくれたのだが、これからはそうはいかなくなったのだ。だいいち、見舞いという口実がなくなれば、父親の手前、小夜は女の身でそう家を出歩くわけにはいかなくなるだろう。それをこの際はっきりと相談しておかなくてはならないのである。

——小夜はわしより頭がいいから、きっとなんとかうまい知恵を出すだろう。

その点、小夜のほうが世事にたけているから、長一郎は小夜にまかせておけばよかった。

「先生はひとり娘のお小夜さんをわしにくれるかなあ」

一度それを心配して聞いてみると、

「そんなこと今から気にしなくてもだいじょうぶですわ。子どもができたら川中の家名は立てますといえば、おとうさんきっと承知します」

と、小夜はさばさばと答えていた。

「そうかなあ」

「じゃ、あなたは父がいけないといったら、あたしをあきらめてしまうつもり」

「そうはいかないさ」

「なら、それでいいじゃありませんか」

万事がその調子の小夜なのである。

「わしがいつまでも免許が取れなかったら、お小夜さんどうする」

そういった時も、小夜の返事は簡単だった。

「あたくし免許とお祝言するんじゃありませんもの。免許を取ってからとおきめになったのは、あなたじゃありませんか」

まったく一言もない長一郎だった。

長一郎はそんなことを考えながら、柳橋土手をぐんぐん歩いていた。白々とした厚ぼったい小夜の顔がまぶたにちらついて、これからその

顔に会いに行くのだと思うと、長一郎は胸がしびれるように恋しくてたまらなくなってくる。

——なにしろ、すばらしい花嫁を見つけてしまったものだ。

長一郎は心からそう思いこんでいるのだ。

「あれえ」

郡代屋敷の土塀のあたりまできて、長一郎は思わず目をみはった。

向こうからちらっと大柄な、大柄なだけに人目に立つ色白な美人が、胸を張ってゆうゆうと歩いてくる。小夜なのだ。

——ああ、わしの巴御前。

それは肉細からず太からず、ぽったりとした柳腰などというおもちゃの美人ではなく、のびのびとした肢体に健康美をみなぎらせて、見るからに溌剌とした堂々たる巴御前的美人なのである。

向こうでも目ざとくこっちを見つけて、にっと豊かな微笑をうかべながら、いそぎ足に近づいてくる。

「よかったわ、あたくし。なんだか途中でお目にかかれるような気がしていたの」

小夜はうれしそうに、ぱっと顔を輝かしている。

「佐久間町へ行くところだったのかね」

「ええ。いろいろご相談をしておきたいことがありますし、これからはもうお見舞いはだめですし、もし、——まだお帰りになっていなかったら、九段へお使いをお願いしようと思っていましたの。ああ、お千代さんはけさ小太郎さまとお立ちになったのでしょう」

「うむ、立った。今ごろもう志村へ着いている時刻だな」

「いい世話女房——。しっかりしていますのね、あなたよりずっと」

「ごあいさつだなあ、そいつは」

ふたりは和泉橋のほうへ肩をならべて歩きだす。土手はほとんど人通りがないから、話しながら歩くには都合がいい。

「実は、わしもお小夜さんを呼び出しに行くところだったんだが、ご尊父になんといったものかなと考え考え歩いていたんだ。お小夜さんはなんといって家を出てきたの」

「父が出かけましたから、ばあやに、佐久間町へあいさつに行ってくるといいおいてきました」

「なるほど——。しかし、もうこれからはあんまり会えなくなるね」

「そんなこと、あたくしいやです」

これはまたはっきりしている。

「そりゃわしだっていやだ。なにかいい工夫があるかね、いつでも会いたい時に会える工夫が」

「ありますわ。あたくし考えましたの」

「そいつはすばらしい」

「いやな方——。まだお話ししませんのに」

「なあに、お小夜さんはわしより頭がいいから、きっとなにか考え出すだろうと思っていたんだ」

「あたくしね、小太郎さまがこんどお帰りになったら、あたくしたちのこと、父に話していただこうと思うんです」

「なるほど——」

「そうすれば、あなただっていつでもうちへ遊びにこられるし、あたくしも佐久間町へおせんたくに行ってあげられるでしょう。それがいちばんいいと思うのですけれど」

なるほど、これは巴御前流のさばさばとした割り切り方である。

「しかし、もしご尊父がいかんといったら、どうするね」

「またそんなこと——。父がいけないといったら、あなたは約束をおすてになる気——」

「そんなことはできない。わしはお小夜さんを強奪する」

「だから、それでいいではありませんか」

「うむ。どうせわしはお小夜さんに首ったけな

んだから、万事お小夜さん次第だ。よろしくたのみます」
「ふ、ふ、うれしいわ、あたくし」
巴御前は満足そうに、そっと長一郎のたもとをつかんでいる。
もうそこに和泉橋が見えだして、ここは外神田と内神田をつなぐ橋だから、かなり人通りが多い。外神田のほうから、今、橋にかかった三人づれの、けいこ道具を竹刀につけてかついだ剣客生たちが、みんなこっちを見ている。
それでなくてさえ人目に立つ小夜が、平気で男と寄りそって歩いているのだから、よけい若者たちの目をひくのであろう。
——うらやめ、うらやめ。
長一郎はなんとなく得意だったが、
「あっ」
小夜はびっくりしたように、つかんでいたたもとを放した。
「どうした、お小夜さん」
「あれ、兵太郎さんのようです」
「ふうむ」
内藤兵太郎と小夜のいきさつは、長一郎も小太郎から聞いているので、
「怖いのか、お小夜さん」
と、思わず詰問するような声になっている。
「いやっ、そんなことおっしゃっては」
小夜もつい意地になったらしく、いきなりしっかりと長一郎の左手をつかんで、平気で橋だもとのほうへ進み出す。
どうしてもそのあたりで双方がばったり顔をあわせるようになるのだ。

22

向こうの三人づれは、和泉橋をわたりきった橋のたもとへ、一列にならんで立ち止まった。いちばん右が内藤兵太郎である。
どっちかのわきへよけて通れば、むろん通れないことはない。が、向こうはこっちの顔をじろじろと見て、からかうようにわざと足をとめたのだ。長一郎も男の意地で、よけては通りかねるから、三人の顔を見くらべながら立ち止まった。
小夜はさすがに長一郎の背へかくれるようにして、じっと男のたもとをつかんでいる。
「だいぶにやけているな、木村」
右の丸顔の男が、肩をならべているまんなかの男にいって、まゆをよせた。
「うむ、たしかににやけておる」
まんなかの木村と呼ばれる男は、目を光らせながら、吐き出すように答える。三人とも旗本の子弟なのだから、ひとりずつにすれば決してそんな人をからかうような悪気はなかったろうが、仲間があるとつい野次馬根性が出るのだろう。
にやけていようといまいが大きなお世話だから、長一郎は黙って三人が道をあけるのを待っている。
「つんぼらしいな、口をきかんぞ」
「いや、唖かもしれん」
「にやけ唖か。もっとも、唖のほうが都合がいい時もある」
「鬼娘も唖だったのかなあ」
木村がいい気になって、小夜のほうへ目を向けてきた。
「そうか、鬼娘でなくて、唖娘だったのかもしれんぞ」
丸顔のほうも調子に乗って、にやりと冷笑をうかべる。
「兵太郎さま——」
きかぬ気の小夜が、きっとなって長一郎の背を離れ、
「このおふたりはあなたのお友達でございますか」
と、静かに聞いた。
「友達ならどうなんだね」
それまで黙っていた兵太郎が、仕方なさそう

に挑戦してきた。
「あたくし、このおふたりをけいべついたします。わざわざ往来をふさいで人をからかうのは、お旗本衆のなさることではないと存じます」
小夜ははっきりと一本たしなめる。
「そうだそうだ」
往来を堰かれて立ち往生をしていた見物人の中から、そんな野次が飛んだ。
「無礼な。からかうとはなんだ。若い娘が白昼男とでれでれして歩いているから、にやけているといったんだ。なにをいっても黙っているから、啞娘といったんだ」
木村がまっかになって、横車を押そうとする。
「若い娘でも、用があれば道を歩きます。別にでれでれして、あなたさまがたのおじゃまをしたおぼえはございません。おとがめだては迷惑でしたので、黙っておりました。啞というわけではございません」
「こやつ、女のくせにつべこべと、あんまり生意気な口をきくと許さんぞ」
「以後慎みます。どうぞお通しくださいませ」
小夜はていねいにおじぎをした。いうだけのことはいってしまったので、この辺が切りあげ時だと考えたのである。
「ならん、貴様はいまわれわれをけいべつすると放言した。ただですむと思うか」
木村は朴歯の下駄を踏み鳴らして食ってかかる。
「では、あなたはご自分のなすったことをいいことだとお考えになっているのでございますか」
小夜はあきれずにはいられない。
「なにっ」
「女連れをからかうなどということは、決して立派なことではないと存じます」
「許さん、こやつ。たたっ切ってやる」
理の当然に木村は引っこみがつかなくなってかっと逆上してきたようだ。

「お小夜さん、もういい！」
あぶないと見たので、長一郎は小夜を制して背にかばい、わざと木村は相手にせず、
「内藤さん、わしは九段の練兵館の門下生、杉下長一郎という若輩者です。ここでいつまでも橋をふさいでいては諸人の迷惑になりますから、今夜六ツ半（七時）わしのほうから大川端まで出向きます。そこで改めて話をつけることにしましょう。どうです」
と、おだやかに提案した。
「今夜六ツ半、大川端だな」
兵太郎は小夜のほうを見ないようにして念を押す。
「そうです」
「よし、承知した。――おい、行こう」
兵太郎は案外あっさりうなずき、ふたりをうながしてさっさと歩き出す。
「おい、きっと来るだろうな。逃げると承知せんぞ」
木村はなんとかいわなくてはおさまりがつかなかったのだろう。
「わしはいまちゃんと、姓名を名乗っている。逃げもかくれもせん」
「そのことばを忘れるなよ」
そんな捨てぜりふを残して、ふたりは兵太郎の後を追っていった。
長一郎もいつまでも野次馬のさらし物になっているのは、女づれだけに気がひける。いそいで小夜をうながして、和泉橋を佐久間町のほうへ渡った。

23

「ごめんなさい。長一郎さん、あたくし出すぎたまねをしてしまって――」
ふたりきりの道になると、小夜が申し訳なさそうにいいだす。
「いや、そんなことない。お小夜さんは立派だった」

長一郎は正直に答えた。
「本当――？」
「本当だ。あのふたりはたしかにけいべつすべき人間だ。それをはっきりといいきったのは、さすがにお小夜さんだと思う。わしは本当に感心しているんだ」
「でも、とうとう果たし合いにまでなってしまって、あたくしどうすればいいか」
「いや、わしは果たし合いをやろうとはいっていない。大川端で話をつけようと提案しただけだ」
長一郎はそういってから、
「しかし、向こうがどうしても果たし合いをやるというのなら、相手はする。決して逃げはしない」
と、それも覚悟の上だったのだ。
「あたくしも今夜いっしょに死にます。あなたとなら、あたくし――」
「お小夜さん、そりゃいかん」
「あら、どうしてですの」
「果たし合いは男同士のこと、まさかお小夜さんをつれて大川端へ行くわけにはいかない」
「だって、事の起こりはあたくしからなのですもの」
「いや、いかん。お小夜さんは鬼娘をやめたはずだ。そして、お小夜さんはわしの妻になる人だ。そうだろう」
「いいえ、小夜はもうあなたの妻ですわ」
「その女房をつれて、果たし合いに行く男があるかね。わしは世間のものわらいにはなりたくないんだ」
小夜は黙ってしまった。
長一郎としては、ともかくも兵太郎は恋敵ということになる。その恋敵との勝負に、自分より強いとわかっている小夜の力を借りたといわれるのは、絶対に避けなければならないのだ。
「おや、お帰りなさいまし。矢ノ倉のお嬢さんもごいっしょですね」

長一郎が小夜をつれて薪屋へ帰ると、女房のおたねが茶の間から、いつもの愛想のいい笑顔でむかえてくれた。
「おばさま、またおじゃまにうかがいました」
「さあさあ、どうぞ――」
「長一郎さん、あたくしちょっと、おばさまにおひるのことをお願いしてまいりますから、先にあがってくださいな」
「うむ」
長一郎はひとりで先に二階へあがりながら、急に胸が重くなってきた。
彼らとの果たし合いは、もう避けられないのである。三人にひとりでは、たぶん生きては帰れないだろう。
――あいにく、小太さんは留守だしな。
むろん、小太郎がいても、こんなことで助太刀をたのむようなひきょうなまねはしないつもりだ。が、あの兄貴のような小太郎がいてくれれば、後事を託して安心して果たし合いにのぞむことができただろう。
――まあしようがない。わしは男として、闘えるだけ闘えばそれでいいんだ。
もう半年前のおれじゃない。兵太郎だって小夜に及ばぬ腕だというし、たとえ相手は三人でも、そうむざむざとは負けるものか。そういう自負がないでもないし、だいいち取り乱してはあの巴御前の小夜に恥ずかしいと思う。
その腹の底から、いま死ぬのはつまらんなあ、せっかく小夜という美しい妻を得たばかりだのにと、やっぱり気が沈んでくるのである。
――一目小太さんに会いたいな。
小太郎のあの落ち着いた顔さえ見れば、自分のこの重い胸はきっとからりと晴れて、もっと勇気が出てくるに違いない。そう考えると、むやみに小太郎が恋しくなる。
「おひる、これにしましたの」
手間がとれると思ったら、小夜が自分でそば屋の膳を運んできた。盛りそばが二つのってい

る。

「よし、やろう。腹がすいた」

その実、あまり食欲はないが、果たし合いが胸につかえて物が食えないと思われるのは恋人の手前恥ずかしいから、長一郎はすぐにはしをとった。

「お小夜さんは食わんのか」

「あたくし、下でおばさまにおはぎをごちそうになりましたの」

「そうか」

食えば食えるもので、長一郎は二つの盛りそばをゆうゆうと平らげていく。我ながらたのもしい。

「おばさまがね、お嬢さんは若だんなのお嫁になるのかと聞きますのよ」

小夜がわらいながら、そんなことをいいだす。これも屈託のない鷹揚な顔だ。

「へえ、そんなことわかるのかねえ」

長一郎はちょっと意外である。

「あたくし、もらっていただきますと、正直にいいましたの。そしたら、たぶんそうではないかと思っていた、おめでとうございますと、よろこんでくれましたわ」

ふっと小夜の目に涙がたまってくる。

「あの夫婦は善人だからね。——ごちそうさま」

長一郎はそばを食い終わって、はしを膳の上へおいた。

小夜は黙って膳を部屋のすみへ片よせ、茶を入れてくれる。お千代が小太郎にそうであったように、小夜もまたいい女房振りをいつの間にか身につけている。

「お小夜さん、ひと休みしたら、矢ノ倉へ送っていくよ」

長一郎はこれから半日、日の暮れるまで小夜の前で虚勢を張っているのは、正直にいってつらいと思うのだ。

「いいえ、あたくしもう家へはもどりません」

「どうして——」

「あたくしもうあなたのお嫁なんですもの、おばさまだって知っていてくれるんですし、帰りたくないんです」

熱い思慕の感情をかくそうともしない目の色である。

「そうか。じゃ、大川端へ出かける時、ついでに家まで送っていこう。わしも、本当をいえば、お小夜さんがそばにいてくれたほうがなんだか安心だ。果たし合いを怖がっているなんて、そんな気持ちからじゃないよ」

「わかっていますわ。ご夫婦なんですもの、つらい時も、うれしい時もいっしょでなければ」

「そうだったなあ、その点、われわれはうれしい時が少し短すぎたようだ。わしは死にたくない。わらうか、お小夜さん」

つい本音が出る長一郎だ。

「死なないで、ねえ、死なないで、長一郎さん」

小夜がさそわれるようににじり寄ってきて、ひしと長一郎のひざにすがる。

「死ぬものか、おれはあくまでも闘ってやる」

「あたくしたちのほうが正しいのですもの、神さまがきっとまもってくれると思います」

「うむ、わしたちのほうが正しいんだ」

それだけに、長一郎はこんなことで死にたくなかった。

「あたくし、さっきはあの人を、兵太郎さんをたずねて、あたくしからこんなことになったのですから、よくわけを話して、果たし合いをやめてもらおうかと考えました。けれど、それではあなたの武士がすたると気がつきました」

「そんなバカなことを考えちゃいかん。世の中に正しいほうがあやまるなんて、そんな法があるもんか」

「ですから、ですから、あたくし、あなたに今夜もしものことがあったら、あたくしその場で自害して、いっしょにお墓へ埋めてもらいます」

「なあに、わしは勝つ。きっと勝ってみせる」

「ええ、勝って、きっと勝ってください」

その勝つということばの裏に、悲しい死がひそんでいるのを、どうしても打ち消すことができないふたりなのだ。

「死なないで、——死んではいや」

小夜はとうとう我慢できなくなって、狂ったように、長一郎にしがみついていった。

「お小夜——」

その火のような小夜のからだをしっかりと抱きしめて、長一郎は死にたくないと胸の中で絶叫しながら、どうしてものがれられぬ死の運命からもがきのがれようとするように、我にもなく座敷中をころげまわっていた。

24

あたりはいつか水のようにたそがれてきた。まもなく暮れ六ツに近い。

太陽が沈むと、急に大気がひんやりと秋めいてくるこのごろの季節である。

長一郎と小夜は、そのたそがれの中に、黙って向かいあって座っていた。いいたいことはみんないってしまって、今はもうなにもいうことはない。いや、いいたいことはまだたくさんある。そして、これからいうことが、人間の本当のことばかもしれぬと長一郎は思う。

「お小夜さん、そろそろ出かけようか」

これから小夜をゆっくり矢ノ倉へ送って大川端へ出かければ、ちょうどいい時刻になるに違いない。

「ええ」

小夜はすなおにうなずいたが、しかし立とうとはしなかった。

「わしはいまふっと考えたことがある」

長一郎も案外落ち着いた調子でいいだす。

小夜は黙って長一郎の顔を見た。

「男は、いざという時、うろたえて出発したといわれちゃ恥ずかしいからな」

「なんのことですの、それ」

「わしに今夜もしものことがあっても、お小夜さんは死んじゃいけない」

「いまさら、そんなこと——」

「いや、わしもさっきまでは、いっしょに死のうというあんたの気持ちがうれしかった。が、今は違う。あんたのからだの中に、ことによるとわしの子どもができているかもしれないと気がついたんだ」

「まあ——」

小夜ははっとしたように、赤くなってからだじゅうで恥じらいながら目を伏せる。

「わしは、この場になって、取り乱して過ちをおかしたんじゃないかと、反省してみた」

「いやっ、そんなことをおっしゃっては——」

こんどはうらめしそうに顔をあげるお小夜だ。

「とにかく、あんたは死んじゃいけない。もし子どもができていれば、それはわしの子なんだ。小太さんに事情を打ちあけて、男の子だったら、ぜひ杉下の家をつがせてもらいたいな」

「いやですというのに、あたくしひとり残るのは——」

「だいじょうぶだ、わしは今夜たぶん勝てる。あんたのことや、子どものことを考えているうちに、ふしぎと勇気が出てきたんだ。むだ死にをしちゃいかん。わしはそのためにこそ剣を学んだんじゃないか。わしがもし世の中に必要な人間なら、天は決してわしを殺さないだろう。急にそんな自信が出てきたんだ」

「小夜のためにも、きっと勝ってくださいまし」

「勝つとも。わしは無念無想で行く」

それが今はっきりといいきれる長一郎になっていた。真剣な人間の苦悩が豁然とある悟りへ達したのだ。長一郎の場合は、小夜という女体に、どたん場で過ちをおかしたと反省したことが機縁になったのである。

「うれしい、あたくし」

小夜は、昼間とまったく人が変わったように落ち着いてきた長一郎が、ただうれしくたのも

しかった。
「さあ、じゃ出かけようか。宮本武蔵流にわざと時刻をおくらせていくほど、まだ腕に自信があるわけじゃないからね」
「いいえ、だいじょうぶですわ。それだけ心にゆとりがあれば、きっとお勝ちになれます」
「ありがとう。そのつもりで出かけよう」
長一郎がわらいながら立ち上がった時、階下からふいに、
「お嬢さん、お嬢さん、小太郎さんが帰ってきましたよ」
と、女房のはずんだ声が告げた。
「まあ」
小夜の目がさっと輝いて、急に気がついたように、
「ごめんなさい、あなた。あたくしが下のおじさまにお願いして、志村へ迎えに行っていただいたのです」
と、そこへ両手をつかえる。
「いや、別にあやまることはないが、——驚いたなあ」
長一郎はその早手まわしに、ただぼうぜんと目をみはるばかりだ。
「長一郎くん、今帰った」
入り口のふすまをあけて、なつかしい小太郎の声がいいながら、静かに入ってきた。
「やあ、小太さん——」
「まあ座ろう、——お小夜さん、使いをありがとう」
「いいえ、あたくし一存で、出すぎたまねかとは思ったのですけれど」
「そんなことはない。とにかく、間に合ってよかった。感謝します」
小太郎は心から小夜に頭をさげてから、
「長一郎くん、事情はあらまし下の仙蔵うじから聞いたが、もう時刻だろう。大川端へはわしがこれから行ってこよう」
と、きっぱり切り出す。

「そりゃいかん、それではわしがひきょうになる」
「いや、ひきょうなどという問題より、ぜひわしが行かなくてはならないわけがあるんだ」
「わけ——？」
「くわしい話はいずれ帰ってきて話すが、内藤兵太郎という男は、実はわしの腹違いの弟になるらしいんだ」
「本当か、小太さん」
「まあ」
長一郎も小夜も、まったくびっくりせずにはいられない。
「そんなわけだから、わしとしてはどっちにけががあってもならん。どうか間にあってくれるようにと思って、いそいで帰ってきたんだ」
「わしが大川端へいっしょに行ってはまずいかねえ」
そういう長一郎には、兵太郎に対してもう敵意はない。売りことばに買いことば、あの場合こっちに行きすぎた点があるなら、小太郎といっしょに行って、あやまってもいいと考えたのだ。
「いや、やっぱりわしがひとりで行こう。正直なところ、兵太郎はわがまま育ちのようだし、当人はまだなにも知らずにいるらしいから、ふたりでゆっくり話してみるほうがいいと思うんだ」
小太郎はさすがに考え深い。
「そうか。では、このことはいっさい小太さんにまかせることにしよう」
「そうしてくれたまえ。とにかく、わしはこれからすぐに大川端へ行ってみてくる。お小夜さん、ついでに矢ノ倉へも寄ってくるから、わしが帰るまでここで長一郎くんと話していてください」
「はい、お願いいたします」
六ツの鐘をいましがた聞いたばかりだが、あたりはすでに薄暗くなっている。

帰ってきて、またすぐ出ていく小太郎を、階下の店先まで送って出た長一郎と小夜は、
「小太さん、向こうは兵太郎くんのほかにまだふたりいる。相当のわからず屋らしいから、十分気をつけてくれたまえ」
と、念を押す。
「ありがとう。なあに、わしはけんかに行くわけじゃないんだから」
小太郎はにっこりしながら、気がせくように店を出ていった。
「おじさま、きょうはお世話をかけまして」
小夜はついでに如才なく茶の間へ顔を出して、膳についている仙蔵に礼をのべる。
「間に合ってよござんしたね、お嬢さん」
仙蔵も使いのかいがあって、ほっとしているようだ。
「おかげさまで——でも、お千代さんがさぞがっかりしていませんでしたかしら」
わが身に思いくらべて、そんなことばがついて口に出る小夜だ。
「そりゃ、少しはうらんでもいましたよ」
仙蔵は冗談のようにわらってから、
「ああ、若だんな、大だんながね、たまには顔を見せるようにって、心配していましたよ」
と、障子の外に立っている長一郎に声をかける。
「うむ、一度帰ってみる。きょうはありがとう」
長一郎も改めて仙蔵に礼をいってから、二階の部屋へもどってきた。
ここにはまだ行燈に灯が入っていないので、窓障子に秋の宵月が青かった。
「お小夜——」
長一郎は黙ってついてきた小夜の肩をいきなり抱いて、
「わしはきめた。練兵館の免許を取ったら、志村へ帰ろう。おまえ、百姓の女房はいやか」
生きえたよろこびが、じいんと胸に熱くなってくるのだ。

「あたくし、あなたとなら——」
そういいかける小夜の甘い声は、たちまち長一郎の熱いくちびるでふさがれている。
そのころ——。
小太郎は疲れた足を忘れて、運命の大川端への道をいそいでいた。

25

小太郎は柳原通りをぬけて、両国広小路へかかってきた。
間にあって本当によかったと思う。ひとりはその父から後見役をたのまれて今では兄弟同様になっている長一郎、ひとりはまだ名乗りあってこそいないが血肉をわけあっている異母弟の兵太郎、どっちにけががあっても、その不幸は直接自分にひびいてくる不祥事なのだ。
——よく話をすれば、きっとわかってくれるだろう。
その点、小太郎はあんまり心配してはいなかった。
それにしても、杉下老人やお千代は、今ごろさぞ心配しているだろうと思う。
薪屋の仙蔵が小夜のことづてを持っていそいで志村へ駆けつけたのはちょうど八ツ（二時）をすぎたころで、小太郎は例のなつかしい納戸の炉端で、お千代を嫁にいただけないだろうかと、杉下老人に切り出している時だった。
農家はいそがしい季節だから、小者はみんな畑へ出ているし、お千代もその話が出ると、つと座を立って奥へ入ってしまったので、納戸にはふたりのほかにだれもいなかった。
「それはもう、小太さんにもらってもらえれば、お千代も幸せ者です。実はな、わしもぜひそうしてもらえたらと、いつも考えてはいたのだが、親の口からいうのはどうも押しつけがましいと、遠慮していましたのじゃ」
長左衛門は一も二もなく、よろこんで承諾してくれた。

「それで、小太さん、祝言はいつがよかろうな」
一度話がきまると、老人はもうあすにも式をあげてしまいたそうな口ぶりである。
「手前もいろいろと考えたのですが、長一郎くんが免許を取った時と、一応きめておいてはいかがでしょう。それまではまだわしにも責任がありますからな」
「しかし、それはいつごろのことになるんだな」
「たぶん、この秋にはだいじょうぶだと思います」
そんな話になっている時、仙蔵が駆けこんできたのであった。
老人にとってはひとりむすこの命にかかわる大事だから、顔色をかえずにはいられなかったのだろう。
「これから行けば十分間にあいそうですから、わしはすぐ帰ります」
小太郎としても、捨ててはおけない問題なのだ。
「そうか。いつも小太郎さんに迷惑ばかりかけるが、それではそうしてくれるか。せっかく久しぶりにもどってきてくれたばかりだのにな あ」
「いや、そう遠いところではなし、あすにもまた出直します」
「ぜひそうしてくれ。様子も聞きたいしな」
しかし、お千代は案外落ち着いていた。
仙蔵にもちゃんとあいさつをして、小太郎が奥へ支度をしに入ると、手伝いをしについてきて、
「お小夜おねえさま、やっぱりしっかりしていますね」
と、感心していた。
「あの話、おやじさまのお許しが出たよ」
小太郎が微笑しながら告げると、
「あたし、もう安心——」
と、ちょっと胸をなでおろすまねをしてみせてから、
「にいさんて、しようがない人。あたしたちに心配ばかりさせるんだもの」
と、愛情をこめて寂しくわらっていた。
——千代はいい世話女房になれる。
お千代のことを思い出すと、小太郎はたのもしくもあり、これからの人生がなにか豊かな気がして、勇気が出てくるのだった。
両国橋へ出て、橋手前を右へ折れ、大川端を新大橋のほうへ入っていく。場所はただ大川端とだけで、目じるしはなにも聞いてこなかったが、この道を歩いていけば、相手はどこかに待っているに違いない。
月のあかるい夜で、ほおをなでていく川風は、もうひんやりと秋の気配を感じさせる。
元柳橋をわたって、片側が大名屋敷の裏手の長い土塀つづきへかかってくると、その土塀がつきて矢ノ倉へ出る横町があり、また、隣屋敷の土塀になる。その横町の入り口から、つかつかと三人の人かげが出てきた。
横町を避けて、七、八間先へ行ったところで立って待っている兵太郎たちだった。
「お待たせいたした」
小太郎がいちばん右に立っている兵太郎にあいさつをすると、
「なんだ、違うじゃないか」
と、まんなかに立っている生意気そうな男が、じろりとこっちをにらめながら、投げつけるようにいった。
まっさきに口をきくからには、これがきょうのけんかの発頭人なのだろう。兵太郎でなくてよかったと思いながら、
「わしは杉下長一郎の代理にきた秩父小太郎という者です」
と、おだやかに名乗る。
「代理をよこすなんて、口ほどにもないひきょうなやつだな」
「いや、わしは杉下の父親から修業中の後見人

をたのまれているので、杉下をとめて、無理に代理に立ったのです。別に当人が逃げたわけではありません」

「それで、代理の口上はなんだっていうんだ」

「杉下はまだ若いものだから、あなたがたのお名まえさえ聞かずにもどったそうですな。失礼ですが、ご尊名をお聞かせください」

「わしは木村定八、これは内藤兵太郎、こっちは北島幸右衛門、——人に果たし合いをいどむ時は、名まえぐらいちゃんと聞いておくように注意しておくんだな」

けいべつしきったようなロぶりだ。

「いや、当人はあなたがたに果たし合いをいどむ気じゃなかった。ただ、後刻大川端であいさつをするといっただけだと申していますが」

「ひきょうなことをいうな。後刻あいさつをするといえば、果たし合いにきまっているじゃないか」

「なるほど、そう取れないこともありませんな。しかし、後で冷静に考えてみると、あんなことぐらいでつい感情に走ったのは、自分もいたらなかった。国家の大事というような問題ではなし、私闘でどっちがけがをしても、世間を騒がせ、親に心配をかけるだけのことだ。こっちの無礼はわびてもいいから、和解をしたいという希望を持っています。どうでしょうな」

小太郎はなだめるように説いてみる。

「いまさらそんな言いぐさがあるか。自分のほうから人に果たし合いをいどんでおいて、無礼はわびるからで事がすむと思っているのか。しかも、自分で出てこられないで、ひきょうにも代理をよこしてあやまる、わしは絶対に承知せん」

「困りましたなあ、木村さんはそんなにご立腹なんですか」

「あたりまえだ。杉下はわしをけいべつすると放言しているんだぞ」

「その点は感情に走って、ついいいすぎたと当人も深く反省しています」

「ならんならん。たとえ原因はくだらないことからにもせよ、武士には武士の意地があるんだ。いまさら、わびる、あやまるといっても、そんなことですむと思っているのか、これでもわれわれは天下の旗本だぞ。あんまりバカにするな。あの男をここへ連れてこい」

木村は居丈高になって、がんがんわめき立てる。兵太郎はそれとなくほかの方を向いているようだ。どうしてもけんかをしたいのは、どうやらこの木村という男ひとりらしい。

「困りましたなあ、原因は杉下が婚約の娘と歩いていた、あなたがたがその道に立ちふさがるような行きがかりになったことから、ことば争いが始まったと聞いていますが」

「そんなことをここで今くりかえしたって、なんになるんだ。後の祭りじゃないか」

「いや、そこをもう一度反省していただきたいのです」

「なに、反省しろ。貴公はわれわれのほうが悪いというのか」

「悪いというのではありません。ほんの行きがかりから起こった売りことばに買いことば、大切な刀を抜きあうほどのことではないと思うのですがなあ」

「黙れっ、自分のほうからけんかを売っておいて、いまさらそんな言いぐさがあるか、ひきょうにも程がある」

ひとりで興奮していて、手がつけられない。

「では、木村さんはどうしても杉下を切らなければ承知できないというんですか」

「当然だ。切る」

「杉下はひとりだが、あなたがたは三人ですな。それに、あそこにもふたり加勢がいるようだが、五人で杉下ひとりを切るつもりだったのですか」

「なにっ」

木村はぐっとことばに詰まったようだ。

少し離れたうしろの川端に、横町から出てきたふたりがそっと立っているのを、小太郎はさっきから知っていたのだ。

「あのふたりは検分役にたのんできたのだ。加勢じゃない」

「それでも、三人にひとりということになりますな」

「いや、勝負はひとりとひとりだ。おれがいちばん先に出る」

「そうでしょうな。それでないと、天下の旗本がひきょうになる」

小太郎はそれとなくだめを押しておいてから、

「木村さん、女づれだからといって、三人で道を排してなぶりものにしようとする、名誉ある天下の旗本のすることでしょうかなあ」

と、改めて一本突っこむ。

「黙れっ。なぶりものとはなんだ。白昼往来を武士たる者が娘の手をひいて歩いている、見苦しいからやめろと忠告してやったんだ、それがなぜ悪い」

「忠告とは、いきなり道に立ちはだかって、頭から相手を罵倒するような言辞をろうすることではありません。かげへ呼んで親切に教えてやるのが、本当の忠告です。そして、それがもし親切心から出た忠告なら、それをきかないからといって、殺意をおこすのは行きすぎです。忠告というものは、決してけんかになるべき性質のものではないと思います。もう一度考えなおしてもらいたいのですが、どうでしょうな」

ことばはあくまでおだやかだが、びしりと暴言をたしなめられて、さすがに返すことばがなくなった。後は腕力あるのみだ。

「うぬっ、いったな、こやつ」

かっとなって、木村定八は無法にもだっと抜き打ちをかけてきた。

ひらりと飛びさがった小太郎は、

「乱暴ですな、およしなさい」

と制しながら、素早く大川を背にして抜きあわせる。

「それっ、やっちまえ」

逆上している木村は、味方に声をかけながら、

「とうっ」

がむしゃらに激しい双手突きを入れてきた。衆をたのんでいきり立ってはいるが、腕まえからいえばまだ免許には少し間がある。すっと小太郎が右へ飛ぶと、見事に空を突いて、

「わっ」

すぐ目の前は満々と夜潮をたたえた大川だ。その岸で踏みとまることができず、木村は狼狽しながら自分からどぶうんと大川へ飛びこんでいった。

26

「それ、行けっ」

「木村の敵討ちだ」

味方が不覚を取ったとなると、理屈はともかくとして、黙って見ているわけにいかなくなったのだろう。右から検分役のふたり、左から北島の三人が、それぞれ抜力して小太郎を取りかこんできた。

兵太郎だけは元の場所を動こうとしない。

「お待ちなさい」

小太郎は刀をさげたまま敵意のないことを示し、

「わしは無益な血闘は好みません。木村さんの敵討ちといわれるが、木村さんは自分から川へ飛びこんだだけで、別にけがもなかろうと思います。わしがいま木村さんにいったことは、そう間違ってはいないと思う。お互いに大切な命を、こんなことで失うのは国家の損だと思うが、もう一度冷静に考えていただけないだろうか」

と、おだやかにことばをつくす。

相手に敵意のないものは切りにくい。しかも、北島といえども、木村のほうに無理のあったことはよく承知しているのだ。

どうしようかというように、三人は顔を見あわせている。
「諸君、刀を引いてくれ」
つかつかと進んできた兵太郎がいった。
「この男はわしと面識のある男だ。問題はわしから起こったのだから、わしが話をつける。任せぬか」
「そりゃ任せてもいいが、ひとりでだいじょうぶか」
北島が心配そうに聞く。
「だいじょうぶだ」
「よし、それなら任せよう。われわれの面目をつぶしてくれちゃ困るぜ」
「心得ている。木村のほうを見てやってくれたまえ」
兵太郎は川のほうを指さしてから、
「おい、いっしょにきてくれ」
と、小太郎にいった。
小太郎は刀を鞘におさめて、
「失礼した」
三人に会釈をして、兵太郎の後につづく。
兵太郎は黙って両国橋のほうへ歩いていくのだ。
「木村、おうい、木村」
「だいじょうぶか。泳いでこられるか」
うしろで三人が口々に呼んでいるのが、一足ごとに遠くなっていく。
やがて、元柳橋が近くなってきた。目の前に両国橋が黒々と弧を描いている。
「秩父、貴公はもと湯島に奉公していたお美代の子か」
兵太郎が低い声で、突然聞いた。
「美代は死んだわしの母です」
小太郎はどぎりとしながら答える。それを知っているようなら、兵太郎はもう自分たちがおなじ父を持つ兄弟だとわかっているはずなのだ。
が、それっきり兵太郎はまた口をつぐんでし

まった。
「湯島のおばあさまから聞いた」
それをいいだしたのは、左に薬研堀の灯を見ながら元柳橋をわたってからだった。
こんどは小太郎が黙っている。軽々しく口のきけることではないからだ。
「おばあさま、一度きみに会いたいといっていた。お美代に苦労させたから、怒っているかもしれないねと、心配していた」
「死んだ母が聞いたら、どんなにかよろこんだことでしょう」
小太郎はなんとなく目頭が熱くなってくる。
「おやじはいま大坂へ行っているが、来年は帰ってくるだろう」
人ごとのようにわざと冷たくいいながら、兵太郎はまだにいさんとはいわない。なにかためらっているようだ。
「きょうのことは、わしの意志じゃなかった。しかし、意志じゃなくても、ああなってはわしひとりいい子になるわけにはいかないからな」
「それは今夜ここへきてみて、わしにもすぐわかった」
「要するに、くだらないことなんだ。杉下という男にも、鬼娘にも、きみからよくあやまっておいてくれ」
「承知した。杉下もよろこぶだろうと思う」
「それから、鬼娘には、もっと前のことも、ついでにあやまっておいてもらいたいな」
「そうか。それもきっと引きうける」
「じゃ、わしはここで別れる」
兵太郎は急に立ち止まって、
「さよなら」
と、まっすぐ小太郎の顔を見た。ちょうど両国広小路へ出ようとするあたりである。
「さようなら。——おばあさまによろしく」
「うむ」
兵太郎はすなおに一つうなずくと、くるりときびすをかえして、いま来た道を引きかえして

いく。もうこっちを振りかえってみようとはしなかった。

——わがまま育ちで、しかも強情な性分だから、てれているんだろう。

そのうしろ姿を見送りながら、小太郎はなにかほほえましい。

それでもよく思いきって、小夜に前のことまであやまっておいてくれと口に出せたと思う。やっぱり、良心にはとがめていたのだろう。

——わしにとってはいい夜だった。

小太郎は胸あたたかく、長一郎と小夜が待ちかねている佐久間町のほうへ歩きだす。

27

すべては再び元通り平穏な日を取りもどした。

小太郎は毎朝矢ノ倉へ通って、夕方薪屋の二階へ帰る。長一郎もまた秋にはぜひ免許を取る必要があり、それを取りさえすれば小夜と結婚できるのだから、今までよりいっそう修業に身がはいる。

小夜は小夜で、ものごとをあまり隠してはおけない性分だから、長一郎との仲を父弥太夫に打ちあけ、幸い長一郎の一本気を愛している父の許しを得たので、安心して毎日家事にいそしんでいる。

そして、若いふたりにとってなによりもうれしいことは、もう隠れて外で会わなくても、時時長一郎が公然と川中道場をたずねられるようになったことである。

「小太さん、あんまり度々道場をたずねて、悪くないかなあ」

それでも、たまには長一郎が気兼ねをしていう。

「かまわんだろう。わしが悪いといったところで、きみはお小夜さんに会いたいんだろう」

「いや、わしはそんなでもないんだが、お小夜のほうで別れる時、こんどはいつ来るようにって、ちゃんと申し渡しがあるんでね」

「それじゃ、なにもわしに相談することはないじゃないか」

小太郎がわらいだすと、

「しかし、おやじどのがどう思っているかと思ってね」

と、やっぱりそれが気になるらしい。

「いや、先生はそんなことを気にするような神経のこまかい人じゃない。相当肝のすわった人だからねえ」

こんな風で、後は長一郎さえ一日も早く免許をゆるされれば万事が順当にうまく運ぶものと、だれもがそれをたのしみに待っていた。

が、人の一生というものは、いつ、どこで、どんな天の試練をうけるか、計り知れないものである。そして、その天の試練を一つずつ乗りきっていける者こそ、真に尊敬さるべき人格を築いていくものなのだ。

九月に入ると、日もずっと詰まってきて、秋はしだいに深くなる。

「小太郎さん、今夜はいっしょにご飯をあがっておいでになりませんか？」

今日も夕方から長一郎が道場をたずねてきている日だった。小夜がそうすすめてくれたが、ふたりであまり度々やっかいになるのは気がひけるし、みんなが待ちかねていた長一郎の免許の日もやがて近い。若いふたりにはまたいろいろふたりきりで相談したいこともあるだろうし、じゃまをしても本意ないと考えたので、

「いや、せっかくだが、わしは今夜ほかにも用があるし、遠慮しよう。まあ、ふたりでゆっくり積もる話をなさい」

と、辞退した。

「あんなことをおっしゃって。このあいだも会っているんですもの、積もる話なんて別にありません」

「そうでもないでしょう。恋人同士の話は、ほこりとおなじで、一日会わなくてもすぐ積もる

もんですからな」

「じゃ、お千代さんなどは、おかわいそうに、ほこりの山の下敷きになっているようなものですね」

小夜はなかなかうまいことをいう。

「なあに、志村は江戸と違って田舎だから、そうほこりはたたないそうです」

そんな冗談をかえしながら、ともかく小太郎は長一郎を残して、一足先に矢ノ倉の道場を出た。が、途中でふっと気が変わり、これから帰ってひとりで膳を出したりしまったりするのも面倒だと思い、米沢町のおでん屋へ寄って、銚子を一本取り、茶飯で腹をこしらえて帰ったから、佐久間町へ着いたのはもう宵をすぎていたろう。町筋はたいてい大戸をおろして、西の空に細い三日月がくっきりとさえていた。

「ああ、小太郎さん、お帰んなさい」

ここも店はしまっているので、くぐりから土間へ入っていくと、女房のおたねがいそいで茶の間から出てきて、

「お客さんですよ」

と教えてくれた。

「お客さん――？　だれだろう」

「小太郎さんは江戸に親類があったんですか。秩父さんはまだ道場からもどりませんというと、親戚の者だから待たせてもらおうといって、二階へずんずんあがってしまったんです。若いお侍さんなんですがねえ」

はてなと、小太郎は思った。親戚で若い侍といえば、兵太郎ぐらいな者だ。しかし、兵太郎とはあれっきり会っていないし、だいいち自分がここにいることさえまだ知らないはずである。

「ありがとう。とにかく会ってみよう」

いそいで二階へ上がってみると、座敷のまんなかにぽつねんと座って青い顔をあげたのは、やっぱり内藤兵太郎だった。

「兵太郎さんか、よく来たなあ」

びっくりはしたが、なによりもたずねてきてくれたのはうれしい。心から親しい微笑をうかべて、つかつかとそばへ行って座ると、

「にいさん、表に変なやつがうろうろしていなかったか」

と、兵太郎はおびえたような目をぎらぎらさせている。

「変なやつって、だれなんだ」

「たぶん岡っ引きだと思うんだ」

「岡っ引き――」

そういえば、家へ入る時に筋向かいの質屋の角にひっそりと立っている人影があった。

「いったいどうしたんだ、兵太郎さん。なにか岡っ引きに追われるようなことがあるのか」

小太郎は思わず緊張せずにはいられない。

「うむ、おれはたたっ切ってしまったんだ」

急に兵太郎はいつものみえ坊にかえって、昂然と胸を張っていう。

「だれを切ったんだね」

「岡っ引きなんだろうねえ。今夜、突然、会合の席へ踏んごんできやがったんだ」

「会合の席って――」

「わからんかなあ。おれはこのごろ尊攘党と付き合っているんだ。ここだけの話だが、今夜の会合は和宮さまのお輿を奪還しようという打ち合わせだったんだがね、ふいに捕り方が四方から取りかこみやがった。完全に失敗さ」

兵太郎はいかにも尊攘浪士らしい口ぶりでまくし立てる。が、元気らしく見せているのはどうやら表面だけで、内心は当惑というより、恐怖にさえおびやかされているのではあるまいか。声の調子まで上ずったところがある。

それにしても、困ったことになったと、小太郎は思った。

尊攘浪士は幕府からいわせれば不逞浪人で、つかまればむろん牢舎へつながれる。場合によっては命がない。それが旗本の子弟なら家名にもかかわってくる重大問題なのだ。岡っ引きに

追われるのは当然な話である。

28

「兵太郎さん、尊攘という問題は、もう時の勢いで、その是々非々をいまここであんたと議論をすることもないと思うが、気になるのは今のあんたの立場なんだ。あんたは本当にその尊攘党に加盟しているのか」

小太郎は静かに聞いてみた。

「いや、まだはっきり加盟したってわけじゃないんだ。ただ、今夜そういう会合がある、行ってみぬかと、定八が、ほら、このあいだ大川へ飛びこんだ木村定八ね、あいつなんだが、定八はすでにやつらと血判を交わしているらしいんで、誘われたから、どんなことをやるんだろうと思って、いっしょに行ってみたんだ」

兵太郎はまだ虚勢を張っている。

「じゃ、兵太郎さんのは、まだ多少相手を試してみようという程度なんだね」

「正直にいえば、そうなんだ。小梅の大橋訥庵先生が黒幕になって、和宮さまのお輿を奪還し、同時に日光へ立てこもって尊攘の旗あげの先駆をやろうという計画がある。それにはぜひ志士三十人を募る必要があるというんでね、定八は長州の多賀谷という男に誘われて一味に加盟した。貴公も加盟せぬか、これが成功すると、天下の大問題になって、どっちへころんでも一方の旗頭になれるというんだ」

「どっちへころんでもとは――？」

小太郎がおだやかに聞きとがめる。

「つまり、成功さえしてしまえば、大橋先生はどうせ一橋公をかつぎ出すつもりだから、行く行くは徳川宗家と手を握る、その場合はこっちはもうただの小旗本じゃないと見ているんだね」

その前に、失敗したらということは考えず、ただ功名心に駆られて動く、そんなたわいもない考え方らしい。

「それで、今夜はどこで会合があったんだね」

「駒形の船宿から、船でこぎ出して相談することになっていたんだが、そこで同志を待ち合わせている間に、いきなり捕り方に踏んごまれたんだ」

「こっちの人数は――」

「五人だった。もうひとり来れば船へ乗るところだったんだ」

「つかまった者はあるようかね」

「たぶん、ないと思う」

「定八といっしょに逃げたのか」

「うむ、窓から屋根づたいに逃げ出して路地へ飛びおりるまでいっしょだった」

「そういう時、尊攘党はたいてい変名を使っているというが、兵太郎さんも名は変えていたんだろうね」

「わしは藤井太郎と名乗っていた」

「よし。それなら、つけられている岡っ引きさえうまくまいてしまえばだいじょうぶなんだな」

「うむ」

うなずいた顔が、ひどく子どもっぽく見えた。

「待っていたまえ、わしがもう一度表を見てきてやる」

小太郎はそういいおいて、下へおりてきた。いま兵太郎に聞いただけのことなら、そう大した問題ではない。この場さえうまく岡っ引きの目をごまかしてしまえば、後は知らぬ存ぜぬでも事はすむだろうし、だいいち変名を使っているのだから、岡っ引きのほうでも内藤兵太郎は探しようがないわけだ。

兵太郎には今後絶対にそういう面白半分の気持ちで軽挙は慎むように、よく意見をしておけばそれでいい。

――苦労というものを知らんから、困ったもんだ。

兵太郎の必要以上におびえているらしいのが、内心少しおかしくもあった。

「どうかしたですか、小太郎さん」
そっと台所へ出ていくと、夜食の跡片づけをしていたおたねが、声をひそめて聞いた。
「いや、二階の客がなにかちょっとした間違いで、岡っ引きらしいのに後をつけられているというんでね、そっと見てきてやろうと思うんだ」
「そういえば、さっきから質屋の角にだれか立っているんですよ」
「わしもここへ入る時、その男を見ている。もし店へ聞きにくるようだったら、よく知らないと返事をして、わしを呼んでくれないか」
「ようござんす。——あたしがもう一度見てきてあげましょうか」
「いや、わしが出てみよう」
小太郎は下駄を突っかけて、裏の薪置き場へ出た。この家の横手の三尺路地は、その置き場へ出入りするために薪屋だけで使う路地だから、路地口に格子の開き戸がついている。路地は暗いから、表からはたぶんなにも見えないはずだ。
そこまで足音をしのばせて出てみた小太郎は、はてなと思った。
筋向かいに見る質屋の角の人かげは、ふたりになっている。しかも、ひとりは侍のようだ。
こっちを見て、なにか二言三言話し合ったと思う間に、侍はすっとそこを離れて、さっと薪屋の前を通りすぎていく。
——あっ、木村定八。
月の光でその顔をはっきりと見て取った小太郎は、どきりとした。
今夜の尊攘党へ兵太郎を誘ったのは、あの男のはずだ。岡っ引きとは敵味方のはずである。それがなにかひそひそと話をして別れる、ただごとではない。
——ことによると、定八という男は公儀の犬をつとめているのではなかろうか。
表面はいかにも志士のように見せかけて、その実、尊攘党の秘密をさぐって公儀へ内通する、

侍としてはもっともけいべつすべき行為だが、公儀としてはぜひそういう隠密が必要な時勢になってきているのだ。
——それにしても、友達まで公儀へ売る必要があるだろうか。
しかも、今夜の彼は、自分がわざわざ兵太郎をそんな会合へ誘い出しているのだ。
どうもおかしいと見ているうちに、質屋の角の岡っ引きがふらりと往来の月の中へ出てきた。
「なんだ、薬研堀の三吉じゃないか」
小太郎はまだ口こそきいたことはないが、弥太夫は土地の顔きききなので、時々台所から顔を出して、小夜などとも心やすく口をきいていく岡っ引きだ。
三吉はちらっと薪屋の店を見ながら、そのままゆっくり定八の後を追っていくようである。要するに、もう尾行を中止したというかっこうである。
——どうもわからんなあ。
取りようによっては、おまえの追っているのはおれの友達だから、もういいと定八が耳うちをしたので尾行をやめたとも見えるし、あの男なら尾行などしなくても、ちゃんと屋敷がわかっているからと、そんな相談になったようにも取れる。
だいいち、おなじ土地にいるのだから、三吉ははじめから兵太郎の顔を知っているはずだ。いったい、なんのための尾行だったのだろう。

29

「兵太郎さん、岡っ引きは引きあげたようだよ」
小太郎は二階へ引きかえして、まずそれを告げた。
「そうか——。そいつはありがたい」
さっと目を輝かして、兵太郎はうれしそうな顔をする。
「あんたは薬研堀の三吉という岡っ引きを知ら

ないかねえ」
「口はきいたことはないが、顔はよく知っている。どうして――？」
「あんたをつけていたのは、その三吉だ」
「ふうむ」
一度明るくなった兵太郎の顔が急にまた曇って、
「そいつは気がつかなかったなあ。――わかっていりゃ、切ってしまうんだった」
と、後の言葉はただ強がりだけのようである。
「あんたは木村定八に、なにか恨みをうけるようなおぼえはないのか」
「いや、そんなことは絶対にない」
「そうか、それならいいが、――そういえば、あんたは近く嫁をもらうことになっているそうだね」
小太郎はふっとそれを思い出した。
「うむ、神保町の岡佐左衛門という旗本の娘で澄江というんだ」
はっきりといって、ちょっと顔を赤くしたのは、前に小夜とのいきさつがあるからだろう。
「美人らしいな」
「うむ、少し」
「恋仲かね」
わらいながら小太郎が聞く。
「うむ、まあそうだ」
「定八は澄江さんを知っているのか」
「知っている。岡の家へつれていったのは、定八なんだ。定八は澄江の兄の広之進と友達でね、広之進は講武所の秀才なんだ」
「本当は定八が澄江さんをほしかったんじゃないのかね」
「さあ――」
兵太郎はちらっと当惑そうな顔をかくしきれず、
「前はそんなことを考えていたかもしれんなあ」
と、口を濁す。

「定八はやっぱり跡取り息子かね」
「あれは本当は三男坊なんだが、長兄がこのあいだ死んで、次兄が八丁堀へ養子に行っているもんだから、運よく跡取りのお鉢がまわってきたのさ」
「ふうむ、次兄が八丁堀へねえ」
小太郎はそれでなぞが解けたような気がした。
「兵太郎さん、さっきわしが下へ見に行った時、定八は三吉になにかひそひそ話をして帰っていった。三吉が張り込みをやめたのは、それからまもなくだ。どう思うね」
「定八が、三吉とか」
さすがに兵太郎もぎくりときたらしい。
「これはわしの邪推かもしれないが、定八はなんとかしてあんたと澄江さんの縁談をぶちこわしたいんじゃないかな。このあいだのけんかもそれが目的だった。あれが失敗したので、こんどはあんたを尊攘党へ引っぱった。定八はその次兄との関係で、公儀の犬、隠密のようなことをつとめているんじゃないのか」
兵太郎はあっと目をみはっている。なにか思いあたることがあるのだろう。
「うむ、たしかにそうだ。そうでなければ、今夜あんなに早く手がまわるはずがないものな。許さん、詰問してたたっ切ってやる」
「まあ待ちたまえ、はやまってはいかん」
小太郎はおだやかに制して、
「とにかく、屋敷まで送ってあげよう。定八の目的は、婚約をぶちこわしさえすればいいんだろうから、まさか友達のあんたをつかまえようとまではしないだろう。しかし、こっちの出ようによっては、そういう卑劣なやつはなにをするかわからん。四、五日は外へ出ないようにして、敵の出方を待ってみることだ」
と、くれぐれも注意しておいた。
「すると、わしはもう尊攘浪士にされているわけなんだな」

「そりゃ、たとえ冷やかし半分にもせよ、幕府に盾を突こうとする浪士の会合に出席しているんだから、同志と見なされてもしようがあるまい。まさか、武士として、あれは冗談でしたともいえないし、そうかといっていまさらその人たちをきみから訴え出るような裏切りはできないだろう。あの人たちはともかくも命がけで国事に奔走しようとしている志士たちなんだものな」

「むろん、そんなことはできないさ」

「兵太郎さん、正直にいえば、そこまでの覚悟がなくて、うっかり定八の手に乗せられたあんたが軽率だったんだ。まあ四、五日家で自重して、様子を見ることだ。なにか起こったら、その時またきっと相談にのるから、母上を心配させてはいけない」

「ありがとう。たのむよ。要するに、わしがバカだったんだ」

帰り道にはすっかりしょげている兵太郎だった。

——無事におさまってくれればいいが。

それから四、五日の間、小太郎は兵太郎のことばかり心配して暮らした。

「妙なもんだなあ、小太さん」

兵太郎のその夜の話を聞いた長一郎が、感慨深げにいった。

「はじめはわしが、京へ行くんだとがむしゃらに強情を張って、おやじや小太さんをてこずらせた。こんどはそこへ兵太郎くんがうっかり首を突っこんで、小太さんを心配させる。つまり、尊攘なんてものは、われわれ若い者にとって、一種のはやり病のようなものかもしれないな」

「まあ、そういうことにもなるな。そして、はやり病程度にこの病気にかかるのが、いちばんあぶないということになるんだ。生兵法というやつは、一つ間違うと命取りになるからね」

「まったくだ。わしも早く生兵法の域を脱しないと、嫁っ子が泣く」

「しかし、きみが京へ行くのを断念してくれたのは、ご尊父にとっても、きみにとっても大慶の至りだ。尊攘は志村にいてもできるからな」

「わしもこのごろはそう考えている。正しい尊攘は、嫁っ子とふたりで、まじめに土を耕すことだ」

「嫁っ子に教わったのかね」

小太郎はわらった。

「うむ、あの嫁っ子は実にすばらしい。わしはどうも嫁っ子のしりに敷かれそうだな」

そんなことが平気でいえるだけ、長一郎はこの半年あまりでぐっとおとなになったのである。

こっちはやっと安心だと、小太郎はわがことのようにうれしかった。

30

それは、あの晩からちょうど七日目、中秋名月の前の夜のことだった。

いつもは長一郎のほうが先に帰ってきていて夕餉の支度をしておいてくれたのだが、その日はまだ帰っていないので、これから膳の支度にかかろうとしている宵の口だった。

どかどかと足音荒く二階へ駆けあがってきた長一郎が、

「小太さん、えらいことになったぞ」

と、いきなり顔を変えながらいう。

「どうしたんだね」

「兵太郎さん、小太さんは帰ってきている。かまわんからお上がんなさい」

長一郎は階段の下へ呼んだ。

「なんだ、兵太郎くんもいっしょか」

小太郎はどきりとした。むろん、いいことできたのではないと直感したからだ。

「にいさん、わしはとうとうやってしまった」

兵太郎はぬっと入ってくるなり、興奮した顔に子どもっぽいゆがんだ微笑をうかべた。

そのうしろへ小さくなって、旗本の娘とも見

える高島田髷の娘が座って、両手をつかえている。十六、七でもあろうか、色の白いかわいい娘である。

「兵太郎さん、澄江さんか」

小太郎が落ち着いて聞く。

「うむ」

兵太郎はうなずいて、

「澄江さん、兄貴です」

と、娘のほうを振りかえる。

「澄江と申すふつつか者でございます」

澄江ははっきりと名乗って、おじぎをした。

「わしは秩父小太郎です。あいさつは改めて後でしますが、——兵太郎くん、まずきみの話から聞かせてくれ」

小太郎は冷静に座りなおした。

「きのう、岡さんから破談の話がきたんだ。事情はわしの胸に聞いてくれといって、なにも説明してくれない。定八のやつ、いよいよやったなと、わしは思った。破談なら破談でしようがない。しかし、そんな卑劣な手段に引っかかって、澄江さんにまで疑われるのはいやだと思ったんだ。だから、さっき、澄江さんを裏口から呼び出したんだ」

「家へは無断でだね」

当然なことだが、一応聞いておく。澄江の態度が見ておきたかったのだ。

澄江は青い顔をして、じっとうつむいたきりである。

「だって、しようがないもの」

兵太郎は不服そうにいってから、

「聞いてみると、やっぱり定八の兄の牧村定五郎がたずねてきて、内藤兵太郎は不逞浪人になにか関係があって、近日大事をたくらんでいるらしい、こちらと縁組みがおありのようだから、内々でお耳に入れておくが、近く奉行所へ呼び出されることになっていると告げてもどったそうだ。だから、わしは、事実はこうなんだと、本当の話をしていたんだ。そこへくせ者がふたり飛び出したんだ」

「場所はどこなんだね」

「水道橋をわたって、人に見つかると困ると、知らず知らずにお茶の水へあがっていたんだ。くせ者はふいにうしろから、裏切り者っという。見ると、ふたりとも頭巾で顔をかくしているんだ。貴公たちは何者だ、なにが裏切り者だとやりかえしたんだが、もうふたりとも抜くとわしを切ろうとする。畜生と思ったんで、わしは夢中だった。そこへ長一郎くんが駆けつけてくれたんだ」

兵太郎はちらっと長一郎の顔を見る。

「わしは今夜、あんまり月がいいんで、お茶の水をぬけて帰ろうと思ってね、水道橋から坂をのぼりきると、ふたりのやつが兵太郎さんを取りまいている。そばに娘さんがいるし、ふたりのやつは覆面をしているから、てっきり辻切り強盗だと思ったんだ。だから、駆けつけるなり、強盗とどなりながら、竹刀でひとりのほうの脳天をがあんと一本くらわしたんだ」

長一郎が手まねをしてみせる。

「ひとりのほうはぱっと逃げ出した。こっちも気が立っているから、長一郎くんが殴りつけたやつへいきなり切りこんだ。倒れたやつの覆面を引っぱいでみると、それがこのあいだの北島幸右衛門なんだ。逃げたやつは、たしかに木村定八に違いないと思う」

「どうしようと兵太郎くんがいうから、もう小太さんが帰っているに違いない、一度相談するほうがいいといって、わしが無理にここへ引っぱってきたんだ」

長一郎にも、どうしていいか、その場で判断がつかなかったのだろう。

困ったことになったと、小太郎は当惑した。なによりもまずいのは、澄江をここへつれてきてしまったことである。

「長一郎くん、澄江さんだけは、家で心配しているだろうし、屋敷へ送ってあげるとよかったね」

「いいえ、あたくし、もう家へはもどりません」
澄江が顔をあげて、きっぱりといった。
兵太郎ははっとしたように澄江の顔を見ている。
「いけなかったか、小太さん」
長一郎は悲しげな顔をする。
「いや、すんでしまったことはもういい。それより、いそいで善後策を講じよう。定八はいまごろきっと岡さんの屋敷へ駆けこんでいる」
小太郎はそういってから、ちょっと考えるようにことばを切った。
三人が三人とも、今は小太郎ひとりがたのみの綱らしく、じっとこっちを見ている。
「兵太郎くんはともかく一応身をかくさなくてはいけない。長一郎くんも定八に顔を見られている。江戸にいてはまずい。ふたりですぐに志村へ立ちたまえ。跡の始末はわしがする」
「澄江さんは、澄江さんはどうなるんだね」
兵太郎があえぐように聞いた。
「先方からここへ押しかけてこないうちに、わしが屋敷へ送りとどけよう」
「澄江さんもいっしょに志村へ行っちゃいかんのか、小太さん」
長一郎がそんな人のいいことをいいだす。
「駆け落ちはいかん。ご両親のことを考えてみたまえ」
「でも、あたくし、あたくし、もう覚悟をきめました。あたくしのためにこんなことになったのでございますもの、兵太郎さまといっしょに死にます」
すがるような目をする澄江だ。
「澄江さん、あなたはそんなに兵太郎が好きなのか」
「はい、好きでございます」
それは偽りのない姿のように見えた。
兵太郎が急に握りこぶしで涙を払っている。
「その今の心にさえ変わりがなければ、必ずいつかはいっしょになれる。いまご両親に心配をかけてはいけない。それに、兵太郎はことによると、当分江戸へ帰れなくなるかもしれないのだ。女づれの旅は、困難が三倍にも四倍にもなる。わしがきっとご両親を説いてあげるから、ここはわしの指図どおりにしてください」
情に負けてはならない時だと、小太郎は思った。
「どうしても、どうしても、いけませんの、おにいさま」
「いかんです」
澄江はいきなりそこへ突っ伏して、嗚咽しだした。
「両君、早く立ちたまえ。この家を取りかこまれてしまってからでは、万事休すことになるぞ」
小太郎はしかるようにいった。
「小太さんはだいじょうぶか、後に残って」
長一郎がそれを心配する。
「わしのことは心配しなくてもいいよ」
「そうか。あのなあ、小夜、小夜に――」
「よし、ちゃんと心得ている」
「うむ、そうか」
追い立てられるように、長一郎はさっと立ち上がった。
「澄江さん――」
兵太郎が人目もなくふいに澄江の肩を抱いた。
「兵太郎さま」
ひしと澄江がすがりつく。
――ふたりとも覚悟ができたな。
小太郎はそう思ったので、黙って顔をそむけた。
「小太さん、千代になにかことづけは――」
若いふたりの前へ立ちはだかるようにして、しばらくでも別れを惜しめというように、長一郎が気をかせて、目にいっぱい涙をためている。
「なんにもない、早く行きたまえ」
冷淡に突っぱねる小太郎だ。
「そうか。じゃ、小夜に、小夜によろしく」

「何度おなじことをいうんだね」
「そうしかるなよ、小太さん。武士の情けじゃないか」
「武士の情けは人を牢屋へ送ることじゃない。ともかくも、まず生きることだ」
じりじりと小太郎は時を刻まれ、胸をえぐられる思いである。
「長一郎くん、行こう」
牢屋という一言が、があんと兵太郎の耳を打ったらしい。澄江を放して、決然と立ち上がった。
「兵太郎さま、これ、あたくしだってお思いになって」
澄江が兵太郎の手に、銀の平打ちのかんざしを握らせたらしい。
「忘れないよ、澄江さん」
「あたくしも――」
「にいさん、後をたのむ」
「わかっている。あわてずに行きたまえ」
「はい」
兵太郎はいさぎよく、もうしっかりとした足取りで階段をおりはじめた。
「じゃ、小太さん――」
「うむ」
長一郎が後を追いだした。
「あの、あの、下までお見送りしては――」
「いけません」
「はい」
急にしょんぼりとなって、澄江はたもとで顔をおおってしまった。

31

「さあ、澄江さん、家へ送ってあげよう」
長一郎と兵太郎が出ていくとすぐ、小太郎は澄江をうながして立ち上がった。なるべく早く送っていったほうが家でも安心するだろうし、それがこっちの責任でもあると考えたからである。

「はい」
「わしからもよくわけは話すつもりだが、澄江さんもありのままをご両親に告げて、ともかくも心配をかけたのだから、すなおにあやまることです」
「そういたします」
「たくさんしかられそうかね」
尊攘党に関係があると聞いただけで、一応の問いただしもなく婚約を破談にしてくる家だから、家庭は相当にきびしいかもしれぬ。あまりしかられてもかわいそうだがと、小太郎はついそんなことまで心配になってくる。
「いいえ、しかられてもかまいませんの」
澄江ははっきりと答えて、寂しい微笑をうかべていた。それは、兵太郎のためならいくらしかられてもいいと覚悟しているようにも見える。それだけこんどの破談には不満もあるのだろう。
「おにいさま、尊攘ということは、そんなに悪いことなのでございましょうか」
連れ立って外へ出てから、澄江はそれを口にしていた。
「いや、尊攘がいいか悪いかは、時勢に対するその人の意見なのだから、それによってその人の人格までうんぬんするのは間違いだと思うな。しかし、公儀では尊攘党を不逞浪人あつかいにしている。これは、そういう浪士の中に、尊攘の名を借りて悪事を働く者が多いからで、まあしようがないことだと思うね」
「兵太郎さまは、あたくし、そんな不逞浪人ではないと思います」
「そうです。あれは悪いことのできる男じゃない。ただ、世間の苦労を知らないから、人にかつがれやすい。つまり、一本気でお人よしなんだ。もっと苦労をすると、いまにきっと男になれると思う」
「どうして、あんな人にだまされたのか、あたくし悔しいと思います」

澄江はじっとくちびるをかんでいるようである。

「兵太郎も澄江さんのようなしっかりしている人についていてもらったら幸せだったのにねえ」

小太郎は冗談のようにいいながら、この澄江といい、お小夜といい、千代といい、女たちはみんなそれぞれにしっかり者ぞろいだと思うと、なにかたのもしくなってくる。

「おおっ」

ちょうど御成街道へ出ようとするところで、ばったり出会ったふたりづれの男が、はっとしたように立ち止まった。ひとりはたしかに木村定八である。

「あっ」

いそいで澄江が背中へかくれるようにしたところを見ると、連れのひとりは兄の岡広之進なのだろう。そういえば、どこか面ざしが澄江に似た美青年である。

「岡さんですな」

小太郎は自分のほうから丁重に声をかけた。

「そうです」

相手はむっつりとこっちの顔をにらむように見すえている。

「わしは内藤兵太郎の身内の者で、秩父小太郎という者です。これから澄江さんをお宅までお送りしようと思って、ここまで出てきたところでした」

「内藤はいっしょじゃないのかね」

そばから定八がうさんくさそうに口を出す。

「いっしょではありません」

「おかしいですなあ。澄江さんを連れ出したのは、たしか内藤のはずだったがなあ」

「貴公、見ておられたのか」

「むろん、見ていたから、岡さんの家へ知らせてあげたんだ」

うそをいってもだめだぞと、念を押しているような定八の陰険な顔つきである。

「貴公はこれから岡さんをわしの家へ案内する途中のようだが、どうして兵太郎がわしのところだと見当がついたんですな」

「まさか、破談になった者が、家へ澄江さんをつれていけもしないだろう。たぶん貴公の家の二階だと見当をつけたんだ」

ずるい定八は、さすがにお茶の水のことは一言も口にしようとしない。

「それだけの友情があるなら、見かけた時すぐ兵太郎に忠告してやってくれれば、岡さんにこんな心配をかけなくてもすんだんですがねえ」

小太郎はわざといってやる。

「それより、内藤はどうしたんだね。自分で出てきて謝罪するのが本当だと思うんだがなあ」

「貴公が兵太郎たちを見かけたのはお茶の水でかね」

「いや、水道橋をわたろうとしたら、ふたりでお茶の水の坂をあがっていくのが見えた。おかしいと思って、すぐに岡家へ知らせたんだ」

あくまで白を切っている定八である。

「岡さん、兵太郎にかわって、わしからおわびします」

小太郎は改めて広之進のほうを向いた。

「兵太郎はこんどの破談についてなにか解せないものがあるので、直接澄江さんに会って聞いてみたかったんだそうです。無断でそういうまねをするのは悪いと十分知ってはいたが、幸い澄江さんに会えたんで、人目をはばかり、つい寂しいお茶の水のほうへのぼっていった。そこへ何者とも知れぬ頭巾の侍がふたり出てきて、裏切り者といって兵太郎に切りかかった。ちょうど、わしの友達でいっしょに二階住まいをして九段の練兵館へ通っている男が通りかかり、ひとりのほうを竹刀でたたき伏せると、ひとりのほうはひきょうにも逃げてしまった。その友達がそこからすぐ澄江さんをお宅へお送りすればよかったんだが、若いものだからついうっかりして、三人でわしのところへ、どうしようと

相談にきました。ともかくも、澄江さんはお送りしなくてはいけないと、わしがさっそくここまで送ってきたところでした。どうぞご了解願いたいと思います」

「内藤はいま貴公の家にいるのかね」

広之進が冷たい声で聞く。

「いや、あれもすぐ矢ノ倉へ帰しました」

「だいじょうぶかなあ。内藤はお茶の水で友人の北島幸右衛門というのを切っているらしいんだ。それに、なにか不逞浪人の仲間入りをしているらしい」

「それは誤解です。兵太郎はただ一度、その木村さんに誘われて、尊攘党の会合に顔を出したことはあるが、なにがなんだかよくわからないうちに、捕り方にかこまれて逃げ出したといっていました。そのことは木村さんがよく承知しているはずだと思う」

しかし、定八はそっぽを向いて知らん顔をしている。

「とにかく、内藤は少し軽率すぎたんだ。北島のことはあるし、わしは真偽のほどは知らんが、江戸にいるのはどうかと思うね」

ことばは無愛想だが、その裏にあたたかい心があると小太郎にも読めてきて、なによりも澄江のためにうれしかった。

「兵太郎にはきっと善処させます。今夜の兵太郎の不心得、澄江さんのそれに対する余儀ない同情は、どうか許してあげてほしいと思います」

「澄江、いっしょに帰れ。バカなやつだ」

許すとも許さぬともいわず、広之進はただ妹をしかる。

「申し訳ございません」

澄江は兄の前へ出て、つつましく頭を下げてから、

「秩父さま、お世話をかけまして――」

と、心から小太郎にあいさつをする。

「気をつけてお帰りなさい。からだを大切にして、自重しなければいけません」

「はい」

澄江はたまらなくなったように、そっと涙をふいていた。

「失礼した」

広之進は妹をうながして、もうさっさと筋違橋のほうへ歩き出す。

こっちへ会釈をして兄の後を追う澄江のうしろ姿が悄然と寂しい。

その兄妹を追うように、定八がわざとゆうゆうときびすをかえす。

――こっちはこれで、一応すんだ。

小太郎はほっとして、しばらく兄妹を見送っていたが、今夜はこれからまだ二軒、いそいでまわらなければならないところがある。

32

小太郎が両国矢ノ倉の内藤家の玄関へ立ったのは、やがて宵すぎごろであった。

まだ見ぬ父の家の玄関へ、こんな用でたずねてこようとは夢にも考えていなかった小太郎である。

「手前は秩父小太郎という者ですが、ご当家の兵太郎どのにたのまれたことがありまして、おうかがいしました」

取り次ぎに出た老僕に申し入れると、一度奥へ入り、まもなく出てきて、

「どうぞお上がりください」

と、玄関正面の客間へ案内された。

主人が不在で無人のせいか屋敷は妙にひっそりとして陰気くさい。

さっきの老僕が茶を運んできて去ると、入れかわりに六十ばかりのしゃっきりとした老婆が被布姿で出てきて、行儀よく座についた。

「わたしは兵太郎の祖母で、湯島の和久です。兵太郎の母はあいにく風邪でふせっておりますので、かわりにお話をうかがいに出ました」

ああ、湯島のおばあさまか。この人なら自分にもおばあさまなのだと、小太郎は目を輝かせ

ながら、しかし落ち着いてそこへ両手をつき、
「はじめてお目にかかります。手前は秩父小太郎と申す若輩者でございます」
と、まず名を名乗った。
「小太郎さんといわれるのだな。兵太郎のお友達かえ」
「はい。てまえはこの近くの川中弥太夫先生の道場で代げいこをしておりますので、そのほうの知り合いです」
小太郎は自分のほうからは父母のことは絶対に口にしないつもりできているのだ。
「それで、兵太郎からなにかたのまれたことがあるというお話だったが――」
おばあさまは冷たい切り口上で、警戒するようにじっとこっちを見すえている。よっぽどきかない気の人らしい。
「ありのままをお耳に入れます。兵太郎さんは今夜、神保町の岡家へ行って、裏口からそっと澄江さんを呼び出しました。破談の理由を当人の口から直接聞きたかったのだそうです」
「まあ、あの子がそんなことを――」
和久のおばあさまはびっくりしたようにまゆをひそめる。
「実は、澄江さんもその真相が聞きたかったところだったそうで、ふたりで人目を避け、お茶の水へのぼっていきました。破談の理由は、兵太郎さんが不逞浪人に関係があると見られたからで、これは悪い友人の中傷だったとわかりました。しかし、そう中傷されるにはされる軽率さが兵太郎さんのほうにもあったので、ふたりでそんな話をしているところへ、くせ者がふたり覆面をして出てきて、いきなり兵太郎さんに切ってかかりました」
「まあ、危ない――」
「折よく手前の友人がそこへ通りあわせまして、ふたりでひとりを切り伏せると、ひとりはあわてて逃げてしまいました。切り伏せたやつの覆面を取ってみると、それが兵太郎さんとは

友達の北島幸右衛門という男でしたそうで、逃げたひとりはたぶんこれも友達の木村定八という男だろうということでした」
「どうしてまた、お友達がそのような」
「つまり、定八という男は、澄江さんがほしかったんです。それでいろいろと小細工をしたらしいんですが、とにかく友達を切ってしまったんで、兵太郎さんもわしの友人もどうしていいかわからなくなり、澄江さんをつれて、三人でわしのところへ相談にきました」
「そして、どうおしだえ」
さすがのおばあさまも、あまりのことにおろおろする気持ちをかくしきれなくなったらしい。
「兵太郎さんとわしの友人は、江戸にぐずぐずしていてはあぶない。ことに、兵太郎さんは不逞浪人の嫌疑をうけています。定八の兄は八丁堀のほうへ養子に行っているといいますし、ふたりをすぐ江戸から落としました。澄江さんも兵太郎さんといっしょに行きたいと泣いてたのみましたが、これはわしが許しませんでした」
「澄江さんはそんなに兵太郎が好きだったのかえ」
「はい、いつまでも兵太郎さんの帰りを待っていると、ふたりで約束をしているようでした」
「まあねえ。それで、それで、兵太郎はもう行ってしまったの」
「行きました。しかし、行った先はわかっています」
「どこなの、それは――。遠いところかえ」
「今はそう遠くありません。ふたりを出してやってから、てまえは神保町へ澄江さんを送っていくことにしました」
「まあまあ、ご苦労さまにねえ」
「ちょうど筋違橋の近くで、にいさんの広之進さんが定八といっしょに迎えにくるのに出会いましたので、ひととおり事情を話し、どうか澄江さんをあまりおしかりなくと、よくたのんで

おきました。広之進さんはなかなかの人物のようですから、澄江さんのほうはまず心配ないと思います」

「お世話をかけましたねえ。それで、それで、あの子のほうは、兵太郎のほうは、どうなるのだろう」

「てまえもいろいろ考えたのですが、兵太郎さんは当分江戸にいないほうがいい。お父上が大坂にいられるそうですから、今夜にもよく話し合ってみた上で、てまえが大坂まで送っていってもいいと考えています」

「大坂へねえ。——あの子に一目会うわけにはいかないだろうかねえ。あの子の母は、ぜひ会いたかろうと思うのだけれど」

哀願するようなおばあさまの顔だった。無理もないとは思う。しかし、おそらくそれはできないことだろう。

「兵太郎さんをここへ連れてくることは危険です。ことによると、町方から兵太郎さんのことを聞きにくるかもしれません。その時は、出奔したまま行くえがわからないと返事をしておいたほうがいいのです。そのくらいですから、無理をしてお会いにならないほうがいいんじゃないでしょうか」

「あなたは、あなたは今夜、兵太郎に会っておくれかえ」

「会います。きっとわしを待っているだろうと思いますから」

「それじゃ、届け物だけはしてくれますね」

「それはいたします」

「しばらく待っておくれ」

おばあさまは急にあたふたと立ち上がって、奥へ入っていった。

かなり待たされたのは、おばあさまは兵太郎の母親とあれやこれや涙ながらに相談していたのだろう。やがて、金でも入っているらしい小さな袱紗包みを持って、涙にぬれた目をして出てきた。

「ご苦労だが、これをあの子に渡して、おばあさまも、おかあさまも心配している、短気をせんようにと、よくあなたからそういってやってください」

「はい、たしかにおあずかりいたします」

「あの子の母もあいさつをしたいが、床についていますので、失礼させてもらいます。どうか、兵太郎のことはなにぶんともお願いいたしますと申していました」

「承知いたしました。あまりご心配ないように、おからだを大切になさるよう、申し上げていただきます」

「あなたは苦労した人のようだ」

おばあさまはいまさらのように、じいっとこっちの顔を見つめている。

「いいえ、てまえは母から、人一倍丈夫なからだをもらっていますから」

「そうだったねえ。そして、辛抱強い、やさしい心も、——お美代がそうでしたよ」

ぽろぽろとおばあさまの目から大粒の涙が流れてきた。

「美代はてまえにはありがたいおかあさんでした」

小太郎も微笑しながら、いつの間にか涙がたまってくる。が、泣きはしなかった。なにか心があたたかくなってきて、

「では、これで失礼いたします。おじゃまをしました」

と、ていねいにおじぎをして立ち上がった。

「もうお帰りかえ。わざわざ本当にありがとう」

おばあさまは立って、玄関まで送ってきた。

そして、うしろからそっと小太郎の肩、背中を手でなでてみて、

「争われないものな、よう似ておる」

とつぶやいて、はなをすすりあげていた。

「おばあさまもお年ですから、どうかおからだに気をつけてください」

「ありがとう。おばあさまはあなたがこんど江

戸へ帰るまで、きっと生きていますよ」
「てまえも、それをたのしみにして、大役を果たしてまいります」
「病気をしないようにね」
「はい」
もっと背中をなでていてもらいたかったが、思いきって玄関へおりて下駄をはいた。
「もう行くかえ」
おばあさまはもう一度いった。それは本当のおばあさまの顔になって、目がぬれていた。
「おやすみなさい、おばあさま」
小太郎は元気よくいって、子どものように下駄を鳴らしながら門のほうへ歩き出した。
月のさえた明るい秋の夜だった。

33

小太郎はその足で、もう一軒川中道場へ寄り、先生とお小夜に今夜のできごとを話し、大坂へ行って帰ってくるまで暇をいただきますとたのんだ。
「そうか。そういうことなら行ってくるがいい」
先生はこころよく暇をくれた。
「あの、長一郎さんも大坂へ行くんですか」
お小夜が心配そうに聞く。
「いや、長一郎くんは当分志村にいて、江戸の様子を見るだけでいいと思います。あの人は別になにをしたわけではない、ただとばっちりを食っただけなんだから」
小太郎は、小夜によろしくといってべそをかいていた長一郎の顔を思い出す。
「でも、あの人、小太郎さんが大坂へ行くといったら、自分も行くといい出しやしませんかしら」
「そんなことといっても、つれていかないからだいじょうぶだ」
「いいえ、あたくしやっぱり心配ですから、小太郎さんといっしょに、今夜志村へ行きます」
「そうだな、それもいいだろう」

娘に甘い弥太夫は、すぐに賛成してしまった。
——困ったな。お千代がそんなことをいいだすと、それこそことだぞ。
小太郎はなんとなくそれが心配になってくる。
志村までは日帰りのできる道だからいいが、大坂ではそうはいかないのである。
まもなくお小夜が大きなふろしき包みをこしらえて出てきた。
「お小夜さん、それわしがしょっていくのか」
小太郎が目を丸くして聞くと、
「夜ですから、いいでしょう」
と、お小夜ははじめからその気でいるらしい。
「小夜、お前まさかこれっきり嫁に行ってしまう気じゃないだろうな」
弥太夫はちょっとそれが心配になってきたらしい。
「だいじょうぶです。お嫁に行く時は、箪笥も持っていきますから」
お小夜はわらいながら答えていた。
「では、先生、行ってまいります」
小太郎は弥太夫にあいさつをして、まさか町の中ではふろしき包みもしょえないので、手に持って出た。
「重いねえ、お小夜さん」
「ごめんなさい。ほんの着替えだけなんですけれど——」
「しかし、こんな大きなものをいきなりかつぎこむと、押しかけ嫁と間違えられないかなあ」
「そんなことありません。あたくし、もうちゃんと、杉下の者なんですもの」
「と、ひとりできめているんじゃないかね」
「違いますわ。ちゃんと証拠があるんです」
「証拠——？」
「ええ、立派な証拠なの」
「はあてな——？」
「いや、顔を見ちゃ」
お小夜はなにか赤くなっているようだ。

「もういいのよ、いわないで」
「そうか、そうか——。それでわしに荷物を持たせたんだね」
「いいえ、それより、だから長一郎さんにいま大坂へ行かれてしまっては大変ですもの」
「わかった、わかった。わしはよろこんで、この荷物をしょっていくよ。お小夜さんはもっと重い荷物を持っているんだものな」
「あら、まだそんなに大きくはなりませんわ」
いそいで帯の上をなでている邪気のないお小夜である。
「どっこいしょ」
小太郎はかまわず大きなふろしき包みを背中へしょって、
「杉下のおやじさま、よろこぶだろうな」
と、その顔を見るような気がした。
一方に哀別があれば、一方に結ばれて実るよろこびがある。これが若い者たちの青春行路なのだろうと、小太郎はしみじみと考えさせられる。
月の道はやがて神田川河岸へかかっていた。

江戸おもしろ事典

旅籠と旅人の心得

旅籠と木賃宿とはどう違うか

草枕という言葉が今に残るように、昔の旅といえば野宿したり、寺院や農家に頼み込んで宿泊させてもらった。交通機関といっても、せいぜいが馬、そして駕籠といったものを利用し、自分の両脚が唯一の頼りであった。

一般庶民が旅に出なければならぬとなったら、これはおおごとである。夫婦、親子は水杯を交わしたというくらいなもので、それも道理、道中にはごまのはい、スリ、盗人、山賊といったもの、疫病、天候異変による災難と、いろいろのものが待ちうけていた。現代のように、飛行機、クルマ、汽車といった交通機関もなかったし、医術も遅れているので、近くの遊山気分の旅以外はまったく決死の覚悟だった。

古く、平安朝のころの貴族の旅では、宿泊、食事といったものは、その地の国司が担当した。それが義務であった。鎌倉時代では宿所の多くを、その国司が経営している。もっとも、宿所といっても、せいぜいが三間ほどのもので、茅葺の小屋で板敷きもなく、風は吹き込むし、月も顔をのぞかせる粗末なものであった。

旅籠屋が職業として成り立ったのは、道中する人が多くなり、宿駅も完備した江戸時代のことである。

旅籠とは泊籠から転じたもの。旅行のとき、馬の飼料を入れる籠のことで、また、旅人の食糧を入れるもののことをいった。それが、旅人を宿泊させ、食事をさせる所を旅籠と呼ぶようになったのである。

現代でいうホテル、旅館だ。旅館という言葉は明治以降にうまれた。昨今は旅行ブームで、懐古趣味も手伝ってか、信州の馬籠周辺に残る旅籠屋が若い人に人気になっている。

旅籠では夕食と朝食を給して一泊させた。一方旅人が自ら米を炊いで食し、宿泊のみをさせるところを木賃（薪の代金）宿といった。また、旅籠では原則として旅人に昼休みはさせず、その代わりになるものが茶屋であり、茶屋は休息させるが止宿させなかった。そして、旅籠屋と茶屋では商品の売買はしない。相互の営業を侵さない規約といったものがあった。

山手先生の作品『青雲の鬼』では、主人公たちが大森の旅籠茶屋で宿泊する。旅籠茶屋とは文字通り旅籠が茶屋を兼ねたものだが、これは宿場にはない。その宿場のないところには、特に通行の多い街道に限って茶屋兼業の旅籠というものがあった。

江戸の初期のころまでは、旅籠屋だけでは食っていけず、農業兼営といったものが多かった。

旅籠が殷賑をきわめるようになったのは宿場が整備され、道中する人間が多くなってからのことであるが、あくまでも武士の公用を第一とした時代であったので、御用宿を務めた旅籠には、補助金を出したりして、旅籠の持ち出しをおぎなった。それに、旅籠が客を誘致するために客を引く飯盛女を雇うことも許可された。

旅の恥はかき捨て、という言葉もある。遊山気分であればなおさらだが、旅に出た解放感も加わるし、つまみ食いの味も悪くないので、旅の一夜を飯盛女のお伽にあずかるということがあった。

旅籠屋によっては飯盛女を多く抱え、客のもてなし、誘致を心掛ける傾向が強くなると、時に客に対し、飯盛女が嬌声をあげたり、悪口を浴びせるということもあって、宿場自体で、飯盛女の行動、雇数に規制を設けた。

旅籠屋に対する本陣とはなにか

三代家光が参勤交代の制度を設けるまでは、大名や公儀役人が宿泊するには家屋敷も広く、間数も多い家を選んだ。武士はつねに軍旅にあるという心得から、その主人のいるところを本陣、あるいは大名宿と呼んだ。そして、重役、家臣の泊まる所を脇本陣と呼んでいた。

本陣、脇本陣の制度ができたのは、参勤交代が行われるようになってからのことで、小田原宿には本陣、脇本陣が四軒ずつもあったが、これは特別のことで、宿場の多くは一軒が普通で、少ない宿場では、本陣の名目許可を領主へ願い出て、領主から道中奉行に問い合わせ、道中奉行の許可を得てから本陣の役目を果たす宿所があった。

本陣の建物は、玄関、書院を備えているのが原則で、建坪は二百坪前後が普通で、百坪以下はない。こうなると、旅籠屋ではまかなえない。本陣の名目を得る資格のある家というのは少なかった。

本陣では種々接待するが、家臣の分は別として、主人の分は下賜の形式できまりはなかった。裕福な大名であれば十分な下賜金を与えてくれたが、不況になればそうもいかない。ひどい大名になると、夜を日についでの道中で、休息を茶屋でという倹約ぶり。本陣という名目上、旅籠のように飯盛女を雇うこともならず、といって家の普請、修理も必要のため、かなり窮迫することもあって、本陣への貸付金制度が設けられたり、大名家へ極力本陣を利用するようお達しが出された。

本来、大名家では家来を先行させて、本陣を予約するか、通達しておくのが例で、たまたまかち合った時は格式の上の者に譲るのがならいというものであった。

山手先生の短編小説に『槍一筋』というのがある。これは、同じ宿駅で、一つの本陣を予約

することからはじまり、武士の意気地を賭けた傑作だ。

格式のある大名の家臣が役目を怠った上、小藩の大名の家臣に先乗りされてしまったことから話がおこる。

大藩の大名の家来は親藩という金看板をかさに、折角予約した小藩のものを譲りうけようと、本陣の主人や、問屋場の責任者をいたぶる。小藩の家来は、大藩からの申し入れがあれば譲る心づもりであったが、横車では承服しかねる。が、本陣や、問屋場の者たちの弱り方を見るとそれもならず、とどのつまりは大藩に譲歩するが、間の悪いことに、臨時に雇った槍持ちが、本陣に槍を忘れてしまった。慌てて取りにもどるが、すでに本陣には親藩の大名が乗り込んでいて、慢幕も張りめぐらし、槍もその手中にあり、槍は大切な武士の表道具、それ相応の挨拶あってしかるべし、という返事。

むろん、槍を忘れた槍持ちの首のほか、責任者の命をも賭けさせた申し越しだ。已らの落ち度は知らん顔の無理、少しも寛容のなさに小藩の家臣は忿怒した。この難事を、武士の意気地と知恵で解決するというものである。

旅籠と飯盛女との関係は

本陣、脇本陣を除いた旅宿を旅籠と呼ぶようになった。

天保年間の東海道の旅籠の数を見ると、熱田の宿が一番多く二百四十八軒、ついで桑名の百二十、岡崎の百十二、四日市の九十八、小田原の九十五、浜松九十四についで品川宿の九十三が多いほうだ。

熱田は熱田神宮を中心に古くからひらけた町で、参拝客が多かったため、桑名は湊町であるし、岡崎、小田原、浜松は城下町という特色を持つ。なかでも小田原は箱根への登り口ということもあり、品川宿は東海道の起点で、江戸時代は遊楽地としても知られたところだった。

先にも書いたが、東海道のように旅人の多い街道では旅籠屋専業ということも成り立ったが、他の街道の旅籠は、特に気候の悪い十一月から二月へかけては旅行者が少ないので、旅籠だけでは生活するのに困難で、農業を兼ねるか、副業的に旅籠をやっていたところもあった。

旅籠屋には飯盛女のいるところを飯盛旅籠屋、いないものを平旅籠屋という。宿場に遊女を置くことは早くから禁止されていた。飯盛女も華美な服装は禁じられ、幕府は飯盛女の売色を禁じたが、これは中々取り締まることはむずかしく、そのため、あまりにも乱れた内藤新宿は、一時遊興地と化すことを恐れ、宿場を廃止させられた。品川宿には、天保十四年の記録では飯盛女の数は千三百四十八人に達したという。

文政八年、関東の諸宿に対して関東取締出役が旅籠屋、宿役人を呼び出し、左記のような箇条書きを申し渡して、その誓状を徴した。

一、旅籠屋に抱え置く飯盛女は二人を超えてはならない。

一、右女の衣類は木綿のほかは決して着用させない。みだりな風俗はさせない。

一、笄類は木櫛、真鍮にかぎり、そのほかは用いさせない。

一、飯盛女を旅人の酒の相手に出すときには、忍びでも華美な衣類に着がえることはゆるさない。

一、飯盛女を置く旅籠屋のうち、平日の旅人の休泊はなおざりにして、遊女屋体の心得で渡世する者もあるやをお聞き及びになっていることは恐れ入ったことで、旅人休泊のための旅籠屋であるから、以後は心得違いなく、正路に当たり前の渡世をする。

一、見世先はもちろん、陰見世などと名付けて、飯盛女を並べて置くことをしない。

一、見番などと唱えて、芸者体の者をさし置

くことは決してしない。他所より立ち入れば追い払うようにする。

等といったものであったが、それでも、飯盛女をまったく廃すということはできなかったようだ。

その彼女たちの多くは貧困な家の妻と娘である。彼女たちは年季奉公の形式で、何両かの金を親や夫がうける。年季がきたときは、身代金に利息をつけて返済するのが例であった。

ちなみに享保年間、飯盛女のひと晩の稼ぎは銭二百文というのが相場であった。現代に銭二百文を換算するのは大変むずかしいが、おおよそ三千円ぐらいなものではないか。

旅人の心得とはなにか

一般の人間が旅をするのはよほどの事情が出来てのことである。まず、長い旅立ちとなると、道中には是非必要なものがある。往来切手、これは現代の身分証明書にあたる。これは檀那寺が発行し、本人が旅先で死亡したとき、その処置方法まで書いてあった。普通の関所では、この往来切手が関所手形のかわりになったが、箱根の関所だけは別格で、箱根関所では入り鉄砲に出女といって、江戸へ下る者が持っている鉄砲と、江戸を離れる女は厳重な取り締まりを受けた。このため、江戸から上る時は箱根関所を通るため、関所手形が必要で、これは名主、大家が発行した。これは道中するのに欠くべからざるもので、そのためには、檀那寺への挨拶とか、大家にはたまっていた店賃の払い、そして他のとどこおった借金はすべてきれいにしないと、切手や手形をもらえないということになる。

旅には、ほかにも必要なものが多くあった。『細見道中記』から引用する。

矢立・扇子・糸・針・懐中鏡・日記・櫛・鬢付油・提燈・蠟燭・火打ち道具・つけ木・麻綱・印判・手拭・鼻紙・道中記・大財布・小財布・巾着・小刀・耳掻・錐・小算盤・風呂敷・薬・合羽・笠。

このほかに着替え類、武士なら大小の刀と、とにかく多い。旅をしながら間に合わせるものもあるだろうが、それほど旅立ちに必要な携行具が多かった。

旅といえば、自分の両脚が頼りで、平均一日の行程は六里から十里というところ。よほどの急ぎの旅でも二十里歩いたら翌日はへばってしまう。筆者は軍隊時代に完全軍装で正味二十五里を歩かされた。それも歩幅八五センチという急歩という訓練も含んでのことであったが、一個中隊の内、約三分の二が落伍してしまった。やっと歩きおえた筆者の足の裏はマメだらけで白くふやけていた。まして昔は草鞋である。慣れない女性はずいぶん泣かされたことだろう。

つぎに旅籠へ泊まってからの旅人の心得といったものが必要である。大体個室に泊まれればいい方で、多くは相部屋である。そして個室といっても錠がないのだからロックするわけにいかない。襖一つが仕切りになっていたのだから不用心なことだった。

旅人が宿をとるときは、定宿があるなら別だが、なるべく家作のよい、にぎやかな宿を選ぶようにする。少しぐらい宿賃が高くとも、繁盛している宿は、それだけの利益があるものだ、とされていた。

旅籠へ到着したら、第一に東西南北の方角を聞き、その家作、雪隠、表裏の口を見覚えておく、これは近火、あるいは盗賊、そして相宿で喧嘩などあって逃げ出す時の用心だ。

旅籠が川岸に建っているようなのは敬遠した方がよい。長雨が降りつづいたような時に洪水に見舞われる。また、山岸も山が崩れるし、大岩石の下にある旅籠も要注意だ。

空腹で風呂へ入ってはならない。それでも宿の都合で入らなければならないときは、まず湯で足をぬらし、それから湯にはいり、この場合

の長湯は禁物。できるだけ空腹を満たしてから入るよう心がけたい。

道中で疲れがひどかったときは、できるだけ熱い湯に入り、いつもより長くつかっていると疲れが抜けるものだ。

暑い道中のとき、色欲はできるだけ慎むことだ。この季の売女の湿毒は感染しやすい。また、宿の夜具から湿毒をうけることがあるので、香気あるものを懐中し、湿邪を避けたい。

その日旅籠に入ったら、翌日、馬、駕籠、人足を利用するときは宿へすぐに依頼し、ついでに自分の出発時間を報告する。といっても、旅人の多い旅籠では自分から出発時間前に起きて、床の中で足袋まで履いて、膳が出次第食して、いつでも旅立ちできる構えにしておく。

旅籠屋の朝というのはせわしいものだ。持ち物の点検、その日の旅程などきちっと決めておくことだ。

（伊藤文八郎）

山手樹一郎長編時代小説全集29

青雲の鬼他一編

発行——一九七八年二月二五日初版第一刷
一九八〇年五月二五日初版第二刷

著者——山手樹一郎©

装画——国貞（静嘉堂文庫提供）

装丁——玉井ヒロテル

発行者——和田欣之介

発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三—四—一六
〒一〇三 ☎東京二七一—〇〇五一 振替東京〇—一六一七

印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします